



# 案山子



2015年夏号

新潟大学文芸部

# 目次

## ◆お題作品『呪』

暖かいもの《楽》	荒月	3
シャドウ・ギャラリー	環和巳	4
おまじない	三ツ葉葵	5
愛におぼれた彼女は夢を見る	七乙女昂	6
旅は道連れ	加々美翔	7
殺人円舞曲 The Murder Waltz	高天美月	8
ファニー・ファッキン・フライデー	落谷 アツムネ	9

## ◆一般作品

心の太陽	哲	1 1
(ファミチキください)	古井 龍	1 2
追憶ティータイム	文部 蘭	1 3
病名：郷愁症候群	三ツ葉 葵	1 4
混合(下)	Puney Loran Seapon	1 5
沈黙の搭	日曜日憂	1 6
プロヴィデンスの瞳 Eye Of Providence	高天美月	1 7
蝸	惇暉	1 8
箆筒集(二)	惇暉	1 9
夏休みのかけらたち	佐倉 奏	2 0
想望のアリア	夏村晋	2 1
パルティール考古堂営業報告書	幼夏	2 2
立つ鳥	瀬戸 若菜	2 3
全ラ!	今畑 鏡	2 4
アディショナルタイム	自分	2 5
背徳者——chaos(中編)——	山吹弓穂	2 6
口笛とお化け	諸木夕	2 7
A	蛭蛙阿鳴	2 8
オヤマサマ	昆布中毒	2 9

# お題作品集 お題「呪」

温かいモノ 《楽》

荒月

先が見えないような森の中を少女が一人、彷徨うように歩いていた。その少女は気温が高くて蒸し暑いというのに体全体を覆う茶色のマントを身に着けていた。そして少女の頭の上には、少しくたびれていてくすんではいるが、しっかりと手入れをすれば綺麗な毛並みを持っていそうな白猫が乗っかっていた。

「主一、いつになったら次の町に着くんですかー？ もう一週間も森の中を彷徨ってますよ……」

「どこかの町に着いた時に着くわ」

しばらく歩いていると突然どこからか少年のような声がした。しかし、少女は驚くことなく感情のない声で返す。

「いや、そりゃそうでしょうけど、僕が聞きたい答えはそんな哲学的な答えじゃなくて……。 はあ、もういいや」

少女の返答に会話を諦めた少年の声は猫から発せられていた。会話がなくなった状態で一人と一匹は森の中を彷徨い続ける。

「主、今日も野宿なんですか？ もうそろそろ野草は飽きてきましたよ、僕。」

「仕方ないわ。もう前の町で買った食料はないのだから。それとも私は猫の丸焼きでもすればいいのかしら？」

少女の恐ろしい提案に白猫は震えた後に叫んだ。

「勘弁してくださいよ、主は表情が変わらないんだから本気かどうかが分かり辛いんですから」

「それどころか感情すらないけれど」

「それは言わない約束で……。あ、主！ あれ見てください！ 煙ですよ、煙！ 村があるかもしれませんよ、行ってみましょう！」

先ほどの重い雰囲気吹き飛ばすかのように元気な声で少女に伝える白猫。それに無言で頷き、少女はその立ち上る煙の方へと足を向けた。

煙を追っていった先で見つけたのは小さな村だった。

「自然の中の村そのものって感じですね。主、今日はここに泊めてもらいましょう」

「ええ、でも」

少女が何か言おうとしたとき、村の奥から女性が現れた。その女性は少女を見つけると、少女に怯えたかのように顔を歪めた後、走って去って行ってしまった。

「あれ、さっきの人、どうしたんですかね？」

白猫が問いかけると、少女は無言で首を横に振る。流石に村人に会ったにもかかわらず、誰にも許可なく入るのも如何なものかと思った少女はその場で黙って誰かが来るのを待つことにした。

女性が去って行ってから、しばらく経った後、村の奥の方から複数の人影が見えてきた。

「あ、人来ましたよ。今日こそはまともな食事にありつけそうですね。」

白猫が少女の頭から、猫らしく身軽に地面に降り立った。その尻尾は喜んでいるかのように左右に揺れていた。しかし、その言葉に少女は無反応で返した。何故なら、こちらに向かってくる人影は皆、その手に各々、剣や鍬、鉈などの刃物を持っていたからだ。

「どう見ても泊めてもらえるどころか、食料を売ってくれそうな雰囲気ではないわね」

「えー！ また野草ですかー？ もう嫌ですよ、僕……」

少女の言葉に不満げな声を上げる白猫。

「貴様、何者だ！」

少し離れたところで足を止めた男は手に持った武器を構えたまま、問いかけた。男たちの顔にも先ほどの女性と同様で、少女に対する恐怖の念があった。

「私はスピリと申します。訳があつて旅をしていたのですが、手持ちの食料が底をついてしまったので、一晩泊めていただけませんか？」

スピリが言い終わる前に、また別の男が叫ぶ。

「ふざけるな！ どうせお前も奴らの仲間なんだろう！ 俺たちが寝たら村の皆を皆殺しにするつもりなんだろう！」

男の言葉に周りから「そうだ、そうだ！」という声が飛ぶ。話が見えないスピリが黙っていると、その様子に苛立った一人の男が剣を振り上げた。それを見たスピリが身を翻して躲そうとした時だった。

「やめんか！」

厳しい声が響き、男とスピリがその場で止まる。視線をずらすと、そこには立派な白髭を蓄えたおじいさんが立っていた。

「村長、こいつは奴らの仲間かもしれないですよ！」

「奴らの仲間である、という証拠もあるまい。一先ずちゃんと話を聞くだけでもよかろう」

「よかったですね、主。話が分かる人もいたですよ」

若い男を村長と呼ばれたおじいさんがたしなめ、なだめている光景を見て、今度はスピリの肩に飛び乗った白猫が言った。その言葉にスピリは、今度は縦に首を振って肯定の意を示した。

「いや、若い者が失礼しましたな、どうお詫びすればよいものやら」

誤解が解けた一人と一匹は村長の家招かれ、話をしていた。その横にはお詫びだと言って村長がくれた干し肉が詰め込まれた袋と乾燥させた果物などが入っている袋が置かれていた。

「いえ、食料を頂きましたので十分です。失礼ですが何かあったのか、お聞きしてもよろしいですか？」

スピリの質問に先ほどまで申し訳ない中にも、旅人に会えたという楽しげな雰囲気だった村長は表情を曇らせ、うつむいてしまった。

「どうやら相当深刻な問題っぽいんですね。まあ、出会ってすぐの少女いきなり刃物に向ける時点で只事ではないのは想像がついていましたが」

白猫はスピリの肩に飛び乗り、スピリにのみ聞こえる声で言った。

「どうやらそのようね。それに、寝ている間に皆殺しってことは命すら狙われている、ということ

だし」

スピリも白猫にしか聞こえない声で返す。

「この村は、現在盗賊に狙われているのです」

重々しい口調で言ったのは、スピリと白猫の会話が丁度途切れた時だった。盗賊、というキーワードに白猫がピクツと反応し、尻尾を立てた。それを落ち着ける様に背中を撫でながら、スピリは村長に問いかけた。

「盗賊、と言いますと通常、来ることが分からないものですが、どうして来る、と分かるのですか？」

「我々の村は一か月ほど前から盗賊に搾取され続けているのです。作った作物を奪われ、渡す作物や獲物がないと、女子供に手を出すのです。」

スピリはその告白を、同情どころか、感情すらこもっていないかのような目で村長を見つめ、聞いていた。白猫はスピリの肩から飛び降りると、スピリの目を見つめ、溜息をついた。

「今までは何とか渡すものを用意することが出来ていました。しかし、我々はもう、奴らに渡せるものはありません。あったとしても、もう次に渡せるものは用意できないでしょう」

なるほど、とスピリは納得がいった。干し肉を分けてもらう際、目の端に、一人の男が村長に食って掛かっていた。その時には、どうしてあんな奴に、というような心情だと思っていたが、実際は、今回渡すものを渡してしまってどうするつもりか、と言っていたらしい。

「それでは今回渡すものを私に譲ってしまって、どうするのですか？」

「我々に利用価値が無くなれば殺すに決まっています。ならばせめてと村の男たちと協議して、抵抗することに決めたのです。」

スピリのもっともな質問に村長は、覚悟を決めたような目と声色で返した。

「盗賊が来るのはいつなのですか？」

「今夜です。だから若い者たちが貴女を盗賊の一味で、下見に来たのだと思ったのだと思いますよ。あの様に武器を持って出てしまっは今夜、我々が抵抗すると教えてしまうようなものでしたから、貴女でよかったです」

そう言って村長は苦笑いを浮かべた。

「ということはこの村は今夜、戦場となる、ということですか？」

村長の苦笑いなどなんとも思わずに厳しい質問をするスピリ。その質問に、浮かべていた苦笑いを消え、スピリの質問と同様に厳しい表情となった村長は重々しく頷く。

「はい、ですのでスピリさんには追い出すようで本当に申し訳ないのですが、すぐに荷物を持って村を去って行ってほしいのです。我々の村の問題に無関係の貴女を巻き込むわけにはいきませんから。ましてや、命を失う可能性がある場にです。」

先ほど、盗賊という言葉に白猫が反応したように、今度は命、という言葉にスピリが反応した。

そんなスピリを見た白猫は、そのスピリの肩に乗ると、再び小声で、

「手を貸したらいかがです、主。食料のお礼として」

「え、どうして？ 食料はお詫びでしょう？」

白猫の提案に、本当に理由が分からないとばかりにキョトンとした顔で疑問を返すスピリ。

「はあ。もしかしたら彼らを助けたことによって、主のなくしたものを見つけられるかもしれませ

んよ？」

「なくしたものの、ね。見つけられなくてもいいけど、もしかしたら盗賊が私のことを、殺してくれるかも、しれないものね」

またそんな物騒なことを、と白猫は溜息をつく。

「どうしたのですかな？」

ずっと猫の方を見ているスピリを不思議に思った村長が話しかけた。それに対してスピリは、特に何も、と返した後、村長に向けて一つの提案をした。

「私を防衛および、討伐の一角に入れていただけませんか？ 私のことが信用出来ないのであれば、どこか適当なところにおいていただくだけで構いません」

「しかし、全く無関係の貴女に……」

「頂いた食料の対価ということで大丈夫です。準備をしまいりますので、それでは」

言うだけ言うとスピリは貰った食料の中から乾燥させた果物を一つ取ると、立ち上がって、村長の家から出た。そして村の入り口のところに座り込むと、少しずつその果物を食べながら夜を待った。白猫はスピリの横に丸まって欠伸をして、丸まって眠りに入った。

「ん、どうやら来たようですよ、主」

そう白猫が声を上げたのは日が暮れてからしばらくした後のこと。周りには松明が灯され、男たちが持つ武器を赤色に染めていた。その物々しい空気の中で一人、スピリは本を読み続けていた。

「あ、主ー？ 奴らが来たみたいですよー？ 早く起きてくださーい」

「……？ ああ、もうそんな時間。分かったわ」

もう一度声をかけられて初めて気づいた様子の主の姿を見てかくんと首を倒す白猫。スピリはパタンと小気味いい音を立てて本を閉じると、自分の服のポケットにその本をしまつて立ち上がった。そして村の外に目を向けると、森の暗闇の中に大量の松明の灯りが見えた。その灯りが近づいてくるにつれ、土を踏みしめる音や、枝が折れる音が近づいてくる。そしてすぐに灯りが、自身を持つ手を、そして人の姿を映し出すようになった。

盗賊たちはこちらから見える位置まで来ると歩みを止めた。見える限りではあるが、全員が腰にナイフや剣を下げている。おそらく、村人の持っている剣のように刃が潰れていたり、毀れたりなどしていないだろう、とスピリは予想をつけた。人数、武器などの考える全ての条件で村人側が負けていた。それを自覚しているのであろう、村人の全員が堅い顔をしている。

「おいおい、どうしたんだよ、武器なんて持ちちゃってさあー？ まさか俺らとやろうなんて思っくんじゃねーだろーなー？」

盗賊の頭と思われる一番前にいる男がおどけた声で言うと、周りの盗賊たちも野次を飛ばしつつ笑い声をあげた。

「そのまさかだ。もうお前たちにやるものなど何もない」

勇敢にも一人の青年が言い返した。その途端、盗賊たちから笑い声が消える。

「ああん？ そういう冗談はいいからさ、さっさと持ってこいや。俺たちだって暇じゃねえんだよ」先ほどのおどけた声とは違い、ドスのきいた声で言う。如何にも最後の質問といった風な雰囲気だ。これでいうことを聞かなければどうなってもしらないぞ、という脅しだった。

「さっきも言っただろう。もう渡すものはない、さっさと出ていけ」

その声に一度は下げた足をもう一度前に踏み出しながら青年は再度言い返した。その言葉を聞いた瞬間、盗賊たちの目から遊びの色が消えた。

「あ、そう。じゃあ、仕方ねえな。……死ねよ」

その瞬間、盗賊の一人が手に持って構えていたナイフを素早く投げつけた。そのナイフはまっすぐ飛んでいき、言い返すために前に出ている青年の右胸に突き立った。青年は何が起きたかわからないようだったが、自分の胸に突き立ったナイフを見ると同時に、彼の口からは鮮血があふれ出た。そしてそのまま仰向けに倒れた。それを見て、村人からは怒声が、盗賊からは笑い声が上がった。スピリは何の声も上げず、表情も変えないまま、青年の傷口近くの色が赤く染まっていくのを見ていた。

「さあて、これを見てもまだやるってんのかい？ 俺は心が広いからな、もう一回だけチャンスやるよ」

男の言葉に村人全員が黙り込む。そのままどちらも動こうとせず、短い時間が過ぎた。

「あ、主。行かれるんですか？」

その一触即発の状況で動いたのはスピリだった。肩から降りながらの白猫の問いには返さずに、黙ったまま、歩いて男の前で止まった。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん」

スピリの行動に、しばらくあっけにとられていた男だったが、状況を理解すると嫌な笑みを浮かべて問いかけた。

「———くれない？」

「何だって？」

ボソッと行ったスピリの答えを聞き取れなかった男はもう一度と聞き返した。スピリはもう一度、今度は男に聞こえるようにハッキリと頼んだ。

「私を殺してくれない？」

「……は？」

しっかりと聞こえたはずの男だったが、今度は内容が理解できずに再び疑問の声を上げた。男の耳には目の前の少女が、自分を殺してくれと言ったように聞こえたからだ。

「だから、私を殺してくれって言ってるの」

スピリは再度繰り返して頼む。自分を殺してくれ、と。やっと意味を理解した男はひきつった笑い声を上げた。

「嬢ちゃんみたいな子を殺すわけないだろう？ それとも女として殺してあげようか？」

その提案に他の盗賊は嫌な笑みを浮かべる。あんな少女に、と村人はさらに怒りを膨らませる。そんな中で一人だけ、正確には一匹だけ冷静にことを見ていたものがいた。

「うーん…… あーあ、言うこと聞いて、剣で主の胸を突いて殺してあげればよかったのに。まあ、主はそんなのじゃ、死なない、けどね」

伸びをしながら言ったのは白猫だった。白猫が盗賊たちに憐みの視線を向けてすぐに、今度はスピリが口を開いた。

「そう、残念ね。『静かなる眠りへと彼らを誘え』」



その瞬間、頭の男を除いた盗賊全員がバタバタとその場に倒れこんだ。胸が上下していることから寝ているだけだと分かるが、いきなり味方が全員倒れたことで錯乱状態に陥っている男には分からなかった。

「て、てめえ……何しやがった！」

「さあ？ 仕方ないじゃない、あなたが私を殺してくれないんだもの」

その言葉に男はついに考えることを放棄した。

「いいだろう、そんなに死にたきゃ殺してやる！」

「ま、待て！」

男は叫ぶと、村人の制止も聞かずに腰に下げていた剣を抜いて、目の前に無防備で立っているスピリの胸に突き立てた、そしてその刃は貫通し、背中から刃が飛び出した。男は壊れたように笑い、村人は目を背ける。そして白猫は静かに見つめていた。

「ははは……は？」

男はあることに気づくと笑うのをやめた。自分が殺した、正確には剣で突き刺した相手が未だに倒れていないことに気づいて。そう、スピリは胸を、それも心臓の位置を貫かれてなお、その場に立ち続けていたのだ。その異常な光景に、出来事に白猫を除く全員が驚き、そして恐ろしいものを見たかのように後ずさった。

「お、お前……どうということだよ、な、何で死なねえんだよ！」

スピリは刺される前と何も変わらない、無表情な目で自分の胸を貫いている剣を見下ろして、溜息をついた。

「はあ、これでも私は死ねないのね。どうしたら死ねるのかしら」

スピリが呟くと、それに呼応するように剣が独りでにスピリの体から抜けていった。そしてカラン、という音を立てて地面に転がった。剣が抜けると同時に胸から血が噴き出したが、すぐに止まり、どんどん傷口が塞がっていき、最後には全く傷などない状態になっていた。

「ば、化物……」

「化物じゃなくて呪いよ。死ねない、呪い」

男の呟きに答えるスピリ。その答えはどこか自分に言い聞かせるような言い方だった。スピリが一歩近づくと男はスピリを恐れて、白目を剥いて気絶してしまった。

「残念でしたね、主。今回も死ねなくて」

「その割には嬉しそうね」

「まあ、僕は主との旅が好きですからね」

スピリは白猫と会話しながら村人の方を振り返る。するとスピリに向けられていたのは感謝の念ではなく、自分たちとは違うものに対する恐れだった。スピリはその向けられたものを完全に無視して、ナイフが突き立ったまま倒れていた青年の横に行き、脈を確認した。

「どうです？ 生きてますか？」

白猫の問いにスピリは小さく頷く。

「助けた方がいい？」

「もちろんですよ、主。人間だけでなく、生き物は誰だって死んだら悲しむものがあるものなんです

」

「悲しむ、ね。私には分からないわ。『安らぎを与え、彼を癒したまえ』」

スピリが言葉を紡ぐと青年の体が温かな光に包まれ、ナイフがはずれて傷が無くなった。

「もしかして貴女は魔女、ですか？ そこにいる猫とも会話をされていたご様子でしたが」

「ええ、まあ」

スピリの答えに対して村長を含む、村人たちが息をのむ。魔女と言え、ほとんど人前に姿を晒すことはなく、それ故に、人がその姿を見ると、報復としてその人物の魂を抜き取ってしまうというような言い伝えがあるほどだ。人を助けるような魔女はいないと言っても過言ではない。

スピリは黙り込んだ村人たちを見て、これ以上ここにいる必要はない、と思い、荷物を取りに行こうとして村の中に入った時だった。

「お姉ちゃんすごいんだね！ 一人で悪い人たち、みんなやっつけちゃった！」

建物の陰から出てきた、一人の女の子がスピリに抱き付いた。それに続くように家の中から男の子が出てきて、同じくスピリに抱き付いた。

「姉ちゃん、兄ちゃんを助けてくれてありがとう！」

驚いたスピリはどうしていいか分からずに突っ立っていると、今度は各家から女子供、お年寄りが出てきてスピリのことを取り囲んで喜んだ。

「ありがとう！」

「あんたがいなかったら今頃どうなってたか分からんよ」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

白猫は、もみくちやにされる自分の主を微笑ましそうに見ていると、横から声をかけられた。声の主は村長だった。

「あの、少しよろしいですか？」

「はい、なんででしょう？」

村長は魔女であるスピリだけではなく、普通の人間である自分とも会話が成立するに驚きながらも、会話を続ける。

「スピリ殿は、魔女なのですよね。それなのに人を助けられるのですか？」

「主は確かに魔女ですよ。それに魔女全員が人間を嫌って、姿を見た人間の魂を抜く、というわけはありません。第一にそんなことをする魔女は本当にごく一部の外れた魔女だけだそうですよ」

「そう、だったのですか。いやはや、我々人間は随分と失礼な思い違いをしていたようですね」

そう言って村長はスピリの方に向かう。

「スピリ殿」

村長が呼びかけると、スピリの周りにいた子供達も静かになって道を開けた。

「我々はこれから宴の用意をするつもりでいます。そこでスピリ殿、貴女もこの宴に出ていただけませんか？ 助けていただいた礼もしなければなりませんのでね」

村長の誘いにスピリは戸惑いを隠せなかった。

「私は魔女です」

「そんなことを気にするような皆ではありません。伝承の魔女は恐ろしいですが、我々は貴女という魔女しか見ておりません。貴女が私たちの知る魔女なのですよ」

村長は周りのみんなを見渡すように合図をする。それに従ってスピリは村人全員を見渡した。そこ

にあったのは自分が魔女と告白する前と何も変わらない、明るい笑顔のみだった。それでも迷っているスピリの肩に飛び乗った白猫は、

「主、いいんですよ、受けて。ここは貴女を受け入れてくれる場所なんですから……ってわー！」

「すごい、喋る猫さんだー！」

「触らせて、触らせてー」

言葉の途中で子供たちに捕まってもみくちやにされた。しかし、言いたいことはしっかり言えていたのでスピリは村長と向かい合うように立つと、いつもの無表情ながら、言った。

「こんな私でよければよろしくお願いします」

「もう、行かれるんですか？」

盗賊たちは、近々来るといって、この村のある領を治める領主の直属の兵に引き渡すと言うので、縛ってそのまま倉庫に閉じ込めた。そしてそれから始まった盛大な宴は夜通し続き、盗賊たちを捕まえた次の日の昼、目を覚ましたスピリが荷物をまとめていると、村長が声をかけた。

「ええ、これ以上は迷惑をかけますから。ほら、起きなさい」

「ふわあ……もう行くんですか、主」

淡々とした口調で返しながら、白猫を起こすスピリと、眠そうに欠伸をする白猫を見て笑いをこぼした村長は、既に起きていた村人に声をかけて、村人総出で送り出した。

「この度は本当にお世話になりましたな。またこちらに足を運ぶ際はぜひ、村によってください。歓迎いたしますぞ」

「こちらこそありがとうございました、それでは失礼します」

村人全員に手を振られて送り出されたスピリは一度だけ振り返って手を振って、そのまま歩き去った。

「ねえ、フィール。少しいいかしら？」

「何です、主？」

フィールと呼ばれた白猫は、スピリの頭の上で器用に毛づくろいをしながら聞き返した。

「招かれた宴の途中、特に子供たちと一緒にいたときかしら。なんだか変な気分になったのだけど、どうしたのかしら」

「変な気分ってどんな気分ですか？」

「そう……浮足立った感じ、かしら」

それを聞いたフィールは微笑んで、答えを返した。

「それが《楽しい》という感情ですよ。よかったですね、主。一つ、思い出したじゃないですか」

答えを聞いたスピリは立ち止まって、胸に手を当てて思いだしていた。あれが、楽しいという感情なのか、と。

「どうしてお母さんはこんな呪いをかけたのかしら。【感情を思い出さなければ死ねない】なんて呪い。こんな私なんてすぐに死んだ方がいいのに。フィール、貴方は言っていたけれど私が死んでも悲しむ人なんていないと思うわ。お母さんだってこんな出来損ない、死んだって悲しまない」

黙って聞いていたフィールは心の中で思った。だからこそ、今の主だからこそ、主の母君はそんな呪いをかけたんだと思いますよ、と。しかし、それを口には出さずに、分かりません、とだけ答えて次の町へと向かうように言った。その言葉に頷いたスピリは、教えてもらった町の方へと再び歩みを進めた。

【次回へ続く】

【あとがき】

初めまして、荒月（こうづき）と申します。まず初めに、『温かいモノ《楽》』をお読みくださりありがとうございます。

新潟大学に入学して、初めて作品を載せていただきました。私は高校でも文芸部だったのですが、初掲載の胸の高鳴りというものは変わることはありません。沢山の方に読んでいただける、という期待と、面白くない、と思われてしまうのではないか、という不安の半々です。

短いあとがきとなりましたが、これからよろしく願いいたします。

シャドウ・ギャラリー

環和巳

アンドレシング

ト音記号の林檎

<sup>ねじ</sup>螺子が回る<sup>さか</sup>逆しまに

ほどけてゆく泣き腫らしたヴェールが

切り取られる午前零時

すり抜けて 触れ合うことのない 人差し指

露わになる漏電した白熱球

— undressing

アイスト・マスク

雪が好きだ。

雪が降っている夜が好きだ。

街灯に照らされ、

仄かに浮かびあがる、

歩道に積もった雪が好きだ。

しゃくしゃくと、

ローファの靴音を吸収する、

静かな雪が好きだ。

雪は、

彼女が歩いた道筋を、

いつまでも遺してしてくれる。

決して彼女の顔を見ることはできないけれど、

遺された足跡は、

彼女だけのものだ。

ああ……、

できることなら、

跪いて、

頬ずりをしたい気分だ。

そうでなければ、  
一歩ずつ切り取って、  
持ち帰ってしまいたい。

いつまでも、保存していたい。

冷凍庫の扉を開ければ、  
そこには、  
至福が詰まっている。  
それを見て、  
満面の笑みを浮かべるのだ。

なんて幸せなのだろう。

けれども……、  
僕はそれをしない。

いつまでも、  
彼女の跡について歩いてゆくだけ。

それだけで、充分。  
満足だ。

それでも、一つだけ わがまま 我儘 を許してもらえるならば、

雪そのものになって、  
彼女に踏み締められ、  
彼女に踏み固められ、

彼女の足跡に、  
彼女の形に、  
自分を凍らせてしまいたい……、

永久に。

—— iced mask

サイコロの隅で対偶を見上げる  
ぴんと張りつめた糸は光  
こまぎ  
細切れのスクラップ記事は砂嵐  
枯れ木には小鳥もとまらない  
いつまでも二分の一  
それでも  
抜け殻が朽ちるとき  
すべては  
水溜まりの中に沈んでゆく  
夢の中に遠ざかってゆく

— Alice In Wonderland Syndrome

### ラミフィケーション

乾ききった喉から  
手首が吐き出される  
ひび  
空を走る罅  
フラクタルな指  
どこまでも  
眼球はそれを追う  
はてしなく  
いつかきっと  
見つかるはずのない  
爪を見つけるまで

— ramification

### シャドウ・ギャラリー

足元から伸びる影  
あまだれ  
その様は霏を想起するも  
うが からだ  
穿つはむしろ僕の躰か

椅子に縛られた僕は  
それをじっと見ている

沼のような影を  
血溜まりのような影を

しかし何故

影は蠢くのか  
うごめ  
ふる  
顫えるのか

視線を移しても  
眼を瞑っても  
消えないのか

靄のように揺らぎ  
かげろう  
陽炎のように滲み

磔の僕を嗤う  
群衆の影

すべては  
影

否  
影は.....

僕の方なのか

僕は.....  
影を観て嗤う

嗤い続ける  
ずっと



## おまじない（三ツ葉葵）

---

おまじない

三ツ葉 葵

人類は私だけになってしまったのだろう

奴らは突然現れた

奴らは私を狙っている

奴らは今日もやってくる

髪を後ろに縛って気合を入れる

そしていつものおまじない

人を三人かいて飲む

噛み千切ってからよく噛んで

奴らの皮でできた上着を勢いつけて羽織る

さあ、斧をもって出かけよう

明日も生きる、その為に

奴らのようにならないように

愛に溺れた彼女は夢を見る

七乙女昴

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『あっ、リンちゃんだ！ いらっしやい！』  
『おそくなってごめんね、ヒメちゃん』  
『いいよ。それよりもきて！ ママからすごいこときいちゃった！』  
『すごいことって、なあに？』  
『おまじない！ ずっとなかよしでいられるんだって！』  
『`ずっと、って、おばあちゃんになっても？』  
『たぶん！ `ずっと、だもん！ ね、やろうよ！』  
『うん、いいよ！ リンコも、ヒメちゃんとずっとなかよしでいたいもん』  
『やった！ じゃあ、ヒメノがまずやるから、リンちゃんはヒメノのまねしてね！』  
『わかった！ .....わわっ、くすぐったいよ』  
『もうちょっとガマンして。えっと、なかよしこよし、なかよしこよし、なかよしこよし.....で  
きたっ！ じゃあ、つぎはリンちゃんだよ』  
『うん。えっと.....はじめはどうするの？』  
『あっ、はじめはね、じぶんのなまえをかいて――』

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

酷く憂鬱な天気。教室の窓ガラスに滴っている雨粒を見て、私は小さな溜め息を吐いた。  
無駄に熱血な数学の先生が「この問題、次のテストに出すからな」と言うと、クラスメイトが一斉にシャーペン走らせ始めた。私もその例に漏れず、シャーペンをあくせく走らせていたけど、途中で芯が折れてしまい、書き写そうという意思も一緒に折れた。  
視線を黒板から窓ガラスの向こうへ戻す。まだ午後四時なのに外はだいぶ薄暗い。分厚い雨雲が見渡すかぎり広がっていて、太陽の影はどこにも見当たらない。  
六月は嫌いだ。平日に祝日がないし、梅雨に入ったらジメジメするし、暑くても教室で冷房点けられないし。ジューン・ブライドという言葉があるけど、私は六月に結婚式なんて絶対したくない。やるなら桜吹雪が舞う三月末から四月上旬の間が個人的にはベスト。それから.....和風と洋風はどっちが良いんだろう。ウエディングドレスは着てみたいけど、桜とマッチするのは和服かな多分。でもチャペル式も捨てがたい.....ああ、悩ましい。っつてか、そもそも私は結婚――

「起立」

いつの間にか授業が終わっていた。慌てて立ち上がり、クラスメイトにあわせて礼をする。金曜六限の授業が終わり、待ちに待った放課後だ。とは言え、私は筋金入りの帰宅部なので帰る以外にやる  
ことがないけど。

<sup>ひめの</sup>  
「姫乃、今日はまっすぐ帰ろっか」

鞆を背負い、隣の席に座っていた長髪の子に話しかける。

「そうね。この天気だし、大人しく帰りましょうか」

そう言って教室を出る姫乃の隣に並び、今日も今日とて梅雨はいつまで続くか、とか今日の夕飯は何だろう、とか他愛のない会話を繰り返す。

姫乃の歩く動きに合わせ、学校中の女子から羨ましがられている髪の毛がサラサラと揺れる。このジメジメした季節でも全く痛んでないのは手入れの賜物なんだろうな。

「そういえば、姫乃って昔からずっとロングだよな。手入れとか面倒くさくならない？」

中学生の頃、姫乃は一時的にツインテールにしていた。本人曰く、『あれは黒歴史だから忘れて』とのことだけど、あれはあれで可愛かったし、姫乃はもっと色んなヘアスタイルに挑戦するべきだと思う。主に私の好奇心のために。

「暑くなると煩わしく感じることもあるけれど、手入れはそこまで苦ではないわ。それに、母がいつも手伝ってくれるから」

姫乃とは対照的に、私は今までずっとショート。運動する時に邪魔だから、とかではなく、単純に、長いと手入れが面倒くさそうだったから。ちなみに、最近は寝癖を誤魔化すために少し巻いているけど、ぶっちゃんけ面倒くさいから巻き方は適当。

「へえ、お母さんが手伝ってくれるんだ、いいなあ。うちのお母さんじゃ頼んだって絶対やってくれないよ」

最近、朝起こしてくれなくなったし。

「そうかしら？ あなたのお母さんなら嬉々として手伝ってくれそうだけど」

「姫乃は私のお母さんを過大評価しすぎだよ。姫乃のお母さんの方がずっと綺麗だし、優しいじゃん」

「.....確かに、母は客観的に見て素敵な女性だわ。母子家庭の一人娘だからか、わたしを溺愛しすぎるくらいはあるけれど」

姫乃のお父さんは、姫乃が産まれた直後に事故で亡くなってしまったらしい。ウチは平凡な四大家族だから姫乃の家がどんなに大変なのか分からないけど、姫乃のお母さんが姫乃のことをすごく大事にしていることは話を聞くだけで伝わってくる。

「そりゃあ、こんなに綺麗で可愛い愛娘がいたら誰だって溺愛しちゃうよ。少なくとも私だったら溺愛しちゃうね」

「本当に？」

「嘘ついたってしょうがないでしょ。ああ、私も姫乃みたいな子供を産みたいなあ」

あまり深く考えずに口から出てきた言葉に自分の願望が漏れ出ていることに気づき、思わず苦笑した。

恋人になることが許されないなら、せめて家族になりたい。

家族になることが許されないなら、せめて隣にいたい。

「.....姫乃？」

渡り廊下の真ん中あたりに差し掛かったところで不意に立ち止まった姫乃につられ、私は振り返った。姫乃が俯いているせいで顔の上半分が前髪で隠れてしまい、笑っているように見える口元がやけに印象的に映る。

「ねえ、二つ訊いても良いかしら？」

姫乃はおもむろに口を開いた。瞬間、周囲の空気が一気に冷たくなった気がした。

「い、いいけど？」

顔を上げた姫乃は今までにないくらい魅力的な笑顔で、だからこそ、私は何か嫌な予感がした。

「わたしが死にたいって言ったら、どうする？」

人気のない二階の渡り廊下に、姫乃の声が響き渡った。

「死にたい、って.....どうしたの、急に。そんなの、引き留めるに決まってるじゃん」

そんな当たり前のことを、どうして今尋ねたんだろう。

「本当に？」

「本当の本当。だからそんな怖いこと言わないで」

幼稚園の時から今までずっと同じクラスの幼馴染で、大事な親友で.....大好きな人が死にたいなんて言ったら全力で引き留めるに決まっている。

「そう。じゃあ、次の質問。わたしがあなたの制止を振り切って死んじゃったら、どうする？」

今度は、事前じゃなく事後の話。死んじゃうってことは、二度と姫乃の顔が見られなくなるってことで、二度と姫乃と会話できなくなるってことで.....

「.....そんなの、そんなの、考えたくもないよ。どうしてそんな怖いこと訊くの？ 私、姫乃が何を考えてるのか全然分かんないよ！」

思わず大きな声を出してしまったけど、相変わらず渡り廊下には私たち以外誰もいない。それだけで違和感がすごいのに、さっきまで聞こえていたはずの雨音さえもいつの間にか聞こえなくなっていた。世界から切り離されて私たちだけが取り残されたみたいで、なんだか怖い。

「気を悪くさせたのなら謝るわ、ごめんなさい。最近ちょっと考えることが色々あってね、それで少しおかしくなっているのかもしれないわ」

姫乃はそう言って今度はニヒルな笑みを浮かべた。その表情に思わずゾツとする。私の知っている姫乃は、そんな表情で笑う女の子じゃない。まるで何かに憑りつかれているみたい。怖い。嫌だ。帰りた。

「ね、ねえ、なんか今日変じゃない？ 早く帰ろうよ。ほら、雨足も弱くなってきたみたいだしさ」

とにかく、一刻も早くこの場から逃げ出たくて生徒玄関に向かおうとした。だけど、なぜか私の意志に反して足が動かない。動いてくれない。動け。動け。動け。動いて。動いてよ。

「.....よく聞いて。実は昨日、`おまじない、の真実を母から聞いたわ」

「.....真実？」

さっきの表情から一転し、いつもの凛とした姫乃の表情に戻った。真実って何だろう。ただ、その声は震えていて、表情は無理して作っているように見える。だから、その真実とやらはあまり良いものではないんだろう。でも、それならなおのこと今は聞きたくない。だけど、未だに身体は金縛りにかかっているかのように動かない。

「よく分かんないけど、取りあえず今日はもう帰ろう？ 話があるなら明日きちんと聞いてあげるからさ」

私の必死の懇願も虚しく、姫乃は口を開く。

「あの時、わたしは確か『ずっと仲良しでいられる』`おまじない、だって説明したわ。だけど、その表現には大きな語弊があったの。実はね、あれは『好きな人とずっと一緒にいられる』`おまじ

ない、だったの」

「好きな人と、ずっと一緒に……」

聞こえはすごく素敵な「おまじない、だ。女の子なら誰もが憧れる、永遠の愛を手に入れるための魔法。だけど、それは理想だからこそ憧れるもので。憧れのままだからこそ素敵に見えるわけで。

「言い方を換えるわ。あれは『相手に一生愛される』「おまじない、だったの。こんなおまじない... ..いえ、互いに理解していなかったのに効力があるのだから、あれは契約、あるいは呪いの類ね。こんな呪いが現実にあるなんてにわかには信じがたいけれど、少なくとも母はそう言っていたわ」

「おまじないじゃなくて、呪い……」

相手に一生愛される「おまじない」。それは相手の心を否応なしに自分に向けさせるってことで... ..それはつまり、相手の心を縛りつける「呪い」とも言える。あまりにも非科学的だけど。でも、「おまじない」が存在するなら「呪い」が存在しても不思議ではないのかもしれない。

「ねえ、一つ、確認したいことがあるの」

「……うん」

流れからして、何を訊かれるのかは予想できた。

「わたしのこと、好き？」

「……うん。私、姫乃のこと、好きだよ。ずっと前から、大好きだよ」

気づいた時には好きになっていた。だけど、いつも一緒にいたせいでそれがあまりにも当たり前になりすぎていて、そのことに違和感なんて抱かなかった。

「わたしのこと、愛してる？」

「うん。「好き」と「愛してる」の違いなんて分かんないけど」

姫乃がクラスの男子に告白される度に、胸がすごく苦しくなった。将来について考えた時、その未来予想図ではいつも姫乃が私の隣で微笑んでいた。

姫乃さえ居れば、それだけで充分だって思えた。

「そう。ありがとう、わたしも好きよ。愛してるわ」

想像していたシチュエーションとは全然違うけど、ずっと聞きたかった言葉をとうとう聞くことができた。夢にまで見た光景を、ようやく見ることができた。心の底から熱い何かが込み上げてきて思わず涙が溢れそうになったけど、それよりも先に姫乃が再び口を開いた。

「私、想い人に好きと言われることがこんなに嬉しいだなんて想像してなかったわ。本当、夢みたい。だけど、だからかしらね。なんだかここが現実世界のような気がしないの。実はここは私の恥ずかしい夢の中で、そのうち目覚まし時計の音に邪魔されて、私はベッドの中で目覚めて。そして登校してみたら、あなたは私に恋愛感情なんて全く抱いてなくて——」

雨音が再び耳に入ってきた、と同時に固まっていた足がようやく動いた。もつれそうになりながらも必死で姫乃に駆け寄り、細い身体を力いっぱい抱きしめる。

「ここは夢の世界なんかじゃない！ 私の想いも偽物なんかじゃないよ！ちゃんと私たち、ここにいるんだよ！」

泣きじゃくりながら必死で私の想いを姫乃に伝える。

「……でも、私たちは「呪い」にかかっているのよ？ たとえここが現実だったとしても、私たちの

「思いが紛い物じゃない保障なんてないじゃない。だから、あなたの言葉があなたの本心かどうか、わたしには判らない。それが、堪らなく怖い。だったら、いつそこが夢の中だって思っていた方が――」

「私は今が本物だって信じたい！　だって、ずっと前から姫乃のこと好きだったもん！　今が嘘だったら、昔の私まで嘘になっちゃうじゃん！　そんなの嫌だよ！　姫乃との思い出が全部偽物だったなんて認められるわけがない！」

私たちの思いが「おまじない」によって作られたものかどうか、それは分からない。だけど、私たちが今まで一緒に過ごしてきた時間さえも偽物にされるなんて絶対に嫌だ。だって、そんなの悲しすぎる。私は本物だって信じたい。いや、信じている。

「私は姫乃と一生一緒にいる。絶対に姫乃から離れない」

「.....本当に？」

伏し目がちに尋ねる姫乃の不安そうな表情は、いつもの自信満々な態度からは想像できないもので、この時になってようやく、私は姫乃の弱っている姿を初めて見たことに気づいた。いつも私が頼ってばかりだったけど、姫乃はいつも人の手を借りずに自分一人で解決していた。そんな姫乃が、初めて私に助けを求めているのだ。なら、私のすべきことは決まっている。

「ねえ、姫乃。もう一回、「おまじない」、しようよ」

姫乃が二度と不安に苛まれないように、呪いの鎖を自ら手に取る覚悟を私は決めた。

四階、特別教室棟の最奥に古い教材や配布物などが保管されている資料室がある。そして、その資料室の隣にある女子トイレは、姫乃の予想通り、誰も使っていなかった。

「ねえ、本当にここで良いの？　と言うか、わたしと二回目、本当にするの？」

あの頃は、姫乃の家で「おまじない」をしたけど、今はいつ誰が来るか分からない学校のトイレ。お互いに羞恥心やら色々な感情を知った上で行うにはかなり気恥ずかしい。

「ほら、善は急げって言うじゃん？　それに、二回目をやれば「おまじない」の効力が途中で切れる心配も減りそうだし」

二回目をやることに効果があるのか、私には分からない。むしろ、「おまじない」の存在なんて忘れた方がお互いのためなのかもしれない。だけど、姫乃にとって「おまじない」が枷になるくらいなら、私は逆にそれを確かな証にしようと思った。

「ねえ、姫乃。私ね、実を言うと「おまじない」が本当に効いてるのかどうか半信半疑なんだ。でも、本当に効いてるとしても、全くのデタラメだったとしても、私は姫乃を好きでい続けるよ。約束する。だから、三つの中から好きなものを選んで」

たとえば、偽物だとしても、死ぬまでその正体を信じ続けられたら、それは本物と呼んでもいいんじゃないかと私は思う。大事なものは、最後まで信じる。疑わないこと。

「三つの中から一つ.....」

「まず、『私を信じて、「おまじない」を信じない』、それと、『私を信じないで「おまじない」を信じる』、それから、『私と「おまじない」の両方を信じる』。さあ、どれを選ぶ？」

姫乃がどれを選ぼうが私がやることは変わらないけど、姫乃が納得できるなら何でもいい。姫乃が

信じきれぬ理由なら何だっていい。

「.....わたしは、わたし自身の気持ちを大事にしたい。だって今、こんなにも幸せな気持ちだから。あなたがわたしを好きだって言ってくれたことがこんなにも嬉しいから。だから、少し怖いけれど、絶対の証が欲しいけれど、わたしは、あなた`だけ、を信じるわ」

姫乃はそう言って、私に優しいキスをくれた。ただ唇と唇が触れただけなのに、涙が出そうなほど幸せが込み上げてくる。「ずっと前から好きでした。わたしと付き合ってください」

「.....うん、もちろんっ！」

ムードもへったくれもない女子トイレの個室だけど、私たちは飽きるまで何度も何度もキスを交わした。本当に、幸せな時間だった。

でも、この時に`おまじない、をしなかったことを後々私は死ぬほど後悔する。

この日を最後に、姫乃は私の前から姿を消した。

【二週間後】

――一次のニュースです。先週、杉並区で起きた母子行方不明事件ですが、先日、遺体が発見されました。遺体は都内のホテルで発見され、現在ホテル内は関係者以外立ち入り禁止となっています。母親の鞆から空き瓶が二つ発見され、遺体には目立った外傷が無いことから、警察は二人が何らかの薬物を大量に摂取したことによる親子心中の可能性が高いと見て調査を続けています。また、行方不明になった前日の夜、母親のり.....

私の中で、何かが壊れる音がした。

【六年後】

「ただいまー」

部屋に帰宅するや否や酷い疲労感が私にのしかかる。スーツを脱ぎ捨てて下着姿になってからベッドにダイブし、今日一日の疲れを改めて実感する。そして自室内に訪れる静寂。仕事終わりの飲み会に参加すること自体は仕方ないことだとしても、職場外でも上司の顔色を窺わなければならないのは非常に疲れる。ニヤニヤしながらセクハラっぽい質問をぶつけてくる輩の相手はなおのこと。

今日も結局二次会に誘われたけど断ってしまった。まあ、何かと私に気を配ってくれる同期の彼がうまく上司の相手をするだろう。

シャワーを浴びた後、髪の毛をタオルで拭きながらいつものようにイヤホンを着ける。

イヤホンから聴こえてくるピアノの旋律と`約束、だけが、今の私の支えだ。立ち直るのにおよそ一年はかかったけど、何とかこうして私は社会の荒波にもまれても平気になった。

姫乃はクラシックが好きだった。その中でも特にお気に入りだったのが『愛の夢』という曲だった。私にはクラシックの知識なんか全く無いので、曲に込められた意味とか作曲家の思いなんて分からないけど、なんとなく、姫乃みたいな雰囲気曲だなと初めて聴かせられた時から思っていた。すご

く綺麗で優しくて、ちょっとだけ儂い旋律が姫乃の凜とした佇まいを思い起こさせる。

脱ぎっぱなしの服を片付けなきゃ、と思いノロノロとベッドから洗濯機へ向かおうとした時、テレビの向かいにある化粧棚が視界に入り、その引き出しが少しだけ開いていることに気づいた。何となく気になったので引き出しを閉めようと近付いたところ、ふと引き出しに入っている封筒の存在を思い出した。

姫乃が行方不明になってから約二週間後、姫乃の家から私宛の封筒が見つかった、という連絡を警察から受けた。

そう言えば、結局受け取った時に一回開けたきりだった。封筒を引き出しの中から取り出してベッドに座り直す。

封筒には『愛しの幼馴染、<sup>りんこ</sup>倫子へ』というかすれかけの文字が書かれていて、中にはいくつか切り分けられた手紙のようなものが入っている。姫乃の部屋にある机の、鍵のかかった引き出しの中に入っていたらしいけど、なにぶん切り分けられているので順番や枚数がこれで合っているのか分からない。枚数に関しては明らかに足りないような気がする。とは言え、これ以上は発見されなかったらしいので仕方ない。とりあえず以前と同じ順番で読み始めることにした。

『私たちは結婚できないわ。だから、私たちは恋人になんてならない方が良いのかもしれない。だけど、私は貴女以外考えられないの。いつか貴女が彼氏を作って、その彼氏が夫になって、子供を作って……って考えただけで気が狂いそうになるの。だから、ごめんなさい。こうするしかなかったの。』

『私は既に底無し沼へ両足を踏み入れているわ。だけど、貴女はまだ片足しか踏み入っていない。そのことに気付いた時、私は思ってしまったの。`貴女を溺れさせたい、って。』

『私が死んだら、貴女はきっと私に一生囚われ続けてくれるはずだわ。だって、貴方の為`だけ、に死ぬんですもの。貴女が私以外の人を好きになることなく、私だけを生涯愛してくれることを祈って死ぬんですもの。』

『色々書いてきたけど、今更ながら、もし、この手紙を読んでいる貴方が倫子以外の人だったら、私のことを狂っていると評するかもしれないわね。でも、私は恋愛ってそういうものだと思うの。運命的な廻り合わせがあって相手が自分の一番になり、自分が相手の一番になった。そうなった後は、それを維持する為にあらゆる手段を投じるのはごく自然なことじゃない？』

『倫子、確かに私は死のうとしているし、貴女がこれを読んでいる時には既に死んでいるかもしれない。だけど、私はいつも貴女のことを見守っているわ。だから、毎日私に`愛してる、と呟いてね。約束よ。貴女が死ぬまでずっと、私は貴女だけを見つめているわ。』

『でもね、貴女を早死にさせたいわけじゃないのよ？ 貴女にはちゃんと年老いて幸せな人生を全うしてから死んでほしいと思ってるの。だから、私が居なくなった後の世界で、私だけを見て、これからも頑張ってるね。』

『もし、貴女がどうしても堪えきれなくなったら、`おまじない、のことを思い出して。きっと、貴女を救ってくれるはずだわ。それじゃあ、次は天国で会いましょう。愛してるわ、倫子。これまでも、これからも。』



警察から受け取って封筒の中身を読んだ当時は恐怖で身体が震えた。ここに書かれている姫乃の気持ちは、私の知っている姫乃とはあまりにもかけ離れているように思えて、まるで、今まで私が見てきた姫乃は偽物なんじゃないかって考えてしまうくらい衝撃的なものだった。今改めて読み返してみても軽く鳥肌が立った。正直、姫乃じゃなかったらドン引きするレベルだと思う。

それでも、ものすごく私を愛してくれていたことは嫌でも伝わってきて、そのことがものすごく嬉しいことに気づいて。

だからこそ、私は社会人になった今でも姫乃に毎朝毎晩『愛してる』と呟いている。

だけど、やっぱり辛い。居なくなった人を愛し続ける生活は酷く息苦しい。

姫乃が居なくなってから今までの間に何度か男子から告白された。中にはかなりのイケメンで将来有望そうな人もいた。だけど、私は『他に好きな人がいるから』と言って断り続けた。それは紛れもない本心だし、嘘は欠片も混ざっていない。だけど、そう言う度に胸の奥がズキズキと痛む。それはその男子への罪悪感なのか、それとも姫乃への罪悪感なのか、あるいはその両方なのか。いずれにせよ、この痛みは永遠に消えることはないだろう。

最近、職場で熱っぽい視線を感じるようになった。向こうはうまく隠しているつもりなんだろうけど、私にはすぐに分かってしまった。同期の彼はものすごく真面目な人で、かなり優秀らしい。顔も悪くないし、気配りもすごくできる。間違いなく良い人だ。

だけど、姫乃に勝ることは絶対にない。姫乃の代わりになり得る可能性は絶対にない。これまでも、これからも。

自分で決めたこととは言え、私は姫乃しか愛せないという業を背負って生きていくしかないのだ。その業がどんなに重くても、その重みを堪えていくしかないのだ。

『もし、貴女がどうしても堪えきれなくなったら、`おまじない`のことを思い出して。きっと、貴女を救ってくれるはずだから。』

不意に手紙の最後の一枚が脳裏に浮かんだ。あれから二十年近く経つけど、`おまじない`のやり方は自分でも不思議なくらい今でもはっきりと憶えている。ちょうどパジャマのボタンを留めていなかったこともあり、特に深く考えずに自分のお腹に親指を当て、あの日姫乃からされたように指を動かした。



『あっ、はじめはね、じぶんのなまえをかいて……あっ、おやゆびじゃないとダメだよ！』

『そうなの？ …… `り`、`ん`、`こ`、こう？』

『おっけー。リンちゃん、これ、かなりくすぐったいね』

『でしょ？ リンはちゃんとガマンしたんだから、ヒメちゃんもガマンしてね？ つぎは、おなかをナデナデするんだっけ』

『うん、`なかよしこよし`、ってじゅもんをさんかいとなえながらだよ！』

『わかった！ えっと、なかよしこよし、なかよしこよし、なかよしこよし……これでいい？』

『うん、ばっちり！ これでヒメノとリンちゃんは`ずっとなかよし`だよ！』



【???

「ママー、おもしろいおはなしして！」

「姫乃、もうオネムの時間だからダメ。また明日ね」

「ぶー、ママのいじわる！　きらい！」

「もう、すぐに拗ねるんだから.....姫乃、ママは姫乃のこと、大好きなのよ。姫乃はママのこと、本当に嫌い？」

「.....ううん。ママのこと、だいすき」

「ふふふ、ありがとう。じゃあ素直で良い子の姫乃には秘密のおまじないを教えてあげるわ」

「おまじない？」

「そう。ママが知ってる中でもとびきり素敵なおまじない」

「わーい！　どんなの？　どんなの？」

「.....好きな人とずっと仲良しでいられる `おまじない、よ」

【終】

～あとがき～

もうちょっとホラーっぽくしたかったけど自分の力量ではこれが限界でした。もうちょっと狂わせてあげたかった。ちなみに、この作品を書いている間だけで『愛の夢』を五十回は聴いた気がします。

次は「キラ☆ふわ」になるよう頑張ります。

# 旅は道連れ（加々美翔）

旅は道連れ

加々美 翔

慣れないなと思う。錆びた鉄と微妙な生臭さを織り交ぜたこの臭い。全身に纏わりつく、べったりと粘っこいこの感触。視界いっぱい広がるこの赤。何度も嗅いだ、見た。今みたいに全身に浴びたことだって少なくない。それなのに――。

「……ほんと慣れねえわ、血ってのは」

周囲の転がる獣たち。体中から血を流し、ズタズタになったそれらは、さっき俺を襲ってきた奴らのなれの果てだ。辛うじてまだ生きてるみたいだが、じきに失血死は間違いない。

真っ赤に濡れた両手をぼんやり眺める。これだけ真っ赤なのに、それでもはっきりわかる黒い痣。蛇が絡み合うように見えるこの痣は、掠っただけでこの惨状を作り出す。

「雨降らねえかな」

灰色に覆われた空。降ってくれば、多少血が洗えるのに。

「うわあ、これはまた派手にやったねえ」

この場に似つかわしくない、呑気な声が響いた。振り返ると、木の陰に金髪の少女が一人。俺より頭一つ分は低い、小柄な少女だ。そんな少女が興味津々といった様子で血だらけの狼を眺めている。暗い色ばかりのこの場で、彼女の長い金髪も白いワンピースも不気味なくらい浮いている。

「あんまり近づくと血が付くぞ」

ひらひら揺れる裾が気になって、思わず話しかける。途端にやたら嬉しそうな顔でこっちに近寄ってきた。

「私はリアン。君、名前は？」

「……レト」

少女、もといリアンは何が楽しいのか、一步離れた距離で俺の周りをちよろちよろ動く。俺の真横に行ってみたり、後ろに回ってみたり。俺が彼女の方に視線を向けるたびに嬉しそうに笑う。なんだ、こいつ。血まみれの男をみて何が楽しいんだ？

「俺は観葉植物じゃねえぞ」

「見えてるよね」

「は？」

「私が。ね？ 見えてるよね」

なんだこいつ。そんなの当たり前じゃねえか。眉をひそめつつ頷く。一瞬、その目が、きらりと輝いた気がした。

「うんうん。やっぱりか。懐かしい感じがしたから、もしかしてと思ったけど私が見えてるし、何よりその痣は間違いないや」

ちょっと、待て。一人で納得すんなよおい。リアンはこれを知ってるのか？ とうとうそれよりも「懐かしい」だと？

「懐かしいってどう意味だ、それ」

「だって、それ———私がかけた呪術だから」

告げられた言葉に絶句する。

今、なんつった？ こいつが？ かけただって.....？

脳裏によぎる、灰色に呑み込まれた村。そこに取り残されたあいつ。俺の人生を狂わせた、この忌々しい呪いをかけたのがこんな少女？

「言うだけじゃ説得力ないね。じゃあ挨拶代り 『私に従え』」

リアンの口調が急に重々しいものになる。そして、その言葉が発せられた瞬間、両手の痣、さらに周りの狼たちの体が赤く光りを帯びた。

「嘘.....だろ」

目の前で、狼たちの傷が消えていく。つい数秒前まで瀕死だった狼たちは光が収まると同時に怯えたように逃げ去っていた。「呪いの効力を消してみた。ぎりぎり死んでなかったから上手くいったね。血は消えてくれなかったみたいだけど」

何でもないことのようにリアン。だが、この十年で、どんなに力のある呪術師でもこの呪いを解呪するどころかこれで傷ついた奴を助けることさえできないという事実を俺は知っている。例外があるとすれば、かけた本人くらいだろうということも。

「.....本当にお前がかけたのか」

「うん、その呪術は二百年前に私がかけたもので間違いないよ。だから——っつ！」

それ以上、彼女の言葉は続かなかった。当たり前だ。俺が蹴り飛ばしたからな。リアンの小柄な体は予想以上に後ろに大きく吹き飛ばされ、地面に落ちた。すかさず、仰向けに倒れた体に馬乗りになって足で抑えつけ、ナイフを抜いて首元に突きつける。

「痛ったいなあ.....まだ話の途中だったんだけど」

「黙れ。お前の、この呪いの所為で俺の兄貴は死んだ。村もめちゃくちゃになって、俺は.....誰にも触れられなくなった」

突きつけたナイフが震える。あと少し、ほんの少し力を込めれば、リアンの細い首なんて簡単に斬れる。

「殺せるの？ そんなに怖がってるのに」

「うるさい」

「無理だよ。君には出来ない。だって本気で殺す気なら慣れないナイフなんか使わなくて、その両手で触ればいいんだ」

確かに、ずっと簡単にできる方法があるのにあえて避けた。———傷つけるのが怖いんだ、違う？ 頭に響くリアンの言葉を振り払うようにナイフを振りあげる。

「出来るさ、呪術ってのは、術者が死ねば解けるんだろ？ お前がかけたってんなら、お前を殺せば、全部終わる」

もう、触れただけで誰かを殺してしまうことはなくなる。一人で生きる必要もない。そう、こいつさえ殺してしまえば。

「残念だけど——私を殺してもその呪いは解けないよ」

振り下ろしたナイフは――、リアンの首の横の地面に突き刺さった。……

「解けない？ どういうことだ」

「そのまんま。私の呪いは私以外には解けないし、私が死んでも解けない。そういう風に私は作った。だからレトが私を殺したら、レトの呪いは君が死ぬまで解けることはないよ」

茫然とする俺を、まっすぐ見据える鮮やかな紅の双眼。いつになっても慣れない、――苦手な色だ。

「だから提案があるの。

――その呪い、私に解かせてほしいんだ」



故郷へ帰る気なんてなかった。というか、帰れる日がくるなんて思ってもいなかった。まして、帰れなくなった元凶ともいえる少女と一緒にだなんて。

「変な気分だ」

「ん？ 調子でも悪いの？」

違う。見当はずれな推察をしてくるリアンに無言のまま首を横に振る。

「じゃあなにさ？」

「別に。それよりお前、本当に解けるんだろうな、村の呪い。あと俺の」

「解けるってば。なんなら今ここでレトのだけ解いて見せたっていいんだかんね？」

心外だとばかりにリアンは俺を睨む。力量を疑われるのは気に入らないらしい。

「馬鹿そんなことしたらお前が見えなくなるんだろ。却下だ」

「私は構わないけど？」

俺が構うわ、ぼけ。見えない何かに付きまとわれるなんて御免だと、軽くつま先でこずく。痛い！

と文句を言うてくるのは綺麗に無視する。相手にされないと分かったリアンも、街道沿いの木の柵の上を歩いてみたり、脇の茂みに入ってみたりと一人勝手気ままな行動をとり始める。俺はといえば、何とはなしにその様子を眺めつつ、数時間前に聞いた話を脳裏に思う浮かべていた。



「解かせてくれって……なんだそれ」

意味が分からない。

「うーん、正確にいうならばレトのというより、その呪いの本体があるところに案内してほしいってことかな」

「呪いの本体……俺の村へ案内しろってことか」

リアンが頷く。自分でかけたくせに場所が分からないのか。

「多すぎて忘れた。し、直接かけたわけじゃないのもある」

.....ひとまず解かせてほしいという言葉の意味は分かった。が、まだ分からないのは。

「なんで自分でかけた呪い解く必要がある？」

「んー.....ややこしい話なんだけど、実は私も呪われてるんだ。かれこれざっと二百年間」

これも見せた方が早いかな？ と、リアンが案内したのは森の中にある小さな泉。小さいながらも、澄んだ水は陽の光を浴びてキラキラと光っていた。

「見たとこただの綺麗な泉だけど、これが何なんだ？」

「水面よく見てみて」

促されて再度覗き込んだ所で気付く。水面に俺が映っていた。.....俺だけ、が。

「お前が映ってない？」

「そ、さらにこうやって水に手を突っ込んでも」

勢いよく水面に叩きつけられたリアンの手は、水飛沫どころか、波紋すら作らない。水面は相変わらず凧いだままだ。

「どうなってんだ、これ」

「『世界から認識されない呪い』 人も物も時間さえ私に干渉できないし、私も干渉できない。そういう呪いだよ」

その後のリアンの話をまとめるとこうだ。

曰く、リアンは二百年前の呪術が最も盛んに使われた時代において並ぶものがないと評された天才呪術師で。故にリアンの強力な呪術はあちこちで必要とされ、望まれるがままに彼女は呪術を作り出した。ところが、あまりに強力すぎたその力は次第に恐れられ、結果リアンは捕まり、その時何人も呪術師の力を合わせて彼女にかけた呪いがこの『世界から認識されなくなる呪い』だったらしい。

「でね、この呪いの解呪条件は私がこの世にかけた呪いすべてを解呪することなの。私以外に解ける者がいない上に、私を殺しても解けないってんで、何とか私自身に解かせようとした結果がこれ」

「なるほどな。考えたもんだ。ということは、俺がお前を見れるし、触れるのは.....おれがお前の呪いに罹ってるからか」

例外。リアンがこの世で干渉できる唯一のものが彼女自身が作り、ばら撒いた呪術というわけだ。

「察しがいいね。で、改めてなんだけど、私を殺すのはひとまず勘弁してくれない？ レトの村の呪いも、レトの呪いも」

私がちゃんと解くからさ——。



結局俺はリアンの提案に乗った。そして二人で一緒に俺の故郷を目指し始めて、そろそろ半日。朝方は雲がかかっていた空も今は晴れ渡っている。西の空はもう茜色に染まり始めていた。

「夜どうすっかな」

「この辺宿場とかないの？ 私は野宿でも、夜通し歩いてもかまわないけど。疲れないから」

「眠くもならないのか」

リアンはこくと頷いた。眠くならない.....想像できないが夜が長そうだなとぼんやり思う。

「偶に寝る真似事はしないと精神的に疲れるみたいなことはあるかな」

「ふうん。……確か少し先に宿場があるからそこで一泊だな」

「りょーかい」

宿場に着いたころにはもうすでに辺りは真っ暗だった。辛うじて取れた部屋は一人用の一等小さな部屋。ベッド一つ入ったらほぼ埋まる狭さだ。……一人用でもないだろ、この狭さ。

「絶対客を泊める部屋じゃねえ……」

「私床でもよかったけど、ベッド以外の空間がないね。一緒に寝る？」

持っていたタオルではたく。一緒に寝るとか、ふざけんな。

「血まみれでおはようとか笑えねえわ」

「そっちの心配？」

呆れたようなまなざしを向けられた。他にあんのか？

「一応男女がこんな狭い部屋でって方が一般的じゃない？ 言っとくけどレトに触ってうっかり呪いの餌食とかないから。かけた本人には効かないの」

効かないのか。結構大事な事をさらっと言いやがったぞ、こいつ。というか、は？ 男女って……

「ガキに興味はつつぐあ」

殴られた。しかも的確に鳩尾。細腕とは思えない威力だ。

「背が低いし、胸もないけどガキじゃないから。いい？ 肉体年齢は二一だし、レトの親の親より昔から生きてるんだからね」

子供っぽい見た目に自覚はあったのか。大人しく降参する。もう一発はごめんだ。

結局その日は、お互いベッドの端で膝を抱える形で夜を明かした。旅に出てから、初めての——一人じゃない夜だった。



「レトの村ってあとどのくらい？」

一人だった旅が二人になって四日が経った。山がちだったところから海の見える所まで。随分近くまで来たもんだと思いながら、折りたたんだ地図を取り出した。

「この街道を道なりにいけば明日の昼にはつくな」

「そっか、結構もう近いんだね。懐かしい？」

どうだろう。十年以上離れていたから変わっているところも多い。それでも、記憶と重なる部分には懐かしさを感じないでもなかった。

「レトの村ってどんな所かなあ」

「面白味なんてないぜ」

海沿いのありふれた村だ。今じゃあ見る影もないだろうが。

「そういや、お前は俺の村に言った後はどうするんだ？」

「まだ残ってるのを探しに行くよ。当たり前でしょ」

「熱心だな。そんなにその呪い解きたいのか？」

ある意味では不老不死とも言える。永遠の命……。俺の考えを悟ったのかりアンは苦笑した。「私も最初の五十年くらいはそう思ってたなあ。元々一人が好きだったし、誰に見られなくても別にどうでもいいやって」

そうやって空をみるリアンの横顔はいつもと違って妙に大人びて見えた。二百年。普通ならどう頑張ってもその半分生きられるかどうかといった時間。

「あと……どれくらい残ってるんだ？ お前の解くべき呪い」

「さあ。ただ何となくまだあるって感じるくらい。あの時はほんと節操なく作ってはばら撒いてたからなあ。ただ、四分の三くらいは達成してるっしょ」

「四分の三は断言できるのか」

「人を対象にかけた呪術は、罹り人が死ねば術者の下に帰って、勝手に解けるからね。二百年たったもん。人間で私の呪術に罹ったのはもういない」

レトみたいな特殊例じゃなきゃね。と悪戯っぽくリアンは片目を閉じて笑う。と、いうことは、俺以外でリアンの姿が見える人間は……もういない？

「まあ、でも自業自得だし。気長にやるよ。才能に酔って、大事なことを忘れてた報いってやつだからね」

そうやってまた遠い目をするリアンを見ていると、つい、忘れそうになってしまう。というより、信じられなくなってくる。

「何が？」

「お前が、こんな凶悪な呪術をかけた奴だってこと」

もちろん、証拠とかこいつの話が嘘だとは思えないから、多分真実だとは思う。でも、それこそ最初に出会ったあの時以降、俺はこいつを殺したいと思わなくなった。出来る出来ないはとりあえず別にして。あの時のように、燃えるような憎悪はもう感じない。

「お前が悪い奴には思えないから」

「それだけ二百年は長かったってことかな。何も出来ない代わりに、考える時間だけは一杯あったからね」

丸くなっちゃったなあ、と照れたように浮かべた笑みが、どこか寂しそうに見えてしまう。多分、――俺の気のせいだ。



二人旅の最後の日は、出会ったときのようなどんよりとした曇り空。重く湿った空気は、こっちの気分まで重くさせる。

「なあに浮かぬ顔してんの？ 今日でレトが呪いとはオサラバで、村も解放されるって素敵な日じゃない」

嬉しくないの？ リアンの言葉に首を振る。嬉しくないわけない。ざっと十年、望み続けたことだ。その……はずだ。

「ほら笑え！ もう自分から一人になる必要なんてなくなるんだから、四六時中仏頂面してたら恋人



出来ないぞ！」

「なんで恋人の話になんだよ……」

なんだか知らないが、隣で笑顔がいかにか大切に語り始めやがった。さっきまでのしんみりした気分を返せ。

リアンの演説を聞き流してさらに歩くこと、数十分。

雲に隠れて見えないが、そろそろ太陽が真上に来る時間だ。

「——ただいつも笑顔な人がたまに見せるそれ以外の表情っていうのも————」

「おい、いい加減にしろ。リアン。着いたぞ」

「おっ、やっただね」

前方に現れる分かれ道。道案内用の立札は右の方向にバツ印が赤い色で付けられている。これは十年前から変わってないな。

「バツの方が、元々村があった場所だから、俺たちの目的は右の方……どうした？」

「……呪術の気配がする」

リアンが怖いくらい鋭い眼差しで見ていたのは左の道。そっちは、あの呪いの所為で村に住めなくなった人たちが別の村を作っているはずの場所だ。なんでそんなところからと、眉をひそめた時、俺は微かに漂うそれに気づいた。

「つつ！ まさか！」

「あ、ちょ！ レト置いてかないでよ」

リアンの声を背に、慌てて左の道を走る。どんどん強くなる、これは——血の臭い！

「皆、大丈夫……」

村は惨憺たる有様だった。壊された家や、ぐしゃぐしゃに踏み荒された食料。あちこちに血まみれの村人が倒れている。

「なんだよ……これ」

一体何が。盗賊か、獣か……いや、違う。そんなんじゃない。

「レト……なの？」

「誰だ！」

か細い声。壊れた井戸にもたれ掛る女がこっちを驚いたような目で見ていた。待てよ？ もしかして……

「姉さんか？ スウ姉だよな！ 俺だ、レトだ」

十年ぶりに会う、義姉のスウだった。

「帰ってきてたの……？」

「今な。それよりこれは、何があったんだ！ なんでこんなことに」

「レイの仕業よ……」

聞き間違いだと思った。レイ。だってそれは、死んだはずの兄の名前に他ならない。この村の惨状が兄貴の所為？

「スウ姉、冗談はよせよ」

「嘘じゃないわ。生きていたの……でも、あれは」

ガタガタとふるえる肩を抱いてスウ姉は涙を零す。一体彼女は何を見たんだ……。兄貴が生きて

いた？ そんな馬鹿な。

「やっと追いついた！ レト！」

リアンが俺を見つけて近寄ってくる、その表情は硬い。

「レトと同じ呪いでやられてるね」

「助けられるか……？」

すがるような思いでリアンを見る。その表情は硬いままだ。

「まだ生きてればね。だけど、範囲が広いから手を貸して」

「呪術のことなんて分からねえぞ？」

「レトは手袋外して、私と手をつなげばいいの！ 早く！」

リアンの剣幕に押されて、慌てて皮手袋を外した。横からリアンの手が俺のに重なった。前に聞いた通り、何も起こらない。分かっているもほっとした。

「『私に従え』」

あの時と同じように倒れた村人たちが赤い光に包まれた。傍らに座り込んだスウ姉が目を見開いて俺を見る。

「レト、これを治せるようになったの？」

「いや俺じゃない。ある奴のおかげさ」

光が収まる。徐々に起き上る村人を横目に、俺はスウ姉に向き直った。

「なあ、さっきの話だけど……本当に兄貴だったのか？」

「ええ……間違いないわ。あれはレイよ。でも……もうあの人がじゃない。あれは……怪物だわ」

「怪物……」

「私の事も、村の人のことも分かってなかった。いきなり現れて、暴れるだけ暴れた後は多分前の村の方に」

再び泣き出してしまったスウ姉を近寄ってきた村の子供に任せ、俺はその場を離れた。入り口のほうへもどるとリアンが待っていた。

「なあ、死んだ奴が生き返る事ってあるのか？」

当初の予定通り、右側の道へと足を勧めながら、聞く。神妙な顔でリアンは考え込む仕草をして見せた。

「お兄さんの話？ レトは死んだって言ってたよね」

頷く。俺だけじゃない、誰もが兄貴は死んだと思っていた。

「兄貴は今じゃ珍しく呪術を学んでたんだ。独学でだけど」

「呪いを解くために？」

「ああ」

元々リアンの呪いが穢っていた洞窟、ここらへんではそこにしか生えない貴重な薬草がある。呪いに触れずに手に入れられる量は僅かなもので。だからそれをなんとかしようとした。

「で、失敗したんだ」

「まあな。そんとき呪術が暴走した。で、村はああなった」

前方を指さす。灰色の霧のような瘴気が前方をふさいでいた。

「呪術の瘴気が村全体を飲み込んでしまったわけか」

「俺は逃げ切れたけど、兄貴はダメだった。そりゃ死んだと思うだろ」

あの灰色の霧は、俺の痣と同じだ。触れただけで簡単に相手をズタズタに切り裂く。

「普通ならね。でもレトは死んでない」

俺？

「言ってなかったけど、この呪いは本当なら人に宿るものじゃないんだ。だって、『生あるモノを壊す』が本質だからね」

なのに俺は死なず、呪いを宿すことになった。確かに妙だ。

「お兄さん、私ほどじゃないけど相当才能あったでしょ」

「へ？ いや、どうなんだ？ 分かんねえけど」

そりゃ頭は良かったけどな。呪術師としてどうだったかなんて俺には分からない。

「レトのお兄さんは呪術を解こうとして、その性質に干渉した結果微妙に性質を書き換えたんだ。その所為でバランスが崩れて暴走したし、人に宿るようにもなったってわけ」

適合しなきゃそのままだけど、とリアンは肩をすくめた。つまり、俺は適合したってことで。生きていたなら兄貴もか……。

「生まれてくる時代によっては一国の王につかえられたかもね。失敗とはいえ、私の呪術を改変するなんて……」

背後で足音。とっさにナイフに手をかけた。ニヤリとリアンが口の端を歪めた。

「ねえ？ やってくれるじゃん。レトのおに一さん」

「……マジで兄貴、なのか？」

スウ姉の言う通り。目の前にいるのは、変わりはてた、しかし正真正銘俺の兄、レイだった。生気のない、虚ろな目。俺と同じ黒い痣は両手どころか首から耳の下あたりまえて広がっている。グルルと口から洩れるうなり声は人というより、獣じみていた。

「思ったより、呪術との一体化が酷いや。今から引きはがして大丈夫かな……」

「やばいのか」

「精神が壊れるかもしんない」

厳しい顔で兄貴を見つめるリアン。彼女がこんな顔をするということは、状況は限りなくまずいんだろう。

「なあ、リアン」

「何？」

「俺に出来ることならなんでもする。兄貴を助けたい。力を貸してくれ」

一度失ったと思った家族。二度失うのは勘弁だ。

「ここで出来ないなんて言ったら天才の名折れかな。出来る限りやってみる。時間稼ぎよろしく」

「どれくらいだ？」

「十分」

リアンがそう言ったのと同時に兄貴が動いた。真っ直ぐ突進してくるのを、すかさずリアンの前に飛び出して迎え撃つ。

振り上げた右手による攻撃を両手のナイフのはらで受け止める。地面にのめり込みそうな、重い

一撃。どんな馬鹿力だくそ。

左手による追撃が来る前にわざと力を抜いて、相手の重心を崩す。その隙に地面を転がるようにして、抜け出し、背中に回った。がら空きだぜ、兄貴よお。

「今、助けてやっから。大人しくしてろっ！」

全体重をかけて、背中からタックルをかける。倒れた所をそのまま、上に乗って抑えつけた。

「リアン！ あとどれくらいだ！」

「もうちょっと待って！」

叫び返してきたリアンは、少し離れた所で両手を胸の前に組んでなにやら唱えている。彼女の周りに白い光の靄が生まれていた。

「なんだあれってうおおおあ」

例の馬鹿力で吹き飛ばされた。まったく冗談じゃない、兄貴はスウ姉に腕相撲であっさり負ける男だぞ。どうなってんだ。

力では抑えられない。となれば後は逃げ回って時間稼ぐしかない、と思った矢先。

「リアン！」

狙ったのは俺でなく、無防備なリアン。慌てて、横から飛び蹴りを喰らわせる。大きくよろめき横に倒れる。がついでに俺も勢い余って地面を転がった。ナイフが手から離れて飛んでいく。

「やべっ」

狙いはまだリアンだ。体制を立て直すやいなや、なりふり構わずリアンに突進していく。まさか、あの白い霧みたいなのに反応してるんじゃ……。

「させるかあああ！」

渾身の力で走り込む。リアンを背後に、振り下ろされる両手を、こっちも両手で受け止めた。その瞬間――

「うぐあああああああああああああああああああ」

呪いが発動した。

脳天からつま先まで、全身を駆け抜ける激痛に悲鳴を上げる。心臓が狂ったように早鐘を打ち、脂汗が吹き出した。腕から吹き出す鮮血。初めて自身で味わう、この呪いの力だった。

見れば兄貴の方も同じ状況だ。そりゃそうだ、向こうには俺の呪いが発動してんだからな。

「……これぞ、痛み分けってか」

ガギッと食いしばった歯が嫌な音をたてた。髪を流れた血が目に入る。右足の膝から力が抜け、俺は一気に不利な体勢に追い込まれた。

「リアン！」

「お待たせ！ 準備できたよ！」

いつの間にやら、兄貴の横にリアンが居た。周囲に白い光の玉を浮かせて、リアンは右手を俺の腕に、左手を兄貴の腕に乗せた。そして、その口がゆっくり言葉を紡ぐ。

「『歪められし、思いの形よ。あるべき姿へ戻れ、そして私の命に従え』」

白い光が俺達を包んだ。感覚がぼやけていく。何もかもが真っ白になった視界で、リアンの声だけが響いた。

「『還れ』」

その声を最後に、俺の意識は途絶えた。



花火が夜空を彩っている。俺は一人、屋根の上でぼんやりそれを眺めていた。眼下では、村人たちが火を囲んで楽しげに踊ったり、しゃべったり。かつての村が蘇った事を祝っている

「嬉しいよなあ、人間って」

傷ついた奴がいる。家も壊され、家畜も何体か死んだ。畑もめちゃくちやになった。すべて万事解決って訳じゃない。それでもちゃんと前は向けるんだ。

「そうだな」

「兄貴か.....どうなった？」

恐る恐る振り返って聞く。

「追放処分だ。かなり温情だろう」

.....追放。その二文字が重く押し掛かる。分かっていた。流石に何のお咎めもないなんてことにはならない。村を二回も危険にさらしたのだから。確かに追放は軽い方なんだろう。

「ここを出てどうするんだ？」

「呪術を学びなおすよ。一からやり直す。そして一生かけてこの罪を償っていくさ」

あれだけの目にあっておいて、まだ呪術を研究する気にいるらしい。こりない男だ。と呟けば苦笑が返ってきた。

「まあ、なんか兄貴には才能あるってどっかの天才さんもいってたしなあ。そういやスウ姉はどうすんだ？」

「置いていったら許さないといわれたよ。スウには敵わないな」

「当たり前だろ。次、悲しませたら俺が許さねえよ」

兄貴とスウ姉が村に居なくなる、か。俺の中の天秤が揺れた。

「肝に銘じる。お前にも迷惑かけたな。俺の所為ですまなかった。本当にありがとう」

「やめろよ。家族なんだし、今更だつての」

むず痒くなって、そっぽを向いた。こういうのは苦手だ。

「お前はこれからどうするんだ？」

「まだ考え中」

「そうか。ゆっくり考えろ。そして好きに選べばいいさ」

好きに、か。

「それじゃあ、俺は戻るよ。明日には出るつもりだからな」

「どうせ暗いうちに出てくんだろ。見送り多分間に合わないだろうから、今言っとく。.....じゃあな。スウ姉によろしく」

縁があったらまた会おうぜと後ろ手に手をふる。フフっと笑い声が聞こえた。

「レト、お前も元気だな。……あの金髪の女の子に俺が礼を言っていたと言っておいてくれ」  
梯子をおりる音が遠のいていくのを聞きながら、屋根の上に寝転がる。なんとなく頭上に上がった花火に右手を重ねてみた。相も変わらず、そこにある黒い痣。呪いの印。

「明日にはこれともおさらばか」

あの時、兄貴と村を一緒に解呪した所為で足りなくなっていたリアンの力も明日には元に戻るといっていた。

要するに……——決めるなら今しかない。

「次上がった花火の色で決めっかな」

青だったら、黄色だったら。花占いならぬ花火占い。みたいな。我ながら呆れる適当具合だが。

「悪くねえだろ」

次の花火があがった。さて、俺の人生の、とりあえずさしあたりの色は何色だ？ ひゅるるると一瞬間に消えた花火玉は、次の瞬間、その花弁を大きく夜空に咲かせ——消えていった。



「遅いよ！」

待ち合わせ二十分遅れ。流石に悪かったと思う。

「悪い、ちょっと手間取ってな」

そうやって一冊のボロボロの本を取り出した。兄貴が昔集めた本の中の一つ。俺も昔読んで、面白かったから覚えてた。

「？ なにこれ」

「日記。ここにとある呪われた谷の話が出てくる」

書かれたのは五年前。リアンの様子を見る限り……

「解いた覚えは無しってか。そうなら「当たり」かもな」

リアンが解くべき、呪いの一つである可能性。

思いがけない手がかりの出現にリアンの目が輝いた。

「で行くのは決まりか？」

「もちろん！」

気持ちいいくらいの即答。だが本題はここからなんだな。

リアンは物に触れない。つまり、この日記は読めない。

「場所、どうやって見つけるんだ？」

「え、レトは読んだんでしょ。教えてくれないの」

「ところがどっこい。この日記の作者はその谷の名前もある場所も書いちゃあいねえ。分かるのはこれを書いた奴の名前だけ」

谷を見つけたければ、作者の居場所を探して、直接聞くのが多分一番早い。が、リアンにそれはできない。

「お前一人じゃ、何年かかるかな」

「そ、そんなあ……」

へにゃんと座り込んで今にも泣きそうなりアン。やばい、やりすぎた。そういうつもりでいったんじゃねえのに。

「二人ならもっと簡単に見つかるって話だ！」

「え、二人？」

ぼかんと間抜け面のまま、固まっているリアン。ため息をついて、その前に屈みこむ。

「お前が嫌だっていうなら無理にとは言わない。お前の呪い探しの旅。俺にも付き合わせろ」

「付き合わせろって……わ、私はともかく、レトにとって何の得にもならないよ？ いつ終わるかも分からないし」

「得ならある。旅の目的と、あと道連れができる。一人も楽で良いけど、中々楽しかったからな、二人旅」

お前はどうか？ 立ち上がって聞く。リアンは俯いたまま。

「……楽しかったにきまってるじゃん。こちとらまともに人と喋ったの二百年ぶりなんだからね」

キュッとこっちを見上げた目がゆらゆらと揺らめいていた。昨日最後に見た花火と同じ色。挑むような視線が俺を刺す。

「いいの？ 私とくるってことはその呪い、当分解けないよ」

「いいさ。元々一生付き合う気だったんだからな。それにお前が居れば誰も死なせずに済む」

「後悔するよ」

「かもな。でも、それは多分何を選んでも変わらねえよ」

手を差し伸べる。さて、リアン。

「改めて、提案だ。

——お前の旅路に俺を同行させてくれ」

終

殺人円舞曲 The Murder Waltz

芸術犯罪！

.....ああ、なんと甘美な響きだろうか。

私は、この言葉、この思想のために生きてきた。

たとえ正義の女神が接吻くちづけを許そうとも、私は決して首肯しなかつたろう。あるいは、葡萄酒ワインを含んで彼女をかどわ拐かすことも厭いとわないだろう。何故なら、「快樂」という名の香水を纏った彼女はまた一段と美しい。その様は私しぎやくの嗜虐心を満たすのだ、肺をタールで犯すように。

そう、だからこそ.....、推理小説は、私のヴィーナスであり、同時に私を滅ぼす毒であり、私を見下ろす墓標でもある。この身を捧げ、「死」に黒い薔薇を飾ること、それが、私の使命、そして存在理由なのだ。

すべての人間に平等に与えられるものは唯一、「死」だけだ。その最後の瞬間に、華々しく散ること.....、これは至上の喜びである。誰もが、不可逆の「死」を上辺では恐れつつも、内心では「自身の最期の姿」を幻視し、その瞬間を待ち焦がれているのだ。そのために人間は生まれ、そして死ぬ。自らの「死」に彩りを加える、そのためだけに.....。

私は.....、その望みを叶える者。

フリーズドライの華のように、「死」を永遠に閉じ込める。

黒い礼服に身を包み、白い手袋を嵌めた私は.....、従者でも葬儀人でもなく、アーティスト 芸術家だ。ただ一人、たった一人の.....。

いったい、何体もの芸術品を生み出してきただろう。私が歩いてきた道は、振り返れば、髑髏の敷き詰められた デッド・カーペット 死の絨毯。

そして、私は今宵、「究極の芸術犯罪」を遂行する。

それは、私にこそ相応しい「死」の演出。ふさわ

そう、つまり、自分自身を殺すのだ。

「自殺」ではない、何故なら、これは「芸術犯罪」だからだ。

私は、私自身を殺すのだ。

さあ.....、刮目せよ、私の究極の「芸術犯罪」をご覧に入れよう！

.....しかし、拍手は起こらず、幕も上がらない。一切の静寂。

私はどんちよう緞帳の隙間から、客席を覗き込む。

そこには.....、満員の観客が座っている、髑髏の観客が、空虚な瞳で私を観ている.....。

私はくずお顔れた。そして気づくのだ。

.....この世の最後の一人は、誰にも葬られない。

墓標を立てる者は.....、誰もいないのだ。



ファニー・ファッキン・フライデー

落谷 アツムネ

亀田駅のホームで考えた。

結婚は人生の墓場と喩えられるが、対して恋愛は毒の沼地を延々と進み続けるようなものなのだろう……と。歩きまわっているうちに、気づけば力尽きて棺桶の中というわけだ。

“2番線に十九時三十四分、普通列車長岡行きが参ります”

人がちらほらと乗り降りして、新潟から来た窮屈そうな鉄の箱は新津へと向けて動き出した。これからこの列車は南西へと進路を取るが、そんなことは今の俺には関係のない話である。

俺は新潟行きの列車を待っていた。……待つてはいたが、乗るべきかどうかは決められないでいた。おかげで列車を三本見送ってもなお、ベンチで項垂れたまま動けないでいる。

「シケた面ツスねえ」

聞こえるより早いのか、まず黒のローファーとニーハイが視界に映った。それから視線を上げるにつれて黒の膝上スカート、黒のパーカー、そして悪戯の好きそうな微笑みが。

「あ？」

半ば煽るような口調に、つい語気が荒くなる。

「まあまあ落ち着いてくださいナ」

「誰のせいだ」

「すみません、調子乗っちゃったツス」

「……チツ」

とりあえず、この訳わからん奴からとっとと離れてしまうに限る。俺は彼女のわきをすり抜け、黄色い線の内側に居場所を移した。

「あれ、どこ行くんスか？」

「新潟駅だよ」

ちょうど新津方面からやってくる光があった。彼女はヤレヤレと言いたげにこちらを見ながら、それでいてこちらへついて来る様子でもない。行き先が反対方面なら、それはそれで都合がいい。

「じゃあな、誰だか知らんが」

そうして前に向き直った瞬間。

ゴオオオオオオオオオオオッ！

風を巻き上げながら、速度を緩めることなく列車が通過していった。俺が立っているところから、一メートルあるかないかの先の地点を。

「乗れなかったツスね」

この駅には通過する特急列車があることを、俺はすっかり失念していた。

「まあ、これも何かの縁だと思って」

俺の隣に立つ。

「少し喋っていかないツスか？」

なぜ彼女は俺に執拗に絡んでくるのだろう。それも、こんなに馴れ馴れしく。

「.....それもそうだな」

誘いに乗ったのは、自棄になったのが半分。

彼女に興味を持ち始めていたのが残りの半分だった。

元いたベンチに腰かけて、俺は立ったままの彼女に訊いた。

「あのさ」

「はいはい」

「何で俺に？」

「ああ、そういえばまだ言っていなかったツスね。.....あたしはミヤコ、こう見えて死神やってるんス」

「は？」

「だから、死神ツス」

「.....はあ」

「あれ、思ったよりビックリしないんスね？」

「そりゃ信じてないからな」

お前の妄想だろ、と片づける方がはるかに容易い話である。

「ちょっとそれは悲しいツスねー」

「知るかよ。悔しかったら証拠でも見せてみろ」

「うーん.....じゃあ、これで」

そう言うとミヤコはパーカーのチャックを下ろし、懐に手を突っ込んだ。

「.....よいしょっ！」

次の瞬間、俺の身の丈はあろうかというほどの大きな鎌がミヤコの手に握られていた。

「どうツスか？」

銀色の刃が蛍光灯の光を返して綺麗だな、などと頓珍漢なことを思った。それだけ、目の前で起きていることはあまりにも現実離れしていたのだ。

「信じる気になったツスか？」

「.....ああ」

よほど俺の顔が引きつっていたのだろう、ミヤコは満足そうにそれを元の場所に収めた。

「これ邪魔なんスよね、しまっておかないと」

「そんな扱いでいいのかよ」

「ええ」

たやすく物理法則を無視して見せたかと思えば、中身は人間に限りなく近い。いよいよ思考が麻痺しそうである。

「とまあ、この話はこのくらいにしておいて」

ミヤコが隣に座る。

「何でキミに目を付けたかって言うと、簡単に言えばキミが死にそうだったからッス」

「！」

彼女が紛れのない死神だとしたら……と嫌な予想が脳裏をかすめた。

「まあ、あたしがキミの命を奪うわけじゃないッスからね。そこは安心して下さいナ」

「……どういう意味だ？」

「あたしはあくまで、キミたち人間が死んだ時その魂を然るべき場所に送り届けるのが仕事ッスから」

「じゃあ、さっきの鎌は？」

「あれは魂を案内する道中で善からぬ連中に絡まれた時の護身用ッスよ。けっこう多いんスよね、あれでザックリとかいう勘違いする人」

ここで一つ納得したのは、彼女が死神を名乗った時に何故それを全く信じられなかったのかという点である。死神と自らを銘打っておきながら、彼女からは俺の命を狙う気配が一切しないのだ。

「あくまで死神は『死に立ち会う神』だから死神なんスよね。それがいつからか、あたしたちが人殺しみたいな見方しかされなくなっちゃって」

「……そりゃ不遇だな」

「まあ慣れたッスけどね」

新潟行きの列車が停まって、何人か乗り降りして発った。ひよっとしたら周りには俺が延々と独り言をつぶやいているように見えるのかもしれないと考えたが、もう遅いしそもそもそんなことを赤の他人に思われようとどうでもよかった。

「ところでさっきの『俺が死にそうだった』ってのは一体どういう事だ？」

「それは単にキミが線路に飛び込んじゃうんじゃないかってだけの事ッス。あたしたちは人の命を奪う権限がなければ、人が死のうとしているのを止める権利もないッスからね」

「そういうことだったのか……」

「あたしたちにとって、魂を迷わせることは最大の失態ッスからね」

最初の出会いから今に至るまでの過程が、一本の線で結ばれるのを感じた。

「言っとくけど俺は死なんぞ？」

「あら、そうッスか。なら良かった」

「それで良いのかよ」

「そりゃ死神だって仕事の好き嫌いぐらいあるに決まってるじゃないッスか。……やっぱり小さい子供とか、まだ若い学生とか、そういうのが相手だと心が痛いんスよね。何でこの子がこんな目に遭わなきゃいけないかったんだろうなって」

言葉に詰まる。すぐに自分の軽率さを恥じた。

「まあ、あたしが死神として未熟だからなんスけどね。こう思っちゃうのは」

苦笑いが余計に胸に突き刺さる。

「ごめんな」

「謝らないでくださいナ。キミは何も悪くないんスから」

「……ああ」

「それより、次はキミの番ッスよ。さっき何であんなに落ち込んでいたんスか？」

「……言っとくけど面白くないぞ？」

「承知の上ッス」

それはそれで悲しい。

金曜の夜は、ユウナの職場に近い亀田駅で待ち合わせるのが恒例になっていた。それから大体いつもイオンで一緒にご飯を食べて、たまにブティックホテルに寄ることもある。今日もいつも通りユウナに車で拾ってもらって、二人でオムライスを頬張っていた。

「ねえ」

半分ほど減ったところでユウナが口を開く。

「ん？」

「あのさ、来週末そっちに泊まる予定だったじゃん？」

「ああ」

「ちょっと泊まれなくなっちゃったんだよね」

「……そっか。仕方ないね」

社会人には俺の立ち入れない事情もあるのだろう。内心がっかりしたものの、俺は何ともないような素振りを見せた。

「……ねえ」

「ん？」

「なんで行けなくなったか訊かないの？」

「あ、ああ……何で？」

「もういいよ、教えない」

「……ああ、そう」

そういう態度を取られるとこっちまでイライラしてくるんだよな……とは勿論言わない。向こうが余計に機嫌を損ねるのは火を見るより明らかだからだ。

「そろそろ出るか」

呼びかけにも答えずスッと席を立つ。こりゃ完全に何かやらかしたな、と駐車場への道中で原因を探っていた。

「あのさ」

「うん」

「私の事どうでもよくなった？」

「……何で？」

「私が泊まりに行けなくなってもあなた何とも思わないんだもんね」

「いや、普通にショックだったよ」

「いいよ嘘つかなくて」

「嘘じゃないよ」

「だって興味なかったから何も訊いてこなかったんでしょ」

「ああ、そういうこと言うんだ」

ピタリと歩みを止める。振り返るユウナの顔はあからさまに不機嫌なそれだった。

「あの時どうせなら怒って責めれば良かったんだな、じゃあ」

「どういう意味よ」

「どうだっていいだろ、別に」

新潟駅まで車で送ってもらう予定だったが、それはもうどうでもよくなっていた。

「ごめん、一人で帰らせて」

駐車場の出口に向かうのを追いかけてくれる影は当然あるわけもなく、いつもなら十分で行ける道を一時間かけて俺は歩いた。ぬるい風だった。

「.....何ともありがちな痴話喧嘩ツスね」

「言っただろ、面白くないって」

語ってみて改めて、何とまあしょうもない理由で喧嘩になったことかと後悔の念が募る。

「仲直りしないんスカ？」

「そりゃ、したいさ」

「なのにこんな所で思い詰めてるんスカ？」

耳に痛い。それでいて、重い腰を上げる気にもなれないのだけれど。

「まったく、ヘタレの極みツスねえ」

「うるさいわ」

「そんなに元気があるならあたしより先にユウナさんとやらに謝ったらどうツスカ？」

「うっ」

「まったく、こういうのは変な意地張ったら手遅れになるって相場なんスカからね。死んで詫げるより死ぬ気で詫げる、これに限るツス」

「だから死なないっつーの」

「ああ、そうだったツスね」

“普通列車新潟行きが新津駅を発車しました”

アナウンスで会話が途切れる。

「.....それにしてもキミに死ぬつもりがないなら、あたしはもう用無しツスね」

「用無し？」

「はい。今のキミには、アタシの案内は必要なさそうツスからね」

「そう言うなよ」

おもむろにミヤコが正面に立った。

「そろそろ他所に行かなきゃツスね。でも、久しぶりに楽しかったツスよ」

「.....ああ、こっちこそ楽しかったよ。ありがとうな」

不意にミヤコがスッと距離を詰めてくる。

「あたし、仕事してて良かったなって思う時があるんス」

「ほう。それは？」

「大往生したお爺ちゃんお婆ちゃんの相手する時ッス。物知りだから道中も色々話してくれて飽きないし、それに皆幸せそうなんスよ。たぶん未練もないんスよね、ああいう人たちって」

「.....そうか」

「だからキミに呪いをかけてあげるッス」

「ほう、まじないとは唐突だな」

「そうッス。キミがちゃんとユウナさんと仲直りして、いつまでも添い遂げて、未練なく死ねるよ  
うに」

「そうかい。じゃあその時はお前が来てくれるんだろうな？」

「もちろんッス」

「.....待ってるぜ」

「それはこっちの台詞ッス。早まったりしちや絶対に駄目ッスからね？」

「分かってるよ」

「.....じゃあ目をつぶって、三つ数えて欲しいッス」

「ん、ああ」

目を閉じる。何をされるのか分からない一抹の緊張を抱えたまま三つ数える。

「もういいか？」

目を開けると、はたしてミヤコの姿はもうなかった。もう少し喋っていたかったのにな.....とほん  
のり落胆しかけたところにポケットの中の携帯から振動を感じた。

「もしもし」

“.....もしもし？”

「うん」

“うん”

しばらく沈黙が続く。死んで詫びるより死ぬ気で詫びる、そうだろミヤコ。

「ユウナ、さっきはごめん」

“.....”

「えっと、その、寂しいって言ったらユウナ責任感じちゃうかなって思ってさ。それで.....」

“大丈夫、分かってるよ。こっちこそごめんね、意地張って”

強張っていた何かがほぐれて、思わず涙腺が緩む。

「ユウナ、今どこ？」

“まだイオンの駐車場だけど、あなたは？”

「亀田駅」

“わかった。じゃあ迎え行くね”

「ありがとう」

“うん。じゃあ切るね”

「うん」

亀田駅のホームで考えた。

結婚は人生の墓場と喩えられるが、対して恋愛は呪いのようなものなのだろう.....と。付き合っ

いるうちに、気付けば離れられなくなって一緒に墓石の下というわけだ。

・あとながき

このあと滅茶苦茶セ（以下略）ごめんなさい冗談です。

こんにちは、ストーリーの山と谷のなさに定評のある落谷でございます。今回はどうしても死神（フレンドリー）が書きたくて、お題にも答えたくて、この前の喧嘩の事も加えた結果こうなりました。いつものように山もなければ谷もありません。中途半端に非日常です。

死に立ち会う神だから死神、というのはだいぶ前から温めていました。今回なんとかねじ込めそうだったのでねじ込んでみた次第です。面白いかどうかはさておき。

ミヤコは機会があればまた出したいですね。

・今回下敷きにしたもの

Aimer『六等星の夜』

植田真梨恵『泣いてない』

米津玄師『MAD HEAD LOVE』

ナナホシ管弦楽団feat.初音ミク『真夜中の微笑み』

ナナホシ管弦楽団feat.IA『ファツキン・フライデー』

ラムネfeat.初音ミク『ナイトウォーカー』

『夜を超えろ』

# 一般作品集



# 心の太陽（哲）

心の太陽

哲

Do you hear the people sing

Lost in the valley of the night

It is the music of a people

Who are climbing to the light

For the wretched of the earth

There is a flame that never dies

Even the darkest night will end

And the sun will rise

（“Les Misérables(2012) “より”The Finale“）

「清水、すりきずは治ったか」

鈴木 <sup>おさむ</sup> 治 は缶コーヒーを飲みながら呼びかけた。慎重に。清水は丸椅子にちょこんと腰かけて、両手を膝の上に乘せて、自分の膝をじっと見つめていた。鈴木は缶コーヒーを飲み終わると、肘掛け椅子からおりて、清水の前にしゃがみ込んだ。

「清水、ゆっくり顔を上げてくれ。清水の顔が見たい」

鈴木は小声でささやいた。清水の目の前には、面長で髪がボサボサの男がいた。眉毛が濃く、四角い目をした男だ。かなり口髭を蓄えている。白衣こそ着ているが、ちぐはぐな印象を与えている。清水からは、鈴木黒目まではっきりと見えた。鈴木はちょっとだけ目をそらせて咳払いをした後、もう一度清水の目を見つめてはっきりと言った。

「清水、このあともどンドン保健室に来ていいぞ。僕は貧乏だが、チョコレートぐらいは用意できる」

鈴木は無邪気な笑顔を浮かべた。清水はゆっくりと丸椅子から降りて、ドアに向かって駆けていった後、ごによごによと礼を言って足早に消えていった。鈴木は窓の前に突っ立って、ぼんやりと夕日に染まる駐輪場を眺めた。舐めていたのだ餡を噛み潰した。

校庭にはサッカー倶楽部の児童たちが後片付けをしている様子が見られた。日が沈みかけていた。児童の様子をパイプいすに座りながら、厳しい目で見つめている男がいた。時々、急かすよう怒鳴っていた。体格はやや太く、八〇キログラムぐらいはあるのではないかと思われた。鈴木はその男に近づいて行った。男の名前を呼ぶと、男は厳しい目そのままに振り向いたが、鈴木だということがわかると、表情が緩んだ。

「鈴木君ではないか。珍しいですな。サッカー倶楽部に来るとは」

「山浦先生。今夜時間がおありでしたらラーメンでも食べに行きませんか」

「君のほうから誘いに来るとは珍しい」

「大事な話があるのです」

「非常に気になるが、その話はラーメン屋で聞くとしよう。どこで食べる。時間は」

「黒竜軒で、二〇時に落ち合しましょう」

山浦は手帳で予定が空いていることを確認すると、二つ返事で承諾した。そのまま、児童を呼びつけてミーティングを始めた。鈴木は礼を言って家路についた。顔面が熱くなっているのが自分でも感じられた。

黒竜軒は市街地の目立たないところにあり、家族連れも一定数いるが、何といたっても会社帰りのサラリーマンが多い。店内は非常に騒々しい。ポジティブな雰囲気であふれている。鈴木はラーメンを食いながら、顔をしかめていた。

「おい、鈴木。大事な話があるんじゃないのか」

鈴木は一瞬体を震わせて、山浦を見上げた。話を聞いていなかったことを詫びながら、頭の中を整理した。そして、清水に見せたのと同じような真剣な顔で、山浦の目を見た。

「近頃気になることがあるので相談に上がりました」

山浦は話を促すジェスチャーをした。

「山浦先生のクラスの児童である清水<sup>よしかず</sup>良和君が近頃しばしば保健室を訪れます。状態は毎回膝のすりきずか打撲です。一か月ぐらい前から毎日昼休みに保健室に顔を出すようになり、一週間前から放課後にも来るようになりました。本人の様子ですが、引っ込み思案でいつも下を向いています。なかなか心を開いてくれません。このことについて山浦先生はどうお考えになりますか」

山浦の頬はわずかに引きつっていた。顔全体がみるみる赤くなっていった。鈴木は歯を食いしばって次の言葉を待った。

「つまりは、だ。君は……、清水君に対する『いじめ』や『虐待』を疑っているわけだね。うむ、つまりそれは……、君の思い違いではないのかな。子供たちはわんぱくであるし、特に体育などはすりきずや打撲など日常茶飯事だろう。清水君の性格だが、君が類推した通りだと私は考えている。しかし、それは本人のパーソナリティであるから無理強いするのは良くないと思うぞ。鈴木君」

「しかし、……」

鈴木はすかさず反論しようとしたら、山浦は人差し指を口の前に持ってきて、シツといった。腕を組んで、威厳のある声で言った。

「そういう話をしに来たのなら、私はこれ以上君に付き合うことはできない。代金は私でもつから君は安心して残りのラーメンを食べたまえ。これ以上続けると言うのなら、君に対して怒鳴らなければならぬ」

山浦は大股にレジのほうへ向かった。鈴木の後方でハリセンを叩くような大きな音がした。山浦が店の戸を閉める音だった。鈴木は大きなため息をついて、ラーメンをすすった。

鈴木はその瞬間を見逃さなかった。二時間目の体育。持久走の練習で、クラス全員が一斉スタートしてトラックのカーブにさしかかり、全員がまだ団子状になっているとき。背の低い児童が一人突然前のめりに倒れて、集団から抜け出した。しかし、その児童はすぐに立ち上がって、集団の後方部に入った。清水良和の純白の体育着には、黒々しく泥の跡が付いていた。

その日の放課後、清水は再び保健室を訪れた。清水が入ってドアを閉めるなり、鈴木は朗らかに言った。

「やあ清水。ようこそようこそ。今、お茶とか用意するから、ちょっと待ってな」

鈴木は声を出して笑いながら、ティーカップを探した。その間、清水は以前と同じように丸椅子に腰かけて所在ない様子でいた。鈴木はティーバッグからお茶が染み出すまでの間に、木製のバスケットに小さなチョコレートを開けて清水の前に滑らせた。背もたれのある椅子に座りながら、おもむろに清水に話しかけた。

「ここって教室なんかよりよっぽどいいよな。涼しくて」

「はい」

清水は小さな声で言った。鈴木は数回大きく頷いた後、そのまま清水を見つめていた。しばらく沈黙が続いた後、清水が口を開いた。その声は依然小さかったが、単語単語は、はっきりと聞こえた。

「す、鈴木先生。先生は僕なんかにかまっていていいんですか。えっと、あの」

「僕に気遣ってくれてるのか。なーんの問題もないから安心してくれ。妻や子供がいない上に、仕事もないからむしろ暇だ。清水がここに来てくれて嬉しいぐらいだ。ところでさ」

清水は顔を上げて、鈴木の目を見た。

「清水、お前勇気あるな。尊敬しちゃうよ」

かすかに清水の頬が紅潮するのが見えた。清水は遠慮がちに理由を聞いた。

「なんとなく。だってお前かっこいいじゃん。知的だし。将来モテるぞ」

鈴木は真顔で言った。清水は思わず吹き出してしまった。袖で涙をふく清水の口からは小さな歯がその姿をのぞかせていた。

「おおっ、お茶ができたようだぞ。やっぱり安物は出が悪い」

鈴木が背を向けると、清水が呼び止めた。鈴木は振り向いて、ニツと笑い、「何だ」と尋ねた。

「鈴木先生、ちょっとお話してもよろしいですか」

「わかった。ありがとう。僕はこのことを親御さんにお伝えしようと思うが」

鈴木は落ち着き払った声で言った。清水はとっさに「えっ」と言った。鈴木はさらに顔を清水に近づけ、両肩に手を乗せた。

「頼む。清水の安全に関わるんだ。清水もさっき言ったようなことが続くのは嫌だろう」

清水は目をすぼめて、黙り込んだ。それまですました顔をしていたが、目が段々とうるんできた。大粒の涙を流し始めた。袖で両目を隠した。鈴木は慌てて清水を抱き寄せた。

「すまなかった。本当にすまなかった。とにかく今日は家に帰ってゆっくり休め」

鈴木は涙声で言った。二人はしばらく抱き合った後、別れた。礼を言って、保健室の出入り口に立つ清水の顔には微笑みが浮かんでいた。清水の姿が完全に消えた後、鈴木は肘掛け椅子に倒れこんだ。目から涙があふれ出てきた。目を閉じたが、留めようがなかった。ひとしきり泣いた後、視界がぼやけ鈴木は眠気に連れ去られた。

「……というわけで、大谷主任。清水良和君のご両親に今一度お電話かけさせていただいてもよろしいでしょうか。あと、できればこの件は可能な限り内密にお願いします」

大谷登美子は鋭い視線を鈴木に向けた。

「大谷先生、私の顔に何か付いているのですか」

大谷はその質問に答えなかった。突然、目を見開いた。鈴木は思わず後ろにさがった。

「いいでしょう。許可します。あなたいい目をしてるわね、鈴木先生」

「はあ」

鈴木は特に意味のない声を出した。大谷と別れた後、鈴木は走って保健室を目指した。手を強く握りしめながら。

「職員玄関前だ。まさかこんなところで聞き耳を立てるほどずるがしこい奴はいないだろ」

自分に言い聞かせるように呟いた。児童がほとんど校舎からいなくなる放課後を選んだ。鈴木は息切れしながら固定電話のボタンを叩いた。

「もしもし、私、市立山野小学校で養護教諭をやらせて頂いております鈴木と申す者です。清水良和君のお母さまでいらっしゃいますでしょうか」

「ええ、良和の母ですが」

受話器から明らかに戸惑ったような声が聞こえてきた。鈴木は意識して明確に言った。

「単刀直入に申し上げます。良和君は学校でいじめに遭っています」

受話器からは声はなかった。十秒ほど後に初めて反応があった。興奮した声だった。

「そんなことはありません。今日も良和は元気に登校していきました」

「家庭での様子は」

「そうですね。いつもおとなしいです。学校のことはあまり話しませんね。聞けば答えますが」

「例えばどんな回答を返してきますか」

「『普通に楽しかった』というような回答が多いですね。それ以上追及はしませんが」

「そうですね。先ほど申し上げたように、良和君が学校でいじめを受けているというのは事実です。

良和君本人が私にいじめられている旨を打ち明けました。お母さまも信じてください」

受話器からの声がかすかに震えていた。

「では、私は具体的にどうすれば」

鈴木は丁寧に要所要所を区切って言った。

「まず一刻も早く良和君を学校から休ませてください。良和君にとって教室は地獄以外の何物でもありません。そして、家庭ではもてる限りの愛情を注いであげてください。次に、ひよっとすると今後学校に乗り込みたいお気持ちになるかもしれませんが、それは良和君の気持ちが落ち着くまで控えてください。学校での対応は私が受け持ちますので、ご安心ください」

清水の母親は懇切丁寧に礼を言った。鈴木は脱力して受話器を戻すというより落とした。机に突っ伏して頭をかきむしった。ちょうどそのとき、保健室のドアを開ける音が響いた。鈴木が右を向くとそこには大柄の男が立っていた。

「山浦先生、保健室なんかにいらっしゃるとは珍しいですね」

鈴木は冷静沈着に言った。山浦は手をわなわな震わせながら、酔狂な声で言った。

「鈴木君、近頃君は私のクラスを嗅ぎまわっているようだが、私のクラスのことは私で管理する。余

計な心配はしなくてよろしい。君の職務は児童の健康管理だろう。そっちに集中したらどうだね。」

鈴木はそのままの口調で言った。

「私は、児童の心の健康にも気遣うのが学校医として当然の責務だと考えておりますが」

山浦は言葉を詰まらせて、右往左往した。数秒後、今度は鈴木の仕事机の上にある余ったチョコレートのバスケットを指差した。

「鈴木君、学校としてああいったものをむやみに児童に与えるのは教育上いかなものかと……」

「自費ですが、何か問題でも。あとお言葉ですが、就業規則には『教職員は児童に飲食物を与えてはならない』などという文言は書いていないはずです」

鈴木は山浦の言葉を遮って、竹を割ったように話した。山浦はぼつが悪そうに背を向けた。鈴木は呼び止めた。

「何だね」

「山浦先生、清水良和君の件、他の先生にお話しされたでしょうか」

「そんなことできるわけがないだろう。じゃ、私はここで失礼するよ」

山浦は扉を閉めて、去って行った。鈴木は思い切り嫌な顔をした。外に目を転じてみると、日没前の駐輪場はやけに静かで人っ子一人いなかった。空ではカラスが数羽乱れ飛んでいた。学校の周りには畑や田んぼが広がっていた。その奥は工業団地らしく、工場やごみ処理場の黒煙が柱を作っていた。鈴木は荷物を乱暴にバッグに詰めて、保健室を出た。

台風が過ぎ去り、蒸し暑くなってきた。鈴木は廊下で児童たちが健気に体育をする様子を窓越しに見るたびに同情の溜息をついた。保健室に戻ると、受話器を取ってボタンを押した。一週間に一回は清水の母親と連絡を取るようになっていた。話によるとどうやら清水の家庭はシングルマザーのようだった。清水良和の様子はおおむね良好。母親は仕事を休んで息子の大好きな映画に連れて行き、息子が満面の笑みを浮かべている様子を自慢げに話してくれた。鈴木は家庭ではいじめの話題を控えるよう念を押した。

受話器を降ろした後、鈴木は鉛筆を握って一枚のコピー紙と対峙した。上部にお世辞にもきれいとは言い難い字で『市立山野小学校 清水良和君いじめ問題解決案』と書いた。その後は、両手で交互に髪の毛をむしったり、貧乏ゆすりをしたり、ペン回しをしたりして二時間が経過した。

「保護者会を使うなら、根回しをしなければ。でもそんなことをすれば確実にいじめがばれる」

時々、こんなことを呟いた。鈴木の額から汗が吹き出し、あごから滴り落ちた。

「かくなる上は」

鈴木はもう一度、固定電話のボタンを叩いた。

「清水さん。二度もおかけしてすみません。山野小学校の鈴木です。七月の三日に授業参観と保護者懇談会がありますよね。そこで、その前日、つまり二日の夕方に良和君を連れて、山野小学校にいらしてほしいのです。」

「では、学校側で責任を取って頂けるのですね。良和が最初に学校を休んだ時はよほど自尊心が傷つけられたのか毎日泣いてばかりいました。最近は笑顔を見せるようになりましたが、時々夜になると

つらいことを思い出して泣くので私が慰めに行きます。今後いじめが良和の中でトラウマになってゆくかもしれません。半月以上休んでいる状態では、成績にも不安を覚えずにはられません。学校にはそれなりの覚悟をして頂かないと」

清水の母親はいらいらした声でまくしたてた。鈴木は申し訳なさそうな声で言った。

「残念ながら、私に学校を動かす力はありません。正直に申しますと、学年主任が大変良心的な人で、私の話に耳を傾けてくれましたが、校長などの管理職に私が掛け合うことは不可能です。児童と保護者が一番強いのです。本来、彼らが学校の主役ですので。もうひとつ、責任問題ですがやめたほうがいいでしょう。学校が責任を取ることは、金銭にしろ謝罪にしろ学校にとって損ですから、責任追及をするだけで学校側は硬直してしまいます。まずは良和君が安全に学校生活をおくるための環境づくりを議論すべきです」

「では、具体的には」

「私が良和君の話をまとめたプリントをファックスで送りますので、それを元手に校長、教頭らと面会してください。大丈夫です。絶対にできます。正常な倫理性を備えた管理職なら、いじめ問題を放置するわけがありませんから」

「わかりました。先生を信じます」

母親の声からは怒りに裏打ちされた力強さが感じられた。鈴木は受話器を降ろした後、真上を向いて目を閉じた。事務机の上に乗った企画書には、タイトルのほかに山浦勇介としか書かれていなかった。鈴木は何回か首を回した後、目を開けて、清水の話をまとめたプリントに目を通した。

あの人たちは何もしていなかった。そう思うしかなかった。そう思うしかなかったんだ。最初に足を引っ掛けられて転ばされたとき、清水良和にはまだそれを表現する言葉がなかった。清水がやっと四つん這いになって立ち上がると、普段となんら変わらない教室の風景があった。クラスメイトはそれぞれ小さなグループに分かれてぺちゃくちゃしゃべっていた。何を言っているのかは全くわからなかった。全く。いつの間にか清水を倒した人もいなくなっていた。清水は怖くなって、教室を飛び出した。いつこんなことになったのかは覚えていない。全ての事実が濃霧にかき消され、残ったのは吐き気と頭痛、そしてモヤモヤした嫌悪感だけだった。

廊下でたむろしている女子からこんな話が普段よりはるかに大きな声で聞こえてきた。

「清水って子、小四にもなっておねしょしてる……」

清水が五メートル以内に近づくと、ふっつりと話が止んだ。廊下でちょっと肩が触れ合うと、すぐに近くの水道に走って念入りに手を洗う人がいた。彼は顔を見せず、清水も彼の名前を知らず、それに輪をかけて手を洗っているだけであるため、清水は何もできなかった。教室掃除は清掃のために机の上に乗せたイスを元に戻すことになっていたが、清水が非常口前階段掃除から戻ると、清水のイスだけが机の上に乗っていた。教室には人の気配がなかった。先生すらいなかった。美術室の電動糸ノコを壊した件で、クラスメイトに濡れ衣を着せられ、先生にこっぴどく叱られた。その日は一晩中泣いた。給食の時は、同じ班の人から広く机を離され、孤立無援で食事をとった。清水が時々ハンカチで鼻をかむなどすると、ヒツという声がどこからか聞こえてきたが、清水にだけ聞こえているようだ

った。四方から清水の悪口が聞こえてきたが、それは他の話し声、叫び声の中で浮かんだり消えたりした。清水には、不特定多数から影響のようなものを受けて、ものすごく気分が悪くなっているという言葉にならない感覚しかなかった。訴えたい気持ちはあった。でも、相手の名前も人数も、時間も、状況も、事実も、自分を暗い気持ちにさせる何もかもが記憶の中で曖昧になっていた。自分がやろうとしていることが正しいのかもわからなかった。学校にいと、顔を合わせる人全てが清水を白々しい目で見ている。清水はその目が一番嫌だった。しかし、本当にそれが正しいのかはわからなかった。『白々しい目』などという主観的なもので先生に訴えることはできないし、この学校の全児童を訴えようなんて夢にも思わなかった。

六月の頭には、一日一回の頻度で強烈な頭痛に見舞われた。そんなときに「死」という考えが頭をよぎった。それはすぐに霧消した。トイレで用を足して個室から出てくると、知らない男子に耳元でこうささやかれた。

「お前、便所で立ってしょんべんするのかよ」

手を洗っていた男子は一瞬ゲラゲラ笑ったが、清水の耳元でささやいた男子を含め全員急いで立ち去った。これも噂になるんだろうと考えると、吐き気を催した。体育でも、持久走の練習のたびに転ばされた。フリーの時間でサッカーをやるにしても執拗に、すねげりやタックルを食らった。犯人はわからなかった。わかったにしても名前を覚えていなかった。授業終了後、新しいゲームがあるとか何とか言って男子はさっさと教室に引き揚げてしまった。その隙を見計らって、清水は保健室に行った。精神的にも、肉体的にも限界だった。

保健室のドアをガラガラと開けると、そこには髪がボサボサでどこか抜けた顔であくびをする鈴木治がいた。斜め上を向きながら、誰に向けて言っているのかわからない声で「よお」と言った。変な人だなと清水は直感的に思った。その後は、普通の保健室の先生と同じ対応だった。唯一違ったのは、傷口を消毒しながら、学校給食のラーメンのスープの量は何かかなんないのか、だのカーテンのシャーってなる部分が壊れた、だのどうでもいい話を繰り返すことぐらいだろうか。でも、鈴木だけは例の『白々しい目』をしていなかった。むしろ、鈴木が清水を真剣に見るときは、その黒目が清水の心まで見透かしているように思われた。それからは多少危険を冒しても、保健室に行くようになった。出入り口でたむろしている児童に冷やかされたこともあったが、鈴木に会える安心感の方が大きかった。

保健室前で、他のクラスの児童数名に殴られたときもあったが、その時は鈴木が仲裁に入った。体の大きな子が清水の胸倉をつかんで頬を殴った瞬間、背後から「何やってんだ貴様あ」と雷のような怒鳴り声が聞こえてきた。清水はその時の鈴木表情が忘れられない。普段のたるんだ顔からは想像もつかないほど強張り、顔をしかめ、髪が逆立っているように見えた。鈴木は、清水を殴ろうとしたグループの主犯格を指さしながらグループ全員を保健室に連れ込み、情け容赦なく叱り飛ばした。清水は廊下で、職員室に聞こえはしないかとびくびくしていた。それ以来、保健室前の廊下で清水をからかおうとする児童はいなくなった。

保健室に通うようになってから、清水は嫌がらせの強度が増したように感じた。もう誰も清水に近づこうとしなかった。たまに近づけば、わざとらしく「うわっ」と言って手を洗いに行った。清水が廊下を歩くとみんなが清水から逃げて行った。清水はいつでも泣きたかったが、泣くわけにはいかなかった。六月中旬、清水はまたも保健室を訪れた。鈴木は以前言った通り、チョコレートを用意し

てくれた。保健室の安心感に浸れるだけで満足だった清水は心底たまげた。学校で物をもらうのは随分久しぶりだった。それだけに心から嬉しかった。清水は嫌がらせのことを打ち明けるかどうか迷った。真剣に受け止めてくれるだろうか。おおごとにならないだろうか。そんなことを考えた。でも、もう我慢できない。鈴木が何の脈絡もなく言った言葉が決定的だった。

「清水、お前勇気あるな。尊敬しちゃうよ」

清水自身は普通に考えればこれはお世辞にすぎないこと、清水自身に勇気はないし尊敬される対象でもないことはわかっていた。しかし、どうしてもお世辞に思えなかった。それは鈴木の世界一まっすぐな目が証明していた。鈴木という言葉は事実として清水の心にどっしりと落ちてきて、そこで太陽になった。清水はつかえながら言った。

「鈴木先生、ちょっとお話してもよろしいですか」

七月二日がやってくる。清水親子が四年二組の教室に入室する。黒板の前で校長と教頭、山浦担任が児童用のイスにそろって窮屈そうに座っている。清水の母親は慇懃に挨拶をする。親子が席に着くと、タヌキに似た顔の校長がおどろおどろしくしゃべり始める。

「ええと、清水様。今回は学校運営に関わる重大な問題がありましてこのような面談の機会をもった次第であります……」

「事の次第は、このプリントを読んで頂ければわかると思いますのでどうぞお読みください。すべて良和の証言をもとに信頼できる方が書いたものですので、間違えないでしょう」

清水の母親はそう言いながら、三枚の資料を手渡す。文章に目を走らせる校長の顔がみるみる赤くなっていく。最初に噛みついたのは校長だ。

「山浦先生、いったいぜんたいこれはどういうことですか」

「わ、私はこのようなことは認知していませんでした」

「『認知していなかった』で済まされる話ではありませんよ」

すかさず教頭が突っ込む。

「申し訳ありません。少し席を外させて頂きます」

山浦はしどろもどろにこう言って、退出する。清水の母親は、はやる気持ちを抑えつけながら、言う。

「私は今回責任追及をしに来たわけではありませんので、その点はどうぞご安心ください。私の願いはただ一つ、良和が今後二度とプリントに書かれているような目に遭わず、安心して通学できるようになることです」

校長と教頭の顔からはっきりと冷や汗が見て取れる。

「わかりました。ちょうど明日、保護者懇談会がありますのでそこで議題として提出してみましよう」

「ありがとうございます。では、私たちはここで失礼します」

校長と教頭が何やら話し込む中、清水親子は教室を出る。



山浦が職員用トイレに入ると、鈴木が小便をしている。

「山浦先生お疲れ様です」

鈴木は平板に言う。山浦は憂いを湛えた声で語る。

「鈴木君は私の愚かさを心の中で笑うだろう。それは全く構わない。自分のクラスの児童でさえその苦しみに気付いてやれなかった。俺は教師失格だ。まあいい。俺はいずれ責任を取らされるだろう」

鈴木は数秒間うつむいてから、毅然とした声で言う。

「私は、山浦先生のことを愚かだなんて考えていませんよ。秩序を守ることも、理想を追求することも、ニヒリズムに陥るよりよっぽど素晴らしいことだと思います。でも、そういう人ほどいじめに気が付きにくいもんなんです。表に現れる成果にとらわれて、裏で何が行われているのか見えてこないのです」

山浦はヒヒツと悲しげな笑い声を上げる。

「お前はわかったようなことを言う。でも、俺もその通りだと思うよ。おっ、さっきの親子が帰る様子が見えた。俺は校長のところに行く。処分は甘んじて受ける」

「私も付き添います。白状しますが、私が清水良和の親御さんにいじめのことをお伝えしたのがすべての発端です。もしいじめの責任を取って山浦先生が辞任なさるなら、それは私のせいでもあります。私には山浦先生を弁護する義務があります。どうか一緒に行かせてください」

鈴木は強い口調で言う。山浦の握りこぶしは細かに震えているが、山浦は鈴木に横顔を向けてわずかに頷く。

ちょうど午後五時を回った頃、保健室の戸を叩く音が聞こえた。小さな男の子が戸を開けて入ってきた。「よお、ケガかあ、病気かあ」と鈴木が間の抜けた声を出した。

「いえ、お礼を言いに来ただけですよ。鈴木先生」

そう言って、清水良和はニツと無邪気な笑いを浮かべた。鈴木も顔だけ清水の方に向けてそのまま同じ笑いを返した。

清水はすっかり保健室に顔を出さなくなった。鈴木は開かない戸を見つめながら、ため息をついた。

「まっ、これが一番良いんだけどな」

鈴木は独り言を言った。窓から外を見ると、一面雪景色だった。窓に、ドアと壁の間に便箋のようなものが刺さっているのが見えた。思わず唸り声を上げて、便箋のようなものを引き抜いた。それはキャンパスノートを切り貼りした手作りの封筒だった。セロテープの封を解くと、キャンパスノートから切り取った紙が四つ折りになって入っていた。鈴木は手が震えるのを押さえつけながら、その手紙を開いた。

鈴木先生へ

鈴木先生、安心してください。ぼくは元気です。時々、友だちがそっけない時がありますけど、ぼくは大丈夫です。でも、気になることがあるんです。なんかぼくの教室にはルールがあるんです。

でも、ぼくにはそのルールが何なのかわからないんです。ぼくはそのルールがいやです。ぼくはなんでもいじわるされたのか知っています。みんなが言うには汚いからでしょ。うちのお母さんにもさんざん言われました。でも、僕はなんも悪いことしてない！　なんでですか？　ぼくはどうしたらいいんですか？

清水良和より

鈴木は手紙を脇に置いて、両肘をついて頭を抱えた。清水に対するいじめを止めたと思っていた時は、嬉しかった。この学校の教師には保身に汲々として、いじめに関わりたがらない者が多かったため、鈴木には児童の心を守る使命感すら生まれていた。しかし、まだ見えない独裁者がいた。いじめは終わっていない。鈴木は急に気持ち悪くなって、吐きたくなった。なんとかそれをなだめて、清水への返事を書き始めた。

清水へ

お手紙ありがとう。元気そうで何よりだ。でも、僕は清水に一つ謝らなければならないことがある。清水の手紙を読むまで清水の思いに気づいてやれなかったことだ。つらかったろう。本当にすまなかった。でもな、世の中にはどうにもなんないことが山のようにあるんだ。今はつらいだろうが、清水にもいつか本当にハッピーになれる時が来ると僕は信じてる。だから、それまで清水には歯食いしばって頑張ってもらいたいと僕は思ってる。つらければ、保健室に来てくれ。アホの鈴木が待ってるからさ。

鈴木治より

これで良かったのか。わからない。今の鈴木にはこのようにしか書けなかった。鈴木は自らの偽善者ぶりを自ら嘲笑した。返事を清水から送られてきた手紙の上に置いて、新たにコピー紙を引っ張り出した。鈴木は興奮しながら、紙の上部に題を走り書きした。その字は線の太さも濃さもバラバラ、殴り書きと言うしかなかった。

『市立山野小学校 いじめ問題解決案』

完

(ファミチキください)

古井 龍

友達が欲しい。

地元から離れた高校へ入学したのだが、友達ができていない。

高一の時は、まだ慌てるような時間じゃない。と思っていたが、なんやかんやでもう高二になってしまった。クラスが一新され、友達ができるチャンスだというのに、まだこれといって友達できていない。

中学時代は一日中ルービックキューブを、机の中で弄くりまくっていたので、寂しいなんて思ったことはなかった。

全面を揃えるのに一分を切ったときは感動した。

しかし、その分青春というパズルは完成しなかった。

というか、それを抜きにしたとしても、まともに人と話したことがない。

人と話すときは店員がレシートを寄こさない時だけだ。

家族とはそりゃまあ話しもするが、兄貴は哲学の話しかしないし、父さんは海外で単身赴任しているし、母さんはネットで『ミミ』という名前で第二の女子中学生の人生を満喫しているし、まともに会話する相手がいない。

家でさえ、まともに会話する訓練を受けていないのに、学校で人と話し合っ、親睦を深めろとか言われても無理がある。

ただ、だれかとおしゃべりしたいな。

メンズトークしたいなあ。高校生活を満喫したい。

高校デビューしたやつらは、誰彼構わず話しかけるが、そういうやつに限って最後はボッチになるのだ。

見栄ばかり張って、けっきょく孤独に陥る。

僕はそんな低俗なボッチではない。僕は可能性のあるボッチなのだ。哲学を嗜んでいる兄貴に——STAP細胞くらいに可能性はあるよ——と言われたのだから、間違いはないだろう。

そんなこと考えつつ、僕は便意を覚えてトイレに向かった。

今の時間は、誰もトイレに居なかった。

簡素な鍵を閉めて便座に座る。

僕はトイレの個室に入ると度々思うのだが、この壁と天井の微妙な隙間から、誰か侵入して来るのではないか。もしくは、下から何か名状しがたいモノが侵入してくるのではないかと.....と。

「よう。最近どうだ」

僕はビクツとして、体を強張らせた。

「お.....おう」

弱弱しくつぶやく。

な、なぜトイレという特殊な環境下で、こいつは話しかけてきたのだろうか。しかも、個室越し

にだ。

事あることか、他人と数年間話していない僕にだぞ。なんとという強者であろうか。

しかし、こんな便座トークだが、僕は嬉しかった。個室の中で歓喜に震えていた。一年ぶりに人と話のできたのだ。

おっと、これで満足してはいけない。まだまだ会話のキャッチボールを続けなければ。

声の方向は右隣の個室からか。

だが、ここはなんと返事をすればいいのだろう。人と話すことが慣れていない僕には、なんと返事をすればいいかまったく分からなかった。

「まあ、人と話すのは慣れねえよな」

な、なぜそれ知っている！ こいつ、僕の思考を直接読み取ったというのか。モノホンの<sup>テレ キネシス</sup>念動力者なのか。やべえなおい。

中二病は不治の病ではなかったのか。

「お前ならやればできるって」

「なん……だと……」

<sup>テレ キネシス</sup>僕も念動力者になれるということか。

「できるできる。そんな難しいものじゃない」

マジか。そんな自転車に乗るようなテンションで能力者になれるのか。しかし、僕は中学の時より、そのようなイメージトレーニングだけは怠らなかつたんだ。<sup>オーラ</sup>中二力引き出し、それを開花させる時がついに来たということか。

僕が口にしていないことまで、わかるということは、これは念話であることに違いない。

脳内で直接話し合いをすることになるのだろう。

しかし、なんと話せばいいか。

(こんにちは。僕の名前は――) いかん。そんなありきたりな常套句じゃダメだ。

(本日はお日柄もよく――) これじゃただのセミナー講師だ。

(あなたは神を信じますか) いけない。初対面の相手に宗教を進めちゃダメだ。

(紙、足りてますか――) これだ。これこそトイレにおいてふさわしい会話だ。よし、これでいこう。

「ハハハ。おもしろいやつだな」

し、しまった。いままでの俺の思考が読まれていたのか。

くそう。なんのために気のきいた言葉を考えたのだ。もはや考えるだけ無駄だ。条件反射で答えよう。

「オ、オレを出し抜くとは、おお、お前もやるじゃないか」

汗が滝のように流れる。オレとか、初めて言ったわ。

「そんなことより、今度カラオケ行こうぜ」

「ファッ!？」

な、なんだって! どういうことだってばよ。初対面、というかまだ顔も見えていない相手とカラオ

ケに誘うとか、あんたそれコミュニケーション能力通り越してただのナンパだぞ。

「ダメなのか～。残念だな」

「い、いや、ダメかどうかと言うより、もっとお互いのことをよく知——」

「やらないか？」

ア、アカン！ ちょっと、本当にダメでしょ。あんたも僕もダメだ。大人の階段どころか、もはや高速エスカレーターだよ。

「そうだな。次の機会にしよう」

「つ、次の機会はない……と思いますが」

「ふーん。困ったな。俺、彼女いるし」

彼女いるんかーい！ なおさらダメでしょあんた。

「わかったよ。お前にも紹介してやる」

「……あ、あんたは何モノなんだ。まさか本当にバ——」

「とにかく、声だけは大きく出していけよ。お前は気弱な性格なんだからな。だけど、お前は面白いヤツなんだから心配すんな。クラスのヤツになんて言われようと、ガツンといけよ。大丈夫だ。問題ない」

もしかして、無口でクラスに馴染めていない僕を、あんたは看過し、僕に自信をつけるためにここまで来たというのか。あんたはそのことを僕に伝えるためだけに、トイレまで来て、僕に教えてくれたというのか。こんな僕のために。

「そーだよ」

僕はある顔も、名前も知らないというのに、そこまでしてくれたのか。

「そーそー。そういうこと」

「……すまなかった。色々疑ってしまった」

「ああ。気にスンナ」

捨てる神あれば拾う神ありってな。まだ僕の人生は始まったばかりということか。

「そんな大したことじゃねえけどな」

「最後に、あんたの名前だけでも聞いていいか。いや、聞かせて欲しい。君<sup>とも</sup>の名を」

「トイレだ」

「ハイ？ それってどういう名ま——」

「ちょっと待って。さっきから隣がいちいちうるせーんだ。また後でかける」

レバーを下げる音の後に、激流が何かが流していった。

「まったく、トイレの最中に話しかけてくるとかマジないわ」

そう言って洗面器で手をバシャバシャ洗ったあと、彼はトイレから出て行った。

……あれ、なんでだろ？ レバーなんて下げてないんだけど、目から水が止めどなく溢れてくる。

その水を拭くために、本来あるべきものに手を伸ばすが、カランという空を切る音がした。

辺りを見渡すが、涙も不純物もふき取るソレはどこにも見当たらなかった。——僕はトイレからも見放されてしまったのか。

## 追憶ティータイム

文部 蘭

私は扉を開いた。ここは街の隅にある小さな喫茶店である。

「いらっしゃいませ」

夜の七時を過ぎているにも関わらず、店員は相変わらずの営業スマイルを私に振りまいた。悪い気はしなかった。

私は空席に腰を下ろし、カバンを足元に置いた。

「ミルクティーをお願いします」

かしこまりました、と女性店員が離れていく。周囲を見渡してみると、店内が異常に明るかった。私が十年間通いつめている、この喫茶店メルツはつい三か月前に改装オープンを行ったばかりで、一見華やかさを増したようにも思えたが、気のせいかもしれなかった。携帯が鳴る。

「もしもし」

「あなた、いつまで仕事してるのよ。残業？」妻だった。

「仕事はさっき終わったんだ。総合商社といえども、営業部はホントに忙しくってさ。終電までには帰るから」

「あんまり遅くしないでよ。せっかく作ったオムレツが冷めちゃってるんだから。息抜きもいいけど、ほどほどにね」

「ああ、わかったよ」

電話を切り、正面を向く。ミルクティーが運ばれてきた。何とも言えない紅茶のほのかな香りが、呼吸によって、鼻から入り喉を抜け、体の芯に染み渡る。この瞬間が私にとって、疲れきった精神を癒す格別な瞬間ではあるが、そう長居もできない。妻のオムレツが待っている。

突然だった。

私は、異様な気配を感じ取った。黒く悶々とした塊のような、今にも迫り来るような、そんなたぐいの感覚であった。後ろを振り返るが、特別変わった様子はなく、ガラス越しに家路を急ぐ人びとの群れが見えただけであった。しばらく経ち、その奇怪な感覚が店内全体の空気であると私は悟った。それは緊迫に満ち、重層感あふれるオルガン楽曲のように、さあ歌え、さあ歌えと連呼しているようでもあった。

「なんなんだ、一体？」

店内にいる客は、私を含め四人だ。

私の正面にいる男が、中年太りのサラリーマン。無精髭を生やしたその大きな口で、しきりにコーヒーを一気飲みしている。額に汗をかいているその男を私は「肉団子」と呼ぶことにした。

その隣に腰掛けているのが、いかにもセレブのような雰囲気を出している金髪の女性だ。年齢は初老といったところか。サングラスを装着し、テーブルに雑誌を広げながらレモンティーを飲んでいる。私はそのマダムを「貴婦人」と呼ぶことにした。

店の奥には茶色の帽子を被った男がいた。トレンチコートに革靴、まるで大正時代に逆戻りをしたかのような風貌だった。彼は落ち着き払って、ゆっくりと一定のペースで飲み干していく。距離があるために何を飲んでいるのかまではわからないが、その冷静な飲み方からして、間違いなくこの店の常連であろう。私はその男を「大正ロマン」と呼ぶことにした。

三人のテーブルには共通点があった。テーブルの上にカップがいくつも並べられていることだ。さらに、三人とも次々におかわりを要求している。「肉団子」は野太い声で、「貴婦人」は高めの声、「大正ロマン」は落ち着き払った冷静な態度で注文を繰り返して行く。ひよっとすると、彼らはある何かを競い合っているのではないか。私は直感した。これは戦いだ。勝負だ。その戦況はあくまで非公式ながら、彼らは互いに競い、戦っている。この小さな喫茶店でそれぞれが独自の理由に基づき、ただただ黙々としのぎを削っている。

私は推測した。この勝負はおそらくこうだ。この喫茶店にいる、私を含めた四人の客は無条件にプレイヤーとして競うことになる。その対象はカップの数であり、どれだけ飲み干したかによって勝敗が決まる。基本的にはサバイバル形式であり、その人の限界摂取量が来るその瞬間まで各プレイヤーは飲み続けることになる。そしてこれも推測の域を出ないが、最後の一人、つまり優勝者には多額の賞金が用意されているに違いない。そうでなかったら、あの三人はここまで本気にはなっていないはずだ。

私が確信したその時、「肉団子」が立ち上がった。カップが二十杯ほど並ぶそのテーブルに、太く大きな拳で一打入れると、悔しそうに頭を抱えた。

「ちくしょう！いけると、思ったのによお」

そう言い残し、足早に店を去っていった。私は彼の汚点が一気に飲みにあったのだと勝手に納得をした。あれでは気が急ぐばかりで、胃袋が追いつかない。彼は戦法を間違えたのだ。そう、気力やガッツだけではこの戦いは乗り越えられない。それ以上におごらず、逸らず、ただじっとその時が来るのを待ち、飲み続けるのだ。それが絶対勝利への唯一の道だ。

あっさり私はベスト3に組み込んだ。しかし、この戦いを知ってしまったからには、目指すは優勝である。いや、優勝しかない。妻には悪いがオムレツにはもうしばらく待っていただくしかない。私には、それなりにこの戦いに懸ける理由があった。それは、幼少期から私を苦しめてきた「勝負弱さ」の克服にあった。

私には、小学生の頃に下校を共にした幼馴染がいた。彼女の名は奈々子とあって、私は当時彼女のことを「ななちゃん」と呼んでいた。

「ななちゃん、下校ってさ、やっぱりひまだね」

私が彼女にそう話を振り、彼女はう～んと悩むような仕草を見せたかと思うと、ふいに満面の笑顔を私に向け、

「じゃあさ、『グリコ』やろうよ」と告げた。

「『グリコ』？いいよ」

グリコ、とはじゃんけんを介して互いに競う遊びである。じゃんけんをし、グーで勝ったら「グリコ」と言いつつ、三歩前進することができ、同様にして、チョキで勝てば「チョコレート」と言い六歩、パーで勝てば「パイナップル」と言い、六歩前進することができる。その間、じゃんけんて負

けた方は身動きがとれない。互いに目標地点を決め、先にその場所に到達したほうが勝者となる。

「じゃあいくよ、じゃんけん」

ポイツ、と言うのと同時に私はグーを出す。対するななちゃんはパーを出していた。パ・イ・ナ・ツ・プ・ル、と彼女は勢いよく前へと進んだ。

「あたし、足長いからさ、一歩が大きいんだよね」

「ななちゃん、それずるい」

私はしかめっ面を彼女に向けたが、すぐに次のじゃんけんが始まる。

「じゃんけん」

ポイツ。私はチョキを出した。しかし、彼女はグーを出し、自慢げに拳を私に向けてきた。グ・リ・コ、と三步前進する。

「ねえ、君ってさ～、もしかしてじゃんけん弱いのか？」彼女は幼馴染という気恥ずかしさからか、私を名前ではなく「君」と呼ぶ。

「そ、そんなことはないよ」

言い返してはみたが、次のじゃんけんも負けてしまった。彼女は、チ・ヨ・コ・レ・イ・ト、と六歩進む。

「ねえ、ななちゃん。提案なんだけどさ、これ負けた方が秘密を相手に言うっていうのはどう？」突然の思いつきで私はそう伝えてみた。

彼女は無邪気に笑った。「秘密って？」

「たとえばさ、好きな人とか」

「ははっ。君って面白いね。好きな人かあ～、あたしはいるよ。君は？」

「秘密」私は当時、彼女のことが好きだった。

「そっか。いいよ、それで。じゃあ、あそこの電柱までね」

そう言って、彼女は五十メートル先くらいにある古びた電柱を指さした。

その後も、私はじゃんけんに負け続けた。その度に、ななちゃんはどんどん私から離れていった。私は男の子としてのプライドで傷つくというよりは、どちらかという、好きな女の子が自分自身から離れていく事の方が耐えがたかった。

ひょっとすると、このまま彼女は私の知らない別世界のどこかへ行ってしまわないか。そんな気さえしていた。そして、別世界のとある荒野で幼馴染はそっと私に告げる。さよなら、と。

「君～、聞こえてんの？なんで黙ってんの？」彼女の大きな一言で私は現実に戻る。

「ごめ～ん、続けよ」

「じゃあ、いくよー。じゃんけん、ポイツ」

距離がかなり離れてしまっていたため、彼女の手が肉眼では認識できない。それなのに一とお互いに言い合い、相手の発言を信じるしかなかった。離れた場所では相互の信頼性がカギを握る、『グリコ』とはそういう勝負だった。

そうこうしているうちに、彼女が目標としていた電柱にたどり着いた。私は彼女のもとへと走り出し、電柱のそばまで来ると重いランドセルを地べたに置き、そのままその場にぺたりと座り込んだ。

「ななちゃんってじゃんけん強いね。僕なんかさ」



「君が弱いだけでしょ」

「えっ？」

「君がじゃんけん弱すぎるから、つまんなかった」

「そ、そう。ごめん」

「あやまんなくてもいいよ」彼女がいつもの笑顔に戻る。「で、君の好きな人って？」

「それは」

「なあに、恥ずかしいの？」

私は困惑した。ここで彼女に思いを伝えるべきか。ふられたらどうする？明日からの帰り道が気まづくなるだけではない。私はなんと答えていいか分からなくなってしまった。しばらく黙りながら考えた末に、ようやく一声絞り出すことができた。

「ななちゃん。実はさ、僕、好きな人いないんだ」

「えっ、そうなの？」

「う、うん。いないんだ」

「な～～んだ。つままないの」

「ごめん」

「だからあ、あやまんなくてもいいって」彼女はまた無邪気に笑った。

翌日、彼女は大型トラックに轢かれ、死亡した。

轢いたのは大手コンクリート製作会社の若手従業員で、話によると居眠り運転らしかった。連日の残業により、睡眠時間を確保することができなかったことが原因だったという。その朝、彼は一人で運転をしており、睡魔が襲ってきたと同時に身の危険を感じ、急にハンドルを右に回した。その時、ちょうど歩道を歩いていた小学生の集団登校の一団に割って入ってしまった。三人が重軽傷、奈々子は命を奪われた。

その日から数日、学校には報道記者やメディア関係者が津波のごとく次々に押し寄せた。私が登校すると、校門では教師陣と記者たちによる質疑応答が繰り返されていた。

「学校側はこれからどのように指導されますか？」

「校長先生、一言お願いします」

「これからの対策について一言！」

血気盛んな記者たちの群れが教師陣を取り囲み、その中央で校長先生と教頭先生が苦々しい表情を浮かべている。

「今回の件につきましては、誠に遺憾に思っております」

「それでは、今後学校側は具体的にどのような処置をとりますか？」こうしたやり取りが半永久的に続いている。

私は教室に入った。奈々子とは同じクラスだったので、教室中に異様な空気感が漂っている。彼女の席には大きな花瓶がぽつんと置かれている。クラスメイトが亡くなるという事態がそもそも初めてであり、多くの子達が言葉を失っていた。しかし、私は別だった。私の悲しみは皆のそれ以上だった。小学生にして、愛する人を失うという強烈な体験をしたのだ。言葉を失うどころか、生きる目的そ

のものを失った。彼女と人生を歩むことができない。とても先日まで『グリコ』を共にしていた、とは信じがたい。こうも現実というものは簡単に塗り替えられてしまうものなのか。現代の大人たちはそんな世界で生きているのか。そう思うと、急に生きるのが恐ろしくなった。自分には無理だ。絶対にこんな世界で生きていくのは不可能だ。

考えるうち、私が最も嘆くべきものが私の、私自身の、勝負弱さであると思い至った。あの日の帰り、『グリコ』で私が勝っていたら。もし勝っていたら、彼女の口から好きな人の名前を聞き出すことができた。それが私であったかもしれないし、私でなくとも、それならそれでこの恋には終止符を打つことができ、ここまで寂寥感に苛まされることもなかった。突然降りかかった悔恨に耐え切れず、私は泣いた。もう二度とあの日常には戻れない。それまで快速なペースで飛行していた渡り鳥の群れの中で、一羽だけが急に速度を落としてしまい、群れから外れていく。それは自らの翼の弱さが招いた結果であるが、その鳥はただあまりにも過酷な現実を受け止めきれない。そんなイメージに近い。その一羽が私だった。

喫茶店の攻防戦は佳境を迎えていた。私はようやく三十杯目のミルクティーを飲み終えた。店の奥に目をやる。「大正ロマン」は相変わらず一定のペースで飲み続けている。その落ち着きぶりはまさに菩薩だ。輪廻転生を清らかに説く、菩薩そのものにしか見えない。彼はかなりの強豪に違いない。私は三十一杯目に手をつける。

一方で、「貴婦人」は腹を押さえ、かなり苦しそうである。確かに、彼女の飲んでいるレモンティーはカフェインをふんだんに含有している。そろそろきつくなってきてもおかしくはない。彼女のテーブルの上には私と同じくらいのカップが並べられている。しかし、広げられた雑誌のページが進んでいないことから、彼女の挑戦もここが潮時であると私は推測した。

「まだよ、まだわたくしは飲めるわ」

「貴婦人」はまだ諦めようとしめない。雑誌は芸能人の不倫騒動のページで止まっている。それを必死の形相で見つめながら、まだよ、まだよ、とレモンティーを飲み続ける「貴婦人」。その光景がどこか新鮮にすら感じる。私も負けてはならない、と三十一杯目を飲み干す。

その時だった。「貴婦人」が、あそこまで負けん気だった「貴婦人」が、もう無理という一言を残して店の外へ出ていった。だが、私はその瞬間に不可解な事実気づいた。最初に脱落した「肉団子」も、先程の「貴婦人」も会計を済ませていない。私は考えた。そういえば、店内にレジが見当たらない。そうか、店の外に会計を引き受ける誰かが立っていて、脱落者を待っているのかもしれない。この喫茶店の店員たちは、本格的なサバイバル決戦の舞台を提供しようとしてそのようにしたのかもしれない。いい緊張感が持続するように、雰囲気崩してしまいかねないレジ音を私たちのために排除してくれたのだ。さすがだな、と私は感心した。

私は「大正ロマン」との決勝戦を迎えた。彼を打ち負かすのは簡単ではないと分かっただけでも、ミルクティーは止まらない。ただ、私自身の勝負弱さに今日でケリをつけたい。その一心により必死の思いで彼に食らいつく。そこで、一騎打ちになったという事実が私を鼓舞させた。思い返すと、一騎打ちになった経験は初めてではない。あれは中二の冬だった。

中二の冬、私は生徒会役員選挙において、定員一名の副会長に立候補した。一年の頃からなんとなく憧れを抱いていた生徒会。その生徒会に入ることの出来るチャンスが回ってきたのだと思い上がり、勢いで立候補した。私には自信があった。なぜなら、私は一年時に、風紀委員会に所属しており、学校をより良くするための活動の推進・全校生徒を奮い立たせるためのモチベーションアップのノウハウなどを経験的に熟知していたからだ。決して、目立ちたがり屋ではなかったが、学校を引っ張っていく立場にはそれなりに興味があった。

副会長に立候補した人物はもうひとりいた。野球部の次期主将候補、畑山である。彼はとても声が大きく、確かにリーダーシップ性に長けていた。その上、後輩からの信頼も厚く、常に周りにはひとが集まっていた。そんな彼を相手にしてのこの舞台に当時の私は正直たじろいでいた。

そして、選挙前の演説の日がやってきた。私は緊張を乗り越えて、むしろ開き直っていた。なにせ、相手はただひとり。確率は二分の一だ。どうこうと考えている方がきっとボロが出る。ここは、気取らずにありのままの自分を見せよう。

ステージ上では既に緊張が解けきっていた。私は自分の発表の番が来るのを今か今かと待ちわびていた。隣に目をやる。畑山が堂々と座っている。その伸びきった背筋は、自信に満ち満ちた有様を見事に表現している、とも見て取れる。だが、君には申し訳ない。勝つのは私だ。

会長候補の演説が終了した。進行役の生徒が、続いて副会長候補の演説に移ります、と述べたのが耳に入った。

「まず初めに、畑山君、お願いします」

畑山が演台の前に立つ。その一瞬、会場がキリッと張り詰めた。

「私を信用しないでください！」

静寂が降りた。畑山の発した第一声は誰もが予想をしなかった。その感覚は、着陸寸前の旅客機において、誰もが現地到着を目の当たりにしたまさにその瞬間に、「車輪が下りません」とアナウンスされたその気概に似ていた。畑山は続ける。

「突然、すみません。今の発言は私独自の次のような考えによるものです。それは、人に対する信用というものは全て後付けであるというものです。というのは、私が副会長になったとして、あらゆる方面で生徒の皆さんには協力をしていただくことでしょう。しかし、その時点ではまだお互いの信頼関係は成り立っていません。個々の活動、取り組みが内外から評価され、それが学校にある種の一体感をもたらした時、初めてその利益は還元されます。信用、というものがブーメランで返ってくるのはその時だと思っています。なので、現段階では信用をしないでくださいと言いました」

畑山は淡々と続ける。野球部譲りのハキハキとした物言い、そしてなにより端正な顔立ちから発せられるユーモラスな論理に一同は息を呑んでいる。

しばらくして、畑山の演説が終わった。会場が一体となって拍手に包まれる中、アナウンスが私の名を告げる。私はここにきて急に緊張が襲い掛かり、演台までの距離が異様に長く感じた。卒業証書授与さながらにたどたどしい足取りで向かったその先は、まるで別世界だった。ステージ下が想像より暗い。視線が痛い。なぜ、私は今ここでしゃべることを選択したのか。意識が朦朧としてくる。「え〜と、あの、そうですね。その」言葉が出なかった。

私は後悔した。きっとブーイングの嵐だ。これから自分は多くの罵詈雑言を浴びせられる。何してらるんだ、さっさと話せ、こんな奴が副会長かよ、緊張すんなら前に出んじゃねえよ。そしておそらく

、ペットボトル・シャープペンシル・紙くずなどが次々に私めがけて投げられるに違いない。私は身の丈に合わないことをしてしまった、と自分を恥じた。

だが、予想とは裏腹の事態が眼下に広がっていた。

「頑張れ〜」

「大丈夫だよ〜」

「落ち着いて、リラックスして〜」

意外にも、耳に入ってきたのは声援だった。こんな私を応援してくれるのか。あまりにも予想外だったため、私は緊張していたという事実を忘れてしまうほどだった。と同時に、これなら勝てるとさえ感じた。ここまで私に寛容であるなら、この選挙は案外簡単に乗り切れるのではないか。当選確実という四字をイメージし、私は演説を続けた。

「正直、今私は驚いています。こんなに皆さんが私の演説に耳を傾けてくれる、ということに大変驚きを感じました。こんな私ですが、一つの野望といえますか、夢があります。それは、皆さん一人ひとりが個性を誇りに思えるための環境を整えることです」

私は遠くの一点を眺めつつ、話を続ける。ちょうど真正面にバドミントン部の愛用する「勇猛果敢」と書かれた横断幕が見えた。

「私は小学生の頃、幼馴染を亡くしました。そのときはクラスメイトが天国のその子に向けて色紙を書いたりしましたが、その翌日にはみんな何事もなかったかのようにすっかりその事実を忘れてしまっているかのようでした。私にはその光景がとても寂しく映りました。確かに亡くなったその子は個性が薄く、お弁当も一人で食べるような子でした。しかし、長所もたくさん持っていました。花が大好きで花の名前や特性などを誰よりも知っていましたし、何より『グリコ』がめちゃくちゃ強かった。そんな個性があることは、とても素敵なことだと思います。私はみんながお互いの個性に、人間性に気づくことのできる、そんな学校にしたいと思っています」

その後も演説は順調に進んだ。そして、会場が拍手に包まれたその瞬間、私は勝利を確信した。みんなはきっと私を支持してくれる。根拠のない自信が次々に湧いてくるのが自分でも実感できた。

しかし、結果は大敗だった。

全校生徒およそ六百人。そのうちの八割が畑山に票を入れていた。私は愕然とした。昨日の今日で一体何が。私の演説はうまくいったはずだ。

それなのに一体なぜ？ 懐疑に満ちたドミノ倒しが私の脳内で繰り返される。畑山に負けた？ 私はその時、目の前に広がる光景を信じ込むことができずにいた。その様子を察してか、周囲の生徒のうちの何人かは私の肩をそっと叩いたり、こういうこともあるよ、という一言を残してすれ違う。私は何をやってたのだ。ひとりでに出馬をし、ひとりでに落選した。奈々子との悲しみを終わらせたかった。弱い自分を変えたかった。しかし、そのどれもが果たせなかった。こういうこともあるよ？

私が空虚に満ちた顔つきで廊下を歩いていると、思わぬ人物と出くわした。

「元気出せよ。いい勝負だったよ」あの畑山だった。

「畑山か。とりあえず、おめでとう」

私は離れていく畑山の背中が妙に大きく見えた気がした。

「大正ロマン」は相変わらず一定のペースでカップの数を増やしていく。私の推測では、彼は既に五十杯を優に超えている。にもかかわらず、彼は表情一つ変えずに飲み干していく。彼の胃袋はどうなっているのか。どの分野にも必ず超人的な才能を発揮する者がいる。それは一つの真理だ。真理ではあるが、私はそれを「大正ロマン」に見出したくなかった。私が彼に対し、恐れに似た感情を抱いたその瞬間におそらく私の敗北が決定する。

私は三杯のミルクティーを一気飲みした。こんなところで負けるわけにはいかない。たとえ限界をとうに超えていようとも構わない。ただ、飲み続ける。それだけだ。勝利というゴールが見えてくるにはまだ時間がかかる。妻とオムレツにはもう少し待っていてもらおう。いや、ひょっとするとオムレツは既に冷めてしまっているかもしれない。

私は最後の勝負に出る。力の限りを尽くして、戦い抜く。それは自分のためであり、愛する家族のためでもある。私が欲するのは目の前にあるミルクティー。私が求めるのは家族を支え続けていくための強さ。そう、何度も自身に唱え続ける。

「求めるのは強さ」

その瞬間、私は現在の会社に入社したてのあの頃を思い出した。

「求めるのは強さだ」

営業部長は朝礼の際、そう私たち社員に伝えた。中には、眠たい目をこすりながら部長の話を聞いていた者もいたが、そんな社員に対して喝を入れるかのように部長は語調を強める。

「今、私たちが求めるのは革新的な強さだ。日本を代表する総合商社としてだけではない。社員一人ひとりが社会に貢献できる、そうした個々の強さも時代は要求している。君たちにはそのことをぜひ自覚しておいてもらいたい」

部長は終始、快活な声で述べていた。だが、その話をまともに聞いているのは誰ひとりいないようにも思えた。

私がデスクの定位置につくと、部長が私と、そして私の同期の城ヶ崎の名を呼んだ。私と城ヶ崎は部長の元へと歩を進める。

「我々に何の用でしょうか、部長」城ヶ崎が部長に問う。城ヶ崎は鼻の下にスタイリッシュな髭を生やし、ネクタイも常に黒を基調にしたもので白いストライプがはしっている。非常に長身であり、料理が得意ということだった。

「君たちにとっては嬉しい知らせだと思うんだけどね」

部長はなぜか笑顔を浮かべていた。私はもどかしくてしょうがなかった。

「どういうことですか」

「それがだね、実は君たちのどちらかに次期営業部長を任せたいんだ」

「我々が、ですか？」私は困惑した。城ヶ崎も納得できていないらしく、ですが部長、と前のめりになる。

「ですが部長、それなら我々なんかよりも先輩たちに持ちかけるべきでしょうか？」

「う〜む、それが彼らより、君たち二人の方が素質というか、センスがあると強く思うんだよ。君たちの先輩にはない、柔軟な考え方と行動力がね。そこでだ」

部長は話の腰を折るなよ、とでも言いたげな様子で淡々と続ける。

「君たちにチャンスを与える。明日からの一週間においてだ。契約件数を多く積み上げた方を次期部長候補とすることにした。話は以上だ」

そう言って、部長はデスクに飾ってある競走馬の模型をいじり始めた。部長は私たちのことを競走馬だと捉えているのだろうか。だとしたら、一体どちらに賭けているのか。だが、そんなことを考えている余裕もない。隣を走る、城ヶ崎という名の馬は既に蹄を地面に叩きつけ、レースを始める用意を万端に済ませているかもしれない。

「では、よろしく申し上げます」

取引先の企業との契約交渉が終わり、ほっと一息つく。私は建物を出てすぐに視界に入った自動販売機で缶コーヒーを購入する。

部長からの話を受けてから四日が経った日、私は十二件の契約を取り付けていた。そう簡単に取引先との契約が取れるはずもなく、一日せいぜい三件ほどが自分の限界だった。話し方や接待の仕方、時には差し入れにまで小さな工夫を施し、駆けずり回った。しかし、もともと敏腕営業マンというわけではなかった私は正直追い詰められていた。

そんな私を支えてくれたのは妻だった。帰宅すると、いつも笑顔で迎えてくれた。彼女も仕事で疲れているだろうに、と私は度々彼女のエネルギッシュな性格に尊敬すら感じていた。

「ねえ、このトップスとボトムスの組み合わせって変かな？」妻はおしゃれ好きで、ファッションには特にこだわりを抱いている。

「そうだなあ、でもこういうのも個性があっていいと思うけどなあ」

「だよな。全然アリだよな？」

「そうだね。全然アリ」私は彼女がしてくれるこういった話題の数々が、一種の精神的支えとなっていることに気づいていた。洋服を手に抱えながら、ああでもない、こうでもないと真剣に悩む妻の姿に安心を感じる。自分の空間に安らぎと落ち着きを作り出せるのは、案外、自分ではないような気がした。そう考えると、私は妻に多大な感謝を背負っていることになる。

「ねえ、何でさっきから難しい顔してんの？」妻はクリーム色のセーターの毛玉取りにせっせと手を動かしている。

「ああ、何でもないよ」

私は、妻を一生かけて支えていこうと心に強く誓った。

翌日、私は昼休みに城ヶ崎に呼び出された。屋上に一人で来い、ということだった。

屋上では城ヶ崎が先に待っていた。フェンスに背中を預け、無表情でタバコを吸っている。頭上の空には雲一つなく、絵の具で塗り潰したかのごとく、青空が広がっていた。気温・湿度がともに高いため、スーツに当たる風がぬるい。

「おう、来たか」城ヶ崎は微笑んだ。

「城ヶ崎、何か用があるのか？」

「まあ、そう急かすなって。ゆっくり語ろうぜ」城ヶ崎は口にくわえていたタバコを地面に叩き落とし、左足で踏み潰した。そして、胸ポケットから新しいタバコを一本取り出す。

「どうだ、進んでるのか。契約のほうは」

「まあな。俺はまだ十二件だが、残り三日でまだ巻き返せると自分では思ってる」私は強気だった。

「そうか。そっちはそっちで順調ってわけねえ。よかったじゃねえか」

「城ヶ崎は何件取り付けたんだ？」

「ああ、俺？まあ、六十件」

私は絶句した。彼との能力差はおよそ五倍だったのだ。途中経過とはいえ、あまりの信じがたい結果に冷や汗の一粒もかけなかった。これが競争社会、これが実力主義の現実なのか。ついさっきまで負けん気だった自分が急に馬鹿らしく思えた。まだ三日残っているなどというような安易な考えは、おそらく彼には通用しない。

結局、私は負けた。約束の一週間が過ぎ、契約件数で比較すると私は二十一件だったのに対し、城ヶ崎は八十五件取り付けていた。当然のことながら彼が次期営業部長として認められることになった。途中経過の時点で目に見えていたとはいえ、私はショックだった。あまりにも差がありすぎる。結果には納得できたが、ふがない自分には領けなかった。自身の連敗記録は一体どこまで続くのか。天性の勝負弱さは果たして、墓場までお持ち帰りになるのだろうか。

「お持ち帰りでよろしいですね？」

帰宅途中、私はハンバーガーショップに立ち寄った。妻の分も含め、ふたり分を購入する。期間限定メニューということもあって、きっと妻は喜んでくれるのだろうとささやかに期待をする。それが敗北者となった自分の気を紛らわす、せめてもの償いだった。

私は、目の前にあるティーカップを見つめ続ける。ミルクティーの液面上に映る自分の顔が、心なしか限界を訴えているようにも見える。それでも私は、勝利への執念を捨てきれず、手元にあったスプーンで無意味に紅茶をかき混ぜる。生じた渦が美しく、螺旋を描く。ふいに、大学時代の物理の講義において渦に関する数式を習ったことを思い出す。

気づけば、「大正ロマン」が苦しそうな表情を浮かべている。さっきまでの気迫は見えない。明らかに飲むスピードが遅れている。彼は鼻で大きく呼吸をし、なんとか正気を保っている状態だ。だが、目には生気がなく、その有様は暗い炭鉱の中でルーティンワークをこなす熟年労働者のそれに似ていた。

勝てるかも知れない。私は全神経をティーカップに注ぎ、集中を維持する。きっと脳内では、アドレナリンが大量に分泌されているに違いない。思うに血液がその運搬速度に度肝を抜かれているはずだ。おいおい、量が多くないか、と。我々のことも少しは考えてくれないか、と。

「あと少しだ。あと少しで終わる」

そう自らに言い聞かせながら、ミルクティーを喉に通していく。辛い時こそ、今この瞬間は幸せであると思いつまみながら、あまのじゃくに数々の修羅場をくぐり抜けてきた。その自負は誰よりもあることは確かだ。自分を追い込み、最後の勝負に賭ける。

突然だった。「大正ロマン」の手が止まった。彼の表情が止まった。ずっと無言で立ち上がり、帰る身支度をし始めた。トレンチコートの第一ボタンまでしっかりと留め、手提げカバンを肩に担ぐ。

ごちそうさまでした、とぼそりと店員に告げ、店を出て行った。

「勝った」

私は呟いた。

「勝ったあああ！」

私は叫んでいた。店内に自分の声が響き渡る。両手を挙げたガッツポーズに店員が笑った。そして店員たちの拍手と笑顔が、ますます私の満足度を上昇させる。目の前の光景が嘘のようだった。全く信じられないが、これは現実である。私は肩の力を抜いた。

ふいにクラッカーが激しく鳴った。黄色や水色、ピンクなどの蛍光色の直線が、空間内にばら撒かれる。それらは宙に浮遊したかと思うと、勢いよく床に向かって、急降下していく。足場を鮮やかに埋め尽くす。つづいて、ドラムの音が慌ただしく鳴った。店員の一人による余興のようだった。その音にはシンバルの、耳をつんざくような響きも重なっていた。

「優勝、おめでとうございます！」

「最後までよく頑張りました」

「男の中の男ですね！」

「かっこよかったです」

店員たちの歓声に囲まれ、私はどのような表情をすればいいのか悩んだ。

素直に喜ばばいいのだが、こういった状況に不慣れなために感覚が現実に対応できていない。どうも、と後頭部を手でかきながら笑顔を浮かべるのが精一杯だった。

ついに勝てた。負け続けの人生に今日で終止符を打つことができた。これまでの苦労は一体何だったのか。勝負弱い、というのは天性のものだと勝手に決めつけていたが、決してそうではなかった。私でも勝てる。負け続けの人生などは最初から存在していなかった。敗北があれば、勝利もある。そういうふうはこの世界は成り立っている。うまくできているな、と私はしみじみと感じた。

そういえば、と思い至るまで時間はかからなかった。賞金の存在を私は思い出した。店員の一人に尋ねる。

「あの、それで賞金とかって、一体いくらぐらいなんですか？」

店員たちはきょとんとしていた。おいおい、なにを呆然としているんだ、と私は無性にツッコミを入れたくなる。しかし、店員たちは眉一つ動かさず、無表情で私を見つめている。なんだ、何が始まった？ここまで頑張ったのだから、賞金の一つや二つ、あってもおかしくはないだろう。なぜ、黙ってこちらを見つめている？

すると、メガネをかけている女性店員が私の方へ歩み寄ってきた。そっと立ち止まると、口をゆっくりと動かし始める。

「賞金なんて、ありませんけど」彼女の目つきは険しかった。

「はあ。賞金がないだと？」

「ええ。代わりにあなたには、本日のお客様方の全員分のお支払いをしていただきます」

「全員分のお支払い？」

私は彼女の言葉をうまく飲み込めないでいた。一体、何がどうなってる？なんで、私がそんな仕打ちを受けなければならないんだ。

「おい、どういうことだよ。説明しろよ！」私は声を荒らげた。



先ほどの女性店員がため息をつく。

「分かりました。あなたにも理解できるように、簡単にご説明します。本日、当店が主催したこの企画は、たしかに大食いならぬ大飲み選手権のような趣旨を持ちます。基本的にはサバイバル形式で行われ、参加者の方々には全力で競っていただきます。ですが、この選手権にはひとつ、ある特別なルールが存在しておりました」

「特別なルール？」

「そのルールというのは、優勝者が総支払額をすべて負担する、というものです。負けるが勝ちではなく、勝つが負け、なのです。なので、あなたは終始気づいていなかったと思われませんが、あなた以外の参加者たちは最後のふたりになるギリギリまで飲み続け、出来るだけ多額の料金免除を狙っていたのです。そうすれば、実質飲み放題となりますから」

私は言葉を失った。そんなルールがあるとは予想もしなかった。私はただ単に賞金があるはずだと思込み、その独断と偏見により、勝手に勝負を進めていた、とそういうことなのか？今更ながら、自分がとても恥ずかしく思えた。私は一体何をやっていたのだ。決して勝利など手にしていなかった。私は、また負けたのだ。完敗だった。やはり、勝負弱いというのは天性の素質かもしれなかった。

店員が勘定を私に向ける。

「お支払いの合計金額は、十七万八千二百円になります」

なんなんだ、この茶番は。どういうからくりだ。私は状況に追いつくことが出来ず、頭の中が真っ白になった。そして、店員が何かを口にしようとする。

「あなたって」

「やめてくれ」私は耳を塞ぐ。

「あなたって、本当に」

「やめろって言ってるんだ！」

「勝負弱いんですね」

私はその場に膝から崩れ落ちた。

喫茶店での攻防戦から一週間が過ぎた日曜日、私は妻と二人で桜を見に行った。河川敷のすぐそばにある、桜の木の下に二人で腰を下ろし、遠くに見える春の景色を楽しんでいた。電車が低い音を出しながら颯爽と橋の上を通り過ぎる。その奥には青い山々がどっしりと連なっていた。

「ねえ、あたしの好きな色って何色だと思う？」妻が急に尋ねてきた。

「何色って、言われてもなあ」

「じゃあさ、勝負ね」

彼女の口から勝負、という一言が出てきただけで私はたじろいだ。勝負事はもうこりごりなのだが。負けることはもう目に見えている。

「あたしが一分間待つ。その間にいくつも答えていいから、答えが出たら勝ちってことで」

なんだよそのルールは、と私は心の中でつぶやきながらも色に関連する単語を出来るだけ思い描いてみる。この世界に存在する色って一体どれくらいなのだろうか。

「じゃあ、いくよ。よーい、はじめ」

妻は無邪気な笑顔を浮かべている。私は赤、青、緑、黄色と次々に色を口にしますが、そのどれもに

彼女は首を横に振る。私は必死に考えを巡らす。彼女がよく買う服は何色だったか。靴の色は何色が多かったか。

だが、そこでふとある回答が頭に浮かんだ。そうか、と私は自分で勝手に納得をする。

「もしかして、いろいろ？」

「ピンポン」妻ははにかんで、よく分かったね、と満面の笑みを私に向けてきた。まさかそれが正解だとは思わなかった私は、素直に喜ぶ。すると、妻は模範解答を述べるかのように、解説を始めた。

「あたしはね、この世界にあるいろいろな事を好きでいたいし、美しいって思っていたい。そのほうが人生ってさ、楽しくなると思うんだよね。もちろん、キミのいろいろもね」

そう言って彼女は、私の鼻先を人差し指でそっとつついた。私はなんと答えていいか分からず、とりあえず笑顔を浮かべる。そして、彼女に告げる。

「俺もだよ」

彼女は笑いながらも照れくさそうに、頬を赤く染めた。その瞳の奥には、優しさがあふれていた。私は妻と何気ない日々を生きていくのが一番の幸せであると悟った。笑って、泣いて、ケンカして、仲直りして。その日常には決して勝ち負けなどはない。

「この勝負、キミの勝ちだね」

彼女だけはいまだにそう言ってくれる。

終

## 病名：郷愁症候群（三ツ葉葵）

病名：郷愁症候群

三ツ葉 葵

「冬村先生、最近私は、無性にカレーが恋しいんです。頭がおかしくなりそうなくらいに」  
秋山は下を向き、呟くようにそう告げた。相手は心療医の冬村。六畳ほどの白い部屋の中、机越しに向き合って座る黒いスーツと白衣の間には暗い雰囲気立ち込めている。

「秋山さん、残念ですが、郷愁症候群の可能性が高いですね。お薬出しておきますし、配給用食もプレーンからカレー味にできるように申請おきますね」

冬村は深刻な顔で秋山をみて、しかし口調は淡白にそう説明した。それを聞き、秋山は虚ろな瞳を冬村に向けると、神にすぎると、苦しみに歪んだ表情をした。

「先生、私はもうだめなんですか。もう、もう助からないんでしょうか」

秋山の切実な問いは空しく響き、白衣と白い部屋に吸い込まれていった。しばしの沈黙の後、彼女は虚ろな瞳を下に向けると、それきり冬村に向けることはなかった。

「……一先ず、薬と食事の経過を診ていきましょう。効果が無ければ本物のカレーにありつけるかもしれないし、可能性はまだゼロではありません。諦めてはいけませんよ」

冬村が念押しすると、秋山はすくと立ち上がり、お辞儀だけして白い部屋から出て行ってしまった。

心療医の立場として淡白な対応しかできなかった冬村にも、秋山の沈みようは理解できる。だからこそ冬村は歯痒い思いを抱かずにはいられなかった。

病名：郷愁症候群

死に至る病であった。

＊

ある有力な一説では、人類が高度な科学技術の名のもとに自然を淘汰し、物質的にも精神的にも有り余るくらいの富を得たことが、人類それ自身にとって、とりわけ心の健康にとっては悪影響を与えてきたとされている。

社会を平和へ導く「管理者」といわれる機関からもたらされた、魔法にも思えるほどの科学技術によって戦争は解決され、心の余裕を生んだ。経済的停滞は解決され、貧しさをなくした。蓄財による富は均され、正直者が割を食うこともなくなった。

しかし、人類が手にした安寧にも、それと等価かそれ以上の犠牲は必要であった。「管理者」による思想統一、所有権の放棄、財産の制約などの強制、さらに、居住区画整備という名の森林の開拓や資源区画と居住区画の分割がなされた。食料安定供給のために食事は配給制になっていき、ついには居住区からの外出さえも禁止されていったのだった。

＊

「秋山さん、その後どうですか。薬と配給用食の改善で郷愁状態は抑えられていますか」

冬村は正面をまっすぐ見据え、診察のためにあえて聞いた。相手はすっかり憔悴した様子秋山。

六畳ほどの白い部屋の中、机をはさんで対峙する黒服と白衣の間には、黒い何かが澱のように沈んでいるようであった。

「先生、何も効きませんよ、何も。苦い薬も、まずい配給食も。やっぱり、だめみたいですね、私も」

秋山は澱んだ瞳で冬村を見つめ、しかし口調は穏やかにそう答えた。その様子を見て、冬村は同情の眼を秋山に向けると、自分のふがいなさを責めるような、苦しさに歪んだ表情をした。

「秋山さん、諦めるにはまだ早いですよ。先日、秋山さんに特別、配給用食じゃない普通のカレーが食べられるよう管理者から許可が下りたんです」

冬村の、秋山にとっては嬉しいその知らせは少しだけ彼女の瞳に光を戻すと、白い部屋に反響した。しばしの沈黙の後、冬村は気まずさに目を逸らすと、それきり彼女には向けられなかった。

「……これで、これできっと治るんですよ。はは、やった、やったよ。やった、やったあ」

秋山が感動のあまり涙していると、冬村はすくと立ち上がり、お大事に、とだけ言って白い部屋から出て行ってしまった。

冬村が「管理者」に申請するとき理由に記した、郷愁症候群の患者に郷愁を引き起こさせている原因を投与する臨床実験、というのは建前であった。しかも、秋山が本当のカレーを食べられるよう申請はしていたが、管理者から許可など下りていなかったのだ。「管理者」から許可されていないことをすれば懲罰は避けられないことは分かっていたが、今、冬村を突き動かしているのは一つの覚悟。ただ同情心ゆえに、心療医ではなく一人の男性として、カレーを作り、秋山という一人の女性に食べさせる、そんな覚悟だった。

\*

「管理者」が支配する社会で得た物質的な豊かさ、生存が保障されているという精神的な余裕とは裏腹に、自然を愛でたり、好きなものを食べたりすることができなくなり、人々は疲弊していたのだろう。とある精神病が「完璧な」社会の中でひっそりと芽吹き始めていた。しかし、「管理者」とその社会の人々がその精神病の存在に気づいたのは、病魔の花が咲いたとき、つまり、一人目の被害者が出たときであった。

その死に様は、ある特定のものを懐かしく思い欲するという「郷愁状態」に始まり、次第に自我が失われていくと、最終的には抜け殻になった身体が心臓を動かさなくなるという恐ろしいものだった。しかも、高度な医療技術をもってしても、いまだに治療法は発見されていない。人々の間では「郷愁症状」を引き起こしている原因のものを手に入れることで治るのでは、という眉唾ものの情報が広まっていたが、「管理者」に支配されている状況では確かめようもなかった。人々はその不治の病に恐怖を覚えたが、「管理者」の支配する「完璧な」社会の中ではその恐怖を訴えることなどできるはずもなかったのだ。

\*

「冬村先生、この間は御馳走様でした。とても、とても美味しかったです」

秋山は前を向き、前よりも少し生気を取り戻した声でそう伝えた。相手は少し疲れた様子の冬村。六畳ほどの白い部屋の中、机をはさんで向き合うスーツと職業衣の間には、古くなった機械油のような鼻をつくような臭気が漂っている。

「……それは、それはよかったです。現在状態は安定していますが、今後の経過を診て、郷愁状態が全くあらわれなくなるくらいになったら、はれて完治といえるでしょう。」

冬村は笑顔を秋山に見せ、しかし、澀みを孕んだ瞳を向けながらそう答えた。その憔悴ぶりを見て、秋山は疑念の目を向けると、いつの間にか大切なものを無くしたことに気づいたような、苦しさに歪んだ表情をした。

「先生、その、失礼かもしれませんが、先生は大丈夫なんですか。最近懐かしいものとか、食べたいものとか、そんなものはありますか」

秋山の問いかけは冬村を一瞬ハッとさせると、白衣と白い部屋に吸い込まれていった。しばしの沈黙の後、秋山は悲痛な瞳を冬村から逸らすと、それきり冬村には向けられなかった。

「……まあ、私の心配は無用です。それよりも今は、ご自分の病気の完治に向けて、頑張ってくださいませ」

冬村が健気にそう答えると、秋山はいたたまれなくなって、すくと立ち上がると、お辞儀だけして白い部屋から出て行ってしまった。

冬村は秋山の快方傾向に安堵するとともに、彼女の言葉に自分の体の異変に対する一抹の不安を感じた。確かに「管理者」からの思想統一プログラムへの参加強制、財産制約の強化などの厳重な懲罰によって自分が身体的にも精神的にも疲れきっているのは分かっていた。しかし、彼女に言われるまで気がつかなかったのだ。僕の体が、心が、初春の芽吹きのを、白い覆いから解放され、漂う土の香りを欲していることに。

\*

「管理者」にとっても「完璧な」社会を維持するために、危険な要因は排除しなければならなかった。そのため、医学者集団に研究と対策を命ずると、学者達は初期症状である「郷愁状態」からこの病気を「郷愁症候群」と名付けたのであった。

しかし、「管理者」はこの病気を解決するための次の手が、自らの課した厳しい制約、それのもつ暗黙の強制力によって妨げられていることには、今も、そしてこれからも気づくことはないだろう。

(終)

あとがき

全然関係ないですが、「ゼロの使○魔」がどうやら完結するようで、ようやく完結することと、ヤマグチノ○ル氏の変態文章で読めないことが相まって、嬉しいやら悲しいやら。それでも僕の青春時代(笑)のバイブル的な本なので、終わりを見届けたいと思います。ちなみに僕はタバサ派です。とっても楽しみ。

## 混合(下) (Puney Loran Seapon)

混合(下)

Puney Loran Seapon

【前回のあらすじを簡潔に言ってもらおうと】

勇気「まあ、あれだ。上巻では、俺達警察と、どっかの殺し屋が追っかけている少女が、まゆみと接触。そして中巻では、藤二と殺し屋が接触。なんかごちゃごちゃと話して終わった、と思ったら、まゆみはあっという間にホテルに連れ去られ、そこであられもない姿に――」

まゆみ「されてないからね？ 嘘言わないでね？」

勇気「はいはい……まあ、そんなところじゃねえの？」

まゆみ「あと勇気、言うこと言わないと！」

勇気「ああ、そうだったな。これクロスオーバーだから。『弾丸』から読むことを勧める」

まゆみ「それもそうだけど！ 他に言うことあるでしょっ？」

勇気「ん？ 後は、【あとがき】で一ページ使っちゃって、そのせいで制限ページ数をオーバーしちゃったから、どうしても【あとがき】が読みたい奴は作者の名前でググってサイトに来いっくらいしか……」

まゆみ「サイトの告知じゃなくて、『ここまでお付き合いしていただいて、ありがとうございます』って言おうよっ？」

変態(?)

「……にやろう」

きむら ゆうき  
木村勇気は、早足で廊下を歩いていた。時折口を次いで出る言葉に、あまり意味は無い。

だが、ただ何となく、彼はそう言わずにはいられなかったのだ。

何故ならば――

「おじさあん、五万円でどお？」

「やだあ、このお兄さんなら、三万で充分じゃな一い？」

声を掛けられ、勇気は足を止める。半眼をつくり、そうやってきた女子生徒の胸ぐらを掴む……のは流石に抑えたが、それでも思わず上がりかけた手は、微妙な位置で固まっていた。

そんな彼が余程ツボにはまったのか、二人の女子生徒は馬鹿笑いしながらその場を去って行く。

「こんなことなら、ブタを連れてくれば良かったな……」

これで何回目だろうと、外に待たせている同僚の顔を思い出しながら勇気は嘆息する。

いや『嘆息した』と言ったが、もっと言えば、その同僚の顔を思い出して、勇気はさらに憂鬱な気分になってしまったのだが。

挨拶も録に出来ない彼が、まともに聞き込みなんかできるとは、勇気は到底思えなかったのである。

。

それにしても、勇気が廊下を少し歩くだけであの調子だ。果たしてここの生徒は、彼が警察官だと理解してあのような発言をしているのだろうか。

これが今の日本の高校生かと思うと、その内生まれてくるであろう自分の子供の将来が不安になる勇気だった。

弾丸(?)

まずいことになった。

藤二の奴に外に連れ出された俺は、必死で藤二から逃げる算段をつけていたのだが.....悲しいことに、その目論見は全て失敗に終わっていた。

なるべく不自然にならない程度に行動していたのだが、これ以上は危険だろう。

もう腹を括る他無いが、それにしても――

「なあ藤二。どこに行くのかそろそろ教えてくれ」

流石に、目的地を教えてもらえないまま三十分近く歩かされるのは、嫌がらせにしては度が過ぎていると思う。

「ははは、先輩、もうすぐ分かりますよ」

この台詞も、もう何度聞いただろう。一応、聞き込み捜査に協力して欲しい、とは言われたのだが、連れ出されてから今の今まで、それらしいことは何もしていない。

まして、俺は殺し屋だ。不安になるな、という方が無理な話だろう。

だが、俺のこの不安は加速することとなる。何故ならば、

「さあ先輩、ここですよ！」

藤二に連れてこられた先が、おっさんの <sup>せがれ</sup> 倅の通っている.....そして、藤二やおっさんから教えてもらった、あの二人の少女が通っていた高校だったからだ。

これは.....ラッキーと捉えるべきだろうか？ 自然に情報収集が出来る。

一瞬、そう思ってしまった自分があることに気がついたが、すぐに思い直す。そもそも藤二と一緒にいる時点で、そんな訳が無い。

「じゃ、先輩。中で捜査一課の人達と待ち合わせているので、合流しちゃいましょう」

「おいおい.....俺以外にもいるのか？ だったら、俺は必要ないんじゃないか.....」

「いや、『人達』って言いましたけど、たった二人ですし。人手は多いにこしたことはありませんから」

ほらみろと、俺は心中で頭を抱える。

複数人で、俺の事を監視する気か。こりゃ、面倒な事になった。

変態(?)

「ほうほう、TOUJIクンの先輩となwww」

「あ.....どうも」

いきなり一般人が聞き込み捜査に加わると聞いて、一瞬怪訝そうな顔を見せたものの、勇気の同僚の <sup>ささき こうすけ</sup> 佐々木康介.....通称ブタはいつも通りだった。

よく言えばフレンドリーと言えなくもない態度のブタに、藤二の連れてきたその『先輩』とやらは、剣呑な目を向けて困惑したような雰囲気を出すという、実に器用な事をしている。流石に藤二の先輩も、まさか康介のような人間が警察官だということは予想できなかったらしい。

「ところで康介君。勇気君はどこかな？」

藤二が、ここにはいないもう一人の同僚のことを、ブタにしか聞こえないように小声で聞くと、ブタは学校の方に視線を向ける。

どうやら一人で聞き込みを続けていることを察した藤二は、ボソボソっと康介に『とある事』を伝

えた。一瞬眉を潜めたブタは、藤二と藤二の先輩に交互に見たものの、色々理解したらしい。

ブタの様子からそれを確認した藤二は、再び自分の先輩の方に向き直った。

「じゃあ先輩、あと一人はすでに聞き込みをやっているみたいなので、一旦合流しちゃいましょう」

「そ……そうか」

えいえいおー、みたいに拳を突き上げて言った藤二に、彼の先輩はただただ流されるままであった。

「……あん？」

藤二が『校舎前で待っているZE☆!』とメールを送ると、それを受け取ったもう一人の同僚、勇氣はすぐにやってきた。

どうもイライラしているような様子で歩いてきた彼だったが、藤二と康介の側にいる人物を見て、一瞬毒気を抜かれたようにピタリとその場で立ち止まる。

で、紹介され、これから自分達と行動を共にする旨を藤二が伝えたら一転、これだった。

「勇氣君。まるで般若の（ry）」

「中々面白い顔を作るね！」

「……なんかすみません」

ふざけたことを抜かした二人に、勇氣の青筋は破裂寸前である。それに同情したかのように頭を下げる藤二の先輩が、あろうことか勇氣にとっては救いであった。

藤二が連れてきた先輩とやらが、藤二や康介みたいなやつだったら、恐らく勇氣の怒りは怒髪天を衝き、周りの人は美しき血桜が三輪、アスファルトの地面に咲き誇るのを幻視することになったであろう。

「……まったく、仕方ないか。初めまして、木村勇氣です」

「苦勞されてますね……心中、お察しします」

曰く、『藤二の先輩』という彼は、どこか疲れたような様子で勇氣に微笑みかけてくる。

どうやら、この人も藤二に振り回される役回りらしいと、どこか勇氣は彼に親近感を持ってしまっていた。思わず、握手を求めてしまったほどである。

彼も同じことを考えたらしい。ほぼ同時に手を差し出してきた。が、

「……あ、もしかして、左利きなんですか？」

彼の差し出してきた手が左手で、勇氣は自分の右手を引っ込め、代わりに左手を差し出しながらそう聞く。

「あ、すみません。気を使わせてしまって……勇氣さん、でしたか？ 藤二の奴がお世話になっています」

「あ、いえ、気にしないでください。つーか、すみませんね。うちの同僚がご迷惑をおかけしました」

ガッチリと握手を交わしながら、二人の会話は続く。

「藤二の奴は、昔やっていたアルバイトの後輩なんですよ」

「うわ……面倒な後輩だったでしょう？ 俺はあいつが中学生だった時から見ていますけど、あいつは昔からこうなんですよ。ちっとも変わらない」

「中学生の時から藤二を？ それは……苦勞の多い学生時代ではありませんでしたか？」

「分かりますか？」



「分かりますっ！」

「あー、お二人さん？」

意気投合した勇気と藤二の先輩に、額に汗を浮かべた藤二が控えめに割って入る。その隣では、ブタが呆れたような目線を二人に投げかけていた。

「本人の目の前で堂々と悪口を言うのはちょっと……」

「それよりも仕事をだね…… s m h」

いつもならこの発言に対して「『s m h』ってなんだ！」と怒鳴る勇気も、今ばかりは二人から目を逸らすしか無い。藤二の先輩も同様だ。

ちなみに『s m h』というのは、『Shaking My Head』の略である。

弾丸(?)

さて、三人か。

俺は、今日の前でこれからの聞き込みについて話している藤二、勇気さん、康介をジッと観察していた。

一番に警戒すべきは、やはり藤二だろう。勇気さんと康介は、一般の警察官とあまり変わらない。少なくとも、藤二みたいに『実は別の部署なのに捜査一課に手を貸している』ような人達では無い。しかもこう言っちゃ難だが……

靴底のすり減り方とか、指の腹や爪だとか、そこら辺を見るに、他の警察官より劣っている感じだ。藤二と同期ってことは、現場に出て間も無いが故か。

とは言え、油断は出来ない。能力がどうであろうが、相手は警察だ。

だが、それにしても。

俺は、勇気さんをちらりと見る。まさか、藤二の扱いに苦労している人が、自分の他にもいるとは思わなかったのだ。思いかけず興奮したせいか、ちょっと饒舌になってしまった。下手なことは喋らなかつたか少し心配だ。

もし俺が殺し屋じゃなければ……少し歳は離れている感じだが、普通に友人になれたかもしれない。

そんな彼は、今はスマートフォンの画面に目を落として、眉を顰めている。と思ったら、顔を上げた。

指があまり動いていなかった所を見ると、メールのチェックでもしていたのだろうか？

「あれ、勇気君。どうしたの？」

藤二も同じことを思ったのだろう。スマートフォンをスーツの内ポケットにしまう勇気さんに、そう聞いた。

一瞬だけ逡巡した勇気さんだったが、言ってもいいと判断したのか、ゆっくりと口を開く。

「いや、まゆみから連絡が無いな、と思ってな。一時間ちょっと前にメールしたんだよ。『聞き込みが長引きそうだから、夕飯は外で食うことにした。俺の分は作んなくていい』ってな。仕事に関係無い事だから、気にしなくていい」

「む？ まゆみくんから連絡が無いだって？ それは、一大事じゃないのかい？」

なんか知らない名前が出てきたが、見れば藤二も、いつもの人を食ったような笑顔は何処へやら、わりかし真剣な顔で勇気さんの、スマートフォンが仕舞われている場所を見ていた。

どうやら藤二と康介はその『まゆみ』という人物を知っているようだ。

「ちょっとおかしくないかな？ まゆみさんって、確かどんなに忙しくても、勇気君のメールには十分以内に必ず返信するよね？」

「ああ。最低でも、『分かった』とか『了解』とか、下手すると空メールを返してくる時もあるな」  
二人の会話を聞くに、どうも勇気さんと、その「まゆみ」さんとやらは、恋仲か、もしくはそれに近い何かなのだろうな。送られてきたメールに十分以内に返信するとか、余程の相手じゃないと、中々出来ることじゃない。

「まゆみくんは、勇気くんから何時連絡が来てもいいように、スマホの電池は必ず一定量以上に保っているからねえ……勇気くん、GPSは確認してみたのかい？」

「おいおい、ちょっと待ってくれ。俺にも説明してくれないか？」

流石に黙っていられず、俺は話に割って入った。

ここで疑問を口に出さなければ、変に怪しまれるかも、と思ったのもある。だがそれ以上に、気になることがあったのだ。

なんか藤二と康介は、まゆみさんについて色々知りすぎていやしないだろうか？

いや、『恋人へのメールの返信は十分以内にする』とか『電池は一定以上に保つ』とか、他人に話す奴は話すだろう。だが、さっき会話をした感じでは、勇気さんは俺と少し似ている気がする。

だから、例えこの二人が同僚、いや百歩譲って『友人』だとしても、俺ならこの二人には、自分の恋人の事はペラペラ喋ったりしないと思ったのだが……

変態(?)

藤二の先輩に、その後輩が勇気とまゆみについての関係を簡単に説明する横で、勇気はブタに言われた通り、GPSでまゆみのスマートフォンの現在位置を調べていた。

検索画面を見つめながらも、勇気は心の中で首を傾げる。藤二とブタはああ言っていたが、まゆみが返信をどうだとか、スマホの電池の量はいつもこうだとか、そもそも勇気自身は知らなかった事だ。

勇気が、その理由について考え始めた時、

「あいつら、なんで知って……ん？」

スマートフォンの画面に『見つかりませんでした』という、無機質な文字が映し出された。

「勇気くん、どうか……む？ 『見つかりませんでした』、とな？」

「なんだってっ？」

ブタの声に、藤二が、彼にしてはやや大きめな声を出す。

そして自身も勇気のスマホの画面に映し出された文字を見ると、おもむろに顎に手をやる。

その顔は真剣そのもので、いつもは見せないその表情に、勇気は少し驚いていた。

藤二の先輩も、こんな藤二は見たことが無いのだろう。目を丸くするとは、まさにこのことである。

「ちょっと、勇気君達を盗撮している動画をチェックー」

「おいこら藤二！」

突然のカミングアウトに、勇気は引き攣った笑顔で藤二の胸ぐらを掴んで引き寄せる。頭突きのおまけ付きで、だ。

「てめえ、科捜研とはいえ警察官のくせして、盗撮たあ何事だよっ？」

「はっはっは、勇気くんwww 科捜研は警察官じゃないよ？」

「そうだよ勇気君。科捜研は警官じゃなくて、技術職員ー」

「いや、そうじゃないだろう……」

藤二の先輩も、左手の親指と中指で自身のこめかみを押さえて溜息を吐いていた。

「おい藤二貴様。『迷惑防止条例違反』及び『プライバシーの侵害』、後は盗撮した場所によっちゃ『軽犯罪法違反』も犯しているし、それに『住居侵入』も……」

「盗撮した場所は君達の家だ。でもトイレや風呂場は盗撮していないから『軽犯罪法違反』は犯していないし、僕は家の敷地内には入っていないから『住居侵入』も大丈夫——」

「大丈夫な訳があるかあっ！」

ここは学校の敷地内。勇気のアッパーカットを顎に受けて伸びた藤二が、多くの若者の好奇の目に晒されたのは言うまでも無いだろう。

「……で、盗撮による罪がどうのこうの、というのは置いておいて」

「置いておかねーぞ。後でちゃんととっちめてやるから覚悟しやがれ」

数分で目が覚めるや否や、そんな事をほざいた藤二に、勇気は半眼で睨む。

「なあ藤二。さっきお前、勇気さんとまゆみさんの家の敷地内には侵入していないって言っていたけど、どういうことだ？」

呆れつつもそう聞いたのは、藤二の先輩である。そんな彼に、得意気な顔をしたのは何故か康介、つまりブタだ。

「おいブタ、まさか貴様……」

「その通りだよ勇気クンwwwっ！ 君達の家にお邪魔させて貰った時に、盗聴器とカメラは僕が——」

その言葉は最後まで続くことは無かった。勇気の強烈なボディブローが、ぽこんと出たブタの腹にぶち込まれたからである。

「……ったく、油断も隙もありやしねえ」

「まあまあ勇気君。絵里さんと凜ちゃんには許可を貰っているからさ。そう怒らないでくれないかな？」

「そ……それに、まゆみクンはこのことは知っているんだ。仕掛けるにあたって、断りを入れたからね。知らないのは君だけなんだよ」

「あ、い、つ、等……っ！」

今明かされた衝撃の事実、帰ったら正座の一つでもさせようと決意した勇気だった。

ちなみに藤二の先輩は、話についていけないようで、その場で棒立ちになっていた。口は開きっぱなしという有様だ。

「まあ気を取り直して、動画をチェックしていこう。僕のスマホでも見られるけど、画面が小さいし、勇気君と康介君には動画をメールで送信するよ。先輩は申し訳ないですけど、僕と一緒にスマホでお願いします。あ、協力してくれますよね？」

「あ、ああ……」

ノーとは言えないようにするその言い様に、藤二の先輩のみならず、勇気の頭も痛くなる。

やがて、藤二からメールで動画のデータが送られてきた。だが……

「……っ」

勇気のメールには本文も添えられており、一言、

『先輩に注意して』

と書かれていて、思わず勇気は藤二の方に目を向ける。藤二は視線だけで、

『後で説明する』

と言ってきた。

驚くのは、まだ早い。動画をチェック——まあ、勇気と藤二の先輩は、終始不承不承といった感じだったが——してから少しした時、ブタが素っ頓狂な声をあげたのだ。

何事かと、他の三人が康介のスマートフォンの画面を見ると、そこに映っていたのは——

友達(?)

私、伊藤まゆみは、目の前の少女から目を離すことが出来なかった。

今日出会ったばかりの女の子に、何だか知らないけど良く分からない所に連れ込まれ、こうしてベッドの上に拘束されていれば、当然目を離すことなんて出来はしないけど、理由はそれだけじゃ無い。

今日の前にいる少女の後ろに、突然別の女性が現れた.....ような幻覚を見たから、とでも言えたいのかな？

でもそれは、例えば目の錯覚だったとか、蜃気楼的な現象があったとか、この鼻をくすぐるオトメユリの香りに当てられたとか、そんなものじゃ無い。

そう思える程、とてモリアルな女性だった。

でも、なんでだろう。今日の前にいるこの少女の姿が、私にはよく分からない。さっきから、目が霞むのか、この子がどんな容姿をしているのか、頭に入ってこないのだ。

ううん、ちょっと違うかも。『容姿が頭に入ってこない』んじゃなくて、『色んな容姿に見えるから、どれが本当の彼女か分からない』と言った方がいいのかな？

分からないと言えば、この子の名前もそう。さっき彼女が教えてくれたはずだけど、今は全然覚えていない。

もっと言うと、頭の中に、彼女の名前の余韻がまだ残っているんだけど、それが段々と消えていく感じ。

でも、私にはそんなこと、今はどうでも良かった。

「ここは.....どこ？」

そう。今、このはつきりとしめない頭の中に入れなきゃいけないのは、ここがどこなのか、ということ。

どう見ても、私はこの子に拉致され、多分監禁ないし軟禁されているんじゃないかな。まさかこの歳になって、誘拐されるなんて夢にも思わなかった。

「ここは.....ですよ？」

あれ.....よく聞こえなかった。

でもその時、私の視界にあるものが入る。ベッドの横に、何かのスイッチやダイヤルみたいなものが、いくつかあったのだ。

試しに、そのダイヤルの内の一つを回してみると.....これ、なんだろう？　なんか部屋がライトアップされたんだけど。

凄く.....凄く、嫌な予感がする。

目の前の少女が、小さくピューっと口笛を吹いたのを見て、私は全てを理解し、そして.....

いや、想像なんてしてない。してないけど.....っ！

自分でも分かるくらい、カーッと顔が熱くなってしまった。

変態(?)

「……で、こう……でね？」

「いや、分かるけどよ……でも……」

まゆみの家まで歩きながら、勇気と藤二はヒソヒソと早口で話していた。ブタと藤二の先輩は、さきに車でまゆみの家まで向かってもらっている。これには当然理由があり、藤二がそうしようと提案したのだ。

そしてその理由は当然、さっきの『藤二の先輩』について、話し合うためである。ちなみにブタは、もうこの話を聞いている。

藤二曰く、どうやら彼は、あまり大きな声で言えない、いわば『裏稼業』を営む人らしいのだが、どうにも勇気は信じられないでいた。

それもそのはずで、藤二は別に、何か物証を持ってきたわけではないのだ。ただ単に、『少し会話をして、そう思った』からだそうなのだが……引っかけた理由が、勇気が納得するには微妙なものだった。

「藤二。言いたいことは分かるが……それじゃ、俺が納得する材料としては弱すぎるし、そもそも発想がぶっ飛びすぎてる。たまたま、そう言っただけかもしれねえだろ？」

「いや、でもさ。ちょっと変でしょ？先輩、この事件の事、よく知らないって言っていたのに、写真を見せたら『女子高生』って断定したんだよ？言っておくけど、僕は『女子高生』なんて一言も言っていないからね？」

「……まあ、その点は俺も気にはなったけどさ。写真を見て、そう思っただけかもしれない」

「でも写真に写っている女子生徒は、高校一年生でしょ。しかも僕の見た感じじゃ、中学生って言われても納得する顔なんだよね。断定するには、難しいんじゃないかな」

「……んー」

勇気は、額に手を当てて考え込む。

藤二が、今勇気が追っているこのヤマの他に、もう一つの事件を調べているのは、勇気もすでに知っていた。しかも、藤二が独自で調べている方のヤマのホシ、つまり犯人は、今、勇気達が捜査している事件の目撃者であるかもしれないのだ。

だがその犯人かつ目撃者が、藤二の先輩だと言われても、勇気は簡単には納得が出来ない。

だが、

「分かったよ。取り敢えず、注意して見てみるわ」

『人を見たら泥棒と思え』という言葉がある。取り敢えず、勇気は藤二の言ったことを、頭の片隅に置いておくことにした。

まあ正直な所、勇気は別の方に気が行ってしまっていて、藤二の言ったことを無意味に保留しているだけに過ぎなかったのだが……これは、責めるべきか否か。

「……やっぱり、帰ってきてないか」

もう日も完全に落ち切った、午後七時。

まゆみの家にやってきた勇気は、そう呟く他無かった。

ある程度、覚悟はしていたが、それでも落胆は隠せない。自分達以外に誰もいない家の中で、勇気の吐く溜息が、白く曇る。

藤二の送ってきた動画に写っていたのは、まゆみが、今、勇気達が追っている事件の犯人と思わしき人物と一緒に談笑している所だったからだ。ただ、少女の顔はピンボケしていたが。

いやまあ、正確には『途中まで談笑していた』と言うべきだろう。数十分くらいしたら、まゆみの様子が突然おかしくなって、あっという間に床に倒れたのだ。

するとどうだろう。今までまゆみと談笑していた少女は、まゆみを担いで、どこかへ向かってしまったのだ。その時の勇気の心境といったら、筆舌に尽くし難いと言っても過言では無い。

その先からは、室内のカメラではどうしても追えず、何か手がかりを求めて家まで来たのだが.....見つかったものと言え、手がかりになるかどうか分からない『匂い』だった。

恐らくオトメユリと思われるこの香りを、勇気はまゆみの家で嗅いだことが無い。この『匂い』は間違いなく、あの少女のものであろう。

再び溜息を吐きかけた勇気の肩に、そっと手を乗せた人物がいた。

弾丸(?)

俺は、勇気さんの肩に手を乗せていた。

これは別に、同情とか、そんな類の気持ちからでは無い。

俺だって、あの少女.....『須藤響一郎』なのか『天瀬響花』なのか、どっちなのかは知らないが、とにかくそいつに生きていてもらっちゃ困る。でも、あまり殺す気にもなれないのも事実だ。

そして勇気さん達からすれば、この少女は逮捕しなければならず、それは俺からすれば『最悪の結末』である。彼女の供述によっちゃあ、俺も逮捕されるからな。

では、勇気さん達にとって『最悪な結末』とは何か。それは考えるまでもなく、まゆみさんの死であり、しかもそれは容易に起きえるだろう。あちとら、経験が、実績がある殺人犯だ。

そうなる、例えばの話だが.....『まゆみさんが助かって、事件の犯人に逃げられる』というのは警察官としてはともかく、勇気さん達からすれば『最悪な結末』では無いのではないだろうか。

で、だ。この場合、俺はどうかって聞かれると.....答えは『かなりハッピーな結末』ということになる。俺は藤二の監視から外れ、その上ターゲットの顔を確認することも出来るからだ。さらに可能性は低い、『藤二が俺に持つ疑念も晴らせる』という嬉しい副産物までついてくるかもしれない。

するとどうだろう？

これは、言ってしまうと『WIN - WIN』の関係。ちょっと危険なやり方かもしれないが、今から俺が選ぼうとしているこの選択肢が、俺にとって、恐らくベストなものはずだ。

だから、

「勇気さん」

俺は、そう話しかける。

話は、この家で手がかりを捜すのを手伝っていた時に、藤二の奴から聞いていた。勇気さんとまゆみさんの二人が今日、何時にどこで何をしていたのか。何故お前がそんなに詳しく知っているんだ、と言いたくなる程だった。

その結果.....

「まだ、何とかなるかもしれません」

俺の探している、あの少女がどこへ行ったのか.....それが、分かったのだ。

いや、

ここは、『分かるだけの材料が揃った』というべきだな。

変態(?)

午後七時半。

勇気とブタは、屋上にいた。季節が季節なせい、この時間にもなると、結構肌寒い。風は無いが、二人は少し震えていた。

全ては、藤二の先輩が推理した通りに、ここまでやってきたのである。

ここは、まゆみの家から一番近い店員のいないホテル.....それがまさかブティックホテルだとは勇気もブタも思っていなかったのだが、その屋上だ。

藤二の先輩曰く、ここにまゆみがいる可能性が一番高い、ということだそうだ。そしてその予想は、見事に当たっていたのだが.....

「ああして見ると、何というか.....」

「ザ・ヒットマン、って感じだねえwww」

勇気とブタは、この屋上の向かいで、ライフルを構えてスコープを覗いている藤二の先輩を見てそう呟いた。

部屋のカーテンは、ほぼ全て閉まっているはずなのだが、彼が言うには、そのカーテンの隙間からまゆみの姿が見えたそうだ。これは藤二も確認したから、間違いないだろう。

それで、である。勇気とブタがここで何をしようとしているのかというと.....二人は自分の腰に、それぞれ消防用のホースを巻きつけていた。ここのホテルの消防用設備の中からお借りしたのだ。

そしてホースのもう片方を、柵の手すりに固く結んでいることから、何をしようとしているのかは一目瞭然だ。

二人は眼下に広がる黒いコンクリートを見て、ゴクリと唾を飲み込む。

こんな時こそ、藤二が発明品を何か貸してくれればいいものを、出てくるのは輪ゴムばかり。しかも意味不明な輪ゴムばかりで、『耐火性輪ゴム』はまあ百歩譲って許すとしても、『耐水性輪ゴム』とか『耐震性輪ゴム』とか、一体何の用途に使うのか分からないものを出してくる始末。

挙句、その製作者である藤二は「全部繋げれば、命綱として使えなくもないんじゃないかな？」とか言いやがるもんだから、取り敢えず勇気は藤二の頭に一発、鉄拳を落としておいた。これならいつもみたく、版權に引っかかる危険性の高い発明品の方がいいと本気で思ってしまった程である。

友達(?)

時間が分からないことが、こんなに不安だとは思わなかった。

私は駄目元で、もう一度部屋の中を見渡す。でも、現在時刻を示すものは、何一つとして見つからない。

この部屋にあるものは、今私が寝ているこのベッドと、隣の変なスイッチのついた機械。そしてその機械の上にあるティッシュと、後は窓際にあるテレビと小さな花瓶くらいだろう。ここから見えるのは、それくらい。

私をここに連れてきた少女は、今は入浴中。この隙に逃げ出したいけど.....生憎、両足を鎖で拘束されていて、ここから逃げることは難しそうだ。

それでも諦めたくなくて、さっきから鎖を引っ張ったりとか色々試してみたりしているのだが、ビクともしない。

あの子がお風呂に入ってから、どれくらいたったのかな？ 体感だと十分くらいだと思うけど、あまりアテにはならないと思う。

それを証明するみたいに、脱衣所の扉が開く音が聞こえて、

「勇気、勇気.....勇、気.....っ！」

思わず小声で、まるで呪文のように何度も呟いていた。

私にとって、最愛の人の名前を。

## 弾丸(?)

まさか、こうなるとは誰が予想しただろう。

今、俺は腹ばいになってライフルを構え、スコープを覗いている。まさに、いつも俺が『殺し屋』の仕事をしている時みたいに、だ。

そして俺の隣では、藤二が俺と同じように、俺と同じ銃を構えてスコープを覗いていた。

このライフルは、藤二がSATから借りてきたらしく……いや、俺は全く信用していないんだが…  
…俺がいつも使っているライフルでは無い。

こいつは、俺が大学時代、射撃サークルに所属して、さらに大会でトップになったことも知っているのだから、こうして今回、スナイパーの役目を押し付けられたのだ。

ちなみに警察所属の狙撃手は、狙撃の際は必ず二人一組で行動する。だから、今、俺のパートナーは藤二……なのだが、こう言っちゃ難だが、かなり危なっかしい。手が震えているから、これじゃ狙いがちゃんと定まらないだろう。

「藤二。お前、あぐらをかいて構えてみろ」

俺の計画には、こいつ等にもしっかり仕事をして貰わないとなので、真面目に注意しておく。

「……あっ、なんか良くなった気がします」

言われた通りに構えを直すと、藤二が面白そうな声でそう言ったのが聞こえた。

「ああ。人は、体型とかによっちゃあ、あぐらで撃つ方が狙いが定まるからな」

「へえ。ところで先輩、頼んだ僕が言うのもアレですけど、腕とか鈍ってないんですか？ 射撃サークルにいたのだから、もう十数年も前でしょう？」

「まあ、今でも毎日、射撃の練習は欠かさないからな。使っているのはエアガンだが……何とかなる」

これは本当の事だ。

「で、先輩。どう撃ちます？」

藤二の作戦では、少女の姿が確認でき次第、俺と藤二で威嚇射撃。その後、勇気さんと康介が上から奇襲する、という事になっている。

「そうだな……」

だが、俺的にはそれでは困るのだ。あくまでも、あの少女は逃がさなければならない。

と、すると……

## 友達(?)

「あれ……まゆみさん。ふふふ……無駄ですよ」

私が逃げようとしているのがすぐに分かったのか、微笑を浮かべながらも少女は私に近づいてくる。

バスローブ姿で出てきた彼女は……女の私の目から見ても、中々扇情的なものだった。

でも、私にそんな事を気にする余裕は無い。私の目は、ただ一点、

「こない……こないで……っ！」

この子の右手に握られた、小さなナイフだけに集中していた。



## 【混合】

カーテンの隙間から少女が姿を確認した瞬間、藤二は静かに引き金を引く。彼の先輩である、殺し屋も同時に引き金を引いていた。全て、この殺し屋の提案によるものだ。

そしてほぼ同時に、一人の男が屋上から飛び降りる。新米刑事の勇気だ。本当はもう一人飛び降りる予定だったのだが……手すりに結びつけただけでは流石に不安が残ったので、やむなく康介に引っ張ってもらっていた。

飛んでいく弾丸は二発。発射位置も引き金を引いたタイミングも、殺し屋が藤二に完璧に合わせた。

違うのは、狙った的だ。この的は、当初の、藤二の予定通り、あの須藤響一郎、もしくは天瀬響花の足元である。

だが、殺し屋はそれを許さない。だからこそ、自分の後輩と色々なものを合わせたのだ。

撃ち出された二つの弾丸は、その進路方向が途中で交わる。

つまり、位置やタイミングが同じであれば、『弾丸同士が途中でぶつかる』のだ。

そして、殺し屋の目論見通り――

ぶつかった弾丸は、それぞれ別の方向へと進路を変える。

一つは、何やら怪しげな機械の上に乗っているティッシュへ。

一つは、ドアについている……鍵へと。

店員のいないこの手のホテルは、扉はオートロック式のものが多い。お金を入れるなりなんなりして、初めて鍵が開く。

だから、あの少女は、もしあの場に誰かが突然乱入してきたら、自分もすぐには逃げる事が出来ないのだ。

殺し屋は、そこに目をつけた。物理的に鍵を破壊して、彼女を逃がそうと考えたのである。

結果、撃ち抜かれたティッシュ箱は、その中身を宙に撒き散らし、扉についた鍵は、破裂したような音を立てた。

少女はそこで以上を察知し、慌てて扉の方へと走り出し、

そしてその刹那、バンジージャンプしてきた勇気が窓を派手に割って中に入る。

殺し屋は細く息を吐き、少女は扉を蹴破って廊下に逃げた。

そして勇気は――

## 恋愛(?)

「まゆみ！ 無事かっ？」

「勇気っ？」

あまりの出来事に、まゆみは目を白黒とさせている。まあ、無理もないだろう。勇気もあまりの事に、正直頭が追いついて無いのだ。

藤二達はどうしているだろうかと、彼等がいる方向を見るも……二人共、もうそこにはいない。恐らく、逃げた少女を追っているのだろう。

ブタもいないが、あいつは多分、こっちに向かって来ているんだろうな、と勇気は思った。

「で、どうなんだよ？」

「……何が？」

頭に『？』を浮かべるまゆみに、勇気はやれやれと息を吐く。

「いや、だから……怪我、無いのかよ？」

「うーん、かすり傷はあるかも。でも……」

「でも？」

「酷い怪我とかは……無い。だって、させられる前に、助けに来てくれたから」

「……そうか。なら良かったんじゃないの？」

二人は思わず、プツと吹き出したのだった。

# 沈黙の搭（日曜日憂）

沈黙の塔

日曜日 憂

美しい、という言葉はひどくあいまいで、だから僕はこの言葉があんまり好きじゃない。けれど、どうしても「美しい」という漠然とした言葉でしか言い表せないような、出どころのわからない感情が湧いてくることがある。脳みその皺が縫い合わされていき、背骨がげばげばしたモールに変わって、心臓から埃を煮詰めたジャムが血管に詰め込まれて、全身の感覚がぼんやりと輪郭を失う、そういう感動が僕を満たすことが、ほんとうにごく稀にだけれど、ある。少なくとも、僕の人生では、かつて一度だけ、そういうときがあった。そういう「美しさ」を感じたときがあった。ほんとうは物心つく前にもあったのかもしれないけれど、なにせ物心がついていないころの話なのでここでは割愛する、とにかく、最も鮮明に覚えている「美しさ」というのは、僕が中学生のときに出会った彼女が持っていたものだった。

彼女と出会ったきっかけは、ほんとうに些細なことで、席替えをしたときにたまたま隣になった、というそれだけのことだ。休み時間はいざ知らず、授業中も、彼女は熱心に無地のノートに何か書いているから、僕はその日一日、気になって仕方がなかった。

「ヤトウさん」

僕は放課後、彼女に話しかけた。もう教室には誰もいなくなっていた。電灯は消えていた。オレンジ色の夕日が差し込んで、空気はマーマレードのように甘くたるんでいた。

「なあに」

彼女はゆっくりと振り返った。使い古してぼろぼろになってしまった紙やすりのような声だった。僕の鼓膜がびりびりと削られた。

「何を書いているの」

僕は素直に尋ねた。彼女は僕を警戒してにらみつけながら、

「今日一日、ずっと見てたでしょう」

「ごめん。気になって、さ」

僕の声までマーマレードになってしまったようで、なんだかでろでろして喉にひっかかるな。彼女の鼓膜にも、煮詰められた砂糖がひっかかってしまったかもしれない。僕は彼女に断られることを予感した。

「見れば」

けれど、彼女はあっさりとノートを僕の机に放った。そう言うわりには、相変わらず疑いで濁った眼をしていたけれど。

「……ありがとう」

僕は心臓が萎びていくのを感じながら、無造作に投げられたノートに目をやった。

そこに描かれていたのは、無数の鳥だった。鳥、といってもそこら中にいるスズメやハトのような

鳥ではなく、ワシ、フクロウ、コンドル、そういう猛禽のたぐいだった。シャープペンシル一本で描かれた猛禽たちは、時に大きく翼を広げ、時に鋭い爪を開き、思い思いにノートの中で生きていた。風切り羽は緩やかに反った刀のように大気を切り裂き、尾羽は巨人の手のひらのように大気をがっしりとつかむ。眼光が獲物を射抜き、嘴がその肉をついばんでいる。彼らの餌食になっているのは、どれも恐怖に顔を歪ませたヒトだった。ワシがヒトの眼球を今にも噛み潰さんばかりにくわえて、フクロウが地べたを這いずり回るヒトの背後から音もなく飛びかかり、コンドルが腐ったヒトに顔を突っ込んで腸を引きずり出していた。うまく写実できているとは到底思えない荒々しい筆致であったが、どれもたしかに生きていた。グロテスクなデフォルメを施された猛禽とその餌食が、このノートの中で息づいていた。

僕は腐臭に顔をしかめて、ページをはぐった。はぐるたびに嘔き出す腐臭と弱肉強食が、どうしようもない冷たさをともなって僕の鼻腔と網膜を凍らせた。氷になってしまった眼球を、しかし得体のしれない熱が直後に吹き抜けて融かした。視神経を通じて脳まで凍らせられた直後、つかみどころのない熱が脳を融かして、寒暖差で脳がとろけてしまいそうだった。ページをめくる音が羽ばたきの音に聞こえて、鼓膜が被食の予感に悲鳴を上げた。猛禽たちと目があうたびに、恐怖に押しつぶされた心臓が最後の抵抗をするかのように心拍数を上げて、こめかみがびくびくと疼いた。脇の下にはひやりとした汗が染みだした。全身に鳥肌が広がる粟立ちを感じて、僕という生き物が身ぐるみはがされていることに気づいた。

僕は苦しみを悟られないように気を付けながら、「上手だね、鳥が好きなの？」僕の声はそれでも甘かった。

「鳥は好きよ、特に、彼らのような、陸に住む大きな鳥たちが好きなの」彼女の声はかすれて空気を削った。「なんなの、その顔」

「いや、腐ったにおいがした気がしてね」

「それはヒトのにおいだわ」

「どうしてみんな腐っているの？」

「だってヒトは腐っているから」

彼女はさも当然のことだと言わんばかりに僕を見下した。その眼光はちょうどノートに生きる猛禽に似ていた。

「どうしてヒトばかり、食べているのかな」

「私が食べてほしいなと思ったから」

「それはどうして？」

「鳥は美しい。その身体は飛ぶことを前提につくられている。飛ぶことは美しい」

彼女は僕の目を見据えながら語り始めた。僕は思わず目をそらして、身体が腐り始めていないか確かめてしまった。

「地上に足をつけているものたちには到底かなわない高みに居て、それから地上に足をつけているものたちを狩る。彼らは頂点にいる」

「それは美しい？」

「そう。頂点にいることは美しい。強さと言ってもいい。何者も触れることすらかなわない.....強さ

は美しさへつながる。上昇気流をつかんで帆翔するワシの美しさ。音もなく羽ばたいて夜の暗闇から獲物を狩るフクロウの美しさ。腐って穢れた死骸を食べて地上を祓うコンドルの美しさ。彼らはみな気高くて尊いの。腐ったヒトはこの世で最も美しいものたちの餌となることで救われる。祓われるの」

かすれた声は、しかしよどみがなかった。僕は彼女のことばを聞きながら、ノートに目を戻していた。はぐっていくと、いわゆる猛禽ばかりでなく、カラスもいることに気がついた。

「カラスも好き？」

「好き。彼らも屍肉を食べる鳥。コンドルやハゲワシと同じ、スカベンジャー。そして鳥類のなかでもっとも賢い。それに、あの黒い羽は綺麗。あれだけ美しいのに、鳴き声はどこか間抜けなところも、歪な美しさがある」

「君は」

僕はノートを閉じた。腐臭が止み、僕の眉根から力が抜けた。

「美しいことが好きなんだね」

「少し違うけれど、でも大筋では合っている」

僕はノートを彼女に返した。彼女はノートを受け取ると、一番新しいページを開いて続きを描き始めた。ページが再び開かれたからか、また腐臭があたりに漂い始めた。

「美しい、って、どういうことだろう」

僕は尋ねた。僕にはその感覚がわからなかった。美しい、なんて、どこにでもありふれていることば。それを聞いた彼女は顔を上げ、また猛禽の目で僕を見据えた。さっきまでより強い目……殺意に似ている。

「わからなかったの？」

僕は押し黙ってしまった。彼女の眼光が、あまりにも僕を鋭く軽蔑していたからだ。彼女のことばが、フクロウの爪となって僕の喉に食い込んでしまった。猛禽はその握力で獲物を絞め殺す。僕は哀れなネズミのように窒息した。

「なら、あなたには、一生、わからない」

彼女が視線を外した。急に解放された喉が空気を吸い込み、ひゅ、と音がした。胸いっぱい腐臭が入り込み、僕の隅々まで死が染み込んだ。

「……」

僕は涙目になりながら、彼女を見つめた。彼女は僕に一瞥もくれずに、一心不乱にノートに描き殴り続けていた。一本の透明なシャープペンシルを握りしめて、彼女はまさに獲物めがけて急降下しつつあった。翼を折り畳み、真っ逆さまに加速していく。迷いなくよどみなく、彼女はその爪を開く――。

僕はただ、それを見ているだけだった。見続けた。

日は暮れつつあって、西は赤く残光して、あとはもう薄い群青が包みつつあった。薄暗い教室……空気は静かに夜に身を包み始めていた。

猛禽と化しているといえど、彼女にも理性というものは残っているらしかった。昇降口が施錠され

る午後六時半の五分前、それを告げる時報が鳴り、彼女は、最後の猛禽——腐ったヒトを圧倒的な握力で掴みながら巣へと帰るワシだった——を描き切ると、顔を上げた。そしてノートを閉じて、シャープペンシルを筆箱に投げ入れ、帰る支度をし始めた。そこで、ようやく彼女は僕がまだ隣にいることに気が付いた。僕をちらりと見て、

「まだいたの」すぐに目をそらした。

「うん。わかりたくて」

僕は、彼女が立ち上がるのと同時に、セカンドバッグを肩にかけて立ち上がった。

「わからないよ、あなたには」

その声はまたしても猛禽の爪だった。しかし、僕は首を絞められてもかまわない、と思った。

「いつか、わかる」

「どうしてそう思うの」

彼女が教室から出ていくのを追いかけてながら、

「ヤトウさんの絵から、何かを、感じたから」

僕は彼女の横に追いついたけれど、彼女は僕を見ないで歩き続けた。もっとも、彼女に今もう一度見据えられたら、僕は今度こそ餌食になってしまっていただろうから、少しありがたかった。

「何か」

「そう、何か。氷と熱のような。でも、何なのかは、わからなかったんだ」

昇降口にたどり着き、彼女は自分の下駄箱から靴を取り出す。僕もそれに倣う。

「それを感じたとき、僕は苦しかった。息切れした。殺されるかと思った。だから最初、それは恐怖だと思った。でもひよっとしたら、その何かが、美しさなのかもしれない。でも、どちらにしても確証が持てない」

「いつまでも私のことを付け回していれば、その確証ってモノが手に入るとでも思っているの。その、キョーフってやつなんじゃないの、どうせ」

彼女は上履きから履き替えて、足早に昇降口を出る。僕は追いつがる。

「君を付け回すんじゃない。君の絵を付け回すんだ。現実に生きている鳥のことだって、観察しなければ、その生態はわからないだろう。僕は君のノートに生きる鳥たちの生態を観察する。僕はその餌食になっているヒトたちの腐臭を観測する。そうやって、僕は君が生み出す鳥たちについて知る。それはきっと、君の言う美しさってやつを知るための、一つの方法だと思う。僕は美しさが知りたい。君の言う美しさが」

彼女が自転車置き場まで歩いていく間、僕は話しながら追いかけた。たしかに、これじゃまるで彼女を付け回すストーカーだった。彼女の言うとおりで。腐って、餌食になって然るべきヒトの仲間。彼女は鞆をカゴに放り込むと、ためいきをついて、ゆっくりと僕を振り返った。僕は死を覚悟した。けれど、彼女の目は、迷いのない、獲物を見つけた猛禽のそれではなかった。彼女は、静かに、黙って僕を見つめた。殺意はそこにはない。鋭利な狩猟者だと思っていたけれど、今の彼女はまるで怯えた雛のようだった。僕は彼女のそんな顔を初めて見た。唐突にそんな表情をされたので、戸惑って僕も黙ってしまった。

「.....変なひと」

彼女はしばらく黙っていたあと、ぽつりと、そんなことばを落とした。そしてすぐに自転車のスタ

ンドを蹴飛ばして、逃げるように立ちこぎで行ってしまった。僕は、あとに残されたことばを、ゆっくりと拾い上げて、胸ポケットにしまった。それはとても冷たかった。

次の日も、またその次の日も、僕はずっと彼女を眺めていた。彼女は、僕と話したことなんてまるで覚えていないようで、毎朝、自分の席につくなり、ノートを取り出して、小さく伸びをした後に、がりがりとして描き始める。僕はじっとそれを見つめていた。ホームルームが始まっても、彼女はいつこうにノートから離れようとしな。一限が始まって、学級委員が「起立」と号令をかけても、彼女は座って描き続けている。昼休みになると、小さなおにぎりを一つ片手に、もぐもぐやりながらやっぱり描き続けていた。ノートのページはどんどんめくられて、白紙だったページには鳥の羽ばたきが満ちていった。鳥たちが増えていくのと同時に、その餌食になっているヒトも増えていった。髪が生えていたりいかなかったり、体型が少し違っていたり、彼女なりにヒトにも区別をつけて描いているようだったけれど、どれもこれも腐っているし恐怖におびえた被食者の表情ばかり浮かべていたので、誰が誰であっても関係ないように思えた。

僕は彼女のほうから漂ってくる腐臭に慣れてしまったようで、初めてのときは思わず顔をしかめてしまったのに、今は少なくとも顔をしかめるほど鼻につくことはなくなっていた。嗅覚がおかしくなってしまったのか.....でも相変わらず鳥たちから感じる恐怖は僕の皮膚を粟立たせていたし、相変わらずそれを鬼気迫る表情で作り続ける彼女の形相は僕を怯えさせた。僕はふと気づいたような気がした。——彼女は僕をいつでも仕留められる——そんな妄想をしてしまうと、上空から僕が食べごろに腐っていくのを見下ろしているだけなのではないか、そんなことまで考えてしまって、恐ろしかった。けれど彼女が僕を食べるのなら、その鋭い爪で僕の喉笛をかき切って、その嘴で僕の腐った肉をついばむのなら、その先に、美しさ、が見えるかもしれない。僕は恐怖と期待を両脇に抱えて、彼女を一日眺めているのが日課になっていた。

そして、ある日の放課後。

「ヤトウさん」

僕は話しかけた。久しぶりに話しかけてみた声は、やっぱり砂糖を煮詰めたみたいに甘かった。

「なあに」

僕のほうを見ないで、彼女は応えた。手は動かさずじまだった。

「君は、家でも、そうやってずっと鳥たちを描いているの？」

「.....うん」

彼女は僕の問いに、しばらく逡巡したあと、一言だけ答えた。

「家だと、ノートより大きなものに描いたりしているのかな」

「.....何が言いたいの」

彼女は描く手を止めて、ペンを置いた。

「あの日から、ずっと、君と君の絵を見てきたけれど、やっぱりわからないかもしれない。それは、もしかしたら、学校ではノートにしか描けないから、その分だけ、美しさもノートの大きさに縮んでしまっているのかもしれない。そう思ったんだ」

僕はことばを選んでいるつもりになっていた。なるべく砂糖まみれにならないように……。

「それで？」

彼女はぎろりと僕を睨みつけた。猛禽の目だ。この目で見据えられたとき、僕という生き物はなんてちっぽけで弱いんだろう……。ヒトは醜い。

「だから、君の家に行きたい。君がもっと大きく翼を広げる瞬間を、僕は見たい」

きっと彼女には、僕のことばが水飴でべとべとになっているのが見えたことだろう。そして、そのどろっとしたことばが、自分の耳に侵入して、鼓膜を汚すのを感じただろう。

「……べつにいいけど」

しかし、彼女の目が瞬膜を閉じて、半透明に濁った。少しだけその殺意が和らいだ。

「ありがとう」

「でも、ここで描いてから帰るからね」

「うん。待ってる」

彼女は僕を、あの怯えた雛のような顔でしばらく見つめたあと、ノートに顔を戻した。すぐに瞬膜が開いて、眼光が鋭く研ぎ澄まされていった。僕はその横顔とノートとを交互に見ながら、帰る時間が来るのを待った。

「……ここ」

彼女がある高層マンションの駐輪場で自転車を止めた。僕もその隣に自転車を止めた。何階建てかわからない……とても高かったけれど、新しくはない。この町のような田舎によくある、ぼつんと一軒だけやたら目立つ、そういうマンション。

「すごいところに住んでいるんだね」

「なにがすごいの」

「高さが」

「……まあ、それはそうかも」

曖昧な返事をした彼女は自転車を鍵をかけると、鞆を担いでマンションの玄関へ入って行った。僕も後を追いかけた。いくつも郵便受けが並んでいて、その中から「302 矢藤」という名札が見ついたものが目に入った。階段を上る彼女についていきながら、訊いてみる。

「三階なの？」

「なんで知ってるの」

「郵便受け、ちらっと見たら、名前、たまたま見つけたから」

「気持ち悪い」

言わなければよかった、と思いながら、黙って彼女の後ろをついていった。僕の目の前で、白いソックスに包まれた彼女の細い脛と、肌色の膝の裏がかわりばんこに動いていた。

三〇二号室の前に彼女が立ち止まった。鞆をごそごそやると、鍵を取り出した。なんだか僕は緊張し始めていたけれど、彼女は知らぬ顔で鍵を差し込んで、ドアノブを捻った。そしてドアを開けた。途端に、強烈な腐臭が、ぶわ、と僕に吹き付けた。僕は思わず手を口元にやった。

「……どうぞ」



彼女は先に入ると、そんなことを言った。らしからぬ、と思いながらも、僕は一つ会釈をして、玄関に一步踏み込んだ。腐臭が僕の全身を取り巻いた。

彼女は僕を自分の部屋の前まで案内してくれた。腐臭の発生源は間違いなくこの部屋だ。そうわかるほど、戸の隙間から漏れてくる臭いが強かった。

「汚いけど」

少しだけためらって、彼女は引き戸を開けた。途端に、目に沁みて涙が出そうになるほどの、黒い臭いの空気がどっと噴き出してきた。彼女は何事もなかったかのように部屋に入って行った。僕もゆっくりと足を動かして、彼女についていった。

一面の黒だった。部屋中にびっしりと貼られた紙に、これでもかと大量の鳥たちが描かれていた。ワシ、フクロウ、コンドル、カラス.....数えきれない。この部屋の数少ない家具であるベッドと机にすら紙が貼りつけられて、鳥が目に入らない場所がない。甲高い鳴き声で、無数のはばたきで、獲物を食いちぎる音で、部屋にこもった空気が身を震わせているようだった。もちろん腐ったヒトも同様に、部屋をびっしりと覆い尽くしていた。壁も床も.....僕は天井に目を向けた。天井には、一羽の巨大なワシが、その大きな翼を広げていた。僕にはそれがこの部屋の王であるように思えた。幾羽もの猛禽たちの頂点.....最も高い上空から、彼らを統べる。上空から狙われている、その威圧感が重く僕にのしかかってきた。しかし――

「.....どう？ わかりそう？」

彼女がそんなことを尋ねてきた。やはり怯えた雛のようだ.....何に怯えているのか。僕は天井を舞うワシから目が離せなかった。彼女は言っていた。頂点にいることは美しいと。何者も触れることのかなわない高みにいることは美しいと。しかし、この天井を帆翔するワシは、はたして何者も触れることのかなわない高みを飛んでいるのか。僕はつま先立ちして、天井に手を伸ばす。ワシのどす黒い翼の付け根に、指先が触れた。そのとき、僕は思わずつぶやいた。

「かご.....」

「かご？」

彼女が、何を言っているのかわからない、とでも言うかのように聞き返した。僕の中で、確信が結晶し始めていた。

「かごだ。かごの中の鳥だ。君は.....君は、こんなものを美しいと言うのか」

僕は手を下ろし、彼女を見下ろした。彼女は怯えた雛のような表情で僕を見ている.....僕に怯えている。

「君は、本当にその目で猛禽の狩りを見たことがあるのか。全部君の妄想だろう。これらには実体がない。.....亡霊。そして彼らは、地上の浄化なんてみじめなことを、きっと考えていない。彼らはただ生きるために狩り、食う。ただそれだけの純粹さに、君は自分の妄想をべっとり塗り付けて汚している。こんな狭い部屋に、これだけの数の鳥たちを閉じ込めて.....ここにいる鳥たちはみんなかごの中だ。遥かな高みになど居ない。手が届くからだ。腐ったヒトに生み出されて、腐ったヒトにかごに押し込まれて、どいつもこいつも腐った目をしている」

僕はまくしたてた。糖分の含まれていない、かさかさした砂のようなことばだった。彼女は小刻みに震えていた。

「君の絵を見たとき、僕は氷と熱を感じた。氷の冷たさは、厳粛な弱肉強食がもたらすものだとばか

り思っていた。でも違う。君の妄想で描かれた弱肉強食だ、これは妄想だ。この冷たさは、君自身ももたらすものだ。君が氷のかごで、熱を包み込んでしまっている。熱の出処はまだわからない.....けれど、きっとそれこそが美しさというやつだ。僕の精神は焼き尽くされなければならない。それなのに、君が一度僕を凍らせるから、融けるだけなんだ」

彼女は自分の両肩を握りしめるように腕を組んでいた。まるで身体のふるえを無理に押しとどめようとしているようだったけれど、その痙攣はおかまいなしに彼女の脚から力を奪った。彼女はぺたりと座り込んでしまった。まだ飛ぶには早い雛だからだ。

「.....でも、絵を描く、ということは、自分の見たものしか描いてはいけない、ということじゃない」と小さな抵抗。雛の嘴はまだ柔らかい。

「そうだね。君の絵は美しいよ。けれど君が美しいと思っているものは君の絵ではないだろう。君は、頂点にいたことが美しいと言っていた。猛禽が美しいと言っていた。君の絵が美しいわけではないというのが君の理解のはずだ。しかし君はまがいものを生み出してはかごに閉じ込めている」

「まがいもの」

「そう。まがいものさ。大ききなんて関係なかった.....この小さなかごの中で王様気取りの大きなワシが一匹。何を僕は期待していたんだ.....」

僕の砂のようなことばが、彼女の鼓膜を風化させているようだった。僕のことばは、彼女の脳みそをやすりがけするかのよう削り、起伏のないつるりとした球体にしてしまう。

「君は.....凍らせるべきじゃないのか。あるいは、燃やし尽くすべきじゃないのか。両方だなんて、ゼロだ。不毛だ。君は不毛だよ。.....そして僕も不毛だった」

僕は踵を返した。異臭のする部屋を出て、靴を履いた。彼女は追いかけてはこないようだった。

「さようなら」

僕は小さく、彼女には聞こえないかもしれないことばを落として、それからドアを開けた。

彼女は学校に現れなくなった。当然だと思った。彼女はもう僕に見られたくないだろう。何日も何日も、僕の隣の席は机と椅子だけだった。僕は、彼女に会うことは二度とないのかもしれないな、と思いながら、からっぽの隣を見ながら日々を過ごしていた。

けれど以外とあっけなくその時は訪れた。僕が彼女の部屋を出てからひと月も経たないくらいのうちに、彼女はふらりと登校してきたのだった。いくぶんやつれて、目の下には濃い隈ができていた。教室に入ってきた彼女を見て、僕は驚いてその動きを見つめていたけれど、彼女は何を僕に言うでもなく、ただ淡々と、以前のように席に座った。またノートを引っ張り出してがりがりやり始めるのかな、と見ていたけれど、ノートは出さずに、ただ、机の木目に視線を這わせているようだった。担任の教師が入ってきて、委員長が号令をかけても、昼休みになっても、彼女はずっと座り続け、ただただ、机に目で穴を開けていた。

そうして放課後がきて。「久しぶり」僕は話しかけた。水飴が乾いて粉になって、砂糖になってしまった、そんな声だった気がする。

「きて」

彼女は僕のあいさつには返事をしないで、ぴしゃり、というより、ぼつり、あるいは、そのどちらでもあるような調子で言った。文字にすればたった二つのそのことばは、しかし僕の耳朶を熱して、鼓膜を確かに揺らして、耳小骨をきりきりと鳴らして、蝸牛の中を攪拌して、脳みそをびくびくと痙攣させた。

「うん」

僕が唾を飲み込むように短く返事をすると、彼女は椅子を蹴飛ばしながら立ち上がった。そして、僕の手を握って、教室を飛び出した。彼女がこんなにも足が速くて握力があるなんて知らなかった——何かに取りつかれていて、その何かが彼女にそういう力を与えている、そんな錯覚すら起こすほど、彼女は強靱に僕を引っ張り走った。昇降口までくると、靴を履き始めたので、僕も靴を履いた、また手をつかんで、自転車置き場へ走り、それから僕の手を放して、自転車に乗って、またすごい速さで自転車を走らせたので、僕も息を切らしながら、彼女を追いかけ自転車を漕いだ。どこへ向かうのか、その道筋は、確かに身に覚えがあった。一度通ったことのある道筋……彼女と通ったことのある道筋。

やがて彼女と僕は、あの高層マンションにたどり着いた。彼女の部屋がある、あのマンションだ。彼女は自転車を止めて降りると、じつ、と僕を見据えた。

「どうしたの」

僕は彼女のそばに自転車を止めながら、そう尋ねた。彼女は黙って、ただ僕を見るだけだ。その表情は猛禽でも雛でもなかった。そして、その表情は猛禽でもあり雛でもあった。僕には何がなんだかわからなかった。けれど、決意らしき硬化した意志だけは僕の脳髄に突き刺さっていたような気がする。

僕が自転車から降りると、彼女はすぐに僕の手を取った。引っ張って玄関に入ると、この間は階段に向かったけれど、今度はエレベーターに向かった。彼女は人差し指が折ろうとするような勢いで、ボタンを押した。エレベーターが来るのを待つ間、彼女は肩で息をしながら、僕の右手に繋いだ左手を固く握りしめていた。

エレベーターのベルが間抜けな音を立てて、ドアが開いた。彼女は僕を投げ込むようにエレベーターに乗せると、自分も中に入って、最上階のボタンを押した。自分の部屋に帰るのではないらしい。了解したエレベーターが小さく揺れて、僕と彼女を運び始めた。血液が下に落ちていく感覚。胸骨の裏側に無理やり毛布を詰め込まれたような違和感。彼女が相変わらず僕の右手を握りしめている、その強弱の感覚——。

しばらくして、エレベーターがまた間抜けなベルを鳴らして、ドアが開く。彼女は僕を引っ張って出ると、外廊下を早足で歩いていく。誰か最上階に知り合いの部屋でもあるのか……けれど彼女はどの扉の前でも立ち止まらなかった。廊下の突き当たりにはしごがあった。天井に空いた穴から、その爪先だけをちらりと見せているはしごは、彼女はともかく僕ですら届きそうになかった。彼女は僕の手をいったん放すと、廊下の腰壁によじ登って、そこから跳んではしごの最初の一段目を掴んだ。そこからそのはしごを上り始めた。彼女は制服のスカートをはいていたので、僕は思わずうつむいて、彼女の後に続いた。ペンキが剥げかかって、錆びた中身を晒す段を握り、彼女に蹴られないようにゆっくりと上る。しばらく上ると、蝶番の軋む音がして、視界が明るくなった。はしごを上りきると、マンションの屋上に出た。僕より先に上がっていた彼女が、貯水タンクの前で仁王立ちして僕を見つ

めていた。

「きて」

彼女はまたそのことばだけを僕に投げつけた。僕は彼女に駆け寄った。

「風、強いね」

「手伝ってほしいの」

彼女は僕の言うことにはまったく興味を持っていないようだった。屋上の手すりに、一羽のカラスが留まっていて、首をかしげながらこっちを見ていた。

「何を」

「私、これから死ぬんだけど、その前に、両手をきつく縛ってほしい。死んでからだと、大変かもしれないから」

彼女は言った。

「何を言って」

「それから、たくさん睡眠薬を買ってきたの。縛り終わったら、これを、私に飲ませてほしい。全部」

彼女は足元の鞆をごそごと探ると、一本の細長いベルトと、白いビニール袋を取り出した。ビニール袋を透かして、いくつもの薬の箱と、水の入ったペットボトルが見えた。それにもう一つ、出刃包丁を取り出した。

「私が眠ったら、今度は私の心臓をこれで突き刺して」

彼女はとても事務的に言った。その口調があまりに淡々としすぎていて、あたりの風は流れるのをやめて沈んでしまった。

「心臓を突き刺して私が死んだら、身体のあちこちに切り込みを入れてほしいの。なるべく深く大きく」

「何のために」

「カラスが食べやすいように」

僕はくらくらした。そして理解した。

「君は鳥そのものになるんだね」

「そう。あなたに言われて、私はヒトであることを思い出した。腐っていることを思い出したの。あなたが美しさかもしれないと思い込んでいる、熱と氷のことは、よくわからなかったけど。でも、なんとなくは、わかった。私はヒトか鳥、どちらかとして生きなければならない。私は鳥として生きたい。その願望が、少しずつ漏れて、あの絵たちになった。腐ったヒトの私から染み出したものなのだから、それは腐っているに決まっている。猛禽たち自身ではなくて、腐ったヒトまでもいっしょに描いていたのは、それ自身が私であったことの出出.....浄化願望の漏出.....あの絵たちは、まだ美しさとして完成していない。だからあなたは不毛だと言った。絵が未完成なのは、願望の結実の過程の瞬間を切り取ったものだから。私の願望は、あの絵たちの先にある」

突然、少しの風が吹いて、彼女の髪とスカートをふわりとなびかせた。カラスが一声、高く鳴いた。

「あなたは気づかせてくれた」

彼女が微笑んだ。とても穏やかな微笑みだった。あまりにも穏やかだったから、彼女はすでに超越

しているように思えた。彼女は、確かに何者も触れることのできなないところに居た。きっと、こんな微笑みを浮かべることができるのは、地球上に彼女しかいない。神様だってこんな微笑はできないに違いない。

「私を、手伝ってくれる？」

僕はうなずいた。そばへ寄ると、彼女はぺたんと女座りして、両手首をくつつけて、上へ挙げた。空へ祈りを捧げているような、神聖な仕草だった。僕は彼女のベルトを使って、その手首を縛りあげて、貯水タンクの脚にくくりつけた。それから、ひざまずいて、錠剤の入った小ビンとペットボトルを取り出して、動けない彼女の口に、一錠ずつ押し込み、飲ませた。儀式を執り行っているかのように厳かな空気が、僕と彼女の周りで凝結していた。冷たく潤んだ空気をかきわけて、僕は彼女の唇へ手を伸ばす。一錠を押し込むたびに、水を飲ませてやる。少しでもこぼれた水が、彼女の唇をつややかに湿らせて、白く細い首筋をゆるやかに伝って流れた。

やがて彼女は、僕が口に水を注ぎこんでも飲みこまなくなった。深い眠りについたようだった。僕は出刃包丁を右手に取った。刃は水平に倒して、左手で彼女の胸を探り、胸骨を探し当てた。その少し右側に切っ先をあてがった。柄をしっかりと握り、左手の平を柄に当てた。僕は手に力をこめ、ぐっと包丁を突き刺した。ブツツと皮を破り、肉が切れていく柔らかい手ごたえの後、刃が肋骨に当たったのか、固いものに擦れる感触が走った。かまわず僕は包丁を押し込んだ。刃が全て彼女の胸に沈み込むまでには相当な力が必要だったし、いつの間にやら染み出していた手汗のせいで滑り、思いのほか苦労した。一番深いところまで刺すと、僕は手を放した。うまく心臓を貫けたのかは定かではなかったけれど、真っ赤な血が真っ白なセーラー服にみるみるうちに滲み広がった。スカーフは血を吸って重く垂れさがり、先端から血のしずくを滴らせていた。血はあっという間にスカートをもどす黒く染めた。彼女の白い脚は赤い枝で彩られた。スカートの下から血があふれて、コンクリートタイルの割れ目に沿って広がっていった。カラスがまた甲高い声で一つ、鳴いた。

僕は呆然とそれを眺めていた。これから鳥になる彼女の姿は、あの絵の、餌食にされる腐ったヒトではなかった。磔にされてなまめかしく曲線を描く腕、白く血の気を失った冷たい顔、真っ赤に染まったセーラー服.....鮮烈だった。僕の瞳孔はきつと開き切っていただろう。しっかりとそれらを捉えるために開いた瞳孔が、発せられる冷気をすべて吸い込み、開いたまま凍ってしまったのだ。眼球の水分は全て凍結して、視線が動かなくなった。凍結は眼球から視神経を通して脳髄にまで及んだ。脳みそから霜柱が生えて頭蓋骨を持ち上げようとしていた。ひざまずいたまま、僕の全身は凍り付いてしまったようだった。

どれくらいそうしていたか、永遠に等しい時間が流れたあと、僕は彼女に切り込みを入れた。血はあまり出なかった。腕に幾筋か、頬に幾筋か、首に幾筋か、セーラー服も適当に割いてはだけさせ、胸元、腹に幾筋か、裏に回って背中に幾筋か、スカートをまくりあげ、太ももに幾筋か、ふくらはぎに幾筋か。結構な重労働だった。僕は荘厳な宗教彫刻に無粋な落書きをしているような心持になった。そうやって彼女の全身に切り込みを入れ終わったとき、突然、さっきからずっと見ていた一羽のカラスが、何度も何度も甲高い声でけたたましく鳴いた。僕は思わずそっちを見た。すると、赤いぼんやりしたかたまりの太陽を背に、いくつもの小さな影が見えた。十や二十ではきかない、ざっと見ても百はあるかもしれない。どれも鳥の羽ばたく影.....屋上のカラスの鳴き声に應えるように、影たち

からまた鳴き声が聞こえてくる。どうやらあの無数の影もカラスらしい。あちこちからカラスが集まってくる。斥候の一匹の鳴き声を目印に、この屋上へ向かって。彼女のために。

僕はその場からあとずさった。やってきたカラスの大群は、すぐに彼女に群がった。羽のこすれる音と鳴き声で、屋上は満ちた。うごめくカラスのかたまり.....カラスたちの翼や身体の間隙から、時折、少しずつ崩壊する彼女の肉体が見え隠れした。カラスたちは食べやすい柔らかい部分から狙う.....眼球が真っ先に食われ、赤黒くぽっかりとした穴が開いているのがちらりとだけ見えた。その瞬間、僕の脳みその皺が縫い合わされていき、背骨がげげげしたモールに変わって、心臓から埃を煮詰めたジャムが血管に詰め込まれて、全身の感覚がぼんやりと輪郭を失った。僕の皮膚は確かに皮膚でなくなり、ビニールのような無機質でつるんとした袋と化した。塵芥で満たされた僕の身体は、さながらごみを大量に詰め込んだごみ袋だった。ごみの詰め込まれた袋は、そのあと、焼却炉で燃焼されるのみだ。僕は焼却されたい。彼女は、美しい。確かに美しかった。

僕はカラスたちに祝福される彼女を背に、覚束ない足取りではしごへと向かった。

ごみ袋になってしまったまま、永遠とも思える時間を過ごした僕は、ふとあの場所へ戻ってきてしまった。あの日から少しずつ僕の袋の中身は乾燥して、ぼうっと温度を上げていた。天をつらぬく螺旋階段をゆっくりと上っていくように、徐々に強くなっていく生理的な乾燥と熱病に耐えかねて、僕はここを訪れざるを得なかった。そのとき僕は涙を流した。再び「美しい」という感情が、僕の輪郭をぼやけさせたからだった。今、僕は彼女に再会している。

食べ残された彼女の骨は白く、ところどころが黄ばんでいた。肉が食われ軟骨が風化して無くなってしまったせい、その骨格は崩れてしまって、頭蓋骨は膝のあたりに転がっていた。肋骨は二本ほどが背骨にくっついて残っていたけれど、あとはみんな脱落して、脚の周りにぼらぼらと落ちていた。肩は外れて、腕はすっかり薄汚れてしまったあのベルトにひっかかって宙ぶらりんになっていた。

何者も触れることのできなない高みへと飛び去って行った彼女が、そのあとに残していった抜け殻。彼女は、ほんとうに僕の手の届かない場所へ、遥かな高みへ.....自らの願いを結実させた。その証明である汚れた美しい白.....僕の目の中に飛び込んできたかと思うと、すぐさま僕に着火した。あのときからずっと、ごみ袋になっていた僕は、簡単に燃え、炎はあっという間に全身に広がった。皮は不燃物なのか燃えずに、しかし内で逆巻く炎でびりびりと震動していた。熱は外に逃げられずに、指先と足先から心臓へ、そして脳みそへ流れ渦巻く。そこで炎は逃げ場を発見する.....目。内側からくる炎の光は、網膜を真っ白に照らし、硝子体を沸騰させた。涙腺が焦熱に悶え、ぶるぶると縮み上がりながら、鎮火せんとばかりに大量の涙を分泌した。ごうごうと逆巻く炎の吠える声が、喉を通して嗚咽となって汚らしく漏れた。

僕は耐え切れなくなった.....自分を支え切れなくなって、がっくりと膝をついた。皮袋だけになって、中身は燃え盛っているのだから、立っていられるはずもなかった。僕はそのまま、彼女の足元に倒れ込んだ。胎児のように丸まって、詰まりかけのホースからしかたなく水が飛び出そうとしているような音を立てながら、痙攣し、涙を流した。僕はひとしきり泣いた。そして、震えながら彼女を頭蓋骨に目をやった。ぽっかりと空洞になった眼窩が僕を見つめていた.....すると、その頭蓋骨の向こうで、一羽のカラスが羽ばたいてきて、柵に留まったのが見えた。僕は思わずぐしゃぐしゃになっ

た顔で微笑んで、

「わかったよ」

カラスは一声、甲高く鳴いた。

あ　　と　　が　　き

どうも。鳥葬というのは穢れなき感じと見た目のグロテスクさとが同居していて面白いですよね。そうでもないですかね。

○執筆中お世話になった楽曲たち

「Kathleen」

「Pacifier」

「Cocoon」 Catfish and the bottlemen

「Ante」 Klan Aileen

「Sleep Sound」 Jamie xx

ここまでYoutubeで聴いてました。ちゃんとCD欲しいです。

『ペーパークラフト』 OGRE YOU ASSHOLE

『Burning Tree』 GRAPEVINE

『MAN NOWEAR』 NOWERAMAN

『SONGS』 踊ってばかりの国

# プロヴィデンスの瞳 Eye Of Providence (高天美月)

## プロヴィデンスの瞳 Eye Of Providence

午後二時の陽射しがカーテンをすり抜けて、テキストとノートを白く染めている。目映い反射が、それ以上視線を下げることを拒む。眼を瞑っても、光は瞼を浸透してくる。その波紋が白でなく赤いのは、血が熱せられているせいだろうか。「掌を太陽に」はあながち嘘ではない、ということか。

仕方なく視線を上げるけれど、どうも黒板を見られない。いや、視界には入っているけれど、何となく、ピントが合わないというか、うすぼんやりとしていて、ただの背景としか映らない。まあ、そんなことを言ったら、すべてが背景にすぎないのだけれど.....。

そう.....、僕の眼は、彼女しか視ていない。

汗ばんだ項は白く、

首筋を這う濡れた髪は黒く、

うっすらと透けた下着はピンク。

僕はそのとき、初めて、彼女のことを、

「綺麗だ」

と思った。

本当に、「不意に」という感じだ。そんなことに気づいた僕に、一番驚いているくらい。自分のことなのに、まるで他人事。何しろ、「僕はそんなものを見ていたのか」と恥ずかしく思ったほどだ。自分には、こんな下心があったのか。意外だ。本当だろうか、ちょっと、信じられない。

だから、きっと、ほんの少しの間、僕は僕じゃなかった、どこかにトリップしていた、とそんな風に思うのだ。そう考えた方が、まだ安心できる。あのとき、僕は僕から遊離していた。そして、抜け殻の僕を見下ろしていた.....。

蝉の鳴き声が僕の鼓膜を震わせていることに、たった今思い至ったことも.....、その傍証といえる。

それに、いつの間にか彼女がいなくなっていることにも、ようやく気がついた。

僕はいったい.....、どうしたというのだろうか？ もしかして、全部、夢だったのだろうか？ それならそれで構わないけれど、でも.....、やっぱり、腑に落ちない。何だろう、この気持ちは.....？

彼女のごとはよく知らない。いや、「よく」どころか、何も知らないに等しい。話したこともないし、顔も見たことがないし、それどころか名前だって知らないのだ。それなのに、僕は今、彼女に魅かれている.....、そんな気がするのだ。

その理由を知ろうとする行為は、まるで、過ぎ去ってゆく風を見て、「この風はどこから吹いたのか？」と考えるのに似ている。それを知るためには、とりあえず風上へ進むしかないのだけれど、空気抵抗があるし、だいたい、風の生まれる場所なんて、最初からないのだ。その程度の予想はつく。だから、追いかけるのも馬鹿馬鹿しい。夢を思い出そうとしても、なかなか思い出せないのと同じ。要するに、考えるだけ無駄、ということ。

それでも.....、帰り道に彼女の後ろ姿を見つけたとき、ふと、

「尾けてみよう」

と思ったのには、僕自身驚いた。いや、順序としては、少し彼女の後を追ってから、不意にそう思



い至ったというわけで、このときも、僕は知らず、僕の軀を抜け出していたのだ。

しかし、こうして正気に戻った後もなお、彼女についていく自分が恐ろしかった。もしかしたら、まだ、僕は僕に戻っていないのかもしれない。上空と体内、視点が違うだけで、僕の軀を動かしているのは、やはり僕ではない、ということになるのか。

だとしたら.....、

僕とは、いったい、誰なのだろう？

それを考えることが、あるいは、彼女に魅かれる理由を知ることおぼろに等しいかもしれない.....、おぼろに、僕はそう思う。しかし、やはり、「そう思う僕」を見ている僕もいる。

どこまで遡っても.....、「僕」は無限に増えてゆくだけ。途方もなく、それは、悲しく、虚しく思えた。

だから、しばらくは彼女のことだけを見ていよう、そうすれば.....、今だけは、苦しくない。

風が吹き、彼女の長い黒髪が揺れる。歩を進める度にちらりと覗く項もやはり白く、ブラウスのそよめきが彼女の香かおりを靡なびかせる。僕はそれを意識して軀まに纏まとわせる。まるで彼女の吐息が僕の肌をなぞっているようで、軽い陶酔のような.....、ほろ酔いの心地に移ろう。

蝶のようでもあり、オレンジのようでもあり、あるいは写真のような香。

それは.....、彼女の「生」の香。

香水でもなく、石鹸でもなく、紛れもない、彼女自身の香。

つまり.....、今の僕は、彼女に抱擁なまされている、と言ってもいいようなものだ。

なんとという安心感だろう。自然と呼吸は風なぎ、心臓は微睡まどろみ、雲の上を歩いている感覚。それとも、僕自身けがが雲になってしまったのだろうか。風に流されるだけの.....。けれども、僕はどちらでも構わない。穢れた地上けがでなく、冬のように冷たく澄んだ空を、彼女と二人だけで漂えるのならば。

もしかして、僕が彼女に魅かれる理由というのなも.....、ここにあるのだろうか？

しかし、その問いには、僕は素直に頷くことはできない。

何故だろう？

僕は、彼女の後ろ姿をじっと見つめる。

白いブラウスの袖から伸びる腕.....。

手首はステムのように細くなめらかで、指先までも氷のように冷たく潤っている。

黒いミニスカートを纏った下半身.....。

腰はせせらぎのように緩やかにくびれ、脚は鞭のようにしなやかに地を弾はじく。

けれども、そのうちのどれかが、彼女の魅力だ、と言うこともできないし、すべてを兼ね備えているからこそ彼女なのだ、と言うこともできない。

何故だろう？

きっと、そう、彼女のことを、まるでジグソーパズルのように解体して、いったいどれが重要なパーツだろう、と考えるのに似ている。どのピースと隣り合うか、どうすれば綺麗に嵌まるか.....、その組み合わせが彼女を形作っているのだ、と考えるのと同じだ。そうしてできあがった絵を観てようやく、「なるほどこれが彼女なのだ」と判定することと同義だ。

しかし、そもそも、人間をピースに分解することなどできないし、二次元の絵に落とし込むこともできない。たとえ無理矢理裁断しても、ピースの組み合わせは一通りではないし、永久不変の組み合わせというわけでもない。額縁だつてない。どこまでも拡散し、常に不定。完成形などないのだ。そして、いったい、誰が彼女を組み立てるのだろうか？ 組み立てることができるのだろうか？

だから、「僕が彼女に魅かれる理由」を断定するなど、ナンセンスなこと。眼に見えないからこそ雰囲気と言うのだし、簡単に言葉にできるなら、それだけ浅い、ということでもある。強いて言うなら、理由がないのが理由、くらいのもんだろう。

結局は、わからない。けれども、知りたい。それでも、わからないままでいい。

.....そんな矛盾に身を委ねながら歩くうち、彼女は扉の切れ目を左に曲がった。

どうやらアパートに着いたみたいだ。僕は歩みを止め、一度通り過ぎ、歩道を渡り、すぐに引き返し、遠目に彼女の行動を見つめる。

彼女は階段を上ったのか、二階の廊下を歩いていた。夕陽でちょうど逆光になっていたが、真っ白なブラウスのお蔭か、影の中を歩く彼女の姿がはっきりと見えた。彼女は左手のドアを、一つ、二つ.....、と通り過ぎ、六つめのドアの前で歩みを止めた。彼女は白い手を伸ばしてドアノブを握る。

.....<sup>かたず</sup>僕は固唾を呑んだ。

そのとき。

風が止んだかもしれない。

汗が頬を伝ったかもしれない。

瞬きを忘れてしまったかもしれない。

もう、僕と彼女以外に、

誰もいなくなってしまったかもしれない。

そうってしまうほど.....、僕は、僕の眼は.....、彼女の一挙手一投足に釘づけになっていた。一瞬が一瞬のうちに過ぎることはなく、さしずめ軌跡を切り取られた矢のように、何もかもが.....、彼女のために、生きることさえすでに忘れて、無音の拍手を贈っていた。

すべては、彼女のために用意された、瞬間、もしくは、道具にすぎなかった、そして、それこそ天命であると信じて疑わなかった。たとえ彼女に背かれても、彼女に壊されたとしても.....、本望だと思われた。

僕もそのうちの一人だ。

そう、気づいたとき.....、

いつの間にか、僕は.....、僕自身が、僕の躰が、僕の皮膚が、砂のように融けて、中から、じわり、と何か<sup>し</sup>が滲み出す予感がした。

それとも、もう.....、遅いかもしれない。

とめどなく、滲み出してゆく.....、自分。

曖昧に.....、なってゆく。

ドアが閉まる音がした。

僕は、また夢を見ていたのだろうか。

僕の眼は、彼女がノブを捻<sup>ひね</sup>り、ドアを引き開け、躰を内に滑らせ、あたかも陽が沈むように、部屋に消えてゆく、その一部始終を、ずっと.....、視ていた。ドアが閉まる瞬間も、すべて、この眼は捉えていた。認識していた。それなのに、それと同時に、僕は、夢を重ねて見ていたというのか。いや、そもそも.....、夢とは何なのだろう？ 現実とは、何なのだろう？ 僕は、はたして、夢なのか、それとも、現実なのか.....？ 僕にはもう、その境界線がわからない。

しかし.....、いずれにしても、彼女の姿から、躰から、<sup>ひととき</sup>一刻も眼を離すことはなかった.....、それは確実なこと、そして.....、僕の躰が、すでに、彼女の部屋の目前に立っているということも、また確実なこと、つ

まり.....、現実なのである。

群青色のドア。

まるで、深く沈み、堆積し光も差さない海のように。きっと、重く厚く、けれども、触れれば、骨のように冷たいのではないだろうか、もしかして、この先には何も無いのではないかと、そう、部屋でも壁でもなく、何も無い.....、そんな予感さえ容易だ。

僕は、波打ち際の落書きのような気分で、そのドアを見つめている。

やがて、潮騒<sup>しおさい</sup>は僕の心臓と同期し、

ウミネコは声もなく頭上を飛び去る。

そして.....、飛沫<sup>しぶき</sup>が僕の頬を濡らしたとき、

僕は.....、右手を徐に伸ばした。

インターフォンではなく.....、波に揉まれる手紙の瓶詰のような、ドアノブに。

少しずつ.....、距離は縮まり、

かすかに、中指が触れた。

僕は、そのまま、瓶を掴みとった。

白波は僕の手を飲み、

幾多の泡が愛撫する。

冷たい絶頂が背筋を走る。

眼がこれ以上ないほどに見開かれる。

僕はそこで、再び正気に戻った。いつの間に、僕はまた、眠っていたのか。それとも、今まさに、眠っているのだろうか。それにしても、この汗は何だろう。海に潜ったようにびしょ濡れだ。呼吸が荒い。どれだけの間、潜っていたのだろうか。意識して、呼吸を整える。

僕は、剩え落書きにすぎないのに.....？

いや、違う、僕は、たった今、ほんのわずかだけれど.....、

彼女の景色を観た。

彼女が観ていた景色を観た。

あの瞬間、僕は、たしかに.....、

僕は、彼女だったのだ。

信じられない。

僕は、僕の観たものを信じられなかった。

僕自身を、信じられなかった。

右手を捻ると、

.....ドアが開いた。

その日からすでに一週間。

再び彼女と逢うことはなかった。なにしろ、家から一步も出ていないのだからそれも当然なのだが、仮に普段どおり大学に行ったとしても、彼女に逢うことはなかつただろう。これはもう、予測ではなく確信だ。

何故って.....、

「自分が自分に逢う」

なんておかしいではないか。

ドッペルゲンガーでもあるまいし。

自分はこの世に一人しかいないのだ。

窓際に佇む影が薄く拡散し、壁を屈折し天井を舐める。

背後からは月明かりだけが部屋を仄かに照らしている。

スポットライトと呼ぶには暗すぎるが、篝火と呼ぶには明るすぎる。まるで、ヴェールがそよ風にたなびくように、揺れながら、降り注ぐ淡い光。抱擁か、あるいは微笑みのように僕を包み込む。夜を嗅ぎ、光を肺に満たす。

そうか……、あの日の、眩しすぎる太陽にも似ているが、しかし……、あの日に比べて、なんて穏やかな光……。

二つの眼は、

ぼうっと鏡を見ていた。

けれども、

しっかりと認識していた。

眼の前には、

彼女が立っている。

長い黒髪が風に仄めき、

ブラウスが燐光のように月を映し、

スカートが湖のように夜を湛えている。

鏡の中に、

彼女が……、

私が、

立っている。

私は、私の顔を見る。

切れ長の眉が流星のように傾き、

鼻は鷹の捕食のようにすらりと伸びる。

視線を下げると、

ルージュの薄く香る唇が弧を描き、

影の落ちた喉は叢雲のように微動する。

右手を左胸に当てれば、

わずかにふくらんだ胸を透して、

水が滴るように規則的な鼓動が、

掌に伝う。

自然に漏れる吐息。

真夏だというのに、白く曇ったかもしれない。

私は、私の姿を見たことはないけれど、

初めて見る姿だけれど、

「これが自分の姿なのだ」

ということはわかった。

わかっていた。

季節が巡るように、私は、私のことを再び知っていた。

初めて見る私に、しかしどこか懐かしさを感じていた。

私は.....、視線を上げる。

すると、

私の眼と.....、

眼が合った。

鏡の中の私は.....、

私の瞳を見つめていた。

真夏にしては涼しい夜だ。森のように空気が澄み、音も風も雑踏もなく、あるいは生命すらあり得ない。

唯一は.....、私。

呼吸もそう、風の流れもそう、アスファルトを穿<sup>うが</sup>つヒールもそう、すべて私のものだ。私から生まれないものはなく、すべて私の中で死んでゆく。

わずかに指を振れば、彗星が夜空の眼を開き、けれども星々の輝きは、瞬きのように呆気ない。しかし、たとえ錆びつき、朽ちてゆくとしても、私の躰に残り続ける。川の流れのような刺<sup>しせい</sup>青となって、私をなぞり、そよめき、あたかも霧散したかのように、残り続ける。

星の色は、私のアクセサリィ。指輪の赤は、アンタレス。

夜のマントは翼にも等しく、血のように私から脈動する。

私は月を見上げて、「しい」と囁いた。彼女はずっと黙っていたけれど、そう、念のため、もしくは、自分に対して.....、かもしれない。誕生日に買ってもらった新しい玩具<sup>おもちゃ</sup>を壊さないよう、優しく扱う子供みたいに。

私は、自分の心に十字架のネックレスをかけてやる。すると、不思議に落ち着く自分が微笑ましい<sup>くるぶし</sup>。今、自分が歩いている道も、まるでイルカのようにさえ思える。踝を洗う海水は、涙のように純粹で、溜息のように冷たい。まるでガラスの海だ。

ああ.....、

なんて、

心地よい夜なのか。

「心地よい」

そう.....、まさに、その言葉がぴったりだ。

私の行く先は.....、すでに決まっている。

想わずとも漂い、いつか還る場所。

私の帰る場所。

波の生まれるところへ.....。

群青色の扉は、今は藍色に翳<sup>かげ</sup>り、ほとんど夜を呑み込んでいる。

ここまで来ると、波も静まり、ずいぶん遠くまで来たものだ.....、と思わせる。振り返ってみても、海は闇を孕<sup>はら</sup>み、砕けた月の光が、落ち葉のように舞い、沈んでゆくだけ。

波間に佇むのは、私と、眼の前の扉だけ。

そう、私は.....、再びここに戻ってきた。

そして.....、扉の向こうに、帰るのだ。

見ると、ドアノブはやはり、手紙の瓶詰のように光を反射し、わずかに揺られている。まるで、折りたたまれた隙間から、無数の文字が、私を見ているかのよう。彼らは、何を.....、期待しているの

だろう。

私は、

右手を伸ばして、

瓶を手を取った。

コルク栓を開け、

手紙を取り出す。

すると……、

やはり、

静かに扉が開かれた。

そして……、

逆光の中に、

私が現れた。

顔は見えないけれど、

髪を黒くさすらい、

ブラウスを白く霞ませ、

みなも  
水面のように透き通った、裸の足を浸して……、

私が立っている。

鏡の氷のように……、

とき  
刻が止まる。

やがて……、

私は、ゆっくりと右手を差し出した。

私は、その指先に軽く触れる。

口づけのように淡く、鱗粉が砂時計のように零れてゆく。

私は軀を翻し、遡る ともしび 灯火の中に身を投じた。

私はただ、その手に身を委ねるだけ。

跳ねた足跡が逃げ水のように波を かわ 躲し、滝壺が抱く しじま 静寂に引き寄せられる。ぼうっと かも 醸す逆光もやがて、  
かど 廉もなく へり 縁に返り、かぼつ ときめく華没を連想させる。

次第に、踝を濡らしていた海も砂に変わり、私は、私を導いて、何もない場所に出た。

私は手を離し、

私を見る。

辺りが闇に包まれているのは……、眼を瞑っているからでも、夜が月を押し倒したからでもない。

私の影が、

私を忍んでいるからだ。

私は……、私と向き合っている。

波もなく、風もなく、

鏡を見ているように、

私は、私を見ている。

それなのに……、

どうして……、

私は、

仮面をかぶっているのか？

そう、気づいたとき……、

「ここはただの部屋なのだ」

と思い至った。

海でもなければ砂浜でもない。

しかし、ただの部屋ではない。

天井も床もある。

けれども……、

四方を囲む壁は、

無数の眼が、

私を見ていた。

それは、

隙間なく掛けられた仮面だった。

そのうちの一つが不意に揺れ、

眼の前の私が、

私の前に佇んだ。

私は、私の顔を……、仮面を見つめる。

仮面には、薄く口が開き、鼻孔が穿たれ、二つの眼窩<sup>がんか</sup>が割り抜かれている。

しかし……、

仮面の下の瞳は一つしかなかった。

その一つと……、

眼が合った。

そこに映っていたのは……、

僕の姿だった。

僕の、顔、

僕の、瞳……。

「……」

波打ち際の落書きを<sup>さら</sup>浚うように、耳元で囁く声……。

僕は、破片に砕け、モザイクのように、散らばってゆく……。

ピースの一片が、波に<sup>さら</sup>攫われ、跡形もなく……。

遠ざかってゆく、何事もなく……。

僕の像<sup>かたち</sup>が……。

そして、

彼は膝をつき、<sup>くずお</sup>頽れた。

私はそれを観ると、

仮面を外した。

壁に歩み寄り、

元の場所に戻す。

まるで涙の痕のよう。

私とそれは、眼が合った。

けれども、私にとっては、

星のように価値のないもの。

貝殻のオルゴールのような彼の瞳。



蝸

惇暉

1

祭があるのだという。この年齢になっても、祭という言葉が身体のだこかをくすぐってくる。三つ子の魂百までもとは、よく言ったものだと思う。

蝉の音が騒がしいと思えるほど響いて、足元の石段が揺れているように感じる。

僕はゆっくりと石段を登っていた。後ろから、はしゃいだ子供たちがどんどん自分を追い越していく。屋台からに違いない、香ばしい匂いがどこからともなく漂ってくる。もう絶滅しかかっている縁日という言葉が頭の隅に浮かんだ。

意味のない、無邪気な幼い笑い声が身体の中を引っ掻き回す。それはうるさくもあり、懐かしくもある。前から下りて来た家族連れに、僕は身体を<sup>よじ</sup>振って道を開ける。小太りの母親が会釈をして通り過ぎていった。顔は、暗くてよく見えなかった。

<sup>あんどん</sup>行燈が点いているのにも関わらず、参道はやけに暗い。まるで自分が<sup>とうろう</sup>灯籠流しの蠟燭になってしまったようだった。実際に見たこともないのに、なぜかそう思う。

参道を登り切り、鳥居の下にたどり着くと、眼に飛び込むものすべてが明るくなった。毒々しくくらしいに、屋台の軒先に電球が灯っていた。

僕は眼を瞬いて、こんなに広い境内だったかと思う。境内全体が何倍も大きく見える。

僕はいちいち屋台の前に立ち止まって、その店先に並べられたものを眺めていく。焼きそば、たこ焼き、かき氷、金魚すくい。……

端から順番にまわっていくと、綿飴の屋台に出くわす。

「お兄さん。一つどうっすか？」

浅黒い肌の、自分より年上らしい男が話しかけてきた。僕は割り箸に巻きついていく飴糸を見つめながら、久しく口にしていない綿飴の味を想像した。甘い、とにかく甘かった気がする。

自然に財布に手が伸びる。

「じゃあ、一つ、いただきます」

「あいよ！ 袋はなんにするかい？」

僕は屋根からぶら下がっている五種類の袋を眺める。どれも子供向けのアニメと特撮物のイラストが入っている。どれも僕が知らないものだ。なので、適当にたぶん戦隊ヒーローだと思うイラストを指で示す。

「おっ、運がいいねえ。この袋、お客さんで最後だよ」

手際よく綿飴を巻き取って袋に詰めながら、男は白い歯を見せて笑う。僕は引き込まれるように、あいまいに唇を緩める。急に綿飴を持つことが恥ずかしくなった。

金を払って屋台を離れると、吸い寄せられるように僕は本殿の右手に据えられた建物の傍に寄った。屋台を冷やかしていく間に、視界の端でちらちらと揺れていたのが気になっていた。

出来損ないの舞台みたいだ、としか言いようがなかった。観客のために正面左右の壁が取り払われていると思いきや、立派な瓦葺の屋根が柱のうえに載っている。ひどくちぐはぐな感じがした。

唯一の壁にはなにか絵が描かれているらしいが、年代物のせいかな、ひどく掠れてしまっていて、なにが描いてあるのかはつきりしない。ただ、緑と赤が使われていることだけは分かる。影を含んでいるせいかな、それはひどく不気味だった。

しばらくの間覗き根性が働いて、僕はなにもない床のうえを見つめていた。

駄菓子屋の前によくある、粗末な青いベンチが舞台もどきの前に並べられているせいかな、どうしようもない寂しさを感じる。

舞台のうえでなにをするのだろう、と思う。

辺りを見回すと、ベンチに座って膝のうえに屋台の品を広げて、口を動かしている人ばかりだった。確かに、疲れた足を休めるのにこのベンチはちょうど良い。僕は錆びついたそれに腰を落とす。

自分を取り巻くすべてのものが賑やかだった。

そういえば、屋台同士の間には微妙な隙間が空いていた。隙間は黒い。僕は当たり前のことを考えている自分がおかしくて、独りで笑う。ついでに、綿飴に口をつける。痺れるような甘さが舌のうえに広がる。

綿飴を舐めながら、つらつらと空想に耽る。頭の内側で、次から次へと意味のない言葉が流れては消えていく感覚。しゃぼん玉が膨らんで破裂するようだ。

ふと、喉が焼けるような甘さとは別の香りが漂ってきた。

紅茶のような、渋くて苦い匂いだった。

「おや、まあ……」

今一度、匂いを嗅ごうとしたとき、記憶に濃く焼きついている顔が僕を見下ろしていた。影に覆われた紅白装束が蝙蝠を思わせた。澄んだ声が自分を二週間前に引き戻した。

「隣、いいですか？」

「ええ……」

蒼い瞳が僕を捉えたとき、身体はどこかが疼いた。なにもかも見透かされている気がした。彼女の名前を呼ぼうとして、僕はそれをまったく憶えていないことに気づいた。茶碗を持つ手つきや箸の動き方ばかりが、やけに鮮やかに眼の前でちらついた。

「今日は仕事のほう、お休みなんですか？」

彼女は右手にぶら下げていたビニール袋をベンチのうえに置いた。袋の膨らみから見ると、きっと貧弱なプラスチック箱に入った焼きそばか、たこ焼きが収まっているに違いない。腹が鳴った。

「大鳥さんに、おまえ顔色が悪いから、ちょっと羽を伸ばしてこい、と」

「それでここに来たんですか？ 逆に疲れてしまいますよ」

「あと、あなたに伝言を頼まれてしまって」

股の間に、剣道の竹刀を構えるように綿飴が巻きついた割り箸を持って、僕は彼女の眼を覗き込んだ。

近くでヨーヨーの潰れた音がした。

「今年は祭に顔を出せなくて、すまない、と」

「それを言わせるために、わざわざあなたをここに？」

僕は黙って肯いた。

「それはまた変なとぼっちりを……電話すればいいのに」

「いや、サボる口実をもらったので、お互い様かな、と」

僕がそう言うと、彼女はさも可笑しそうに首をかしげた。これでいいんだと、救われた気がした。身体の方が自然に抜けた。

彼女は袋の中からプラスチック箱を取り出し、僕と自分の間に置いた。

「お詫びと言ったら、お叱りを受けると思うんですが……」

むせ返るほどに濃いソースの匂いがした。

彼女は細い指で輪ゴムを外して、蓋を開いた。薄暗い中でも、箱に詰まった肌色の球が見えた。たこ焼きだった。子供のように僕は唾液を飲み込んだ。

恥ずかしくなるほど、また腹が鳴った。

「……そんな、悪いですよ」

「いえ、遠慮なさらずに」

僕は彼女の言葉を待っていたのだと思う。声が耳に届いた瞬間に、自分の手が爪楊枝に伸びていた。たこ焼きは出来立てらしく、舌を真っ黒に焦がしてしまうかと思うほど熱かった。たこが食われることを嫌っているかのように、噛み千切られることを拒んだ。

「うめえ」

自分の粗暴な言葉に対して、彼女はクスリと忍び笑いをした。ふと、いろいろなものから遠ざかって楽になったな、という感じが頭の内側で流れた。もう一つ、とたこ焼きに爪楊枝を突き立てた。

彼女は器用に鰹節を球に絡めて、口に運んだ。妙に新鮮で、感心してしまった。

「そういえば、そちらのほうは、仕事をしなくても大丈夫なんですか？」

何度もたこを噛んでいるうちに、<sup>もや</sup>霧が取り払われたように思考がはっきりしてきた。僕はひどく不思議だった。石段を登るときの、あの浮遊感は一体なんだったのだろう。

彼女は口の端を舐めて、目尻を下げた。

「休憩中なんです。今は。このあと、演じなくてはいけないので」

「演じ？」

「能楽をやるんです。私は一応そういう立場ですから」

彼女は静かにそう言い切って、目の前にある舞台を仰いだ。僕もつられて、なにもない舞台のうえを見つめた。そこに彼女の姿をあまりにも自然に嵌め込むことができた。もう、かえって似合いますぎて、僕は嘘ではないかと思った。

「西宮さんは能の舞台を見たことは？」

「ありませんね」

「面白いですよ。私が保証します」

「すごい自信だ。そんな大見得切って、いいんですか？」

僕の含みを持たせた言葉に対して、彼女は涼しげに淀みなく言った。

「本当につまらなかつたら、とっくの昔に滅びてますよ」

つづみ

鼓 という言葉を誰から教えてもらったのか、僕は憶えていない。ただ、両親ではないことは確かだった。二人とも、古典や芸能に纏わることに興味も関心もない人間だ。

ポン、という音が鼓膜を打った。背中を勢いよく押された気がした。

乾き枯れた笛の音。脳味噌を捌かれている感じ。

そこにまた別の音が忍び込んでくる。低く摩り減らした人間の声。それは自分を包む唸りだった。顔に皺が深く刻まれた老人二人が声を出しているとは、信じられなかった。

老人たちが話す言葉は、遙か昔の時代がかったものだった。そのせいで、なにを言っているのかさっぱり分からない。もはや唸りにしか聞こえない。

唸りと、笛が鳴る。

滑るように彼女の足が動き、手が止まる。握った扇がゆっくりと翻った。

今度は、鼓でポン。と、唸り。

緋と白の衣装のうえに、さらに重ねた白い衣が床に触れそうになった。衣に入った金の刺繍が、見たこともない牡丹であればいいと思った。いや、そうに違いないと僕は思った。

能面にこびりついた翳<sup>かげ</sup>が、彼女の動きに合わせて蠢く。僕はそれが生き物に見えた。

面は毒々しいまでに肌が白く、唇が紅かった。女の顔に間違いないと僕は思った。決して厳しい表情をしているのではないのに、面は不気味だった。女の面が底なし沼を思わせて不安にさせるのだった。

彼女が床に足を踏み込む度に空気が張りつめた。その癖、彼女の黒髪は身体に纏わりつくように震えもしない。ただ、右手に持った扇が返されると、僕は自分が落葉になったような、小さくなった気がした。

開いた扇には、鳥が描かれていた。

ポン、ポン、ポン。ヒョーヒョーヒョーヒョー。楽器たちの音を受けて、男たちの一際低い唸りが続いた。

面を追いかけているうちに、舞台の右の隅に座っている男の横顔が眼に写り込んだ。自分の父親と比べ物にならないほど、凛々しく厳しい顔をしていた。この人は険しい山のように、手強く一流だ。まさしく、すべてを知って難問をこなす達人だった。

彼はなにも語らなくても、座っているだけで名人だと僕は強く感じた。

そして、彼女もまた、研ぎ澄まされた名刀なのだと胸の中で呟いた。眩暈を起こさせるほど、彼女の所作は僕に刺さる。

彼女がゆっくりと膝を折って床に伏せっていった。鈍く光る華やかな衣装が床に広がった。彼女の身体中に翳が走って、唐紅と錫を一緒に混ぜてそこらじゅうにぶちまけたように見えた。

彼女が俯いた瞬間に、僕の手には唐紅と錫がこびりついたと感じるほど、汗が滲み出た。

観客は誰もが黙り込んでいた。自分自身も例外ではなかった。一言でも言葉を発してしまうと、なにかが逃げるような、舞台と自分を包んでいる膜が壊れてしまうような、そんな恐ろしさがあった。

今、仄暗い舞台を見つめている人間は、きっと彼女の所作でできた陰影に取り込まれてしまったのだと僕は思った。

恐ろしい。自分の喉を驚掴みにされるのは、こういう感覚なのかもしれない。

錆ついた声と澄み切った音が重なって、ピタリと止んだ。

彼女は床に開いたままの扇を置いて、頭の後ろに手をやった。いよいよ、女の面が笑い出しそうな感じがした。

滑るように面が剥がれ落ちて、その下に隠れていたもう一つの面が露わになった。

金色の中に黒い瞳がある女の面だった。その瞳は僕を刺し殺すような冷たさだった。

開いた唇から覗いている歯は銀色だった。

眼が鋭く光ったとき、背筋を下から上に撫でていくものがあった。子供の頃の、友達から蝉の抜け殻を後ろ襟から入れられたときによく似ていた。得体の知れないものが骨を引っ搔いている感触だった。

彼女はユラユラと立ち上がった。彼女の身体が陽炎のように霞んで見える気がした。

彼女は右手で抓んだ扇を水平にして、舞台から飛び出すように伸びている渡り廊下を歩いていった。それは足になにかが絡みついて離れなくなったような、時間が遅くなったと感じるほど動きが鈍かった。一步一步が、重く苦しいものかもしれないと僕は思った。

廊下は舞台よりも薄暗かった。そのせいで、面だけが浮かんで独り歩きをしているように見えた。

彼女の背中が薄緑の幕に吸い込まれると、沈黙が訪れた。

かみしも  
袴かみしもを着た男たちが楽器を置いて、右隅にいた男が立ち上がった。途端に風船を割ったような勢いで拍手が起こった。

独り他人とはずれたリズムで手を叩きながら、終わってしまったと僕は思った。

胸に大きな穴が空いて風が通る、そう強く思うほど、僕は寂しかった。諸行無常の響きあり、沙羅双樹の鐘の音。国語の教科書に載っていた古い物語の一節が頭の中で何度も響いた。いくつもの囁き声が耳に飛び込んできて、また自分のまわりが騒がしくなった。

水が蒸発するように人の気配が消えていった。

僕はふと、写真を撮ろうと考えた。携帯電話を開いてどこを撮ろうかと舞台を見つめていると、急に勿体なくなった。自分が望むものをカメラに収める自信がなくなった。

もう、舞台のうえには誰もいなかった。すべて、幕の内側に吸い込まれるように消えてしまった。こんなちっぽけな四角形で捉えきれぬのだろうか。なにを撮るのかも決まってないのに、おかしなもんだ。僕は鼻を鳴らして携帯を閉じた。そして、舞台に対して背中を向けた。帰ろう、と思った。

さっきの能がこの祭の最大の山場だったらしく、かなりの数の人が石段を下っていった。

それに従って、僕も石段を下った。

子供のはしゃぐ声と、それを窘める大人の声がやけに遠く聞こえた。また耳に鼓と渋い男の声が残っていた。鼓膜が麻痺してしまった気分だった。

「……業はア、霊イ薬う、人の罪なるう」

笑いに紛れて、そんな声が聞こえてきた。また、骨を引っ搔かれるような感覚に襲われた。今度は、痛みまでついてきた。僕は思わず立ち止まって振り返った。酔った若者だと決めつけていた。が、自分を追い越したのは中学生くらいの少年グループだった。

やべえ、チョー似てる。お互いにそんなことを言い合いながら、彼らは遠ざかっていった。そうか、舞台の最中で彼女が見せた台詞を真似していたのか。気がついたときには、少年たちの姿は自分の

視界から消えていた。

業か、と僕は独りで呟いた。

なんて嫌な言葉だろう。馬鹿にしている、そんなことは誰でも知っている。そうじゃないのか。...

...

どうして、あんな台詞を彼女は言ったのだろう。そりゃ、台本に書いてあったからに決まっている。分かり切ったこと。僕は失笑した。

けれども溶けた鉛が腸に詰まったように胸がむかつく。

彼女が産んだ、周りの物をすべて震わせるような声と、翳を滲ませた仕草が僕を苛んでいた。まだ閉じ込められていた。お伽話に出てくる、丸みを帯びた花や木の絵を彫り込まれた箱の中にいる。それは濃厚でかつ蠱惑的で、思考の働きを停止させてしまう。

僕は蓋を開けて外に出て、上から舐めるようにそれを見たいと思った。

そこに、ポンと鼓が響き、ヒュルリと笛が鳴った。

幻聴にしろ、気のせいにしろ、鼻を鳴らして切り捨てることができないほどにその音は澄んで響いた。美しかった。

戻らなければならない。口にはしない呟きが漏れた。

僕は踵を返してもと来た道に戻り始めた。そのときようやく彼女の名前を思い出した。

確か、碧、だったはずだ。

### 3

これは油蟬だろうか、それとも <sup>ひぐらし</sup> 蛸 だろうか。祭の余韻を引きずっているかのように、鳴き声は盛んだった。

縁側は、湿った草木の匂いが鼻を詰まらせるほど漂っていた。部屋の灯りが窓から漏れて、いまにも折れてしまいそうな細い木を照らしていた。

不気味というよりは、不細工だと思った。

背中に微かな風を感じた。

「お待たせしました」

身体を捻って後ろを見ると、彼女が盆を持って自分に向かってきた。盆のうえには、薄緑の小瓶とそれにぴったりと合う小さなグラスが載っていた。

「どうもすみません」

「いえいえ」

彼女は笑っていなした。紅白の衣装はそのままで、足袋だけ脱いでいた。青白い素足が覗き放題だった。

彼女が腰を落として盆を置くときに、指のつけ根が桃色になった。僕は足が恥ずかしがっているような感じがした。裸足はひどく猥雑だったけれども、気にならなかった。

「ワキって、西宮さんは意味分かりますか？」

「聞いたことあるような、ないような」

「烏帽子をかぶって、左の隅で語っていた人なんですけど」

「ああ、あの人」

あの達人か、と僕は彼の顔つきを頭に浮かべた。そういえば、若くも老けても見える、年齢不詳の人だったことを思い出した。

彼女は瓶の蓋を開けてグラスに注いだ。グラスのガラスの透明さが、ひどく自分を落ち着かせた。「そう、その人の本職は酒屋さんなんです。だから、差し入れがいつもこういう類のものになるんです」

「どれぐらいもらうんですか？」

「このサイズと、一升瓶が二本ずつ」

彼女は蓋を開けながら瓶を指で叩いてみせた。「そりゃ多いな」と言ってしまってから、僕は彼女が一人で暮らしているということに思い当たった。

急に後ろめたくなった。

「では、今日はわざわざありがとうございます」

彼女はグラスを掲げた。それに合わせて自分も掲げて、グラス同士を触れ合せた。

涼しげで乾いた音がした。グラスの中身を一気に飲み干して、息をついた。彼女を見やると、眼を細くして僕を眺めていた。

「お酒、強いみたいですね」

「ええ、それが唯一の自分の取り柄で」

僕は彼女のグラスにある残りの量を眼で計った。もう三分の一も残っていないように見えた。ふと、琥珀色の酒が自分の血液のように感じた。ひどく流れにくそうだとも思った。

「これは、ブランデーですか？」

「その亜種で、カルヴァドスっていうんです」

その名前が、ひどく厳つく硬いものだったので、僕はつい笑ってしまった。この場所にも彼女の着ているものにも、ふさわしくない。ただ、信号機のように力強く光る瞳が彼女を遠い国の人に見せていた。

「高そうだ」

「ええ、酒屋さん曰く、輸入品だそうで」

「なんか飲むのが勿体ないな」

彼女は軽く頷くと、僕のグラスに酒を注いだ。また、琥珀色の液体がグラスに満ちた。

僕は腸が温くなっていくのが分かった。きっと酒の度数が高いのだろう。ジワリと背中に汗が滲んだ。

手を伸ばして、彼女は自分で自分のグラスに酒を注ごうとした。僕はすかざす瓶をつかんで「やります」と言った。彼女は唇の端を上げて瓶から手を離れた。

僕は瓶を傾けながら、彼女に問う言葉を探していた。

「改めて、なんですけれど」

注ぎ終わると、彼女はそう言ってグラスを振った。

蝉の鳴き声が止んで、静かになった。

「わざわざ礼を言いに来て下さるなんて、ひよっとするとうちの社が始まって以来、初めての人も

しれません」

「ははは。大げさですよ」

「それよりも、あなたが面白がってくれたことが、私にはなにより嬉しいんです」

彼女は少しグラスを傾けて、酒を舐めた。耳のつけ根がほんのりと朱く染まっていた。案外酒に弱いかもしれない。僕は意外だと思いながら、酔っているのかどうか分からない彼女の横顔を見つめた。

「碧さんの言う通りでした。正直言って期待していなかったんですけど、見たら心臓を掴まれて、扱られるような気がして……」

「ずいぶん気に入って下さったみたいで、なによりです」

彼女は微笑んだ。僕はそれに後押しをされて酒を呷った。喉に焼きつく辛さが染み渡った。今だと、頭の中で囁くものがあつた。

「業は靈薬、人の罪なるって、どういう意味なんですか？」

僕の言葉を聞いて、彼女はフフッと笑った。相好を崩すように、また目尻が下がっていた。今度はさっきよりも下がった角度が大きくなった気がした。

彼女は唇を舐めて、なにかを誘うように足と腕を組んだ。まるで猫だ。

「西宮さんは、どう考えていらっしゃるんですか？」

意外だった。彼女はたちどころに筋の通った答えを出してくれると、僕は信じていた。胸の隅で、なぜ信じているのかという疑問が湧いたが、すぐに霞み消えた。彼女の姿形があまりにも尤もらしいせいだった。

「……業は、人間の執着で、靈薬はなにか性質の悪い物事で……」

「なるほど、なるほど」

「人の罪っていうのは、そのまま……」

僕は彼女を横目でちらちらと盗み見た。彼女はさも鷹揚にグラスを口に運んでいた。その揺らぎのない態度に僕はひどく感心した。決して無感情というわけじゃない。彼女の見せる仕草がすべてを語り尽していた。それは、必要なものだけを集めた救急箱によく似ていた。

彼女もどこか達人に近いものを持っているに違いない。

「で、要するに、人間の醜さを刻んでいる……」

言ってしまうってから、僕は後悔した。酒のせいで軽口を叩きやすくなっている。こんな臭い言い方は、滑って寒い。

ただ、恥ずかしかつた。裸踊りをしているようなものだ。

「それで終わりですか？」

「ええ」

彼女は顎をひと撫でして、眼を瞬いた。僕はそれが驚きの表情に見えた。いや、見たかった。あまりにも穏やかで静かだと、怖くなる。

僕がなにか言葉を継ごうとしたときだった。

「それでいいと思いますよ」

「えっ？」

「醜さっていうのは、今まで考えてもみませんでした」



彼女は涼しい顔でグラスの中身を飲み干した。長い息が漏れた。それに合わせて、軒先にぶら下がっている風鈴が鳴った。なにか区切りをつけるような音色だった。手の甲に浮いた汗が、自分の眼にとまった。汗は手首を伝い流れて地面に落ちた。

自分のすべての感覚が身体から切り離されたような気がした。僕というものが球のように道端に転がっているようだった。

彼女が少し首を傾けて僕を見透かしていた。

僕の頭の中で一気に言葉が捩れ集まり、硬く結びついた一本の紐になった。迷路のように、入り組んでほどこき方が分からない。

彼女に差し込む翳が濃くなった。

「僕は、なにもかも意味が分からなくなってしまったんです」

「それは、大変だ」

男のような口調だった。僕を意識したのかどうかは分からない。彼女の声は今日会ったときからほとんど変わっていなかった。このまま暗い庭に吸い込まれて消えてしまいそうなほど、揺れ動かない。

ふと、彼女がとてもうらやましくなった。

「もう、全部眼を塞がれてしまった感じがして……とにかく周りのものが曖昧模糊になって溶ける気がするんです。仕事で歩いて、人から話を聞いてもこれには意味があるのか疑いたくなるし、そもそも刑事ってなんだよって思うわけで。今の担当事件も下らなく感じるし……ただ勝手にてめえが自殺しただけ……熱いせいなんだ、きっと」

「だいぶ支離滅裂ですね」

彼女の言葉に、僕は腹の底でその通りだと呟いた。少し自嘲気味に。喉が渴いた。僕はグラスを一気に干した。すかさず、彼女が空になったグラスに酒を注いだ。一口含んで、ほんの少しだけ眩暈がした。

ああ、キてる。これは。脳味噌に砂が詰まったような苦しい感覚が、身体全体を浸していく。これは嫌悪だろうか。それとも不安だろうか。

だから、彼女が膝のうえに指で文字を書いていることにすぐ気づけなかった。

「なんの字ですか？ それは」

「痴、です」

彼女は唇から舌の先を出して人指し指を舐めた。もう一度お盆のうえに書いた痴は、ひどく霞んで見えた。痴が今にも動き出して、自分を喰ってしまいそうだった。

眼を瞑ってしまいたくなるほど、あやしかった。

「西宮さんの、今を端的に表す字」

「あんまり良い字じゃないなあ」

「ふふ、私は西宮さんがうらやましいんですよ。一度でいいから、痴になってみたい」

「あなたは、変な人だ」

僕は纏わりつく虫を払うように頭を振った。実際、眼の前に見えない虫が飛んでいる気がしていた。まっすぐに物を見れない。ひよっとすると、とっくの昔になにか病に罹っていたのかもしれない。

彼女はますます涼しげに笑って、前髪を掻き上げた。そのとき、額に傷跡があるのに気づいた。

細い線が額の右のほうにあった。

「あなたは、感じ取った物の一番深い底を捕まえることができる」

そんなのまやかした。

あなたの言葉はひどく人を惑わせる。と、僕はぼんやりと霞んだ頭の中で呟いた。

彼女は首を斜めに傾けて、僕を見据えていた。その瞳は、化物がおいでおいでをしているようだった。

襟首にも、細い線が走っていた。

また、彼女はあやしい。そう思った途端に、まやかしという言葉が身体の内側を掻き回した。カメラのフラッシュが焚かれるときを思い出させた。光の明滅が文字に変わったかのように、二つの言葉が繰り返された。

あやしい、まやかし、あやしい、まやかし、あやしい、.....

「あまやかし」

何の脈絡もなく、そんな言葉が口を突いて出た。僕に取り繕う余裕はもうなかった。ただ、呆けた笑いを浮かべるだけだった。

彼女は酔いで潤んだ眼を瞬かせた。迷いか惑いか、ほんの少し唇を開けて眉が動いた。

そして、小気味良い、底抜けに明るい笑い声をあげた。

#### 4

さすがに、きまりが悪かった。

「碧さん、今のそんなに面白かったんですか？」

「ええ。だいぶツポに入りまして」

「ちょっと怒りたい気分なんですけど。僕は」

「ええ、大丈夫です。もう笑いませんから。あなたの言葉は.....そうなのかな。いや、そうなのかもしれないね」

そう言いながらも、彼女は目尻を拭いながら独りで頷いていた。種を蒔いて芽が出るように、胸の内側で疑問が次から次へと浮かんできた。皮膚を突き破って、なにか腐ったものが飛び出してきそうだと僕は思った。

あなたの、その傷は？

「やっぱり、どう考えても意味が掴めないんですよ。僕は。意味がないから、なにもない気がするわけで、自分が空っぽに思えて仕方がないんです」

「空っぽ、ですか。それは喜んでいいことです。きっと」

「そんな.....こんな実のない、訳の分からない話をしているも？」

「そうですね。確かに今の雁字搦めの状態からは、なにも産み出せない」

彼女の顔からいつの間にか笑いが消えていた。うっすらと汗をかいているせいか、ところどころ朱い肌が照り浮いているように感じた。

僕は彼女とよく似た人をどこかで見た記憶があった。

「でも、その空の感覚で触って確かめれば、こう、頭がクラクラするような、生きてるものが産まれます」

「それって、不自由じゃないですか？」

「さすが、鋭い指摘です。そう、自分の意志を信じられなくなりますからね。自分でなにも決められなくなってしまいうけです」

怒りとも、憂いとも、その両方とも受け取れる口調だった。彼女の内部で蠢いているものがあるのかもしれない。ただし、肌のうえではなにも変わらず、ひたすら静かだと僕は力強く感じた。

彼女はグラスにわずかに残った酒を干して、額の傷跡を指でなぞった。

「五体満足で不幸か、それとも五体不満足で幸福か。どちらの道を選ぶか、ということかもしれません」

彼女は左右の人差し指でx印を造った。

その声と仕草は僕の意識に深く撃ち込まれた。小さく身体が震えた。

リンリンリンと風鈴が鳴った。その音は、僕はここにいるべきではないと告げているようだった。でも、身体は重く、またグラスに手を伸ばしてしまった。

彼女は黙って僕と自分のグラスに酒を注いだ。琥珀色がやけに古く朽ち果てて見えた。

瓶の中身がなくなったせいか、彼女はそれを軽く二三度振って蓋を嵌めた。会話が途切れた。今日、僕はしゃべりすぎたのかもしれないと思った。舌から喉にかけて妙な痺れがあった。

彼女は襟元を手で仰ぎながら、「熱帯夜です」と独りごちた。

また蝉が鳴き始めた。ひどい気紛れだ。今度は他の虫の音も交っているようだった。

「そうだ、あなたが解いてください」

自分の中に最後まで残ったものが言葉になった。それさえも、すぐに溶け消えた。

血を吐いているのかと覚えるほど、僕の声は擦り切れていた。自分の魂が疲れ枯れているのだと知った。身体の流れている器官や神経が悉く停止してしまっただのと分かった。

内臓の奥の奥に溜まっていた彼女の匂いさえも、逃げてしまいそうだった。

身体の芯が折れかけて僕は眼を瞑った。

バチンと、なにか破れる音がした。

朦朧とした、無限リピートから一気に醒めた。僕は眼を擦りながら、かすかに耳に留まっている音の残滓を追いかけた。首が左右に振れて自分の周りを探った。

彼女が左手のうゑに重ねた右手をじっと見下ろしているのに、行き着いた。

「蚊が出てきましたね」

彼女はまた手を叩いた。今度は彼女自身の額近くに蚊が飛んでいた。蚊は器用に逃げた。僕は腕を伸ばして、緋色の袴の膝元に逃げたそいつを叩き落とそうとした。でも、自分の指が袴を掠めても蚊は捕まらなかった。

彼女は眼を細めて頬杖をついた。

「惜しい。あともう少し」

「僕はもうやめときます。心も身体も乱れてきつと潰せない」

「酔いましたか？」

「ええ、それはもう」

「でも、心地良いんじゃないですか？」

「いや、刃物で刺されたみたいで辛い」

僕がそう言うと、彼女は目を閉じて大きく深く頷いた。やっぱり、どこかで見たことがある気がした。閉じた眼が僕の息を詰まらせた。

睫毛が震えて蒼い瞳が現れると、彼女は両手を組んで高く突き上げ背筋を伸ばした。一度は掻き消えてしまった彼女の匂いがまた漂い始めたようだった。

草木でも汗でもない、純粹に乾いた匂い。

「どうもお互いに悪酔いしたみたいですから、水を持って来ますね」

僕はなにも言えなかった。盆のうえに瓶とグラスを載せていく、彼女の手つきを見ることしかできなかった。

彼女は立ち上がりながら、まるで別の生き物のように唇を動かした。

「でも、安心しました」

「それは何に対して？」

「あなたですよ」

盆を持って僕を見下ろす彼女の顔は、涼しく澄んでいた。その癖、翳は一向に消えなかった。

今さらながら、彼女がひどく歪に見えた。

「ひどく遠い眼をしてましたから。もう、夢から戻って来ないかと思いました」

彼女の言葉が心臓を中心にして、うわんうわんと波打って身体中に響き広がっていった。甘く寂しい疼きが肌を走って、それを塗り取りたくなった。しきりに、そいつは臭いぞと自分の中に咎める声が出た。

彼女が僕に背中を向けたとき、僕はため息のような言葉を漏らした。

「遠い眼じゃなくて、死んだ眼なんです」

「水を飲めば、きっと生き返りますよ」

振り向かなくとも、彼女が微笑んでいることは容易く想像できた。

彼女の白い背中はずぐ暗い廊下に消えていった。僕は独りになって落ち着かなくなった。何気なく下を向くと、自分の足元に蟬の抜け殻が転がっていることに気づいた。

種類は分からない。でも、それが今抜け出たばかりの新鮮なものなのだと、なぜか分かった。

急に肌寒くなりくしゃみが出た。それがきっかけで、僕は彼女に答えをはぐらかされたのだと気づいて苦笑した。

筆筒集 (二)

惇暉

久遠

この世に失敗というものがあるならば  
平等に分けるべきであろう。  
ナラトロジー ナラトロジー  
神話なのだろう。  
寓話ではない  
沼に棲んでいる魚は  
すべてを見ている。  
かつて絞り取った培養液が  
また戻り  
枯れた森を養うとして  
如何なる薬にもならない。  
毒入り菓子が  
幸せな死を呼ぶ。  
穴のない笛を吹くことが  
水子の供養だとして  
笛吹き男は  
哀しい笑いすら浮かべない。  
リズムとテンポの違いが分からぬ。  
それが理というものだ。

心象風景

——無からなにも信じることはできぬ——  
現代人は美味しいものを喰い過ぎた。今に腸が腐り滴る日が来る  
皿まで口に入れようとする。それが公共の福祉だ  
墓の準備は夜に終わらない。司祭が寝ている  
——共感とは偽善者が持つ美德である——  
自分は供物であるべきか。正直な水牛ではないつもりだ  
戯れが一つの孤独を保つ。集合的無意識か  
幻視が嘲笑を買う。嘘から真を産む工場  
——動かないことすなわち民衆の夢——

いい加減夢から醒めよ  
新鮮な魚として捌かれる前に  
三文文士たち

品良い噓をするな

# 夏休みのかけらたち（佐倉奏）

---

夏休みのかけらたち

佐倉 奏

「朝顔」

まっさらな光が街を包む頃

わたしは目覚める

からだをぐにやりねじらせて

はじめての世界へ

おはよう

今 わたしは何色？

まだ分からないけど

今日は快晴

「プール」

キラキラに手を伸ばして

ザブン

ゆらりゆれるひかりたち

ドクントクン速く遠く

広がっていく六度五分

繋がっていく星の細胞

そろそろ限界？

ズブン

ただいま

昇っていくよ入道雲

「ラムネ」

はじけて消えるラムネの泡

何が詰まっているの？ 何がはじけたの？

遠くに見える虹の橋

ふもとはどこにあるの？ そこに何があるの？

誰かが残せというドーナツの穴

何でできているの？ そこに何が残るの？

図鑑に載ってるブラックホール

中には何があるの？ 吸い込まれたらどうなるの？

今ここに立っている僕

一体何者だというの？ 死んだらどうなるの？

分かんないことだらけ 大人になったら分かるのか

とりあえず ゴクリ ラムネがはじけた

「夕立」

突然 暗転 熱裂くシャワー

黒塗り潰す黒

牙むく雷音

冷えるさめる頭ん中

三秒先が不透明

シャットダウン

チリリーン

そっとなでていく



流れる雲 差す光  
街に弾けたオレンジ果汁

よし行こうか  
夏祭り

「打ち上げ花火」

街はにぎやか お祭りビート  
何回目だろう 腕時計  
手を振り近づく 見慣れた顔  
時が止まった午後五時半

流れる人混み 引かれる手  
りんごあめより赤くなる  
多分夏のせいじゃない

みんな見つめる西の空  
空裂く閃光 花開く  
その時間こえた君の声  
花火と弾ける胸の中  
黙ってうなずき手を握る

まだまだ上がれ  
打ち上げ花火

「蛍」

ここにいる

気付いてよ

太陽よりも 大きくない  
お月様ほど 輝けない

微かでちっぽけ

それでも 確かに ここにいる

あ

見つけてくれてありがとう

そろそろ行こうか 向こう側

おやすみ

あとがき

どうも、佐倉奏です。四年ぶりの投稿となりました。久しぶりだったので、手探りでの作品執筆となりました。

さて、夏号ということで、自分が大好きな「夏休み」を軸に作品をお届けしました。夏休みは人が大きく成長できる時間で、キラキラした瞬間の集合体だと筆者は思っています。そうした夏の日の輝きを少しでも感じられる作品をお届けできたならば幸いです。

それでは、機会があればまたどこかでお目にかかりましょう。

# 想望のエリア（夏村晋）

想望のエリア

夏村晋

可愛いものが大好きだ。

可愛いことは素敵なこと。

服も、靴も、鞆も、部屋も、自分を取り囲む全ては、可愛くあってほしい。

リボンで、ビーズで、フリルで、レースで、可愛らしく飾りつけられたらなら、一体どんなに幸せだろうか。

天気も良く穏やかな午後のある日、いくつもの窓に面した静かな廊下に、靴音が一つ響いていた。編み上げのハーフブーツが一步前に出されるたび、大きなフリルがあしらわれたミドルスカートが揺れる。繊細なレースで装飾されたブラウスに通された腕には、黒猫のぬいぐるみが抱えられていた。

彼女が窓の前を過ぎるたび、亜麻色の髪と、ぬいぐるみの胸元に飾られた空色の宝石が、きらきらと光を反射している。

ゆっくり歩を進めながら、彼女——イツサは溜め息を吐いた。

陽を受け入れる窓の向こうには、森を挟んで王都が、そしてシンファラジア王国の国土が広がっている。

建国の歴史より、魔法が深く根付いてきた国、シンファラジア王国。

国民の総数からすれば魔法使いの数は圧倒的に少数ではあるが、政治、軍事共に国属の魔法使いとしての地位が存在するほど、シンファラジアは魔法が広く認知された国である。

少女イツサは、国の司祭を務める魔法使いの弟子として、王都の郊外に建つ広大な屋敷で暮らしていた。

ダメだ、思いつかない。

イツサは溜め息を吐いた唇を、そのまま手元のぬいぐるみに押し当てて思案した。

齢十二で魔法使いの弟子になってから数年、イツサは初めて自分の使い魔ファミリアを持つことが許された。

正確には、自分の使い魔を得るという課題が師より言い渡された。己の力で使役さえできればどんな存在でもいいのだが、一体何を使役しようか、イツサは一向に決められない。

いっそのことその辺の鳩を捕まえてきてもいいのだが、可愛いもの好きな自分の性格が決断を妨げていた。

だって、折角ならとびつきり可愛いものもいい。使い魔なんて生涯付き合っていくことになるのだから、なおさら。

イツサは魔法使いの杖すらも、可愛いものがあると手作りする始末である。今まさに抱えている黒

猫のぬいぐるみが、その“杖”だ。

どうせなら使い魔もぬいぐるみがいい。ぬいぐるみは勿論、魂などないから、使い魔だと言い張っても結局ただのぬいぐるみなのだけれど、それでもぬいぐるみがいい。

無論、そんなことで許す先生でないのはイッサもよく分かっている。相弟子達も使い魔を獲得し終え、期限も迫っていた。

最終手段として小型犬かうさぎを使役してふりっふりに着飾るという案を頭の隅に残している。けれど、こういった動物達は本来衣服を着用しないため、過度に装飾されることを嫌がるものが多い。だからこそイッサはぎりぎりまで足搔きたかった。

そうして考えを巡らせながら歩を進めていると、不意に小鳥が目の前に現れた。小鳥といっても、羽、瞳、くちばし、全てが木で作られた彫刻品である。

しかし、小鳥はまるで生命が宿っているようにピロロロと鳴くと、ふわりと向きを変えて飛んでいった。その方角の先には玄関ホール。来客の報せである。

木像彫刻の小鳥は、重厚な木造りの扉の縁に身を置くと沈黙し、装飾の一部となった。

小鳥に遅れて玄関ホールに辿りついたイッサは扉を引く。陽の光とそれを遮る影が滑り込んできた。

「こんにちは」

見上げると、灰白色の髪をした男性が見下ろしていた。髪色のせいで初老のように見えるが、顔つきは精悍で目つきが鋭い。というか、険しい。

「カーヴ司祭はご在宅だろうか」

己の師の名前を聞いたイッサが答えようとした言葉は、後方から響いてきた声に遮られた。

「また珍しいお客が来たものですね」

振り返ると、玄関ホールと上階を繋ぐ階段から、一つの人影がゆっくりと降りてきていた。

エイドワース・カーヴ。長い黒髪を持ち、モノクルの奥に柔和な笑みを湛えたその人は、シンファラジア王国が司祭であり、イッサの師である魔法使いだ。

四十代ほどの男性に見えるが、その実年齢は遥か上に行く。イッサも詳しいことは知らないが、イッサからすれば祖父か曾祖父ほどの年齢であるはずだ。

「エイドワース」

客人が名前を呼んだところで、イッサは、おや、と思った。

司祭という立場故か、自分の師がファーストネームを呼び捨てられる場面はあまり見たことがない。

「久しいですね、マーセン・ロイド警部。どうぞ、お入りください」

どうやらカーヴと旧知であるらしいマーセン・ロイドは、険しい顔を崩さずに玄関ホールへと足を踏み入れた。

「それで？」

応接室に腰を落ち着け、イッサが用意したティーカップを持ち上げて口をつけると、カーヴは穏やかにロイドを見据えた。

「私を訪ねてきたということは、何か警察の手には負えない事件でも？」

ロイドは額に皺を刻み込んで沈黙した。警察の手に負えない、という部分に不本意を示しつつも、その態度はカーヴの発現を肯定していた。

「幽霊でも出ましたか」

笑みを浮かべるカーヴの口元から流れ出た言葉に、二人の邪魔にならないよう退出しようとしたイツサは動きを止めた。

幽霊。

冗談にも聞こえる単語は、イツサにとって身近なものだった。

イツサは生まれつき、超が付くほどの霊感体質である。

これは魔法の才能とはまた別物で、幼い頃は幽体と生体の区別も付かないほど、はっきりとその存在が認知できていた。

カーヴが「幽霊」という言葉を口にした時、どういう訳か、イツサの頭には一つの考えが降って湧いた。

幽霊は、使い魔にできるのだろうか。

経験上、幽霊とは魂だけの存在なのだという気がしている。つまり、魂の器である実体がないのだ。

そして、使い魔とは術者と使役される側の魂と魂の契約。そこに肉体が絡まず契約が成立するとすれば、後々、使い魔の魂の容れ物を術者が用意することも可能なのではないだろうか。

例えば、好きなだけ着飾れる人形とかぬいぐるみとかぬいぐるみとかぬいぐるみとか。

「.....それは勘か。それとも見通しているのか」

苦々しい口調でロイドが呟くが、カーヴの表情に変化はない。

諦めたようにロイドは一つ息をつく。しかし、なかなか話を始めようとはしなかった。代わりに、動こうとしないイツサに視線が投げかけられる。

そこでようやくイツサは分の存在が気にされていることに気付いた。

「イツサ」

自分の名前を呼ぶカーヴの声に、思わずびくっと身を竦める。やはり自分がいては邪魔だろうか。

「聞きたいですか」

咎める響きは、その声に込められていなかった。師の瞳を見つめ返すが、そこには相変わらず穏やかな笑みが浮かんでいるだけで、何を考えているのかは読み取れない。

イツサが頷くと、カーヴはロイドに視線を移して「イツサもよろしいですか」と問いかけた。

ロイドは了承も拒否もせず、難しい表情を浮かべた。

「彼女はお前の弟子かもしれんが一般人だろう」

「おや。私も警察関係者ではなく、この件に関しては正式に依頼も受けていない謂わば一般人ですが」

カーヴにそう返されて、真面目な警部は言葉に詰まった。

「.....話を聞くだけだぞ」

幾何かの沈黙の後、ロイドが首を縦に振った。イツサもほっと肩の力を抜く。

ロイドは、数枚の写真を取り出すと、カーヴとの間に位置する机の上に並べていく。写真には妙齡

を少々過ぎたくらいの女性たちが一人ずつ写っていた。

「ここ最近、俺がいるセインズエールの町で、女性が襲われる事件が頻発している」

セインズエールという町の名は、あまり馴染みがなかった。

ロイドは写真と共に取り出した手帳に視線を落とし、事件の概要を述べていく。

「襲われると言っても、命に関わる怪我を負った者はまだいない。ただし全員軽傷を負った。襲われた者は今までで五人。時刻は総じて夕刻。被害者の証言が一致しているから、同一犯の可能性が高い」

「被害者の証言というと？」

「勿論、犯人についての証言なんだが……」

そこでロイドは一端言葉を切った。もともと険しい表情に、さらに陰が落ちる。

「少年、だそうだ」

「ほう」

「背格好からして十二歳前後といったところか。何でも、一人の少年と黒い影に襲われたらしい」

「黒い影、ですか」

「黒いどろどろした煙と表現した被害者もいたな。状況としては、少年に声をかけられてそちらを見ると、突然、少年と少年を囲む黒い影が迫ってくるそうだ。伸びた黒い影に掴まれた被害者の手足には、黒々とした痣が残っていた」

ロイドが魔法使いであるカーヴを訪ねてきた理由がイツサにも理解できた。一般人のみで成立する事件ではない。

写真に視線を落としたカーヴが問いかける。

「よく大怪我を負った方がいませんでしたね」

「それなんだが。なんでも至近距離まで近づいてくると、一様にして少年も黒い影も夕焼けに溶けるかの如く消えてしまうらしい」

「だから幽霊みたいなの？」

イツサが控えめに尋ねると、ロイドは頷いた。

「ああそれと、少年が消える直前、首を傾げているように見えたと言った被害者もいたな」

「人違いだったのかもしれませんがね」

カーヴは目を細めると、呟くように言葉を零した。それを聞いたイツサは同じ言葉を繰り返して問いかける。

「人違い？」

「人を襲っても、大した収穫も得ないままに消えてしまう。襲った相手を良く確かめられる位置まで近付く。本命を探しているよう感じませんか」

そう言うカーヴに、ロイドも同意を示した。

「俺もそう思う。それに加え……セインズエールのような小さな町の中でのみ起こっていること。つい最近から事件が起こり始めたこと。これらを加味して、セインズエールで少年にまつわる事件がなかったかどうか洗い直した」

ロイドが、被害者達の写真の前に、さらに一枚の写真を置く。

「結果、この少年が浮上した。名前はジャック・オリバー。先月から行方不明になっている」

写真の中の少年は、まだ幼さの残る容貌に、元気の良さそうな瞳でこちらを見ていた。歳もちやうど十二くらいだろうか。

「さらに、母子家庭だったようだが、母親も行方が分からない」

そう言いながら、ロイドはジャック・オリバーの横にもう一枚写真を置く。他の被害者と同年代の女性である。それがジャック・オリバーの母親だということはすぐに分かった。

「よくこの少年が行方不明だと分かりましたね」

「少年の友人が相談をしにきた。母親は、少年が友人に会わなくなった日から仕事に姿を見せなくなったらしい」

なるほど、とカーヴが一度目を閉じ、それからロイドを見据えた。

「総合すると、このジャック・オリバーという少年は既に亡くなっていて、何らかの理由で幽体になってまで母親を捜している……そうお考えなのですね」

ロイドは視線を伏せると、無言で頷いた。

「現在、ジャック・オリバーと母親の両名を捜索中だ。両者とも安否の確認ができていないが、」

そこでロイドは一端言葉を切った。もともと良い姿勢が、改めて正される。

「……もう五人も被害者が出てしまった。本当にこの少年が幽霊の類いだとしたら、セインズエールの警察では解決が難しい。エイドワース。頼めるか」

イッサは思わず、ぎゅっと拳を握った。

何とかしてこの事件に関わりたい。

これまで聞いている限りで、ジャック・オリバーという少年は幽霊の可能性が色濃いとイッサの勘が告げていた。ロイドも、ほとんど確信しているのだろう。そして、聞いている限りでは母親を捜すという明確な目的意識が存在している。

使い魔とは魂と魂の契約。幽霊という不確かな存在でも、強い意識が刻みついた魂ならば、契約も不可能でないのではないだろうか。

未知数だ。でも、試してみたい。

イッサは鼓動が早まるのを自覚した。

一方、国が誇る魔法使いはゆったりとした笑みを口元に広げた。そして、その口元から言葉が流れ出る。

「引き受けましょう。勿論、報酬はいただきますが」

その応えを受けたロイドは、静かに頭を下げた。

「礼を言う」

「さて、そうと決まれば具体的にどうするかですが」

カーヴの瞳がふっと持ち上がり、イッサを捉える。

イッサ、と名前を呼ばれると、無意識に背筋が伸びていた。

「行きたいですか」

「いいんですか！」

「なっ」

即答したイッサの目が分かりやすく輝いた。一方、ロイドは非難するような声を上げる。

「おい、エイドワース！」

慌てた風なロイドは気に留めず、カーヴはじっとイッサを見つめた。

穏やかなままなのに、どこか底の知れない色を含んで、イッサの師はもう一度ゆっくりと問いかける。

「本当に、行きたいですか」

僅かに変化した空気に、高揚していた気分が少しずつ落ち着いてゆく。問いかけの真意を探ろうと己が師の瞳を見つめ返すが、揺らぐことのない笑みの奥に答えは見つけ出せなかった。

しかし、胸に湧く興奮は冷めそうにない。

私は、試してみたいのだ。

「はい」

イッサは杖であるぬいぐるみを抱く腕に力を籠め、頷いた。

それを受けたカーヴは、ロイドに視線を戻す。

「そういうわけなので、一先ずイッサを君について行かせます」

「しかし、」

「とりあえずは調査のみです。イッサは非常に強い靈感体質ですので、初期調査だけなら私よりも役に立つでしょう」

「そ、そうなのか。いや、だが危険な可能性もある以上は子供を巻き込むわけにはいかない。それに、」

「危機管理能力は叩き込んであります。また、君が本当に危険だと判断した場合はすぐに私自身が出向きましょう」

「だが……」

「マーセン」

強いわけでもないのに有無を言わさぬ迫力を伴った口調で、イッサの師は渋る警部の名を呼んだ。

「ご安心を。未熟者ですが、私の弟子です」

額の皺を更に濃くしたが、そこでロイドはようやく渋々ながら了承の意を示した。

車窓の外で景色が流れていく。

イッサとロイドは王都を離れ、汽車で案件の地であるセインズエールへ向かっていた。

「セインズエールってどんなところなんですか」

僅かに開けた窓から入る風に、亜麻色の髪と結えたりボンを揺らしながら、イッサは目の前に座るロイドに問いかける。

返答するロイドの灰白色の髪も、風に少し揺れていた。

「王都から北西に位置する小さな町だ」

「へえ……あ、お花畑」

青空の下、線路に沿うように色鮮やかな花が咲いていて、思わず目を奪われた。ロイドもつられて窓の外へ視線を投げる。

「ポピーだな。この時期はセインズエールでも良く咲いている」



「こんなお花畑もあるんですか？」

「いくらでもある」

「それは楽しみです」

ポピーの群生は眼下を滑っていき、次第に遠くなっていった。

それ以上の会話は続かず、二人の間には沈黙が落ちる。

それなりに長い自動車での旅の間、特にすることもなかったが、イッサは上機嫌で己の杖である黒猫のぬいぐるみを弄んでいた。

ようやく、理想の使い魔を手に入れられる可能性が見えてきたのだ。もし成功したとして、使い魔の魂の容れ物を作れるなら一体どんなぬいぐるみにしようか。

鼻歌でも歌いだしそうなイッサを見ながら、ロイドは相変わらずの険しい表情で、しばらく続いていた沈黙を破った。

「一応確認しておくが、これは遊びではないからな」

咎めるような物言いに、イッサは僅かに眉を顰めた。

「分かっています。そもそも、本当に私では歯がたたないくらい危険なことなら、師匠は私を向かわせたりしません」

「.....分かっているなら、いい。だが、遊びでないことだけは改めて心に留めておいてくれ」

「だから分かっていますってば。何なら、危険を想定して最初から防御魔法でも張っておきますか」

ロイドからすれば子供なのは事実だが、子供扱いしすぎではないだろうか。

イッサは唇を尖らせるが、ロイドはそれ以上何も言わず、二人の間には再び沈黙が落ちる。

それ以降は特別な会話もなく、イッサも暇を持て余してからしばらくした頃、自動車はセインズエールに到着した。

二人が自動車から降り立つと、夕日が駅構内を赤く染め上げていた。駅は決して大きなものではないが、二人の他にもちらほらと乗客だったらしき人々の姿がある。駅の出口の外には、小規模な広場の向こうに町並みが続いているのが見えた。

「小さいって聞いてましたからよほど田舎町なのかと思ってましたけど、そうでもないんですね」

「ここは中心街だからな。少し行けばすぐに建物も少なくなる」

ロイドの言葉を聞きながらイッサは歩き出したが、並んでいたはずのロイドの姿が視界に追いついてこなかった。

不思議に思って振り返ると、ロイドは同じ場所に立ったまま、どこかを見つめていた。その視線をイッサが追う間に、ロイドが駆け出す。

「そこのご婦人！」

ロイドが呼びかけた先には、恐らく二人と同じ自動車に乗っていたのであろう女性が一人、早足で歩いていた。そのどこか青ざめた顔を見た瞬間、思わずイッサもロイドに続いて駆け出す。

それは紛れもなく、カーヴの屋敷で写真を見た、ジャック・オリバーの母親であった。

呼びかけられた女性は、駆け寄ってくるロイドを見ると青い顔を更に蒼白にして身を翻した。

「待ってください！」と叫ぶロイドの制止も聞かず、人にぶつかりそうになるのも憚らず、女性は駅の外へと走っていく。続くロイドに、人々は何事かと足を止めていた。それが障害となり、なかなか

女性に追いつけない。

イッサといえばブーツの踵を鳴らして必死にロイドの背中を追っていた。走るのはあまり得意ではないのである。

あっという間に人気がまばらな場所を走っていた。女性も良く逃げた方ではあるが、現役の警察官を振り切れるはずもない。とうとうロイドが女性の腕を掴んだ。

「いや！」

「急に呼び止めて申し訳ありません。私はこういうものです。少々お話を伺ってもよろしいでしょうか」

警察官の証をロイドが示したところで、ようやくイッサも追いついた。

肩で息をしながら、ロイドの少し後ろで立ち止まる。夕日が三人の影をやけに色濃く映し出していた。

「私はなに……も……」

言葉を続けようとした女性がイッサの方を見つめて絶句する。

その瞬間だった。

——ゾク

悪寒がイッサの背筋を駆け上り、息を詰まらせた。振り返ると夕刻の陽射しが瞳を焼く。

太陽光を手で遮りながら目を細めると、夕焼けに一つの姿が浮かび上がっていた。

夕日を背に立つ、少年。

ジャック——

女性が、否、母親が、消え入りそうな声で彼の名を呼んだ。

そしてイッサは気付く。少年の足元に存在しない影と、その顔に広がってゆく笑みに。

み一つけた

「下がって！」

叫んだ刹那、イッサは詠唱を開始していた。

足元にあるべき人型の影の代わりに、少年の背後でドロドロした黒い影がうねり、膨張していく。影が肥大化していくにつれて、全身を這う寒気が強くなっていった。

悪意の権化であるそれはやがて夕日を遮るほど大きくなり、少年と影は三人に——主に母親を目がけて——襲い掛かった。

影とイッサが肉薄した瞬間、イッサの詠唱が終わって防御魔法が発動した。黒い影はイッサが作り出した魔法障壁に当たって弾かれ、蒸発する。悪意の手が母親に届かない少年は不思議そうに攻撃を繰り返した。やがて邪魔されていることを理解した彼は怒り狂ったように、魔法を発動させているイッサに向かって襲い掛かった。

障壁と少年がぶつかった場所から衝撃が広がり、イッサは思わず目を瞑る。すると、何故だか瞼の裏に光が溢れ、イッサの意識は攫われていった。

笑み。笑み。笑み。

笑み。花。優しい手。

涙。涙。涙。

赤い空。閉まる音。すすり泣く声。ぶつかる音。倒れる音。暗い視界。

花。花。花。

ポピーの花畑。花を抱えた両手。遅い景色。

花瓶にポピーを活ける。甘い香り。腕をさする。

赤い部屋。開く音。消えてしまった声。割れた音。倒れた音。低い視界。そして、見上げて、

「おい！」

肩を強く揺さぶられて、イツサは正気に戻った。先程までの景色が消え、瞬くにつれて、心配そうに自分を覗き込む男性に色がついてゆく。ロイドさん、と掠れた声で名前を呼ぶと、ロイドはほっとしたように表情を緩めた。

気付けば全身から冷たい汗が噴き出していた。ゆるりと周囲を確認すると、少年と黒い影の姿はどこにもなく、足から力が抜けた母親が数人の警察官に支えているのが目に映った。少し時間が経過していたのか、夕日はほとんど沈みかけている。

「あの子と黒い影は……」

「消えた。君の魔法が破れないから諦めたようだった。魔法を解いても君はしばらく立ち尽くしたままだったから焦ったぞ」

「すみません。多分、あの子——ジャック・オリバーの意識にのまれていました。それで、記憶を視てきました」

本当か、と驚くロイドにイツサが無言で頷くと、彼は戸惑いを吐き出すように息をついた。

「とりあえず、部下とも合流できたから一度母親を連れて署へ戻る。ついて来てくれるか」

イツサはもう一度、無言で頷く。

冷たい汗は、まだ止まっていなかった。

翌日のセインズエールの町は、雨に包まれた。

イツサは一軒の家の前に立ち、家の主が震える手で鍵を開けるのを眺めていた。

「私なら彼を鎮めることができます」

昨日、警察署へ連れていかれた後、震えながら黙りこむジャック・オリバーの母親にそう言った。できるだけ穏やかに、安心させるように努めながら。

でもそれには貴女の協力が必要です。明日、私と二人で貴女の家に行かせてください。え、家に行かなくちゃ駄目かって？ ごめんなさい、行かなきゃ駄目なんです。ここで鎮めないと、今後の貴女の安全は保障できません。大丈夫、今日ご覧になられたように、私なら貴女を守ることができます。貴女は私の後ろにただついて来てくださるだけで構いませんから。

嫌がる母親をそう説得し、翌日の今日、イツサはジャック・オリバーの生家を訪ねていた。母親が

鍵を開けると、イッサが扉を押して家の中へ入る。そのすぐ背後に母親が付き従った。

一ヶ月ほど無人だった家の中で、イッサは視線を走らせる。少し埃っぽい気はするが、何の変哲もないごく普通の家である。

ふと、ダイニングテーブルの脚の傍に、枯れた花が一輪だけ転がっているのが視界に映った。

無論初めて訪れる家だが、イッサの足取りには迷いがなかった。自分の靈感に由来する勘が何処へ足を進めればいいのか教えてくれている。その勘が正しいこともイッサは知っていた。

一つのドアの前に立つと、躊躇わず開けた。ひやりとした冷気が流れ出てくる。目の前には階段が地下へと続いていた。背後では母親が唾を飲み込む音が聞こえた。

「こ、この先に進むんですか」

進みます、とだけ簡潔に答えた。灯りのない地下は暗そうだったので、蝋燭と燭台だけ借りて地下へ降りて行く。

もう一つの扉の前に到着すると、母親の気配がすぐ後ろにないことに気付く。振り返ると、階段を少し降りた位置で固まる姿が目に入った。ここまで来ることを躊躇しているのを知っていたので、イッサは一言、その位置では何かあっても守れませんよ、と言った。恐怖の色が強くなった母親がぎこちないながらにイッサの近くまで降りてくるのを見届けると、目の前の質素なドアを押し開く。そこは土壁がむき出しになった、狭い地下倉庫だった。

蝋燭で照らしながら、足を踏み入れる。そして母親も倉庫に入った、次の瞬間だった。

ころす

母親が絶叫した。

昨日も見つめた黒い影が壁中から溢れ出し、二人に襲い掛かる。

しかし、黒い影はイッサが予め張っていた魔法障壁にまたしても弾かれた。衝突した衝撃だけが爆風のように襲い掛かった。

ゆ、る、さな

イッサの鼻先で、かろうじて少年と呼べる程度の原型を留めた影が叫ぶ。その指先や顔半分は、黒くどろどろに溶けていた。

背後で許しを請う言葉が響く。無秩序に、勝手に、悲痛に、切実に。

そ、の、おん、な、ころ、させ、

「だめだよ」

イッサは障壁の向こうの顔を撫でるように、その黒を拭うように、そっと手を動かした。

「だめだよ、ジャック」

どす黒く溶けていく少年の顔の中で、ほんのわずかに目が見開かれたような気がした。

——赤い部屋。開く音。消えてしまった声。割れた音。倒れた音。低い視界。そして、見上げてみると、花瓶を振りかざすオンナのヒト——

イッサは目を細めると、ジャックに背を向けて振り返った。そこには蹲ってただただ自分を守ろうとする、小さな女の人。

「貴女だったんですね」

静かな声が響いてゆく。

「貴女が、ジャックを」

「違う！」

女の方は泣いていた。

「違う、死ぬだなんて思ってなくて、ただ少し苛々して、あの子がお皿なんて割るから、花瓶を、花瓶で叩こうとしただけで、今までどんなに叩いてもあの子<sup>うろ</sup>がしんだことなんていちども」

イッサは目を閉じる。大きな虚<sup>うろ</sup>に心が落ちていった。

膝を付いて、女の方と同じ高さになる。

「もういいんですよ。もう、分かっていますから。花瓶を振り上げたあと、ジャックはどうなったんですか」

「額から血が噴き出て、動かなくなったら怖くなって、」

「ジャックは今、どこにいるんですか」

「その壁の中に……埋めたわ」

力のない指先が、土壁を指し示した。

その先へ一度だけ視線を投げると、イッサは立ち上がった。

「だそうです、ロイド警部」

発せられた言葉に女の方が顔を上げるのと、閉まりかけていた倉庫のドアが開くのが同時だった。

ロイドを筆頭に、数人の部下が女の方を取り囲む。

「ご婦人。児童虐待と、殺人容疑で逮捕させていただきます」

ふとイッサが振り返ると、地下室を充満していた黒い煙は消えていて、身体の半分以上が黒く溶けた少年だけが、連れていかれる姿を呆然と眺めていた。しかしその姿も、イッサと目が合うと暗闇に霧散して消えてしまった。

静まり返った家の中を、火を灯したランタンを片手にイッサは一人で歩いていた。

昨日と同じように階段を降り、地下室へ続く扉を開ける。暗くて狭い地下室へ入ると、足元にランタンを置いた。

室内の気温がずっと下がり、壁から黒い影が滲み出てくる。

どうして

再び、あの声が聞こえてきた。黒い影は昨日のように勢いよく迫ってくることもないが、イッサに

にじり寄ってくる。

けれど、イツサはもう防御魔法を使わなかった。

影がイツサの素肌に触れる。触れられた箇所は、じりっとした鈍痛が走った。

どうして、じゃま、した、あのお、んな、は、ころ、さ、

「だめだよ、ジャック」

昨日と同じ言葉を繰り返す。

「あの人は、裁かれるべき場所で裁かれるから。ちゃんと裁かれるから。あなたは、だめだよ」

苛立ったように影がイツサを這い、痛みも広がっていく。

「ポピー」

イツサの頬を透明な流れがつつたつた。

影の動きが止まる。

「お母さんが好きな花だったんだよね」

語尾が嗚咽で滲んでいた。

耐えきれずイツサはしゃがみこんだ。涙が溢れて止まらない。

「ごめんなさい」

私が泣いて、ごめんなさい。

ここに来たきっかけは何だっただろう。

使い魔。可愛く着飾れる使い魔がほしかった。そんな理由。

殺してやりたい。こんなくだらない自分。

少し想像すれば分かったはずだ。還るべき所へ還らなかった理由を。生者に干渉してしまえるほど強い意志をもった理由を。その意思が形を成し、他者を傷つける悪意にまみれてしまった理由を。

大切な人に、守られるべき人に、殴られ続ける痛み。

見ているだけで背筋が凍るあの苦痛をずっと受け続けていた、たった十二歳の少年。その痛みのひとかけらすら想像せずに、私はただ面白がっていた。

ああ、だから先生はここへ来させたのか。だからロイドさんはついて来させることを渋っていたのか。私が人の痛みも想像せず、状況を楽しむだけの子供だったから。先生は思い知らせるために。ロイドさんは浮ついた私を関わらせないために。

「だって、惨めじゃないか」

イツサのものではない、頼りなげな声が響く。

その声に顔を上げると、写真で見たままの少年が一人、ぽつんと立っていた。気付けばイツサに触れていた影も消えている。

「駄目になっちゃうと思ってたんだ」

自分のつま先に視線を落としながら、少年は言葉を紡ぐ。

「父さんがいなくなってから、母さんはいつも不安定で。俺を殴ってなきや自分を保てなくて駄目

「なっちゃうんだと思ってた。でも実際は違って。母さんは俺が死んだら怯えて逃げて、すぐるあてもあったみたいだ。俺はいらなかった」

少年は泣かない。

「惨めじゃないか。実際は必要なかったのに、あんなに殴られて、でも憎めなくて。笑ってほしくて。結局殺されて捨てられたのに、嫌いになれないなんてさ、」

惨めじゃないか。

重ねられる言葉に、イッサはただただ首を横に振り続けた。

勝手なことを言うなど怒られるかもしれない。お前に何が分かるのかと、憤られるかもしれない。

それでも、否定しなくてはならないことを、イッサは理解していた。

「だから母さんを恨んで、殺して……」

そこで、初めて少年の言葉が力なく途切れた。自分の両の手をぼんやりと見つめる。その手は透けて向こうが見えていた。

「殺す……そっか。俺、死んじゃったんだったな。死んだら、もう何も意味ないんだな」

どこか穏やかさを秘めた声は、イッサの嗚咽に紛れて消えてゆく。

もう二度と生き返ることがない半透明な少年の前で、イッサは零れる涙を止められはしなかった。

どれほどの時間、そうしていただろう。

嗚咽が途切れだした頃、ジャックはイッサに問いかけた。

「君の名前を聞いてなかった。君はどうしてここに来たの？」

イッサは顔を上げる。真っ直ぐ自分と目を合わせるジャックを見て、手の甲で涙を拭いて立ち上がった。

「私はイッサ。イッサ・シアン。魔法使いの弟子なんだ」

「魔法使い？ ああ、だから」

これまでの事を思い出したのか、少年は腑に落ちた顔になる。

「魔法使いがどうしてこの町へ？ 俺が騒ぎを起こしたから？」

「それもあるけど」

ここから先を、言ってもいいのだろうか。

使い魔などと、自分勝手に、彼からすれば戯言のような話を。

もう自分の興味だけを優先させた軽々しい言動も行動も、イッサはしたくなかった。

しばし迷った後、言葉を選びながら慎重に口を開いていく。

「あなたはさっき、死んでしまったら何も意味がないと言ったけど、もしかしたら私は、一つだけ意味を渡せるかもしれない」

真っ直ぐな瞳が、きよとん、と瞬く。

「もし、もしあなたがそう望むのならの話だけど、私の使い魔になりませんか」

「使い魔？」

「平たく言えば契約を交わして、魔法使いが魔力を対価に力を借りてずっと一緒にいる存在、かな。ああ、でも勿論あなたの意志が一番大事だから、無理になんて言わないよ。幽霊の使い魔の前例は知らないから成功するかも分からないし。どっちにしたってあなたの身体は私が責任をもって埋葬するし、多分今のあなたなら還るべき場所にだってちゃんと還れるから、」

「いいよ」

何を焦っているのか言い募り続けるイッサを遮って、少年は了承の意を示した。

自分で言い出したにも関わらず呆気にとられるイッサを見て、その表情に初めて笑顔が浮かぶ。

「いいよ、使い魔になっても」

「っいや、そんな消極的な姿勢なら即決しちゃだめだよ。よく考えて」

「じゃあ、使い魔になりたい。させて」

「……。本当に？」

「いいよ」

「成功するかも分からないけど」

「失敗したら、還るだけだよ」

少年らしい無邪気な笑顔に、イッサも肩の力が抜けていく。

「分かった。ありがとう。やってみよう」

イッサは掌を少年に向けて差し出す。

「そうだ、名前はどうか。ジャックって名前はそのままでも良いし、使い魔として新しい名前を渡すこともできるけど」

少年は、一瞬だけ目を細めてどこか遠くを見つめる。応える声に迷いはなかった。

「新しい名前がいい。イッサからもらいたい」

イッサは彼と出会った、ほんのここ数日の出来事に想いを馳せた。そして、頭の中に言葉が浮かぶ。

。

思いやりと眠りを司る神の名。

「これからよろしくね、ヘムエル」

幽霊の少年と魔法使いの少女の手が、重なった。

夜の帳が落ち、月明かりが差し込む廊下を、空色をしたうさぎのぬいぐるみが歩いている。

ヘムエルは主人の仕事部屋に向かいながら、ふと彼女と出会った時のことを思い出していた。

今思い返してみれば、幽霊を使い魔にするなどと良く成功したものだと思う。実行する気になった彼女も彼女だ。

ヘムエル自身はどうだっただろう。正直、あの時は使い魔になってもならなくてもどちらでも良かったように思う。それでもすぐに了承したのは、多分、自分と一緒にいることを望んでくれる人がいたことが嬉しかったのだ。

ジャック・オリバーとして生きた短い十二年間をヘムエルは覚えている。しかし、それはもう過去というよりも、遠い昔に読んだ物語のようだ。

ジャック・オリバーは確かにあの日、死んだのだ。

もう自分はヘムエル以外の何者でもなかった。

光が漏れだす扉の前に辿りつく。そっと中を窺うと、無人の仕事机の上でランプの灯りだけが、作業を中断された道具たちを照らしている。部屋に滑り込んでソファを覗き込むと、彼の主人がその上



で寝息を立てていた。

「だからベッドで寝ろって、いつも言ってるのにこの人は」

眩きながらも、ヘムエルは毛布を横たわる体にかけていった。

穏やかな寝顔にかかる髪をそっとどけてやる。

「おやすみ、イツサ」

ランプの灯りが落とされた。

# パルティール考古堂営業報告書（幼夏）

## パルティール考古堂営業報告書

幼夏

今年のコスモスは、随分とあわてん坊らしかった。蕾をつけるのも早かったが、開花はなお一層早い。例年に比べて一週間は早いように思われた。「パルティール考古堂」の古めかしい建物は、早咲きのコスモスに囲まれて、ひっそりと谷風に吹かれていた。人里離れたこの場所は、足を運ぶだけでも相当骨が折れる。ここに訪れるのは、余程の骨董品マニアか、もしくはパルティール考古堂「本来の業務」を知るものだけだろう。

店舗を構える一階に降りると既に、我らが店主、バシラス・サブティリーが静かに座っていた。

「店長、おはよう」

「はい、おはようございますベニス嬢。今朝は随分と女性らしい趣ですね」

「どうも。店長も、今日は随分かしまった格好ね？」

「ええ、今日はお客様がいらっしゃるのです」

私は、彼が「お客様」という一語を強調したのを、聞き逃さなかった。彼は「お客様」を迎える日特有の、無機質な微笑みを浮かべる。

「それにしたって、今日は早すぎるんじゃない？」

「いえいえ、ベニス嬢。御覧なさい、もう九時ですよ」

彼が指差した先には、大きな置時計が鎮座していた。針の先まで装飾が凝られていて、見にくいことこの上ない。

「店長。あの時計、ずれてるのよ」

「ああ、本当ですね。隣の時計はまだ七時を指していますね」

「その隣の時計は六時を指しているわね」

彼は黙り込んでしまった。

「正解は六時半よ。私の腕時計は、ここにあるガラクタとは違って精密だから。やっぱり電波時計が一番ね」

「ガラクタではありません。ここの時計は、僕が週に一度は合わせています。少しずつ、ずれが大きくなっていくだけで」

「そう、まるで生き物ね？」

私が笑うと、店長はむくれて、そっぽを向いてしまった。

「店長、あの時計は動いてさえいないわ」

私の目線の先には、店内で一番大きな振り子時計があった。いつも大きな音を立てて針を動かしているというのに、今日はやたらと静かだ。

「そうでした、そうでした。中の振り子が動かなくなっているんです。僕ではどうしようもありませんでしたので、ベニス嬢、貴方が何とかしてくださいませんか」

「私？ 私にそんな技術はないわよ」

「いいえ、僕よりずっと上手にできるはずですよ。さあ、どうぞ」

店長に促されるまま、振り子時計へ近づいていく。ひしめき合うように並んだ古美術の数々を避けながら、何とか振り子時計の前にたどり着いた。飾りガラスの反射が邪魔で、近づくまで振り子の様子は見えなかったが、目の前に来ると異常が一目でわかる。中に何か大きなものが入っているのだ。振り子はそれに抑えられて、動かなくなっている。私は躊躇うことなく、振り子時計の前扉を開けた。

「うわ」

つい、声が出た。振り子時計の中に入っていたのは、あどけない少女だったのだ。真っ白のふんわりとした髪が腰まで伸びている。太い眉も色が白く、白い肌に溶けていた。小刻みに震え、怯えたようにこちらを覗き見るその姿は、小さな仔ヤギのようだった。どこかの国の、古いおとぎ話を思い出す。

「店長、これ……」

「僕とは目も合わせてくれませんでした。流石ですねベニス嬢」

「流石も何も……」

少女の扱いには慣れていない。年は十二、十三程だろうか。私はぎこちなく屈んで、視線を合わせた。

「お嬢さん、お名前は？」

「……グリシア。グリシア・ストレプト」

か細いが愛らしい声だ。

「グリシア、そこから出ておいでよ。お姉さんがモンブランをあげよう」

「モンブラン……！」

少女の目の色が変わった。食べ物につられるとは、警戒心がなさすぎる。先ほどまでの怯えはどうしたのだろう。グリシアは振り時計から飛び出し、両手を広げた私の胸の中に、飛び込んできた。

「……かたいです」

「うるさい」

グリシアの頭を小突く。それでもグリシアはなんだか嬉しそうだった。そんなにモンブランが魅力的だったのだろうか。

「ベニス嬢、モンブランなんていつ買ってきたのです」

「昨日の仕事帰りよ。珍しく食欲があったから、買ってきたの。いざ箱を開けたら、気分が悪くて食べられなかったけど」

「僕の方は……」

「ないわ。店長、いつも私の分まで食べちゃうじゃない？」

店長がしょんぼりと肩を落とした。

\*\*\*

「ごちそうさまでした！」

グリシアは満面の笑みを浮かべた。先ほどまで、時計の中で小さくなっていたとは思えない快活さだ。馬鹿なのだろうか。

「グリシア、貴方どこから来たの？」

「お肉工場です」

「お肉工場……？」

不審に思って店長の方に目をやると、それに気が付いたようでにこりと笑った。

「お察しの通りです。先週の依頼元、畜産農家の馬小屋で見つけました」

なるほど、お肉工場とは言いえて妙だ。先週、「依頼」をしてきた畜産農家の主人夫婦は、養鶏・養豚に加え、屠殺から食肉加工までをこなしていた。工場といっても過言ではない規模だ。

モンブランを乗せた皿を下げようとしたとき、店舗の表扉が勢いよく開かれた。古びた飾り扉は軋んだ音を立て、強くひねられたノブは叫び声をあげた。

「いらっしやいませ、『お客様』」

店長は立ち上がり、深く礼をした。

「急いでくれ！ とにかく、急ぎなんだ！」

飛び入ってきた客人は、見るからに頭が悪そう。柄も言葉遣いも悪い。着崩されたタキシードは、この男のだらしなさを映し出す鏡のようだった。

「お客様、どうか落ち着いて。こちらへお座りください」

客人は、差し出したソファーに腰掛けた。腰掛ける、という表現は妥当ではない。その勢いといったら、まるでヒップドロップだ。ソファーを破壊する気だろうか。

扉が再び開いて、申し訳なさそうにもう一人男が入ってきた。こちらはどうかやらまともな人間のようで、近づいてきてまず非礼を詫びた。どうやら、「依頼主」の執事か何かのようだ。

「なぜ謝る。俺が何か悪いことをしたとでもいうのか？」

「いいえ、坊ちやま、これは……」

「お口を挟んで申し訳ございませんがお客様、お急ぎの用でしたら、お先にご用件を」

店長が割って入った。客人は少し不満げな顔をしたが、本当に急いでいるようで、すぐに本題に入

った。

「スタフィズ・アウレウスを殺してほしい」

彼は自らの両膝に肘をかけ、手を組んで前のめりに話し始めた。名乗るより先に『依頼』内容を口に出すとは、そうとう焦っているらしい。

「詳しくお聞かせ願えますか、エスキア様」

「コリーでいい」

「それでは、コリー様」

「どうやら店長——いや、依頼が来た以上、今の彼はボスと呼ぶべきか——は、客人の名前を知っていたらしい。コリー・エスキア。随分と高級な装飾品を身に着け、執事を連れている割には、聞かない名だ。私の隣できょとんとしているグリシアに、

「奥の部屋で待っていて」

と耳打ちし、遠ざけさせた。これから先の話は、子供に聞かせるものではない。

私たちの本来の業務は「暗殺屋」だ。

その実態は、わずかな富豪とその関係者の間で、口伝されるに限られている。「仕事とあれば、莫大な資金と引き換えに、女子供でも容赦なく始末する」それが、パルティール考古堂なのだ。

コリーは息を荒げて話を続ける。

「今夜、アウレウス公爵家で、爵位相続の披露パーティーが開かれる。相続するのは、第四子であるスタフィズ・アウレウスだ」

「あら、先代のアウレウス公はまだ亡くなっていないでしょう。もう相続するのね」

「公表されていないが、爺さんの先はもう長くない。長男・次男は死に、三男は病弱で役に立たない。自分の目が黒いうちに、健康な末の息子に相続したいんだろう」

「今夜のうちにスタフィズ・アウレウスを暗殺し、相続を阻止したい、と」

「そういうことだ」

「それは構いませんがコリー様。費用の方はどちらからご用意されますか？ お安くはありませんが」

ボスは、請求書に値段を書き込んだ。ハイリスクな依頼だからか、いつもより随分と高い。庭付きの豪邸が二、三は建つだろう。請求書の額をみたコリーは、随分と落ち着いた様子で、笑みさえ見せた。

「大丈夫だ、このくらい。奴さえ死ねば、俺には莫大な資産が転がり込んでくる」

「どういうことなの？」

「聞いて驚け、俺は、アウレウス公の愛人の子なんだ」

アウレウス公爵は、愛妻家の君子として有名だ。愛人がいたとは信じがたい。しかし、彼の身に付けている装飾品の数々からして、どうやら嘘ではないらしい。

「爺さんは、血のつながりを重要視している。不健康な第三子に相続させないのも、血が絶えることを恐れているからだ。正妻の子が誰も駄目となれば、健康な俺に話が回ってくることは間違いない」

「そうですか、ならば安心です」

ボスはほほ笑んだ。

「それでは、依頼を受ける前に、いくつかお約束をしてください。ベニス嬢、契約書を」

隠し底の引き出しから、契約書を取り出しボスへ渡す。

「お約束は二つだけです。一つは、料金は確実に支払うこと。もう一つは、以後あなたの依頼を私たちが受けないことに、異論を申し立てないこと。よろしいですか？」

「一つ目は当然だが、二つ目は初耳だ」

「おひとり様につき、暗殺対象は一人。一生に一度限りとさせていただきます」

「そうか、わかった。サインしよう」

コリーは、契約書にペンを走らせた。

「もしお約束を破られた場合は、責任を取っていただきます」

「責任.....具体的にはなんだ」

「こちらの裁量で決めさせていただきます。しかし簡単なことです、約束を破らなければよいだけの

ことですから」

「.....それもそうだな」

コリーは、「よろしく頼んだ」とだけ言い残し、考古堂を後にした。執事も急いで後を追う。コスモス畑の間を縫って、よく磨かれた高級車が遠ざかって行った。

「今晚か、随分と急ね」

「予定が早まったのかもしれませんがね。先日お電話をいただいたときは、ああも焦ってはいませんでしたから」

「今から出ても、パーティー前の暗殺は無理そうね。スタフィズ・アウレウスの所在や動向も分からないし」

「そうですね。パーティー会場内での暗殺になってしまいます。失敗は許されません。ラクトも動員しましょう」

ボスは、店内に置かれている古い電話の受話器を取った。内線三番。ボスが打った瞬間、二階からけたたましい呼び鈴の音が響いてきた。

「相変らずうるさいわね.....。これを間近で聞いたら、鼓膜が破れるんじゃないかしら」

「ラクトはこうでもしないと、起きて来ませんからね」

二階で扉を開け放つ音がしたため、ボスは内線を切った。どたばたと階段を降りる足音が聞こえてくる。そしてその直後、奥の部屋から「うわあああ」と少年のかわいらしい叫び声をした。

「ああ、そうか、階段下の小部屋にはグリシアがいたわね」

「小心者のラクトには少し刺激が強すぎましたかね」

二人でにっこりした。奥の部屋——階段下の小部屋の戸が、勢いよく開かれた。

「ううう動くでっかい人形が！　そこに！　バシラスさんついに呪いの人形を入荷したの！」

目を白黒させている少年が、焦りすぎて眼鏡を床に落とした。彼はラクト・ガルビエ。満十歳、乱視持ちである。

「よく見てごらんなさいラクト。彼女は正真正銘生身の人間です。こんなに大きく精巧なドール、あるなら欲しいものです」

ラクトは落ちた眼鏡を拾い上げ、かけなおしてグリシアを見つめた。

「ほ、ほんとだ.....。おれをびっくりさせるとは、なかなかやるね！」

グリシアはただきよとんとしている。

「ラクト、遊んでいる暇はありません。お仕事です」

ボスのその声を聴いて、ラクトが向き直った。

「おれを、こんな時間に呼び出すってことは、つまり——」

「そうです。場所はアウレウス公爵家のパーティー会場ですよ」

「パーティー？　そんな人の多いところで.....」

ラクトがごくりと唾を飲んだ。

「大丈夫です。策はあります。グリシア、貴方にも働いてもらいますよ」

「わたし、です？」

グリシアが目を見開いて驚くより早く、私の右手は机を叩いていた。

「何言ってるのボス！　グリシアは一般人よ！」

「ベニス嬢。僕が采配を誤ったことがありましたか？」

「それは、そうだけど、でも.....」

グリシアは「お仕事？　お仕事ってなに？」とラクトに訪ねている。ラクトは何も言えずに黙っていた。

「ラクトと対して年も変わらない、女の子なのに.....」

「グリシアは今年十七になる立派な『女性』ですよ」

「十七？」

そうは見えない。話し方からすればその半分の年齢でもおかしくはないくらいだ。十分な教育を受けられなかったのだろうか。

「彼女は、先日の依頼で、私たちが殺すはずの人間でした。一度死んだも同然です。今回の依頼には

彼女の若い容姿が役立つことでしょ？」

「グリシアは、遺児じゃなくてターゲットだったってこと？」

「はい、そうですよ」

先日、大型畜産農家の主人から受けた依頼は、長女の殺害だった。十六歳の長女は、長年子供が出来ないことに悩んだ夫婦が、十年前に貰ってきた里子だという。不思議なことに里子をもらって程なく、三人の子供に恵まれた夫妻は、長女が邪魔になった。長女には障害があり、扱いに困っているとも言っていたのを覚えている。気分の悪い依頼ではあったが、仕事だからと引き受けた。しかし、依頼を受けた日の夜、その夫婦と長女は行方不明となる。ここらでは有名な資産家夫婦の失踪事件として、新聞にも掲載された。依頼主もターゲットもいなくなったことで、依頼は無効となったのだ。

「でも、確かあの時のターゲットは、赤毛にグレーの瞳の女の子だったような」

「人は、ショッキングな出来事を前にすると、髪が退色してしまうと言います。恐らく、色が抜けてしまったのでしょうかね」

義理とはいえ、両親の失踪が、あまりにショックだったのだろう。馬小屋で怯えながら小さくなっていた姿を想像すると、いたたまれなくなった。知的発達が遅れがある里子だとしても、純粹に両親を信じていたグリシアを、殺害しようだなんて。姿をくらました夫婦に怒りを覚える。自らの手を汚さないよう、外部に依頼するところも気にいらぬ。

「かわいそうに」

私はグリシアを抱きしめた。

「ベニス、胸がかたいです」

「まだ言うか」

私は再びグリシアを小突いた。

「それでは皆さん、作戦会議を始めますよ。一時間後に出発です。町までは距離がありますからね」

\*\*\*

パーティー会場となる公爵家には、既に人が集まり始めていた。アウレウス公爵家に集まる車は、どれも必要以上に長く、車高が低い。爵位を持ったからには、目立たなければならないという法でもあるのだろうか。グリシアと私は、屋敷の裏手に広がる林の中に息を潜めていた。

「こんな早い時間から、随分暇なのね」

私は思わず呟いた。すると耳に予めつけてあった通信機から

『彼らは、酒を酌み交わし、心にもないお世辞を言いあうのがお仕事なのですよ』

というボスの声が聞こえてきた。

「通信機の調子はいいみたい」

『そのようですね。グリシアの調子はどうです』

「やっとヒールで歩けるようになったところ。今からお化粧よ」

『急いでください、会場に潜り込めるのは、今から三十分後、果物の運び入れが行われる時間帯のみですから』

「分かってるわボス、心配しないで」

隣でぐったりとしているグリシアに目をやる。どうやら、ウォーキングの練習が余程疲れたらしい。

「ベニス、この靴、まだ脱いではいけないです？」

「だめ。今晚はずっとその靴よ。あと、会場に入ったら決して口を利かないでね」

「はい、大丈夫ですベニス」

グリシアは物分かりがいい。言葉遣いに癖があるが、会話に難はない。障害があるようには全く見えなかった。

グリシアには、薄手のワンピースを着せてある。この後控えている早く替えに、これほど適したものはない。

「グリシア、私がよしと言うまで、目を開けないでね」

「はあい」

私は化粧箱を静かに開く。化粧が、私にとって唯一の特技だ。グリシアを出来るだけ幼い顔立ちに

仕上げていく。ベースがあどけなく白いため、そう時間はかからない。少し強く頬紅を差すと、まるで十に満たない子供のような面持ちとなった。

ラクトの収集した情報によれば、ターゲットであるスタフィズ・アウレウスは、幼女趣味らしい。彼の別宅で働くメイドは、全員十二歳以下なのだそう。寒気がする。

「よし、目を開けていいわよグリシア」

「くすぐったかったです」

「顔を触ってはだめよ、約束ね」

私自身は化粧をしない。それは私の顔が華やかだからではない。私の顔に特徴がないからだ。整っているが、これといった特徴がない。私の顔を一度で覚えられる人間などいない。ここ二十数年の間に出会った人間で、どんな顔の私も私として認識できるのは、ボスただ一人。この「覚えにくい顔」こそ私の武器だ。

『もうすぐ時間ですよベニス嬢』

耳元で、ボスの声がある。

「そうね。グリシア、さあ中に入って」

私は、グリシアに優しく声をかけて、彼女を箱に詰めた。

\*\*\*

『フルーツショップのトラックが屋敷に近づいてる。トラックは想定通り七台だね。恐らく台車は二十一台だ』

ラクトが通信機越しに状況を伝える。

「ラクト、今どこから外を見てるの？」

『おれはもう建物の中だよ』

「いいわね、小さいと侵入が楽で」

『本当に楽だと思うなら、ほこりまみれの屋根裏を通ってみてよ。さっきネズミに足をかまれたんだぞ』

ラクトは本気で怒っているようだが、エピソードに緊張感がなさ過ぎて笑ってしまう。

私は、冷蔵四輪台車の持ち手を強く握る。中にはグリシアと、この後使用する着替え数点が入っている。これは、今日ここに果物を運びに来る果物屋が、先月まで使っていた台車だ。冷蔵機能が壊れてしまっているが、中にグリシアを入れる都合上、寧ろ好都合である。

果物屋のトラックから、台車が姿を現す。目の前を通り過ぎる従業員を眺め、タイミングを伺う。全員視線が外れたその瞬間、私は台車を押して、堂々と群れに混ざった。

厨房に繋がる裏の戸口から、列に紛れて屋敷に侵入する。

『入ってすぐ、左に折れて。冷凍室の脇に、外掃除用の用具入れがあるんだ。鍵も監視カメラもない部屋だから、入るには問題ないけど、誰でも入って来られるから着替えは早くね』

小さな体と地獄耳、そして何故かやたらと広い友人の輪が、ラクトの武器だ。誰よりも先んじて動き、諜報活動を行うという、重要な役割を担っている。心の中で彼にお礼を言って、言われた通り左に折れる。果物の運び先は第一厨房・第二厨房・冷蔵室とばらばらである。冷凍室の方向へ向かう私たちを、怪しむものはいなかった。

「グリシア、出ておいで」

台車の上蓋を開けると、グリシアが目を回していた。無理やり引きずり出すわけにもいかないため、自分の支度を優先する。薄暗く狭い小部屋ではあったが、着替えには十分なスペースがあった。

ちょうど私の着替えが終った頃、ようやく目を覚ましたグリシアが、むくりと体を起こして台車から出てきた。

「ひう！ だ、誰です……！」

彼女は私を見るなり、しりもちをついて腰を抜かした。

「私よ、私。ベニスよ」

「ベニス……？」

訝しげな眼で私を見つめるグリシア。信じられないのも仕方ない。私の化粧をした私の顔は、すっぴんのそれとは似ても似つかないのだから。そんな彼女を、強く引き寄せて抱きしめた。

「このかたさ.....ベニスです」

「分かってくれてありがとう。でもグリシア、小さな胸だって、役に立つことはあるのよ」

「ベニスの胸は、小さくないです。全くないです」

今日一日で何回目だろうか、私は彼女を小突いた。ボスとラクトの笑いを堪える声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

胸に詰め物をし、インソール入りのパンプス型ハイヒールを履けば、豊満なバストを有する高身長淑女に早変わりだ。グリシアにはインナーコルセットつけ、きつく縛った。

「苦しいですベニス」

「我慢して。あと、もう決して喋らないで。お里が知れるわ」

帰り用の薄手の着替えとメイクセットを布で包み、グリシアの腰に括り付ける。その上からチュチュドレスを着せれば、荷物を入れているとは思えない自然さだ。忘れ物がないか、台車の中を確認すると、見覚えのない包みを見つけた。白い布に何か硬いものが包まれている。

「ボス、この硬いものは何かしら」

『ああ、それも大切なアイテムです。一度開封すると再び包むのは難しいので、そのままグリシアに持たせておいてください』

「ふうん.....？」

よくわからないが、これもグリシアの腰布の中へ入れた。グリシアは重そうな顔をしたが、決してそれを口には出さない。お利口さんだ。

『ベニス、そろそろいい？』

「ええ、大丈夫よ」

『標的がメイン会場である大広間に出てくるのは、パーティーが始まってからで間違いはないよ。それまではおそらく、この屋敷で一番大きな控室、三階の「アネモネの間」と呼ばれる部屋にいるだろうね。扉にアネモネの彫刻がされているはず』

扉の一つ一つに異なった彫刻を入れるなど、美的センスのかけらもない。ただ、金のかかる工夫を凝らし、人に見せびらかしたいだけの様に思える。

「グリシアをうまく使って、彼を誘き出せばいいのね？」

『誘き出す先は、同じ三階にある「トラの間」だからね』

「その扉にもトラの彫刻があるの？」

『いや、扉の彫刻はバラだよ。中一面に敷いてある絨毯が、トラの血だけで染められた希少なものだから、そう呼ばれるんだってさ』

「悪趣味ね」

『悪趣味だね』

血染めの絨毯なんて、色も肌触りも最悪に違いない。トラの無駄遣いだ。トラの血も人の血も、大して変わらないだろうに。

ラクトから、脱出の合図が来るのを待っていると、小部屋の扉がゆっくり開かれた。まずい、人だ。

「きゃあ！ ど、どちらさまですか.....！」

現れた人物の顔を見て安心した。ただのメイドのようだ。彼女は何も知らず、ただ掃除用具を取りに来ただけなのだ。

「まさか、私が誰だか分からないのですか？」

「い、いえ決してそんなことは.....！ 申し訳ございません。パーティー会場はこちらです、ご案内します」

学のない使用人は簡単で良い。彼女らが知っているのは、自分がものを知らないことだけだ。本物の貴族の妻や娘が、このような屋敷の隅でかくれんぼに興じているとでも思っているのだろうか。人のことをとやかく言える立場ではないのだが、嘘やはったりを見抜く力くらいは身に付けておくべきだろう。

会場まで、十分は歩いたと思う。この屋敷は広すぎる。

「こちらでございます。先程は本当に申し訳ありませんでした」



私は彼女を無視して歩き出した。多くの貴族のメイドに対する態度は、こんなものだ。使用人控室が、悪口大会の会場になってしまうのはこのためだ。それに、正直な話、私自身もお里が知れることを恐れていた。

『ベニス、聞こえてる？ おれもパーティー会場の屋根裏に移動したよ。聞こえていたら、目の前の女性サーバーから、赤のワインを受け取って』

ラクトの指示に従い、サーバーからワインを受け取った。パーティー開始までまだ一時間はあるというのに、参加者たちは随分と酔っていた。調度品やワインの薄っぺらい批評、娘息子の自慢話、くだらない講釈で、会場内は充ちている。誰もお互いの教養不足気が付かない。自分の知識が足りていないから、相手の話の間違いに気が付けないのだ。本当に価値の分かる人間は、ただ黙って良いものを選びとり、静かに酒を飲んでいて。しかし悲しいことに、そういった人間は、浮かべている微笑みの奥に、人を見下す目を持っている。

『ベニス、グリシアと決してはぐれないようにしながら、会場の端までゆっくり移動して。怪しまれないように気を付けてね。奥の扉から、三階まで上がれる階段に行けるから』

私は合図代わりに、赤ワインを飲み干した。私の隣で、グリシアは歩きにくそうにしている。歩くと、彼女の白髪がふわりふわりと空を泳いだ。

会場の端まであと十数歩、というところで、予想外の出来事が起きてしまう。

「いやあ、今日はいい日ですねえ。お初にお目にかかります、ご婦人。本日はどこから？」

見知らぬ男性に話しかけられる。派手な白のタキシードには、とある子爵お気に入りの、ユリの紋が入っている。随分と若い。数多くいる孫の一人だろうか。無駄話に割ける時間などないというのに――焦りが汗となって首の裏を伝う。

「さて、どこでしょう。当ててください？」

「ううん、そうだなあ……この辺りではなさそうだ。僕がこんなにお美しいご婦人を、見逃すわけはありませんからね。子連れていらっしゃるのが何とも残念だ」

口説き方が雑だ。こんな軽薄な男に尻尾を振ってついていく女がいるとするなら、それは彼の纏ったユリの紋に強く惹かれる身分の低い者だろう。そういう女性は、彼の背後にあって決して彼自身でないものに、恋をしている。

「娘さんはおいくつですか。まだ幼いご様子で」

「今年、十になりますわ。ほら、グレイセス、ご挨拶なさい」

グリシアの背中を軽くたたき、お辞儀を促す。彼女は練習したとおり、深くお辞儀をする。

グリシアの腰が垂直にまがった途端、ごとりと何か落ちる音がした。先ほどグリシアの腰に入れた、やや重い包みである。

「おや、なにか落とされましたか」

男性は包みの端を掴む。これを持ち上げると、荷物の包みがするすると解け、中身が姿を現した。

「うわああ！」

子爵の孫は、幽霊でも見たかのような、情けない叫び声をあげた。荷物の中身――それは、鋭く光る、立派な肉断ち包丁だったのだ。

叫び声を聞いた人々の目が、こちらに集まる。

「ふ、不審者だ！ 捕まえろ！ 刃物を持っているぞ！」

男は大声をあげる。グリシアは、肉断ち包丁を拾い上げ、脱兎のごとく走り出した。ほとんどの人間は呆然としていたが、ごく近辺にいた者は、逃げるグリシアの背中を捉えたようだった。

「待ちなさい！」

私はハイヒールを脱ぎ捨てる。私の伸長は二十センチ縮み、にわかに人々の視界から消えた。ほとんど四つん這いになりながら、人混みをかき分ける。

「あっちだ！」 「誰か早く！」 「警備兵はどこだ！」

まずい、まずい。騒ぎが大きくなってしまふ――！ 誰かの大きな手が、うまく走れない私の腕をひしと掴んだ。私の喉から、声にならない吐息が漏れる。失敗、したのか――？

その瞬間、会場の電気が落ちた。

突然の停電のためか、にわかにパニックが伝染する。会場中に、群れを成した小鳥のような喚き声

が反響した。

「僕です、ベニス嬢」

耳元でささやく声。ノイズのないその声は、通信機越しのものではなかった。

「ボス……！」

「早くグリシアを追ってください。彼女も阿呆ではありません、扉の方向に向かったことでしょう」

私は頷く。ありがとう、ラクト。通信機に入るギリギリの声で、呟いた。返事はなかったが、電源ケーブルを切った特大ペンチを片手に、照れ笑いをする彼の姿が、見えたような気がした。

\*\*\*

扉の向こうは長い廊下になっており、床一面に真っ赤な絨毯が敷かれていた。毛足の短い絨毯に、グリシアの下手くそなヒールウォークの跡が残っている。どうやら彼女は、右のかかとに不必要な力を加えて歩いているらしい。絨毯上に、わずかなヒールの跡が残っていた。

ヒールの跡を消しながら、彼女の後を追った。階段を上り、三階にたどり着く。どうやって見つけたのか分からないが、彼女は鍵のかかっていない部屋へ逃げ込んだようだ。

ゆっくりと戸を開くと、包丁を握りしめてへたり込んでいるグリシアの姿が見えた。小刻みに震えている。私は近づいて、グリシアを抱きしめた。

「もう口をきいてもいいわよ」

「……やわらかい。ベニスじゃありません」

「そうね。今は遠くの町から来た謎の貴婦人だもの」

私はゆっくりと彼女の頭を撫でる。そして太ももに携えてあったハサミを取り出し、白い髪をバツサリと切り落とした。

「ひ、あ！」

グリシアが、驚きのあまり言葉を失っている。

「ウィッグをかぶせるには、量が多すぎるわ」

肩口に髪が降りない長さまで、容赦なくハサミを入れる。短くした髪はすべてネットの中にまとめて、ブラウンのウィッグを被せる。帰宅時用に用意してあったものだが、仕方ない。彼女の白い髪は、あまりに多くの人間に触れすぎた。

「剃刀を当てるから、絶対に動かないで」

おとなしく目を閉じたグリシアの眉を、剃り落す。すべての毛は、裾を広げた私のドレスに零れ落ちていった。少し乱暴ではあるが、剃りたての肌にコントロールカラーを乗せ、ベースメイクでごまかしていく。天然ウィッグの茶色に合わせてアイブローを引き、眉を作った。ブルーのカラーコンタクトを入れると、先ほどと同じ人間には見えないほど印象が変化する。グレーの瞳に、深い青はよく馴染んだ。髪と瞳の与えるイメージの力は強い。マスカラも一段暗い色へと変え、重ねつけた。

「完成。ラクト、お願い」

私はドレスを脱ぎ、グリシアの毛ごと丸めた。グリシアからチュチュを剥ぎ、ドレスとともに布に包んできつく縛る。

「人使いが荒いなあ、おれの荷物だって軽くないんだぞ」

「ありがとうラクト、助かるわ」

屋根裏から顔を出したラクトは、げんなりしていた。彼は、私が預けていた荷物と大きな工具箱を担いで、屋根裏を移動しているのだ。正確には屋根裏ではなく、床と天井の間にある、わずかな配線スペースだが、疲れのないわけではない。

布に包まれたドレスたちをラクトにトスすると、代わりに別の荷物が落とされた。

「ありがとう」

お礼を最後まで聞かずに、ラクトは天井の穴を閉めた。荷物に入っていた新しいスカートは、茶髪になったグリシアにぴったりだ。私の方は、タキシードを羽織る。化粧を直すと、たちまち青年執事の容貌となった。

時間がない。スタフィズ・アウレウスに広間の騒ぎが伝われば、早めに部屋を出してしまうかもしれない。もう包丁をグリシアに預けておくわけにはいかないため、私がこれを預かった。

「さあ、行くわよグリシア。声を出さずに、標的をトラの間に誘き出すの。いいわね？」

グリシアは大きく頷いた。そして私より一歩先を歩き、一足先に部屋の外へ出ていく。扉の向こうに踏み出したグリシアは、その場で立ち止まってしまう。

「どうしたのグリシア？」

私がそう言いかけたところで、外から男の声が聞こえた。

「おやおや、迷子かい」

不思議だ。こんなにも優しげな口調なのに、どうしてこんなにも寒気がするのだろうか。いやらしさが、にじみ出てしまっている。今廊下にいる男が、スタフィズ・アウレウスだ——私は確信した。彼がグリシアを迷子として認識した以上、私が姿を現すのは得策ではない。廊下側から見えないように、私はそっとグリシアの背中を押した。

「パーティーに来たのかな？ パパやママはは？」

「そうかそうか、はぐれてしまったんだね、かわいそうに」

「私が、パパとママを探してあげよう」

「こっちへおいで、怖くないよ。お菓子もある。おいで……」

グリシアの乱れた足音が伝わって来る。彼に強く手を引かれているに違いない。彼が、お気に入りのトラの間に、グリシアを連れ込むことは間違いない。開錠の音を待った。

がしゃん

錠の落ちる音がした。

「そんな、まさか——！」

廊下へ飛び出すと、既に二人の姿はない。廊下には静寂だけが居座っていた。トラの間の鍵は、最初からしまっていてなどいなかったのだ。廊下に敷かれた絨毯は、扉の開閉音をも吸い取る力を持っていた。ラ彫刻の扉に駆け寄り、ノブを捻って強く引くが、びくともしない。

「グリシア！」

私に鍵開けのスキルはない。それから数分の間、扉をたたくことしかできなかった。私は手元の肉断ち包丁を握りしめる。

「もう、壊すしか——」

「包丁はそうやって使うものではありませんよ、ベニス嬢」

背後から耳へ届く、聞き慣れた声。はっとして振り返ると、ボスはおどけた仕草で、軸の細い銀細工の鍵を見せた。

「スペアキーを作るより、マスターキーを拝借する方が簡単でした。凝った鍵を作るより、鍵を管理する優秀なキーパーを雇うことにお金を使うべきだと思いませんか？」

「ボス、そんなことより、早く鍵を」

「グリシアは大丈夫です。それより、気を確かに持つことを考えてください」

ボスの言葉は、全く頭に入ってこない。彼が鍵穴に差し込んだ鍵が、錠を押し上げる音だけが聞こえた。

「開けますよ」

ボスがドアを開ける。

眼前には、血まみれのグリシアと、息絶えたスタフィズ・アウレウスの骸があった。彼の喉からは、強烈な血の臭いで、部屋中の空気は淀んでいる。

「よくできましたね、グリシア」

ボスはグリシアにほほ笑みかけながら、私の手元からそっと肉断ち包丁を取り上げた。そしてそれを、丁寧な手つきで目の前のグリシアに渡した。

「顔を布で隠しますか」

グリシアは首を横に振る。それを見て、ボスはグリシアの頭を何度か軽くなでた。焦点の合わない目で死体を見つめるグリシア。彼女の体に対してあまりに大きな獲物が、その小さな手にきつく握られる。私は言葉を発せぬまま、ただグリシアを見つめた。

彼女の振るった刃は、美しいまでに表皮と腹膜だけを破る。

まだ温かい内腑は、つやつやと光っている。グリシアは素早い手つきで食道と腸を結紮し、消化管ごと取り出した。断面から漏れ出す血は、滲むというのが正しいほどに勢いが無い。心臓が、生を巡らせる役目を終えたのだと感じさせる。――心臓？

私は、取り出された赤黒いそれを、「心臓」と呼ぶことに違和感を覚えていた。心臓を目にしたのは、初めてではない。しかしこれは、以前見たそれとは違う。

これは、『ハツ』だ。

「僕がグリシアを見つけたとき」

ボスが小さな声で話し始めた。

「彼女は包丁を抱いて藁に埋もれ、寝ていました。どうして警察が、彼女を見つけることが出来なかったと思いますか？」

「小柄だったからじゃないの？」

「ヒントをあげましょう。公表されていませんが、捜査に向かった警察官は、誰一人帰ってきていません。失踪した夫婦の呪いだど、まことしやかに囁かれています――さらに、もう一つヒントです」

ボスは真顔で、呟くように告げる。あの畜産農家では、商品にならない雑多な肉片は、肉種に関わらずミンチにして、業務用ウィナーにしていたこと。そして、家畜の骨は、粉碎機にかけ、肥料用骨粉として売りに出していたことを。

少し目を離しているうちに、目の前には精肉が陳列されていた。脂が乗りすぎたモモ肉も、疾患で白く濁ったレバーも、進んで口にしようとは思えないが。醜いものは、「骨の髄まで」醜い。

「さてみなさん、ラッピングの時間ですよ」

屋根裏から、ラクトが飛び降りて来る。担いでいる袋には、スチロールトレイと業務用のラップが入っていた。

「行きは果物屋さんでしたね。帰りは、肉屋さんになりましょう」

\*\*\*

「ごちそうさまでした！」

モンブランは、たった五分で皿から消えた。グリシアの調子は、完全に元通りだ。

「へくちゅ！」

ラクトがくしゃみをする。あのあと、私たちが脱ぎ捨てた着替えと工具箱を担いだまま、発煙筒をもって屋敷中を回ったのは、ラクト一人だった。屋敷のスプリンクラーがごとごとく作動し、騒ぎが大きくなったのは言うまでもない。ラクトが「ボスは正面から出入り出来てズルい」と文句を言っていた。

突然の停電や、ボヤ騒ぎによって、「刃物を持った謎の白髪少女」のことはすっかり忘れ去られたようだった。

「死体を捌いた現場、血を全く回収しなかったけど――水をまくだけで、大丈夫だったのかしら」

「それなら心配は無用です。あの部屋の絨毯は、最初から血まみれだったのですから」

すべてが、ボスの想定のうちで済んだと思う。後から聞けば、グリシアの「才能」について知らなかったのは、私だけだったらしい。なぜ彼女の義父母が、彼女の殺害を依頼したのか、わかった気がする。ある種の「才能」は、それを理解できない人間から見れば、「異常」でしかないのだから。

大きな音を立てて、パルティール考古堂の扉が開かれる。入るなり不安げな顔をしたその男は、コリー・エスキア――今回の依頼主だった。彼は急ぎ足で近寄ってくる。

「ど、どうなった」

ボスはほほ笑む。

「スタフィズ・アウレウスの殺害に成功しました」

「ああ、本当か！ よかった……」

安堵の表情を浮かべるコリー。しかし一方で、ボスの微笑みは突如冷たいものに変化した。

「ところでコリー様、ご存知ですか。スタフィス氏の代わりに相続を行うのは、リヌス・クロストリー氏だそうです」

「――どうということだ、何の話をしている」

「アウレウス公爵の愛人は、六人いらっしやったそうですね」

その場の空気が凍り付く。一人だけ理解が追いついていない様子のコリーは、しばらく首を傾げた後、一気に青ざめた。

「まさか、つまり、俺は――」

「愛人の子は全部で十人いたとか。愛妻家が聞いて呆れますね」

「そんな馬鹿な！ それじゃあ爺さんの土地と爵位は――！」

「あなたの手元には来ないわね」

「冗談だろ？ .....殺してくれ！ 爺さんの子供、全員殺してくれ！」

「依頼は一度きり、対象は一人という約束です。さあ、料金を」

「無理だ、俺には金がない！ わかってるだろ！」

「お約束はお約束です。さあ、料金を」

コリーは、背を向けて逃げ出そうとする。扉のノブを必死にひねり、扉に体当たりするが、一向に開くことはない。

「あなたをご存じないでしょう。あなたのように約束も守れない人間の臓器でも、欲しがる人がいるのです。肝臓、腎臓、心臓、骨髄――ああ、何人の人間を救えるでしょうか」

ボスがゆっくり近づいていく。コリー氏は狂気じみた叫び声をあげ、遂には失神した。

「不思議ですね。追い詰められた人間は、決まって引き戸を押すのですから」

窓から見える空は、もうすっかり暗幕を垂らし、僅かばかり光の粒を散らしていた。腹を満たした子供二人は、コリーの叫びも気に留めず、まどろんでいた。

「お仕事はおしまいです。今回は『コレクション』が二点も増えますね、嬉しいです。本当は女性のお骨が好きなのですが」

「――店長、あなたが一番、誰よりも悪趣味ね」

「ありがとうございます」

「褒めてないわよ」

『店長』は、微笑みを絶やさない。夜風に揺れるコスモスに囲まれて、パルティール考古堂は本日の営業を終了した。

おわり

# 立つ鳥（瀬戸若菜）

立つ鳥

瀬戸 若菜

「締切前日です」

「そうだな」

「というわけで」

「どういうわけで」

「締切に間に合わなそうなので」

「頑張れよ」

「これでお茶を濁すことにします」

「何持ってんの？ .....待ってそのお茶私のじゃん濁す（物理）はちょっとやめてそれお昼ごはんと一緒に飲ん」

「抹茶オレっぽくて美味しいんじゃないですか？」

「砂糖が足りない」

「ほらこうなることを見越してオリゴ糖持って来ていましたよ、さすが私」

「そもそも牛乳持ってるのもおかしい」

「だばー」

「.....多くない？」

「まあ、一カップくらいですかね」

「絶対過剰だよそれ」

「どうすんのこれ」

「飲めばいいんじゃないですか？」

「五百ミリの半分残ってたところに牛乳を百入れて、それにオリゴ糖を二百入れました。さてこれはなんでしょう」

「乳飲料」

「おうこれ売るか？」

「大ヒットまちがいなしですね」

「じゃあまず飲んでみろ」

「牛乳って薄まると突然美味しくなくなりますよね」

「そうだな。五倍に薄まったら非常に美味しくないだろうな」

「でもカフェオレとかミルクティーって美味しいですよ」

「そうだな」

「紅茶も緑茶も同じお茶じゃないですか」

「ミルクティーであることには変わらないな」

「では、どうぞ」

「頂きます」

「あ、飲むんですね。……どうですか？」

「……ふつう」

「一ページ使ってふつう！」

あとがき 自分で作った似たものはコメントしづらい味でした。

# 全ラ！（今畑鏡）

全ラ！

今畑 鏡

月光歴三十八年。マイル率いるアエイン軍と闇王率いるバルク軍によるビルマ戦役は終焉を迎えようとしていた。

陽に導かれマイルはここまで辿り着いた。遠路であった。マイルは遠路で幾許もの民を失った。これ以上価値ある民を失う訳にはいかない。

「さあ、終わりだ。闇王」

「ガハハ。愚民の分際で何を！」

砂埃が彼らを包む。砂埃が去った時、二人の死闘の幕が開けるのであった。

～次回、衝撃の最終回！～

【ビルマ戦役より抜粋】

人には使命というものがあって、それに導かれて生きているらしい。だが、使命というものは目には見えない。空気よりも薄く、太陽よりも遠い存在。果たして俺、三鷹四郎にも使命があるのだろうか？

「ぐああああああああああああ。PV数伸びねえええ！」

机を指でカツカツと叩きながら、俺はあまりの悲しみで叫ぶ。絶叫だ。一人暮らしのワンルームに声が響いた。

俺は自分のサイト上で小説を連載している自称ラノベ作家の端くれだ。現在「ビルマ戦役」を絶賛連載中。そして今回は最終回だ。

がしかし、閲覧数は五である。非常に少ない。

本来の目論見では連載十回目ぐらいから人気が出だして「書籍化はまだか」と出版社から引っ張りだこになっている予定だった。だった！

現実はというと、閲覧数は十回目から横ばいで五件のみ。コメントも同一人物からばかり。これじゃ過疎ってるニコ生と何ら変わりねえじゃん。メンヘラ生主かよ！

どうして伸びない。どうして人気が出ない！ 人気声優と結婚する未来はどこに行ったんだ？

はあ、と重いため息が出る。ハートではない。時計を見るともう大学に行かなくちゃいけない時間だ。

ああ、学校めんどいなあ。

俺はいそいそとパソコンをシャットダウンさせて軽く朝食を済ませて大学へと向かった。

日中は大学生というカーストをそつなくこなす。ラノベ作家にも学歴は必要なのだ。

加えて大学と言うのは情報収集において絶好な場所だ。

「今期は紐がイチ押しだなあ。はあロリ巨乳さんp r p r だあ」

「いやいやガイルさんに決まってるだろk s。俺も本物を探し当てたいでござる」

「あ？ 今季は楽園と型月アニメが最強にきまってるやろ」

「はいはい。エロゲヲタは黙っててくださいね」

こんな会話を生で聞けるのだ。しかも大声で話しているから嫌でも耳に入る。ホント大学生は最高



だな！

市場調査は欠かせない。こいつらが俺の作品を読んでいるかもしれないのだ。敵の情報は知っていた方がいい。敵？ 自然の敵かな.....

だが、それが俺の作品に反映されているかというところでもない。

あくまで読者が俺に着いてくるのだ。こいつらに媚びたりは絶対しない！

そうは思っているけど、なかなか人気作家になれないんだよなあ。

あー人気作家になりてえ.....。

大学の授業が終わると知り合いと世間話を少々して帰宅する。それからさっさとご飯を食べてパソコンに向かった。

「あれ、コメントが増える？」

サイトを見ると「ビルマ戦役」に新着コメントが付いていた。

「どれどれ..... 『あなたの作品を必ず人気作にして見せます！ 詳しくはこちら——』なんだこれ」

ビルマ戦役の感想ではなく、謎のURLが書かれていた。

怪しさ満点である。人気作になれる？ いったい何を根拠に言っているんだろうか。

気になったので俺はURLをクリックする。すると、画面にシークバーが複数出てきた。ダウンロードしているようだがあきらかにパソコンの挙動がおかしい。

「うわ、これって」

もしかして、これは最近話題のウイルスソフト？ キャー、あたしの大事な情報が漏れちゃうー！

俺は慌ててパソコンの電源を引っこ抜こうとした。が、このパソコンはお年玉をはたいて買った大事なパソコンだ。買いなおすとなれば出費がかさむことになる。

俺は自分の個人情報とキャッシュを天秤にかけた。

圧倒的な差でキャッシュが勝利した。三鷹四朗は庶民体質なのだ。庶民体質な男が戦記物を書いているのはちょっとおかしな話か。

数分後、謎のシークバーは消えていた。消えていたが、おかしなブツが画面内を闊歩していた。

例えるなら、ドコモコンシェルのような、オフィスにいたお助けイルカのような..... あいつどこに行ったんだろ。

デフォルメされた二・五等身の美少女キャラのようだ。白髪に青い瞳で黒いセーラー服を着ている。

。

『はいはい。おっはようございまーす！』

何やらボイスがついているようで俺に話しかけてきた。

「.....」

『そこのキミ、聞こえてるでしょ！ 挨拶は常識だよ』

えっ、人工知能か何か？

「おっ、おはよう.....」

『よろしい！ さて、私は電子の世界から君を救うためにやってきた全自動ラノベ製造機、通称ノベルちゃんです！ よろしく。ところで君の名前は？』

「み、三鷹.....四朗」

『むむむ。タカシ？ 君もタカシなのかい？』

「いや、タカシじゃなくて三鷹四朗だ。というかお前は一体何者だ？」

『だから、全自動ラノベ製造機だって言ったじゃないか。タカシを救うために電子の海からこんにちは、だよ！』

俺を救うためにやってきた？ なにそれ、〇〇えもん？ そういや、覗き専門「の●ぞ●もん」は回収されたっけ？

加えてどうやら俺の名前はタカシになったらしい。「みタカシろう」でタカシか。

謎の全自動ラノベ製造機であるノベルちゃんは指ピストルで俺を狙い、ズキュンと言っている。かわいい。

「本当に人気になれるのか？」

『もちろんさ。私の力で君の作品を必ず人気作にしてみせるよ！』

いつもなら詐欺だ、胡散臭いと言って無視していたかもしれない。けど、大学というモラトリアムの猶予が残り僅かな自分としてはわらにでもすがりたい思いだ。

「頼む。俺に人気作を書かせてくれ」

＊

『じゃあ、はじめにターゲットを決めよう！』

ノベルはダーツの矢を持ってくるくると回路的に狙いを定めている。

ターゲット？ ハハッ。ノベルちゃん～そんなこと小学生でもわかることだよ。舐めてるのかな？ ライトノベルだぞ。ライトなノベルだぞ。

「もちろん。学生だろ。中学校をはじめとして、メインは高校生と大学生に決まっているだろ」

『ぶっぶー。ざんねん、違います』

ノベルはビシッとダーツの矢を的に当てた。そこには若年層と書いてあった。たしか若年層は十五歳から三十四歳までのことだったはず。

『いいかいタカシ。学生相手に商売やっても人気作にはなれないよ。一番財布の紐がゆるいのは独身貴族の大きなお兄さんたちだ。そのお兄さんたちに読んで買ってもらわなくちゃランキングには載らないぞ』

ノベルの言うのはもったもな気もする。売り上げも大事な要素の一つだ。しかし、学生のためにあるのがラノベじゃなかったのか？

『それに学生はこのラノとかオリコン、まとめサイトで人気な作品ばかり読むから別に気にしなくてもいいです。ランキングに載れば学生はホイホイついてくるし。みんな地雷を踏みたくないからね。人生で失敗なんてしたくないもん』

そうなのか.....ふと、俺はむかし読んだ地雷ラノベのことを思い出した。

当時の人気作と人気作を組み合わせた悲惨な運命をたどる魔法少女がMMORPGの世界で戦うような、それなんてマドカ・アート・オンライン？ って作品だったなあ。

それ以来、俺もAmazonレビューで低評価だと買う気がなくなってしまった。

うん。若者はドンドンお金を払って地雷を踏んだ方がいいと思うぞ。

「じゃあ、働き始めの若者を中心に大学生や高校生向けって感じでいいのか？」

『そうだね。給料は入ったものの、彼女がいないから趣味にしか使えない社畜さんをメインにしよう！』

ノベルさん.....いちいち心に刺さることばかり言うなあ.....これじゃお友達できないぞ。

『よし、ターゲットが定まったところで、次はジャンルだ！ タカシはどんなジャンルで書きたいかな？』

おっ、いいこと聞いてくれるね。俺は戦記物が大好きだ。司馬遼太郎さんの作品から始まり、架空戦記物にどっぷりとハマった。時代の流れと広大な世界観に心踊らされたものだ。

ちなみに俺が書いている「ビルマ戦記」も戦記物だ。

「戦記物」

『えっ？ 学園？』

「戦記もので」

『えっ、よく聞こえないなあ。うーん、学園？』

どうやら学園を付けなきゃノベルの耳は聞き取れないらしい。

「.....学園戦記物で」

『おお、いいね。面白いジャンルだ』

「なんで、学園を付けたがるんだよ」

『学園が舞台なら読者の親近感を上げるでしょ？』

おいおい、さっきと言っていることが違うぞ。メインは働く若者じゃなかったのか。

『で、学園戦記物ってどんなことをするんだい？』

強引に戦記物へ学園要素を付け加えるのか.....そうだなあ。学園という領域の中で各陣営に分かれて領地を取り合うとかどうだろう。おっ、なんかいい感じのストーリーが出来そうじゃないか。

「学園内で国盗り合戦かな」

『うん。なかなかいいね。学園要素にバトル要素、戦略要素も加わって盛り上がりそうだ』

ノベルはどこからかボタンを出す。ぽんと押すとガッテンと音が鳴った。

初めて俺の案が通ったかも。自分の案が通るといのは気持ちのいいことだ。この調子で行こう！

『ようし、次はヒロインちゃんを決めていくよ〜』

あれ、ちょっと待てちょっと待てノベルちゃんー？ ヒロインから決めちゃうんですか？

『あー、主人公は男だゾ。大きなお兄ちゃん向けだからね』

「いやいや。最初は主人公の設定から固めていくんじゃないのか？」

『何を言ってるんだい、タカシ。主人公の設定はジャンルを決めた時には決まってるんだよ』

どういうことですかね。俺はニュータイプでもなければ種も割れないし、英雄願望とかトレースのスキルも持ってないんですけど。あと、ブースターもやってない。

『学園戦記物の主人公はね、現世では【ごく普通】の歴史好きな会社員だったんだけど、不慮の事故で死んじゃうんだ。すると突然、主人公は異世界の学園に高校生の姿で転生されてしまう。そこでは学園を統一するために戦が行われていた。偶然巻き込まれてしまった主人公は、現世で学んだ兵法を使って軍師としてヒロインを助ける。どうだい？ タカシの得意な戦術も使えるよ』

どうだいてって.....突っ込みどころが多すぎるぞ。どうして学園戦記物が異世界転生学園戦記物になってるんだ？ 漢字が多すぎて中国語みたいだ。

「あの、転生要素はどこから」

『読者は日々の生活にフラストレーションを感じてるんだよ。本当はこうやって生きたいのに、自分の個性を使っていきたいのにと思っている。要はピーターパンシンドローム。だからピーターパンが悠々と主人公になれるネバーランドを作らなきゃ。それでネバーランドに行くために主人公は現世で死んで転生するんだよ』

要は読者が物語の世界に入りやすいように転生要素を入れたのね.....じゃあ【ごく普通】ってキーワードも同じ理由か。

だんだん分かってきたぞ。ノベルの言い方はとっても汚いけど読者のことを第一に考えているらしい。

「わかった。主人公はそういう感じか。うーん、ヒロインかあ.....お姫様かな？」

『それと？』

ソルト？ 塩はソルトだがどうした？ 悪霊払いでもしたいのかな？

『早く、次のヒロインを挙げてよ』

そうだな、ヒロインは物語の重要な味付けだもんね。っておい。

「何人ぐらいかな？」

『最低九人は挙げてよ』

ちょっと多い気もするんだが。それじゃ味が濃くなっちゃうぞ。薬用石鹼 $\mu$ ，sでも作るんですかね？

「流石に多くないか？ 消化しきれない気がするんだが」

『話ごとに一人ずつ加えていくから数が多いほどいいの。女の子とのイチャイチャはラノベの常套手段だからね』

たしかに、ラノベの主人公の周りには最低でも二人は女の子がいるもんね。しかも主人公ラブな女の子。

「えーっと。そのヒロインっていうのは」

『ん？ 全員主人公のことが大好きだよ』

ノベルはマシンガンを取り出して、ドドドと宙にわんさか浮かぶハート形のバルーンを割っていく。

『ツンデレ、ヤンデレ、クーデレ、幼馴染、ロリ、お姉さん、アンドロイド、妹、生徒会長、エルフ、男の娘、艦隊のアイドルなどなど。好きなものを選んでよ。あと最近流行りのバブみとか』

「ママー——！」

おっと、思わず叫んでしまった。女の子の母性とか包容力とか優しさは大切。赤い彗星さんも年下の女の子にママとか言ってたし。

うん。優しさに包まれたならきっと目に映るすべてがメッセージに見えちゃうもんね。俺、きらりんぱわー受け取ったよ。ママ！

ちなみに俺はきらりんよりしまむーからバブみ感じています。とっても気色悪いね。

『えーっと、タカシ.....何やらグヘヘってキモイ笑い方してるんだけど、決まったのかな？』

「イエス、マスター。とりあえずバブみは必須で」

\*

ノベルに言われた属性からヒロインを作り上げていく。とりあえず、バブみはお姉さんキャラに一任することにした。

そこで気づいたことが一つ。

「ノベルさん、ノベルさん。妹とか幼馴染とかどうする？ 主人公と一緒に殺して異世界に飛ばすか？」

「タカシ。なんか物騒な言い方だよ。簡単に殺すとか言っちゃだめだよ」

ノベルはメツと注意を促す顔をした。かわいい。幼い容姿から注意を受けるのもありだな。

あらら、俺としたことがノベルの口調のせいで汚い言葉遣いになっていたようだ。

『転生先に理想の妹とか幼馴染を作ればいいんだよ』

もっと物騒なアイデアだった。

『いいかい。タカシ。転生って画期的なアイデアなんだ。ラノベにありがちな両親の海外出張とか謎の部活動などなどの環境は転生ですべて可能になる』

すげえな転生。しかし、

「そんな甘っちょろい幸せな世界で読者は満足してくれるのか？ 甘口カレーより甘いんだが」  
『そうだね。ちょっと甘いかも。よし、毎回モブが数十人犠牲になるようにしよう。ネバーランドのフック船長みたいなもんだね』

ノベルはなむなむと両手を合わせた。ホント最近の若い子って物騒な作品好き過ぎ。もうマッドがマックスだよ！

さらに俺は、フック船長という言葉聞いてこの作品に敵がないことに気づいた。

「ノベル、敵キャラはどうすればいいんだ？」

『敵キャラ？ ああ、あのヒロインたちは最初、主人公と敵対してるの。それで主人公が敵を倒すごとにヒロインが仲間になる』

やっぱりそうなるんですね。いいね、敵キャラを味方としての再利用。資源は有限だもんね。

でも、元敵キャラに囲まれてイチャコラする主人公ってなんかぞっとする。ヤンデレに寝首とか狩られそうだ。

「じゃあラスボスは？」

『ラスボスはカリスマ的美少年で。愛読書が哲学書みたいなインテリにしよ！』

おっと、ラスボスに関してはノベルさんからの注文があった。やっぱりノベルちゃんも麗しき乙女だからカッコいい敵とか欲しいんだよね。

『主人公とラスボスのカップリングが捗ります。これで女性層もがっちり！』

わお.....言われてみれば主人公とラスボスって互いを意識し合っただけでも恋人のようにも感じる。

スタンドで時を止めてその間とか、ニュータイプ的な空間で赤と白が混じるとか.....ハイ、この話はここで打ち止め。そげぶです。あつ、この二人もお似合いのカップルですね（ニッコリ）

『よし、ラスボスの案も出たことだし、タイトルも考えようか』

読者に分かりやすく、印象深いタイトル.....こうなったらやけくそだ。

「異世界学戦記とかいいんじゃないか？」

漢字でだいたい印象も分かるので自信がある。

『うーん。異世界学戦記～転生先で軍師になった件～もしくは〇〇の学戦記（スクールウォーズ）みたいなのはどうかな』

最初のやつはまるっと某サイトのスレタイだな。～な件ってよく見かける。タイトルであらすじ説明しちゃってるよ。後はラノベでよく見かけるスタンダードなタイトルだな。中二な単語にヒロインの名前を組み合わせたりとか流行ったなあ。けど、この作品のヒロインってたくさんいるからヒロインの名前をタイトルにするのは難しそうだ。

『何か不満かな？ 別にいいじゃないか。ラノベは表紙のイラストで買うか買わないかがほぼ決まるもんだよ。だからタイトルは一瞬で作品を説明できるものがベストだよ』

本当にそうなのか？ ノベルの言うことは正しく聞こえるし、理路整然としているのだが引っかかる所も多々ある。

「じゃあ、異世界学戦記～転生先で軍師になった件～にしようかな。分かりやすいだろうし」

流れのままにだ。俺はノベルの会話にも考えにもすっかり慣れきっていた。

\*

一か月ほど経った後、遂に「異世界学戦記～転生先で軍師になった件～」は完成した。

俺は一か月の間、ノベルにしごかれながら文章を書きまくった。

迷えばノベルに相談した。ノベルは『そうそう。もーっと私に頼っていいのよ』と元気よく相談に乗ってくれた。

そうして人気にするために作品に磨きをかけていった。だが、作品に磨きをかけるにつれて何か大事なものが削れてしまった気がする。しかし、俺の書きたかった戦記物の要素はふんだんにこれでもかと作品内に散りばめたつもりだ。

この作品ができたのもノベルのおかげ。ノベルさまさまだ。

「やったな。遂に完成だ。これは自信作だ」

『お疲れ様、タカシ。いや今日は四朗と呼ぼうか。四朗完成おめでとう。すごく面白い作品に仕上がったよ』

ノベルはクラッカーをパンと鳴らして祝福している。

おめでとうだなんて、照れてしまう。

完成した原稿を眺める。自分で書いたのかなと思うほどの出来だ。我ながら素晴らしい。

おっと？ よくよく見ると、タイトルの横にあるべき大事なモノがかけていた。

そう、作者名だ。

今までは自分の本名をもじって使っていたのだが、ここまでくればペンネームも変えた方がよさそうだ。きっとノベルもハートにキャッチでポピュラーな名前を要求するだろう。

そうだなあ……「名無シさん」「ふえ☆ると」「一元（はじめゲン）」「Higasi」「マルオ」「のべる」とかどうだろう。

見た人が食いつくような名前を手あたり次第に頭の中で挙げてみる。

有名な作家に似せた名前から記号を使った奇抜な名前まで考えてみた。

けど、こんな作者名で中の人がむさい大学生だったら印象ガタ落ちだろうな。

「作者名なんだけど、ノベルは何か良いアイデアある？」

俺はさっき挙げた名前を挙げて、ノベルの意見も聞いてみた。

『作者名？ 作者はもうオーディションで決めているよ。だから四朗が気にすることじゃないね』

「はい？ ノベルさん、どういうことかな？」

予想外の言葉に俺は戸惑う。作者は決めてあるだって？

あれれ、おかしいなあ。電子の世界から来た全自動ラノベ製造機のノベルさんも一か月経てばどこかにガタが来るのかな？ 未来デパートにでも修理依頼しなきゃダメなのかな？

「俺が、作者じゃないのか？」

正解がわかっている質問をぶつけてみる。

『いや、四朗は作者だけど、読者からは決して見えない幽霊作者になるんだよ』

「それって」

ゴーストライターという言葉はすぐに浮かんだが口に出せない、出したくもない。

『作者は人気作のための重要なファクターであり、エレメントなんだ。最適な作者を用意するのは当然でしょ。トーク力抜群でイケメン。趣味は料理。T w i t t e rで大人気』

「あの……俺がその作者にはなれないのか？」

『なれるわけないでしょ。読者が求める理想の作者は、四朗みたいな人じゃないからね。それに、四朗が書いたからって誰がこの作品を読んでくれるんだい？ 作者も重要な宣伝も材料なんだ。四朗君より優れた人を用意することのどこがダメなんだい？』

くっ、言い返すことができない。ノベルの言うことは間違っていないけど、納得できない。

俺が無言でいることにノベルは首を傾げる。

『どこに不満があるのかな？ 作品は人気になって多くの人に読まれるんだよ。これほど幸せなこと

はないね。あっ、もちろん印税の何割かは四朗に差し上げるつもりだよ』

違うんだ。お金がどうかの話じゃない。もっと根本的なところに嫌悪感を抱いているんだ。

「でも、やっぱり俺は自分の作品に自分の名前を書きたい」

『どうしてさ。人気作が今ここで生まれようとしているんだよ。なぜ人気作を書きたいと願った君がここにきて拒否するんだい。一体四朗は何のために作品を書いているの？』

ノベルの口調が厳しくなった。それは俺を説得するのではなく、俺の意見の意味がまるで理解できないような口調だった。

何のために書いているか.....小説を書くのが好きだから？ いいや、それだけじゃない。それだけなら誰かに読んでもらう必要なんてない。チラシの裏にでも書いてればいい話だ。

じゃあ、なんで誰かに読んでもらいたいんだ？ 読者の人生の一部を頂いてまで読んで欲しいわけは？

それは、誰かに伝えたいモノがあるから。

俺が面白いと思う軍記物を読者に届けたいから。

「俺は作品と一緒に俺自身も読者に届けたい。だから無機質に作品を生産するだけのロボットにはなりたくないんだ」

『あきれた。君はラノベを意見表明の道具として扱うんだね。そんなの読者が読むと思っているのかい。おこがましいよ』

「もちろん、読者が楽しんでくれるように精いっぱい努力するよ。ノベルが言ったことも参考にする。でも、そこには俺の思いも少し混ぜたいんだ。できれば、俺がここにいる証明を作りたい」

『でもさ——』

ノベルが反論しようとしている。言いたいことが俺には手に取るようにわかった。だからノベルの話に割り込んだ。

「そうだな。異世界学戦記は俺だけでは完成できなかった。ノベルがいたからこそできた作品だ。本当にありがとう。だからこの作品はノベルの自由にしていよ」

そう、この作品は俺だけの力でできた作品じゃない。

ノベルは腰を抜かしたようにべたんと座り込んだ。

『き、君は不思議な人だね。私に反対したと思ったら急に自由に使ってもいいと言い出して.....本当に好きに使ってもいいのかい？』

「いいよ。また書けばいいし」

ノベルはうーんと唸り、頭を左右に揺らしながら画面内を歩く。

『はあ、困ったねえ。今までの人は、この話をしたら私を強制デリートしたり、お金をもらってウハウハしてたのに。四朗みたいに作品の全権を私にゆだねる人は初めてだよ〜』

数分後、ノベルはポンと手を叩いた。

『うん、私にもわかんないや。よおし』

ノベルはペンを取り出すと、キュッキュと異世界学戦記の作者欄に「のべる」と書き込んだ。それはさっき俺が挙げた作者名候補の一つだ。

それからノベルは異世界学戦記のファイルでサクサクパタパタと紙飛行機を作った。そして

『華麗に舞い上がれ！』

と、紙飛行機を電子の海に向かって飛ばした。

「いいのか。これで」

『ボトルシップみたいでいいでしょ。あの作品は私たちの物にしたよ。ノベルちゃんは誰かが悲しむ横でお金儲けしたくないんです』

ノベルは紙飛行機に向かってにこぼっと笑って敬礼した。

『それにさ、私は全自動ラノベ製造機だけど分かってるのは今まで流行った作品とその傾向だけ。この先でどんなラノベが流行るかなんてわかんないや』

ノベルは明るい口調で言う。

俺も飛びゆく紙飛行機に向かって敬礼した。

「ノベル、今度俺が作品を書いたら読んでくれるか？」

『モチのロンだよ！ 楽しみに待ってるね』

そう言うと、ノベルは画面上からスッと消えてしまった。

俺は次に書く作品の構想を考える。以前に比べると気が楽になったようだ。

さて、次はどんなのを書こうか.....

### あとがき

お疲れさまです、今畑鏡です。今回もいろんな方に迷惑かけてしまいました。ゴメン！ 本当にありがとうございます！

さて、今回の作品は妄想百二十パーセントでできております。はい、「本作品はフィクションです」と言うことです。

今作ではラノベについてとやかく言ってますが、一番大事なのは締切に間に合うように書く根性だと思います。加えて友人。自己陶醉するのを止めてくれる友人は私にとってとても大事です。

最後に、人は一人では生きていけないと言いますが、小説も作者と読者なしでは成立しないと思います。ホント読んでくれた人ありがとうございます。これからも読者が楽しめるように精進していきます。愛してるぜ！



# アディショナルタイム (自分)

## アディショナルタイム

### 自分

「いやー、今日はキタノ選手がやりましたね！」

「ああ、あのセンタリングからよく合わせたよな。ぞくぞくしたぜ」

入社して三ヶ月。「趣味はサッカー観戦です」の一言に食いつた上司とまさかここまで熱中することになるとは……。応援した地元チームが勝ったのもあるが、やはりゲームはいい。

「うっし、じゃあやるか」

上司はバックから1.5Lペットボトルが三本は入るビニル袋を取り出す。

「あ、はい。やっぱやりますよね！　じゃあボクはこっちで」

ボクも手慣れたように袋を出す。

アディショナルタイムにキタノが合わせたシーンが脳内に何度も再生される。そんな試合の余韻に浸りながら、ビニル袋を片手にスタンドの下の方からシートを一つひとつ眺めていく。すると、あるシートの下にストローの刺さった紙コップと、その隣にチョウ結びの真っ白い袋が佇んでいた。

発見とともに自分の頬が徐々に下がっていくのが分かる。

「はあ」

その白い袋を取り上げ、持っていたビニル袋に放り込む。そのままコップの方も頭をつかむと、ホチキスほどに重い。手首を振ると、液体が波打った。

「チッ」と舌打ちが漏れる。身体を起こしてそのシートの周辺を見渡すと、紙コップや袋、ビール缶、串の棒があちらこちらに散在している。

一山隣のシート群では、上司が黙々とゴミをかき集めている。スタンドを見渡せば、試合中には熱狂していた千分の一ほどの人間が、居残りして同じように袋を片手にシートを動きまわっている。ボクもつべこべ言わずに、スタンドのゴミを拾い続けることにした。

「ホント毎回思うんですけど、ひっどいですよ、ゴミ」

帰りの電車、数駅超えるまで我慢できず、隣に座る上司に腹立たしさをぶつけた。

「ハハ、確かにな」

「なんで笑ってられるんですか。サポーターとしてあるまじきことじゃないですか」

ボクは身体を上司に身体を勢いよく向けた。ヴィツと、身に付けたオレンジの地元チームのユニフォームと座席がこすれる。

「そうかもな」

「そうですよ、そもそもゴミを持ち帰らないなんてマナーがなってませんよ。汚くて困る人がいることを知らないんですかね」

「まあ、スタンドにゴミを放置したところで死にやあしない。置いていく方が楽なんだよ。人は楽をしたがるもんだから仕方ないさ」

次の駅に到着する英語のアナウンスが流れる。

「それに、いちいちそんなのに腹立ててたら、今日のゲームが台無しだろ？」

「あ、すみません……」

「ハハ、別にお前は間違っていないんだから謝らなくていいよ。ただ、仕方ないってことさ」

電車が止まる。荷物を持って立ち上がった上司に起立して挨拶をする。上司は手を一度振り、笑みを浮かべて車出ていった。入れ替わりに乗客が流れ込んでくる。

ボクは元いた席に腰を落とした。上司のいた場所には、男子高校生がエナメルのバックが地面に落ちると平行にドサツとはまり込んだ。休日の部活終わりだろうか。そう思って前を向くと、小豆色の花柄の服をきた老婦人が、乗ってきた乗客に押されるように、私の目の前に立った。老婦人は黒い手提げを腕にかけている。

軽やかなBGMとともにドアがしまり、発車。すると、立ったままの老婦人が前のめりにふらつく。腰が曲がっているためか、つり革に手が届かない……ことは本人も自覚しているらしい。体勢を立て直したのちも、そのままじっとしている。

「あの、どうぞ座ってください」

席を立つ動作とともに、ボクの口は彼女にそう告げた。

「いいのかい？」

彼女が、か細い声で聞き返してくる。

「はい、ボクは全然問題ないですよ」

「ありがとね」

彼女と席を代わり、荷物を減らすために上着を着た。周囲を見渡すと、ある者はスマホをいじり、ある者は車窓に顔を向け日常を過ごしている。ただ先ほどの男子高校生は、むやみに目を閉じ、寝たふりを演じているように見えた。

老人に席を譲ることはマナー。ボクも最初は声を掛けづらかったが、何度も繰り返すうちに、脊髄反射のごとく席を譲れるようになった。この男子高校生には、またの機会に勇気をもって年配の方に席を譲ってほしいと思った。

「あー、まだか」

割引シールが張られていない惣菜コーナーの品々に落胆した。そういえば、仕事終わりに比べれば、このスーパーに来るのはいつもより早い。

でも今日はずのチームが勝ったし、一日くらい奮発して刺身でもいいだろうと、唐揚げのバックから目を離し、鮮魚コーナーへ向かった。

「ん？」

冷蔵の必要がない商品棚群を通過中、足が止まる。ある少年の背中が目にとまったのだ。いや、こ

どもなら店内のあちこちにいるから、彼自体が珍しいわけではない。気になったのは、彼が乾電池の棚に右肩を張り付ける、不自然な姿勢をしていることだ。

三メートルほど離れたその場で、覗き込むように首を右に傾ける。見たことは一つ、そして一瞬。彼は右手で腰の高さの位置にある単一電池をつかみ、そのまま右ポケットに流し込んだ。

万引き。

断じて許されない。

彼は身体を反転させた。

彼がボクの目をとらえた。その瞬間ボクには、彼が一ミリほど口が開き、一ミリほど首を引いた気がした。

彼はそのままボクの横を通り過ぎようとした。

「乾電池が欲しいのか」

彼の腕をつかむとともに、ボクの口は彼にそう告げていた。

「ッん！　　ツう！」

周囲に助けを求めることができないことは、本人も自覚しているらしい。死刑執行の直前に生への執着を丸出しにしている囚人のような形相をしながらも、ボクの手ひらから逃げようと必死に腕を引っ張っている。

「乾電池が欲しいなら買ってやる」

そう言うと目を真ん丸にしに、ピタリと抵抗をやめた。

「欲しいものを見せろ」

彼は右ポケットに手を突っ込んで抜き出すと、うつむいたままゆっくりと手を開いた。単一電池が二つ手のひらで横に倒れていた。

「君がやろうとしていたことが犯罪だってことは分かっているかい」

「はい.....ごめんなさい」

小さめのビニル袋に目的の品を獲得した後も、彼はまだうつむき続けている。

「別に謝らなくていいから、もう絶対にするなよ。必ず誰か見てるからな」

「はい.....」

これでいい。叱りすぎても仕方がないことだと思って、「なんで、電池が必要だったんだ？」と何とはなしに聞いてみた。

「.....懐中電灯のためです」

「そんな、懐中電灯の電池くらい買ってもらえないのか」

「ばあちゃんが入院しちゃって、母ちゃんも仕事なくなっちゃって.....」

気になってはいたが、彼の服はしわだらけで、髪もボサボサでいたんでいる。貧しい家庭なのか.....。何とかしてあげたいが、ボクにできることは、ルールを守らせるくらいしかないだろう。

「そうか、君のおうちは大変なんだな.....。ごめんな、余計なこと聞いてしまって」

「いえ.....」

「よし、何か食べたいものとか飲みたいものがあれば買ってあげるよ」

「え、いいんですか？」

「ああ、問題ない」

遠慮を知らなくていいのはこどもの特権。だがルールは守らなければならない。この子には、ルールだけは守れるようになってほしいと思った。

\*\*\*

「いやー、今日もやってくれましたね、キタノ選手！」

「ああ、あの角度からフリーキックで決めたのは初めて見たよ」

入社して四ヶ月。一ヶ月ぶりの観戦。やはりゲームはいい。

「よし、今日もやりますかー。こっちは任せてください」

大きめのビニル袋を取り出し、バサッっ空気を入れる。

「お、張り切ってるなあ。すると俺はこっちかな」

人は楽をするもの。いちいちそのことに突っかかっても仕方ない。だがせめてボクはマナーとしてゴミを拾う。

「あの、どうぞこちら座ってください」

「すまないね」

その日の帰りの電車内、ボクの隣に座っている男子高校生が老婦人に席を譲った。

誰かが実践すれば徐々に、席を譲るマナーは広がっていく。そして、みんなが気持ちよく電車を使えるようになる。ボクも彼に負けないようにしないと。

「あー、やっぱりまだか」

観戦の日は仕事ほど遅くならないんだった……。うん、今日も奮発して刺身にしよう。そう思って、冷蔵の必要がない商品棚群を通過する。お菓子の棚のところで、母親に女の子がダダをこねている。しかし、お菓子コーナー以外に、肩を棚につけている少年の光景はない。

遠慮を知らなくていいのはこどもの特権。大人からタダで与えられるものがあるのだから、子どもでもルールは守らなければならない。

刺身とビールをビニル袋に持ち、帰路につく。今日は一本だけ道を外れて帰ることにしよう。

夏まっただなか、熱いのは昼間だけではない。チームユニフォームのオレンジが、夕焼けと重なっ

て一層濃くなり、むしろ赤みを帯びている。

「あれ？」

知らない家の敷地に突き当たってしまった。しかも、行き止まり。いや、この屋根は我が家の向かいの家の奥に見たことがある……。

「そうか、こっちはつながってないんだ」

ボクは身体を反転させた。

「すいません、お金、くれませんか？」

誰だ？ 夕日に邪魔されよく見えない、が声はそちらから聞こえる。

「お金だけくれれば、何もしませんから。すいません、お金、くれませんか？」

声が近くなった。夕日を手の平で遮り視界を確保しよう。

「な、なんだ君は。そんなこと、やめなさい」

目の前に帽子をかぶったこどもがいる。

彼の手には包丁。まっすぐボクに向けられている。

でもこの声は、どこかで……。

「は、はやくしろ！」

唐突に声を荒立ててきた。何なんだ？ でも、しわだらけの服、帽子からはみ出たいたんだ髪の毛……間違いない。この少年はこの前の――

「き、君。やめなさい。ボク、ボクだ」

「はあ？」

吐き捨てるように反応する。

「ほら、覚えてないか？」

すると彼は首を傾げ、一瞬だけ顔を下に傾ける。

「……」

なぜかボクの胸のあたりを凝視し、ろう人形のように固まっている。

「ほら、わかるだろ？ こんなこと、やめなさい」

「はあぁっ！？ お前らがぁっ！？」

声を裏返らせ、叫ぶ。

「何だどうした！ なぜ怒っている？ ボクだぞ？ こんなことやめなさい！」

「殺した、あぁっ！ 奪ったアアツツ！ お前らがぁぁっ！」

なんなんだ、正気じゃない！

「落ち着け、落ち着け。金、金だろ？ 出すから落ち着け！」

「殺したあぁっ！ ウぁアアぁっ！」

彼が突進してくるのがわかる。やば――――

\*\*\*

じめん？ にねてる……のか。

水に……いるのかな、目が……ぼやける。赤い……ひかり？

……なにか……きこ……える……けど、なに……かな……。こ……え？

……つ……め……たい……。なつ……だ……よな。

あ……せ—————

\*\*\*

「彼の母親は清掃会社で働いていたが、最近、不況のあおりやなんかで解雇されたらしい。加えてちょうど同じころに、祖母が階段で転倒し骨折。最近のお年寄りにはよくあるし、入院できればよかったんだが、もともと貧しい家庭だったこともあって、療養が続けられず、そのまま自宅で亡くなってしまったそうだ。

ライフラインも全部止められ、環境的にもアレだったみたいだし……。

精神的にああなるのも当然だろう。

行政がもっと支援の網を広げていれば、こんなことにはならなかっただろうに……。

本当についてなかったな……他人事ですまない。でも、死なずに済んだのは不幸中の幸いだよ。

死んだらガチでゲームセットだったからな。

しっかり完治したら、またサッカー観戦に行こうぜ。……じゃあな」

《了》

この作品はフィクションであり、登場する国家、団体、組織、個人や出来事は全て架空のものです。

## 背徳者--chaos(中編)-- (山吹弓穂)

背徳者——chaos (中編) ——

山吹 弓穂

来栖恵は十歳の頃、その手で実の親を殺めている。

全てが連写した静画のようでありながら、それは轟きにも似ていた。

地鳴りのように這う稲妻。銀色の髪先から滴る雫が、おろしたてのブラウスに深紅の牡丹を描く。

重油のように爛れた腐臭が喉を塞ぎ、足元に広がるのは瞳孔を焼く鮮烈なマゼンタの海、海、海.....

。

ど、ど、ど、と克明に刻まれる心臓の音が、ただ機械的に時を刻む秒針と重なり合い、全ての感覚が蜃気楼の如く捻じ曲げられていく。

ただその中で、不可侵たる気高さを纏い、慈愛に満ちた微笑をたたえる聖母マリア。何もかも見据え何も映さぬ石膏の瞳と目が合ったとき。

幼い少女の手から、がろんと音を立てて鉄の棒が滑り落ちた。

「——.....」

ざぱん、と波打ち際に打ち上げられるようにして、意識が急速に浮上した。ひたひたと黒い海に浅瀬に浸るような感覚の中、重い瞼をゆっくり上げる。深く吸い込むかび臭さが、かすむ視界の輪郭を徐々に明確にし、広がるのは薄暗さに覆われながら規則正しく並べられる大量の本の背表紙。

(.....えっ)

見慣れぬ景色に慌てて飛び起きようとしたが、なぜかケイの身体はそのままごろんと倒れてしまった。びたんと横顔を床に打ちつけ、節々が軋んで悲鳴を上げる。そこでケイはようやく気づき、目を丸くした。彼女の手が後ろ手に、足が束ねて縛られていたのだ。

「気がついたようね」

不意に、どこからかそんな声が降ってきた。まるで家事手伝いを労る口調に、ぞっと背筋に悪寒が走る。はっと息を殺し、ケイは身体を強張らせた。視線だけを動かし、恐る恐る声の主を探る——斜め上に見えたのは、ゆらゆらと頼りなく揺らめく灯と、すらりと組まれた足。

「.....純香」

ケイが呆然とため息を漏らす。椅子に腰掛け、退屈気に分厚い本を読んでいるのは、まさに純香そのものだった。ランプの下に照らされる彼女の顔立ちは神秘的で、陶器のように透明で、ケイの知る純香と何一つ変わらない。だが、ページをめくる手を止めて怜悯な瞳がこちらに向いたとき、首筋にナイフを当てられたような、本能を脅かす寒々しさがケイを襲った。

「拘束監禁なんて」

ケイは無理矢理笑みを浮かべ、わざとおどけてみせた。

「穏やかじゃないわね。私を誘拐したところで千円一枚も絞り出せやしないんだから」

「あなたの過去を勝手に詮索したことは謝るわ」

ケイの言葉を半ば遮り、純香が言う。その声は平淡でありながら、相手を黙らせるほどの絶対的な無情さがあった。過去、と告げられたそれに、先の写真がネガとなって脳裏をよぎる。

やはり、あれは夢なんかではなかった。

黙然とした確信が愕然へ変わり、見開かれた瞳が必死に問う、なぜだと。すると、純香はふっと視線を逸らした。ケイの糾弾からしばし逃れるように、束の間口を結んで押し黙る。

「ヤングガンテロリズムを追ううちにあなたのことが浮上したの」

やがて、顔に一つの皺も刻まれぬまま、ポツリとそう吐露した。それは囁きにも似ていて、下手をしたら聞き逃してしまいそうだった。

「狂気の影があなたに潜む限り、見過ごす訳にいかなかった」

鈍器で殴られた気がして、呼吸さえも止まる。衝撃が脳を揺らし、思考が追いつかなかった。何が起きているのかも。掌を返したように平然とそう言っただけの純香のことも。

「.....私の中に、今、二人の私がいる」

舌に広がる苦味を奥歯で噛む。青ざめた唇を震わせ、大きく息を吸ってから、それでもケイが気丈に言った。

「純香を信じたい自分、純香を疑う自分.....私は、どっちでいたらいいんだろう」

ふっと鼻で笑い、皮肉げに歪められた口元は果たしてどちらを意味していたのか。読んでいた本を閉じると、純香はおもむろに立ち上がる。その拍子にランプの灯が大きくなびき、世界がぐらりと傾く錯覚に囚われかけた。

「この本に覚えはあるでしょう」

冷徹に見下ろしながら、純香が無感情にその本を掲げた。間近に見るハイソックスに、今なら躊躇なく踏みつけられそうだと思うながら、ケイは言われた通りにその本を見遣った。

『夜叉の鳴く唄 著アルバート・コールマン 訳若林 剛』

少し眉を寄せた後、顔を叩かれたようにはっとなる。差し出されたスマホの広い画面が、瞬時に脳裏をよぎる。ゴシック体の大々的な見出しの異様な禍々しさを、ケイははっきりと覚えていた。

我知らず噴き出る冷や汗、すうっと血の気が引く感触。現実と記憶が目まぐるしく交差する中、ケイは視線を純香へ戻した。

「その本の翻訳者は若林剛。独和大学の名誉教授で、宗教心理学の第一人者でもあったの」

本を掲げた手を引き、表紙に目を落としながら純香が言った。

「『青少年の心理と罪の意識』、それが若林の生涯の研究テーマだった」

「.....何の話をしてるのよ？」

「独自の理論を展開しながら、彼は熱烈に、全身全霊を投げ打ってでも心を閉ざした青少年のために献身的だったわ」

まるでかつての素晴らしい思い出が一瞬で醜いものへ変わり果ててしまうように。独特の抑揚とハスキーボイスが混ざり合い、忍び寄る不協和音を高まらせる。宙を眺める彼女の瞳は無を装いながら、奥ではじっとりとした恨めしさが佇んでいた。

「彼の開いたセミナーは細々としたカウンセリング中心の運営だった。けど、彼の人柄があつてこそだった。鋭敏で移ろいやすい心を抱えた若者たちにとって、憩いの場として大切な存在だったの。

でもいつしか、彼は理想に溺れていった.....献身的過ぎるが故に、自らの理論が狂気へと向かっていくことを止められなかった！ 若者たちは主体から子羊に成り下がり、彼らは日に日に傲慢で、不



遜で、邪悪な幻想に焦がれていく……いつしか広がるのは、血の臭いと腐り果てた肉体、生気を失った墮落の果て、気違いに壊れた荒廃の都だったわ！」

最後はほぼ、血を吐くようだった。凄烈な吐露に秘められた悲痛な響きが激しさの尾を引き、静けさの中へ溶け込んでいく。

「それが……」

それが若者集団テロ事件の正体なのか——問いかけて、ケイはぐうっと胃液がこみ上げてくるのを感じた。その先に待ち受ける狂った世界が恐ろしくて、とても尋ねられなかったのだ。

「彼には多くの数知れない弟子がいた。けどその中で抜きん出て才があり、彼が最も目をかけた最愛の弟子がいる」

再びケイに向けられた目に、冷ややかな光が宿った。

「それが、あなたの慕う神の使い——ヤングガンテロリズムの首謀者は、あの神父よ」

○

喫茶店。神秘的な朝の陽が静かに波を引き、それを覆うようにしてからりとした陽気が町に満ちる。ざわざわと忙しない人のざわめきと足音が行き交う街の外れ、人気もなくひっそりとした店内には芳ばしいブレッドの匂いが漂っていた。

神父は紅茶を口に運び、本を読んでいた。テーブルには無造作に新聞が広げられている。その一面には、若者集団テロ事件初の未成年者である被告人が、無期懲役刑を言い渡されたことが仰々しく書かれていた。だが神父はそれに目もくれず、本のページをめくる。可もなく不可もなく、これ以上もこれ以下もなく、彼の目は無感情に文字の羅列を追い続けた。

ず、と紅茶をすすったとき、突如として爆音に似た音が急速に近づくのが聞こえた。何事か、と不審に思った店主が外の方を見遣ると同時に、店が壊れる勢いでドアが開いた。

「はあーい」

店内に響くはつらつとした猫なで声。愛らしく手を振りながら満面の笑みで現れたのは、無精髭を生やした剃髪の僧侶だった。開け放たれたドアから見えるのは真っ白に輝くハーレーダビッドソン。その見た目とあまりにもかけ離れた態様に面食らった店主が、お盆を落として硬直した。

「遅い」

神父が眉をひそめ、不機嫌に言う。僧侶はすすすと歩み寄って向かいにどっかりと腰を下ろすと、頬を膨らませた。

「アンタって相変わらずいけずねえ。人がせつかく仕事放り出して三つも離れた町からわざわざ飛んできてあげたのに。どーも、その人間離れした凶相がご健在で何よりですこと！」

「お前のその姦しさと減らず口も健在で何よりだ」

「可愛くなあい、口達者って言ってちょうだいよ」

僧侶がほぼほと高笑いをすると、神父は苦虫を噛み潰したような顔になった。片や神父、片や僧侶という異様な光景に目を点にしていた店主だが、諦めてもそもそとお盆を拾った。

二人は大学の研究室を共にした同期である。卒業後、互いに別々の大学へ編入して神父と僧侶となった身だが、今日まで縁が腐りきっているにも関わらず切れることのない仲だった。

「それより、例のあれは持ってきたんだらうな」

「持ってきたわよお。あんなヤクザの揺すりみたいな連絡をよこされたらね」

僧侶が、抱えていた冊子——同窓会名簿——をテーブルに放った。神父は礼も言わずに一つを取って読み始めた。そんな彼に呆れてため息が出たが、テーブルに広げられた新聞と脇に置かれた本が目にとまり、思わず僧侶の顔が曇った。

「どういうつもりよ」

僧侶がコーヒーを頼み、店主が奥へ引っ込んでからしばらくして、僧侶が問うた。神父は顔を上げぬまま、

「何のことだ」

「丸分かりなとぼけ方しても駄目。教授の通夜にも告別式にも出なかったアンタが、そんなもの漁って小学生みたいに探偵気取ったところでね、教授の弔いになる訳でもなし……」

語尾がわずかにきつくなって声音が上がり、熱を帯びて相手を知らぬ間に責める。言いながら僧侶の視線が注がれる先には、随分前の版であることが一目で分かるほどに黄ばんでくたびれていたが、間違えもなく『夜叉の鳴く唄』だった。

さあな、と神父はにべもなく、言葉少なに答えるだけだった。片眉を上げ、じれったそうに何か言いかける僧侶だったが、コーヒーが運ばれて一度口をつぐむ。店主はついでに冷めた紅茶の替えも持ってきた。二つの香りが混ざり合い、異国船を待っているような遠い寂しさに包まれる。

「そういえば久しぶりに同窓会名簿を見たんだけど」

髭を撫で付けながら、僧侶が意地悪な笑みを含んで、

「アンタの名前がどこにもなかったわよ」

「そりゃそうだろう、俺は追放された身なんだ」

くっと喉を震わせ、神父が自嘲気味に吐き捨てた。僧侶は疲れたように目頭を押さえると、大きく天井を仰いだ。

「あの頃が懐かしいわ……仏の道に仕えることが生まれたときから決められてたアタシには無意味なものだったのかもしれない。けど、そんな宗教の垣根なんか下らないと思えるくらいには、あんたと教授の論争は血沸き肉躍る、熱情的なものだった……そう、激争の挙句にアンタが研究室を飛び出すまではね」

潤んだ目をうっとりとして細めて語る僧侶は、悲しみの淵に夢見る甘美な幻想に酔い痴れているようだった。

「全く……何でそんなことしたのよう」

指でのの字を書き、鼻声交じりの甘えた声で問い詰める。

神父は黙ったまま、いつの間にか字を追うことをやめていた。黒々と波立った瞳の奥には仄かな蒼白い炎が揺らめき、顔に落ちる翳がいつそう険しさを滲ませながら濃くなっていく。

「教授は俺に、こう言ったんだ」

不意に神父が口を開いた。傍観者のように冷めた声音でありながら、全てを焼き払おうとする、激情を孕んだ目。真っ直ぐ見据えられた僧侶は、どきっとした。

「『罪の意識に抑圧される限り、人は本当の自由を手に入れることはない。罪こそが罪であり、我々が罪から解放されることこそ、人は人たらしむるのだ』と……だから俺は、こう返した。『キリストが贖った罪の感触を忘れてはならない。罪の意識こそ、人が人であるのだ』と」

薄い唇から滑り落ちる言葉に含まれた毒々しさが体内を回り、手の先に伝わる冷たい痺れに、三白

目の鋭い目がわずかに見開かれる。遠く馳せる瞳が、何も映さぬ空間をはっしと睨む。その視線は血を吐くほどの凄絶さを湛え、何かを訴え、詰る。

だがそれも束の間で、やがてふっと彼の瞳から全ての光が失われた。

「弔い、か。なるほどお前の言う辛気臭い言葉もあながち的を外れてはないな。別に俺は、今でも自分の考えが間違っているとは思わん。教授の言うことも理解できない訳ではないし否定もしない……ただ、許せないんだ。教授の言葉を己の都合のよさのために歪曲し、神を利用しようとする輩たちを！」

神父は唐突に、すっと両手を差し出した。僧侶が思わず身を引く。神父は掌をじっと見つめた。指先からじわじわと赤黒い靄が滲み、やがてはどろどろと爛れていく。ぐっと拳を握れば、ぼとりと肉片が紅茶の水面に波紋を広げ、瞬く間に灼熱の如く焦がしていった。神父は目を閉じた。

「罪は、罪だ」

噛み締めるように吐き出すそれは、この場を取り巻く空気を大きく震わすのには十分な、重い威圧を放っていた。

「……ほんっとうに変わんないのねえ、アンタは」

鼻から長く息を吐き、僧侶がぼやいた。鬱々と淀みの溜まった空気を霧散させるほどに、その声はうららかで呑気なものだった。

「教授の葬儀もすっぽかしたアンタだから罰として黙っといてやろうかと思ってたわ。アンタに呼ばれでもしなけりゃ、誰にも話さなかったかもね」

唐突に感じられる話に、神父が目を開けた。じろりとねめつける先で、僧侶は思わせぶりに目を伏せると、何やら嬉しそうに口先を綻ばせて袂をまさぐった。

「教授の葬儀の後しばらくして、遺族の方から連絡が入ったのよ。納骨にはまだ早いと思って行ったら、教授の妹さんと弁護士がアタシを迎えてね、こんなものを渡してくれたわ……」

声を弾ませてそう語りながら僧侶が取り出したのは、曇みきれない量の原稿用紙の束だった。いつものものかさえ見当もつかない黄ばみと、圧倒される厚さ。

目にした瞬間、神父は息を詰めてそれを凝視した。身じろきもせず声もなく、ただ彼の強い視線に滲む驚嘆だけが、彼の中の凄まじい動悸の狂いを物語っていた。

「アンタが教授宛に書いた、最後にして最大の論文」

掲げながら、僧侶はそんな彼の様子を見て満足そうに言い放った。なぜだ、と口調に一切の変化を見せず、しかしその奥に激しい糾弾を秘めて神父が問う。

「教授の遺言書と一緒に封をしてあったそうよ」

「……全く、つくづくおかしな話だ」

数拍間止まった世界が、再び緩やかに動き始める。どっと疲れて肩を落とした後、髪を無造作に掻き上げるふりをして神父は目元を覆った。気づけば喉の奥から笑いがとめどなく漏れ出す。心底愉快そうに、同時に真におぞましげに、たっぷりと気の済むまでそれは続いた。

「教授は死んでまで、結局はアンタのこと気にかけてたのね」

「いいや。死んでなんかいないさ」

僧侶の言葉を、口角を吊り上げたまま神父が否定した。僧侶が片眉を上げる。ゆっくりと顔を上げ

た神父の瞳で、禍々しい闘志が燃え上がっていた。

「決着をつける 때가来たのさ。でなければ教授は、死んでも死に切れないだろう。上等だ、俺と教授の論争に、終止符を打とうじゃないか。今度こそ！」

○

それは、餅を喉に詰まらせたような間抜けな衝撃だった。

「.....何でそこに神父さんが出てくるの？」

快晴の日にいきなりバケツで水をぶっかけられたときのような顔をしているケイに、純香は肩を竦めてみせた。

「言ったでしょう、彼は若林の最愛の弟子だったと。彼は大学時代、若林の研究室生だったの」

「だから、何でそれが単純に神父さんと結びつくのよ」

馬鹿じゃないの、とケイは心底呆れた。

「神父さんは.....『背徳者』よ。神を憎んでる、でも、同時に神を愛してる。だからこそ神への冒瀆を一番嫌うの。そんな神父さんが、カルトテロなんて起こすと思う？ 冗談じゃない！」

脳裏に蘇るのは、十字架から背く瞳、マリア像に背を向ける姿——破壊の衝動に血が全身を巡る、だからこそその欲望は神への強い追従となり、相反する想いに苦悩と絶望を掻き抱く姿。そんな彼を一番近くで見てきたのは自分だという自負が、ケイにはあった。

「そこにあなたの意思はあるの？」

そんなケイに、純香が鋭く問うた。透明な面立ちは変わらないのに、その目元は歳をとってやつれているように見えた。

「『背徳者』というものにどれほどの価値があるのか、私には計り知れないわ。でも、そこにあなたの意思はあるの？」

その問いの意味が分からず、ケイは虚を突かれた。純香が黙って首を振る。艶やかな長髪が彼女の頬に垂れて物憂げな翳を落とすのを目にし、ケイはどきりと切迫した不整脈を感じた。

「若林に従事していた神父は聡明で優秀だった。彼らが時に交わした論争はたかが教授と学生の戯言だったけれども、その域を超えた高度な内容は若林の後の研究に大きな影響を与えたといわれているわ。」

でも.....彼はまた、若林の理論について常に警鐘を鳴らしてもいた。最終的に彼らは袂を分かち、神父は若林の下から去ることになる」

「だったら何だっていうのよ、二人は決別したんでしょ？」

「決別したからこそ。異教として共存することより異端として排除さえる道を選んだ彼だからこそ！」

若林をだれよりも理解していた。彼は、若林の辿ろうとしていた破滅への道を誰よりも感じ取っていた.....若林の野望を食い止めるために、そして自らの理論を立証するために！ 彼は人柱として...  
...自らの手で怪物と化した彼をあるがままへ帰したの！」

ケイは驚愕した。耳を塞ぎたくなかった。本能が喚く警告に、心臓ががなり立てた。

「でもそれだけじゃ終わらない.....若林亡き今、砦を失った彼らは無秩序に野へ放たれたウルフ同様となった。地獄に向かう連鎖を止められない今、ヤングガンテロリズムを野放図にする神父は、首謀者に等しいんだわ！」

「やめて、聞きたくない！」

ケイは絶叫した。その拍子に手足の縄が肌に食い込み、激発する感情に痛みが走る。胸の奥にある仄かな神聖不可侵の領域を蹂躪されたような、明確な屈辱と嫌悪が腹の中でうねりをあげる。

「そこに何が残るのよ！ 若林って奴が何考えてたか知ったこっちゃないわよ。でも若林を殺したところで、神父さんに何が残るの！ 自分の理論を正当化？ 現にそんな奴らが暴れ回ってるのに？ 何の解決にもならない、こんな虚しいこと、人の幸福を踏みにじってまで築くような歪んだ正義があつてたまるもんか！」

「あなたには分からないのよ！ その歪んだ正義のために幸福を踏みにじられた者の気持ちが！」  
純香が怒鳴り返した。椅子の倒れる音が耳をつんざく。純香の身体から放たれる殺気が、蛇の如くケイの首に絡みつき、締め上げる。

「その手で人を殺した——罪を犯して今日まで生きながらえたあなたなんかには！」

それは、断罪だった。

頭の中が瞬く間に白く染まる——鼓膜を鈍く震わせる重音が、世界に致命的なひびを入れた。心臓を一思いに抉られたように息が詰まり、言葉が喉の奥につかえる。

純香はケイを睨んでいた。腹の底からぞっとするほど冷え冷えとした憎悪。充血した眼から溢れ頬を濡らす熱が、わなわなと震える拳が。噴き出す憤怒が怒涛の勢いで漏れ出すのを抑えることができなかった。

「『背徳者』なんて……笑わせてくれるわ。結局はそれに名前をつけて、押し潰される鎖の重さから理性を逃すだけの弁明でしかないんだわ！」

——一緒に来ないか。『背徳者』の世界へ。

手を差し伸べて誘う神父の面影が色褪せていく。彼の纏う黒い服は、覗き込めばこうっと冷たいうめきを上げる、漆黒に濡れた深淵にも似ていた。なす術もなく真っ逆様に墜ちゆくのは、果たして自らの重みか、力づくで引き込まれたか。

遠くなる自我の中、純香の憎々しげな声だけが鮮明に響く。

「壊してやるの。妄執に支配された虚構も、生かされ続ける若林の亡霊も、何もかも！」

○

「セミナー参加者リストも持ってくるよう言ったはずだが」

「冗談よしてちょうだいよ。そんな個人情報、問い合わせしても門前払いだったわよ」

「使えん奴だ」

「ひどいわねえ。同窓会名簿だってこれだけ集めるのにアタシ走り回っちゃったのよ？」

「走り回ったのは大型二輪でお前の毛むくじゃらな大根足じゃないだろう」

「ああ言えばこう言う、いけず！」

何杯目か分からないコーヒーを仰ぎ、僧侶が舌を出した。神父は知らん顔で何冊目か分からない冊子を手に取る。繰り返される動作にいい加減怠惰を覚えた僧侶が、げんなり頬杖をつく。だが、ふと何かに思い当たったのかにやりと然り顔になり、

「ははあ、だからアンタ教誨に行ったの？ テロの犯行者がセミナーの参加者かどうか確かめるために？」

「……知っていたのか」

「当然よお。犯罪者更生のために頼る宗教はキリスト教だけじゃなし、アンタの奇行は嫌でもアタシ

の耳にも入るわ。で、どうなの？ アタリ？ ちょっと何とか言いなさいってばあこのこのお」

「さあな」

「まあたとぼけちゃって、普段は頼まれたって教誨なんてするような善良な心持合わせてない癖に」

「それにしてもおかしいと思わないか」

脈絡のないそれに、僧侶が怪訝そうに眉を寄せた。神父はおもむろに顔を上げ、頭の中に積もる鬱蒼とした影を疎ましく思うように目を細める。

「これだけ要素が揃っていれば、捜査能力の高い警察がセミナーの存在を嗅ぎ付けられないはずないんだがな」

「……そういえば」

そう言われ、僧侶が戸惑いがちに顎を撫でた。

「問い合わせをしたのも大学なんだけど、妙なこと言ってたのよねえ。教授が亡くなってセミナーが事実上活動停止になったのは当然だけど、そこから大学の手を離れて状態が一切把握できてないんだとか……」

「裏で操作されてる可能性があるな」

しれっと断言すると、神父は視線を冊子に戻した。

「警察の目を欺き、なおかつ取調べにおいてセミナーの存在を漏らさないよう若者を徹底的に調教する……恐らく、ヤングガンテロリズムの首謀者であり、教授を殺害した犯人だ」

「わっかんないわねえ、やんなっちゃう」

一寸先に立ち込める紫煙の如く漠然とした途方のなさに、僧侶が肩を落として弱々しく溢した。だがその間も紙を擦る音が絶えず、僧侶はいささかむっとなると苛立たしげに指でテーブルを叩き、目の前の神父を睨み付けた。

「ねえ、よしましよよお。アタシだって同窓生の中にそんな凶悪犯がいるなんて考えたくないんだから……」

「俺もお前も大学を卒業したのはいつの話だ。それだけ月日が経てば人種も変わる、それこそどんな奴が残忍な犯罪者に豹変するか知れないだろう」

「まさに、教授の研究対象にうってつけて言いたいよね」

悪気はないだろうが、底意地の悪い皮肉だった。神父は鼻を鳴らして流そうとした。が、途端に瞳の動きが凍りついた。規則的に字を追っていた視線が不自然に乱れるのに気づいた僧侶が、不審に思っただけで彼の顔を覗き込む。

「何、どうしたの？」

「もしかしたら俺たちは、既に会っているのかもしれない」

満ちた潮が引いていくようにして終わりを告げる、平和への憧憬。代わりに刻々と押し寄せるのは、錆びついた運命の鎖が凄まじい威力で絡み合う音。地響きとなって迫り来る現実を悟ったとき、神父の表情がみるみるうちに強張った。

「そうだとしたら、彼女が危険だ……」

「えっ？」

弾かれたように顔を上げた神父は、人を射殺さんばかりの怒気を孕んでいた。何もいわずに千円札

をテーブルに叩きつけると、何も言わずに店を飛び出していく。わずかの間に起きた彼の純情ならぬ変化に一瞬呆気にとられた僧侶だったが、すぐさま我に返ると彼を追って駆け出した。

「待ちなさい！ アンタどこへ行くの！」

ハーレーにまたがり、既に数十メートル離れた神父の目の前にはだかる。耳を塞ぎたくなる爆音にも構わず、神父は邪魔だと無言で罵った。剥き出しになる牙から放たれる毒々しい殺気に臆しそうになりながら、僧侶は負けじと怒鳴った。

「急いでるなら送るわ！ 乗りなさいな！」

親指で後ろを示せば、神父は頷くと飛び乗った。

○

脳がどろどろと溶けていく感覚。水面に向かってもがこうとするほどに、じわじわと塞がる呼吸器、頭に血が上っていく。充満する石油の匂い――ケイは遠い記憶の彼方に、知っている気がした。心の中のみみず腫れが膿み、じくじくと疼いて熱に冒される。幻惑に揺られて夢うつつを彷徨う意識の中、時折聞こえる水音だけが思い知らせる。目の前に広がる、変えようのない惨劇を。

「純香……じゅんか！」

闇の中で盲目に手を這わせるように、ケイが声を張り上げた。必死で押し出すそれは掠れ、霧散するガソリンが喉の力を奪う。空になった小型タンクを投げ捨てた純香は、立ち込める熱気に汗ばんでいた。息を弾ませ、ぎろりと目を剥いて振り返った。

「この真上には――」

すかさず掲げて見せたのは、どこにでも売っている安いライター。ケイは思わず目を疑った。鈍く光を反射するそれは、可憐な少女の掌には重すぎる、命運を操るためのたった一つの鍵である証だった。

「今、聖書科の講話に全生徒が集ってる。ここは礼拝堂の地下にある書斎……私は、全てを握ってることになるわ」

「どうして……何考えてんのっ？ そんなことすればあんただって……！」

「ヤングガンテロリズムを終わらせるには、こうするしかないのよ」

ケイははっと息んだ。神父を潜めて佇む彼女。じっと見据え返す純香の瞳が眼鏡のレンズ越しに、何にも替え難い決然とした意思に満ちていたから。彼女の仕草一つ一つから淀みがなくなるたび、ケイはぞっと旋律に肌が粟立つのを禁じえなかった。

「ヤングガンテロリズムの始まりが神父にあるのなら……彼のあるべき場所がこの礼拝堂にあるというのなら。壊してしまえば、彼は何も手出しできないでしょう！」

「何があんたをそこまでさせてるんだ！」

ケイは悲鳴に近い叫びを上げた。泣き出したい衝動に頭が締め付けられる。

「あんたの大事な人がテロに巻き込まれた？ それとも、セミナーに入っておかしくなっちゃった？ ……あんたがやろうとしてることは！ 傲慢なテロリズムと何一つ変わらない！」

「言ったでしょう――あなたには、分からないって！」

ぱた、と石油を撒き散らす際に被ったせいか、黒髪を濡らした雫が滴る。必死に痛みを耐えようと、ライターを持つ手に力を込め、純香が無表情のままぎりっと奥歯を噛み締めた。

「思い知ればいいんだわ……大切なものを一瞬で破壊されたときのあの、心臓をすり潰されたような

耳につく音、陵辱されたような気持ち……彼らは笑ってた。目の前で、無邪気に、後ろめたさの欠片もなく、美しく、気高く、穢れなく！ そんな世界を築き上げようとしている彼らに、気づかせてあげるのよ。あるべき混沌の姿に、鎮めてあげるの。彼らが信じてやまないその絶対的な幻想が、ただの混沌の中に見出した虚構でしかないことを！」

脳内に反芻する純香の声が呪いの如く、歪み、ざわめき、耳鳴りとなって自我を食い荒らす。耳を塞げない代わりに、ケイはとっさに目をつむってしまった。

遮断された世界は、暴発砂嵐のようだった。内なる慟哭がせめぎあい、肉体にもたらずのは律動的に突き上げる、胸を刺す嘔吐感と激痛と狂乱……絶望への絶望と、抗い。

——その手で人を殺した。

——罪を犯して今日まで生き延びてきたあなたなんかに。

震える唇を噛む。強く強く、必死で歯を立てれば微かな鉄の味が舌に広がる。戒めの縄が手首を締め付けるたび、じゅ、と見えない烙印が掌に押し付けられ、肉を切り裂く灼熱に自己の存在が打ち消されていく。

助けて。

誰か。

——神様にすがらないと何もできない訳？

そのときなぜか蘇ったのは、今朝廊下で因縁をつけてきた女生徒たちだった。神さま助けてくだちゃーい。下劣な笑いと嘲りの表情が交互に過っていく。

瞼の裏に稲妻がほど走る。その切れ目に鮮明に浮かび上がるのは、あの日最後に見た、古びた聖母マリアの像だった。

「私は神にはすがらない」

嵐がやみ、訪れたのは身の毛のよだつ孤独を伴った、残酷なほどの静寂。

「あの人たちをこの手で殺めてしまったとき、たった一つだけそう誓った」

ゆっくり目を開ければ、粒子の流れが手に掴めそうなくらいに視界が冴える。鼻筋を伝う汗が冷え、あらゆる感覚が研ぎ澄まされていく気がした。

「だからこそ、私は、“私”になれたの！」

純香の頬が強張った。真意を図りかねて、警戒心を募らせながらケイを睨み据える。ケイも真っ直ぐに見つめ返した。目が合った瞬間、腹を抱えて抑え込んできた悲痛な哀願が、腸を突き破って溢れ出した。

「罪は、罪だ！ どんな理由があつたって。例え相手が微笑んで赦してくれても、死んだ人が何も言わなくても、皆が首を縦に振ったとしたって、罪を犯したあの感触は消えてくれない——手を洗っても洗っても、泥で上塗りしても、他の誰かを殴って血の匂いで紛らわしたとしても！ いつも闇から無数の目が覗いて行く先私を取り囲む。無数の口が私の耳元に集まって囁く。何千、何万の汚れた罵りが、私を、私の存在を、全てを、なじるの！」

胸に埋め込まれた銀弾が暴かれ、火を噴いて燃え上がる。



「純香、あんたは言ったわよね。『背徳者』なんて、罪を犯したことの言い訳に過ぎないって。でも、そんな言葉一つでこの手の感触がなくなるなんて、そんな都合がいいわけじゃない。

着けてみなさいよ、火を。あんたに、罪を犯した覚悟があるなら。いいわ、私はあんたの前で死んだって、構うもんか！」

純香は微動だにしなかった。相変わらず、ライターを目の前に掲げたままの姿勢。だが、その姿は自ら命運の鍵を手にして優越感に浸っているより、天井から糸をかけてぶら下がっているそれに、すがりついているようにさえ見えた。

「――……純香！」

続く

※今更だけど注意書き

この作品の前に、『案山子2013年夏号・背徳者、背徳者――1 / 2 神話』『案山子2014年夏号・背徳者――chaos(前編)』を読むことをお勧めします。

※あらすじ

ミッション系高校に通う不良少女の来栖恵は、ひよんなことから礼拝堂の凶相神父と言葉を交わし、「背徳者の世界へ」という合言葉と共にこき使われる毎日。素行不良を貫き通す中、ケイはある日、作家少女の純香と意気投合する

神父は最近、巷で騒ぎとなっている若者集団テロ事件〈通称・ヤングガンテロリズム〉の実行犯の教誨をしているようで、何やら穏やかではない。そして純香にもまた、ただならぬ気配が潜み――……

。

毎度のことながら参考曲

- ・「F.D.D」 いとうかなこ
- ・「1 / 2の神話」 中森明菜

《あとがき》

またまた「案山子」に登場するのが一年ぶりとなってしまいました。お久しぶりです。そしてはじめましての方、山吹弓穂と申します(本当はペンネームをThis is a pen に変えようかなとふざけたこ

とを考えましたがそれはともかく)。

締切直前の切迫感を言い訳にするのは卑怯だという信念があるので言い訳は致しませんが、それにしてもこの作品が仕上がったのが締切日なのだという事は実に感慨深いものだなあなんて思ったりします。そして我が相棒である小説ノート君が史上最大に大変なことになっております。

相変わらず、心の支えになってくれたのは西部警察です。それが影響して「爆発」とか「麻薬」とか「暴力団」とか不謹慎なワードに反応して興奮するという特殊な性癖が発生したなんてそんなまさかまさかー(棒読み)。

最後に。ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。

## 口笛とお化け（諸木夕）

口笛とおバケとぼく

諸木 夕

「こら、夜に口笛を吹いたらおバケが来るでしょう」

夕飯の片づけを終えた母親が、庭に面した縁側に顔を見せた。庭と縁側はうっすらと月明かりに照らされ、ぼんやりと輪郭が浮かび上がっている。

少年は縁側に腰掛け、夏の夜空に向かってぴゅうぴゅうと口笛を吹いている。その一人の空間を突如破られた少年は口笛を吹くのをやめ、唇を尖らせた恰好のまま、

「はあい」

と、不服そうな返事をひとこと投げた。

「あと、お風呂沸いているから早く入りなさい」

「うるさいなあ。分かったから、あっち行ってよ」

ぷい、とそっぽを向いた少年に、母親はやれやれという顔をしながら「早くね」ともう一言残し、踵を返した。

再び訪れた一人だけの世界で、少年はいらだちを募らせて強く息を吐き出した。

（どうしてお母さんはぼくのやることにいちいち文句をつけるんだ。口笛を吹くのはぼくの勝手じゃないか。こんなことで怒られるなんておかしいよ。

しかも『おバケが来る』だって？ ただの子供だまだ。ぼくはもう小学三年生なんだぞ。お母さんはぼくをバカにしてる。

お母さんはいつもこうだ。ぼくのことを嫌いだから、こんなイジワルなことばかり言うに違いない）

少年の心の中に日頃からの母親への不満が渦巻いた。母親の言動・行動が自分への嫌がらせのように感じられて怒りがこみ上がってくる。

——その一方で、肉親から拒絶されているという感覚が、その心に強い悲しみや寂しさといった感情も呼び起こしていた。

少年は再び、口笛を吹き始める。先程とは違って、その音色は乱暴で無秩序だった。

息を吐くばかりで酸素はすぐに足りなくなり、少年は胸いっぱい夜を吸い込む。

肺が空気で満たされた瞬間、目の前の闇が数段濃くなった。

ざわざわと庭の木が鳴る。風はそれほど強くないのに、葉や枝が揺れ擦れる。少年は異様な雰囲気を感じ取った。

そして、夜の闇に溶け込む真っ黒な「何か」を視認した。

「上手だね」

突然、黒い影が音を発した。少年はびくりと肩をふるわせ驚きに目を見開く。

「口笛、上手なんだね」

再び、黒い影が言葉を投げかける。その姿をまじまじと見てしまったために、少年の身体は言いようのない恐怖に支配される。しかしそれでも少しの理性が働いたのだろう、明らかに自分に向けられた言葉に対して、何か反応しなければと小さな頭を必死に巡らせた。

「……で、でも、お母さんが夜の口笛はだめだって」

なんとか絞り出した返事は、影の言葉に対するものとしては少し的外れなものだった。しかし、それを聞いて影は愉快そうに笑った。

「あはは。夜の口笛がだめだなんて、そんなことないよ。だって現に、君の口笛のおかげでぼくは君に逢えたんだから」

どこからか、蛍が庭に入り込んでいた。黒い影にまわりつくように飛ぶその光は強弱を繰り返すが、影はただ真っ黒な空洞のようで、それを反射することはなかった。確かにその影は人の形をとってはいるが、体表は暗黒に包まれているのみだった。

少年は、目の前の光景を見ると同時に、先ほどの自分の行動をひどく後悔した。  
(『これ』はオバケだ。お母さんの言っていた山から来るオバケだ。ぼくが口笛を吹いたからほんとに来ちゃったんだ。どうしよう、どうしよう)

「僕が怖いんだね？」

心を見透かしたような言葉に、少年はさらに表情をこわばらせて後ずさる。

「そんなに怖がらないでよ。ただ、話し相手になってもらいたいだけなんだ」

「話し……相手？」

「そう、話し相手。僕ね、長い間一人ぼっちなんだ」

少年には、顔を持たない影が悲しげな笑みを作ったように感じられた。

影がその輪郭をゆらめかせると、少年は何か魅入られたように目を見開いた。



少年がふと我に返ると、いつの間にか庭の飛び石辺りに立っていたはずの黒い影は、少年の隣で縁側に腰掛けていた。

不思議な事に、先ほど感じた強い恐怖は少年の頭の中から消え去っていた。数十センチに縮まった二人の距離にも疑問を持たなかった。むしろ、影が漂わせた孤独感のようなものに対して共感の念すら覚えていた。

「一人っていったら、ぼくだってこの家に味方なんていないよ。一人ぼっちでいるみたいなものさ」

少年は、不規則な軌道を描く弱々しい蛍の光を見つめながらぼつりと呟く。

「どうしてだい。君はお母さんと一緒に暮らしているだろう。お母さんは君の味方じゃないのかい」

空間をそこだけ墨で塗りつぶしたような影が不思議そうに尋ねる。

少年はふるふると力なく首を横に振った。

「違うよ。お母さんはぼくが気に入らないんだ。テストで九〇点とって褒めてくれないし、頑張っ  
て見つけたカブトムシも捨ててこいって言うし、さっきも口笛を吹いただけで怒ったし……ぼくの

ことが嫌いなんだ」

表情を曇らせ、少年はうつむく。

お互い何か思案するような数秒の間。先に声を発したのは影のほうだった。

「……君はお母さんに嫌われていると思っっているようだけれど、それはきっと勘違いさ。テストの点数を褒めてくれないのは君がもっと良い点数をとることを期待していたんだと思うし、カブトムシを捨ててこいって言ったのは、ただ虫が嫌いだっただけかもね。口笛は——僕みたいなヘンな奴が家に近寄らないように注意してくれたのかも」

それは冗談めかした声色だったが、少年ははっとしたように顔を上げ、影の顔があるであろう場所をすぎるように見つめた。

影は言葉を続けた。

「君は確かに、お母さんに愛されているよ」

真剣な声だった。

少年は影がじっと自分を見つめ返していることを感じとった。影が本心から自分に語りかけていることが痛いほどに分かった。

少年は思わず影から目をそらし、庭のほうに投げ出した自分の爪先を見た。

(お母さんはぼくのことが嫌いなわけじゃないの？ ぼくがそう勘違いしてただけなの？ 本当にそうなら、ぼくってすごく恥ずかしい奴じゃないか)

少年は気恥ずかしさと母親への申し訳なさから、カッと顔が熱くなるのを感じた。

そんな少年をよそに、影は半分独り言のように呟く。

「いいなあ、君は。愛してくれる人がいるんだもの。いいなあ……」

今度は、淋しさと羨望が入り交った声で。

途端に力をなくした影の声に、少年は何かを決意したかのように手をこぶしの形にぎゅっと握った。

「じ、じゃあさ、ぼくと友達になろうよ。ぼくのお母さんはあげられないけどさ、ちょっとは寂しいのも紛れるかもよ」

少年は恥ずかしさで顔を上げられないまま、少し上擦った調子で影に。気恥ずかしそうに脚をぶらぶらと揺らす少年に、影はふふ、と笑い声を発した。

「嬉しいなあ。そんなこと言ってくれたのは君が初めてだよ」

心底嬉しそうな影の声に、少年も笑顔を見せる。

「でも僕は、友達じゃなくて、君が欲しいなあ」

少年は影の言葉の意味が理解できなかった。はじかれるように顔を上げると——。

「『お母さんに愛されている君』が欲しいなあ」

真っ黒な影がいた場所には、代わりに少年自身がいた。

「え……？」

目の前で起こっている現象が全く理解できずに、少年はただ呆然として硬直する。

突如現れたもう一人の「少年」は口の端を吊り上げて笑った。

「ごめんね。我慢できなくて、もうもらっちゃった」

瞬間、その背後から全てを飲み込むような闇が堰を切って溢れだした。濁流はそのまま少年に襲いかかる。

少年の視界と意識は、彼が叫び声をあげる間もなく、一瞬にして暗闇に塗り潰された。

最後に少年の目に映ったのは、自分ではない自分の、幸せそうな笑顔だった。



「ちょっと、まだお風呂入ってないの？ 早く入りなさいってお母さん言ったでしょ」

雲がかかって月明かりがあたらなくなった縁側に、再び母親が顔を見せた。

少し声を荒げる母親に少年は、

「えへへ、ごめん。僕、今すぐお風呂入るよ」

と笑って縁側から腰を上げ、小走りで母親のもとまで行く。

母親は、いつもと反応が違う息子の様子に少しばかり違和感を覚えたが、素直に言うことを聞いてくれたことへの安堵感にその違和感はかき消された。

「そんなにニコニコして、何かいいことでもあったの？」

「うん、すごく嬉しいことがあったんだ」

少年は満面の笑みと共に答える。その笑顔に、母親もつられて笑った。

「よっぽどいいことだったのね。あ、また虫捕まえたとか言うならダメよ。逃がしてきなさい」

「違うよ。何があったかは秘密。でも、もう虫は捕まえてこないから安心してよ」

他愛もない親子の会話を交わしながら、二人は明かりの点る部屋の中に入っていった。



蛍の光だけが照らす庭の片隅に、真っ暗な影が人型に固まった「何か」がぼつりと立ち尽くしていた。

しばらくしてゆらりと動き出したそれは、庭の中をぐるぐると音もなく歩きまわった後、ここに居場所はないと悟ったようにふらふらと民家の敷地を後にした。

遠くから聞こえる、誰かの口笛の音に誘われるように。

<あとがき>

二年ぶり二回目の投稿です。

この作品は三題噺「笛・山・怒る」で書いた作品を加筆修正したものです。（ちなみに山要素はなくなっています）

あれだけメ切り当日になってから焦って書きだすなど言ったろうがアホめ。

「圧倒的語彙不足、徹底的超展開」のもろきゆうでした。読んでくださった方、ありがとうございました。

ところで「夜に口笛を吹くな」という言葉には様々な脅し文句が付随していると思うのですが、読者さんのおうちではどのようなものでしたか？（ちなみに筆者の家では「蛇が寄って来る」というものでした）

## A (亜蛙阿鳴)

A

亜蛙阿鳴

A

「いらっしやいませ」

鈴の音と一緒に店員の通る声がカフェのなかに響いた。青葉は「待ち合わせです」と伝え店内を見まわす。サラリーマン、女子高生、家族連れ。まばらにいる客の中で、青葉は店の奥の席に座る、彼に向かって小さく手を振る女性を見つけた。茶色のショートヘアで、整っているが仏頂面なのが特徴的だ。青葉は駆け足でその女性の元へ向かった。

「ごめんごめん。道に迷っちゃってさ」

「平気、私もいま来たところだから」

青葉は女性の体面に座った。テーブルにはすでにカップが置いてあり、青葉はそれと同じものを店員に注文した。店員がいなくなると、女性は口を開いた。

「もしかしてケンさん、方向音痴？」

「ただここに不慣れなだけだよ」

女性はコーヒーを一口飲んだ。

「ユウさんはこの辺り慣れてるの？」

「うん、お母さんの地元だから結構来たことあるんだ」

ユウと呼ばれた女性は表情を和らげ答えた。またカップに口をつける。店員がやって来た。コーヒーをもらい、口につけようとする。ピタッ、と青葉はその手を止めた。

「そういえば、まだ挨拶してなかったね」

青葉はカップをソーサーの上に置いた。

「ケンです。初めまして」

「初めまして。ユウです」

女性もまた穏やかに答えた。

昨日。里野大学の図書館ホールで、青葉は友人の赤崎に自分のケータイを見せつけていた。

「見なよ、竜児。明日午後三時。約束を取りつけたよ」

「すげえ！ ついにやったな。ケン」

青葉はケータイを操作すると、赤崎にそれを渡した。彼は息を飲みながら、その画面を注視した。彼の手が震える。

画面の一番上に「フワ・ユウ」。その下には茶色のショートで仏頂面だが整った容姿の女性が映っていた。

「出会い系アプリを始めて二週間。ついに悲願が達成したな」

「ああ、メアドもらうまで一週間。それから会う約束まで一週間。長い戦いだっただ」

あふれ出ない涙を親指でぬぐう青葉の背中を、赤崎は何度も叩いた。最初は優しく、徐々に強く。

「そうか、お前も卒業か。クソッ、うらやましいぜ」

「イタイイタイッ。竜児止めて、マジでいたいから」

赤崎から距離をとり、青葉は自分の背中をさすった。



「それに、まだだよ。明日は食事だけ」

赤崎からケータイを奪いとると、メール画面を表示する。

「なーんだ。それはそうと、『フワ・ユウ』っておかしな名前だよな」

「そうかい？」

「まあ、そこまでおかしくないか。とりま、デートの結果は明後日、いや、その次の日に聞かせてもらおうか」

「ああ、いい結果を期待しててよ」

偉そうな赤崎に、青葉は自信満々に答えた。数多くの冷ややかな視線のなか、二人はハイタッチを交わした。

「カンパーイ」

「カンパイ」

デパートで買い物を楽しんだあと、大きな商品袋を持ったまま二人は居酒屋に向かった。店内は臭いと煙と談笑あふれている。テーブル席に座り、注文をすませ、食事を楽しんだ。

「実家でイヌを飼ってたな。ユウちゃんはネコ派？」

「うん。お父さんがアレルギーで飼えなかったけど」

枝豆、焼き鳥、ピーナッツ。

「ケンくんサト大か。私は海潮大」

「へー、ユウちゃん頭いいんだね」

あげ豆腐、漬け物、焼き魚。

「ケンくんお姉さんが三人もいるんだ」

「実家じゃこき使わされてツライよ」

アルコールは少なめに。料理が来ては談笑しながら箸でつつき、グラスが空けばまた注文をした。

「ケンくんさ、私の名前どう思う？」

一時間が経ったころ。彼女は目を伏せて尋ねた。彼女の問いに、青葉は箸を止める。口の中のものを飲みこんだ。

「おかしな名前だと思うでしょ」

彼女ははしを置いて、グラスを手を取った。ハイボールから泡がうきでる。

「だって `Who are you?、だよ」

青葉は空のグラスを手を取った。

「『君はだれ』ね。あっ、からだ」

「思ったより食いつきわるいなあ」

力が抜けたように彼女はため息をついた。

「ケンって偽名でしょ？」

青葉はコクリとうなずく。彼が口をひらく前に、ユウと名乗っていた女性はハイボールを飲みほした。

「ねえ、ゲームしない。本名を当て合うゲーム。お互いに質問し合って、先に正解したほうが勝ち」

身を乗り出す彼女に、枝豆をつまみ、彼もまた乗り出す。

「面白そうじゃん。勝ったら？」

「相手になんでも命令できる、とか」

彼女は静かに答えた。彼は笑みをうかべ、乗り出した身を引っ込ませる。女性も「へー」と相槌

を打った。

「のったね。じゃあ、細かいルールを決めよう。質問はイエスノーで答えられるのだけ。質問に対してウソつくのは禁止」

彼女の説明を、青葉は片手をだして止める。

「じゃあ俺からも一つ。質問は一日一回で」

首をかしげる彼女に、青葉は腕を組んで答えた。

「すぐ終わるのはつまらないから」

最初はキョトンとしていた彼女だが、ほおをゆるませ口角をあげた。

「あと毎日メールする口実にもなるから？」

青葉は答えず、店員を呼んだ。彼はハイボール。彼女はウーロン茶を頼んだ。

「じゃ、さっそく始めよ。まず私から」

彼女は机に寄りかかり頬杖をついた。

「まずは、ケンって本名？　なんとかケンくん、なの？」

「ノー。本名じゃない。友達からはケンって呼ばれるけど」

青葉はハイボールに口をつけた。彼女は興味深そうに相槌を打ち、焼き鳥に手を伸ばす。

「じゃあ、私もケンくんって呼ばせてもらうね」

「いいよ。じゃあ今度は俺から。もしかして君の名前って、聞いたことのなさそうな名前？」

彼女はグラスに口をつけながら、首を横に振った。

「ううん、聞いたことがある名前」

「どこで？」

彼女はため息をついた。

「それ言ったら大ヒントになるよ。けど、君はケンなんとかくんだって教えてくれたからね。フェアに行こう」

カルピスを飲みほして、一息つく。

「たぶん、テレビや小説でまれに見ると思うよ」

「そっか。話変わるけど、ユウちゃんってテレビ見るほう？」

「ドラマぐらいしか見ないかなあ」

そしてしばらく二人はテレビの話で盛り上がった。談笑しながら、テーブルの上の料理や飲み物をすべて口のなかにつめこむ。食べ終わる。

「勘定のほう、六万三千二百円になります」

「あ、昼買いすぎた。ケンくん、お金ある？」

「俺、五万しかないけど」

「ウソ、私一万もない」「ウツソ、というか食いすぎた」「どうしよ」「あ、クレカある」「そっか、あるかな」「なにそのカードの量！　クソ、俺も見つからねえ」「あっ」「やっべ！」二人のカードが床に落ちた「これはケンくんの？」「ほとんど君のだ、クレカ探して！」「よかった、あったよ」

「ユウちゃんナイス！　拾うのは任せて！」

勘定をすませた二人は、重い足取りで居酒屋を出た。青葉は大きな袋を引き下げて、二人で駅まで向かう。

「荷物持ってくれてありがと」

「気にしないでいいよ。じゃあね」

「うん。じゃあね」

彼女を乗せた電車を、彼を見送った。電車が見えなくなったころケータイが鳴る。赤崎からの電

話だった。青葉は今日のことを楽しそうに話した。

『で、次いつ会うの？』

「あっ」

彼は肩を落とした。

B

『ハッスルして明日遅刻すんなよ』

「しないって」

午後十時。コンビニの前。赤崎からの電話をきり、青葉はメールの画面を開いた。

From : ユウちゃん To : ケンくん (2015/08/18 09:31)

題名 : 名前分かった

本文 : ケンくんの名前は青木剣(アオキツルギ)くんかな？

正解だったら海潮西のコンビニに午後十時に来てもらえる？

「どうして分かったんだろ」

ケータイをしまいふと視線をあげた。女性が手をふりながら駆けよってきている。揺れる茶髪のショートヘア。顔は少し赤くなっており、表情は柔らかい。

「ごめん。遅くなった」

「大丈夫。で、なにか用かな」

「そうそう、これ」

彼女はカバンからカードを取り出した。『里野大学 青葉剣』と書かれている。彼の学生証だった。

「昨日カード落しちゃったときさ、交ぎっちゃったんだと思うんだ。私のカバンの中に入ってたよ」

青葉は急いでサイフを確認した。学生証はない。彼女からそれを受けるとサイフにしまった。

「青い田んぼに真剣の剣。ケンって読みじゃないから名前はツルギ。ここに来たってことは合ってるんだね」

彼女は歩きだした。青葉が立ったまま彼女を見ていると、振りかえり首をかしげる。

「家まで送ってよ。そのために呼んだんだから」

あいまいな返事をして、青葉は彼女の後を追いかけた。照明と月が照らす夜道は、人っ気がなく静かだった。彼女は鼻歌まじりに歩いている。

「今日なにかあったの？」

「客としてバンドの打ち上げに。お酒だけ飲んできた。二次会にも誘われたけど」

彼女は青葉の顔を見た。

「彼氏と過ごすって、ウソついてきた。ごめんね、君を利用しちゃって」

「.....確かに酔ってるね」

青葉は赤く染まったほおを見た。足がよつれ倒れかける。

「音楽ってよく聞くほう？」

「ううん。今日は友達に誘われただけだし。お父さんに似たのかな。音楽はさっぱりだよ。ケンくんは？」

あ、と彼女はなにかに気づいたように声をあげた。

「べつにケンくんのままでいい？」

「かまわないよ。音楽は、俺も詳しくないな。アニソンぐらいしか聞かないし」

「あ、同じ。もしかしたら私とケンくん、気が合うのかもね」

ハハハ、と彼女は楽しそうに笑った。青葉は目をそっとそらした。

「本当に酔ってるね」

「うん、酔うと恥ずかしいことも言えるから、不思議だね。お母さんに似たのかな」

歌うように彼女は話している。

「ユウちゃん、家族のこと好きなんだね」

「うん、大好きだよ。お母さんはおっちょこちよいだし、お父さんは心配性だけどさ」

嬉しそうに彼女は笑う。青葉は彼女を見て、夜空を見上げた。月のまわりで星々が輝いている。彼女は鼻歌を歌っている。二人は夜の静寂にしたがった。

「ありがと、私の家そこだから」

それは比較的新しい、少し大きなアパートだった。

「明日も会えるかな？」

「いや、明日から友達と旅行に行くんだ。コシヨって言ったかな？ 俺もよく知らない」

青葉は頭をかきながら答えた。

「私も知らないな。お土産楽しみにしてるよ。じゃあね」

彼女はアパートへ駆け出すも、すぐに立ち止まり振りかえる。

「そういえば今日はまだ、ゲームの質問聞いてなかったね」

「でもあれ、君の勝ちで終わったんじゃないの？」

戸惑っているようすの青葉に、彼女は鼻歌まじりに答える。

「終わりなんて言ってないよ。勝ったら命令できる、とも言ってないしね」

覚えてないなー、と頭をかきながら、青葉は苦虫を噛み潰したような顔でつぶやいた。そしてチラッと彼女のほうへ視線を向ける。

「じゃ、じゃあ、ユウちゃんの名前を当てることができれば、なんでも命令、できる？」

言葉をつまらせた青葉の顔を、彼女は覗きこむ。

「どんなことを命令するつもり」

青葉は顔を赤らめて、彼女から目をそらした。

「ケンくんも男の子だね。ま、あんな呆気なく終わるのもむなしいじゃん？」

じゃ、じゃあ。青葉はどもってから、小さな声で尋ねた。

「ユウちゃんの名前って、カワイイ名前？」

彼女はあごに手を当て、眉間にしわをよせた。

「ケンくんの『カワイイ』と、私の『カワイイ』が同じとは限らないからね。答えようがない。それに私は君のことまだ知らないし」

彼女はほおを緩ませ、青葉を見た。

「知りたいな、ツルギくんのこと」

「ホントごめん。雰囲気酔いすぎた」

「ハハハ、ツルギくんはカワイイな」

顔を抑える青葉の顔を彼女は覗きこんだ。青葉はたじろき数歩下がった。

「敢えて答えるなら、私はカワイイと思うよ、自分の名前。質問変える？ このままだとフェアじゃないし」

青葉は首を横に振った。

「そう。じゃ、送ってくれてありがと。おやすみ」

「あ、ちょっと待って」

彼女が振りかえるのを止めた。青葉は一、二歩近づき、声をつまらせた。

「あー、特別な意味はないけど。マイって呼んでいい？ フワ・マイちゃん」

「どうして？」

「いや、ユウちゃんのフワ・ユウって名前、偽名じゃん。偽名って分かってるのに呼ぶのって、なんかもどかしいなって」

彼が言い終わると、そっか、とつぶやいた。青葉の後ろを自動車が通りすぎる。

「いやだ」エンジン音が消え、彼女の声が響く。

「て言ったら？」

彼女は笑った。彼は肩をすかして息を吐く。そして青葉はまた手をふった。

「このままユウちゃんって呼ぶよ。変なこと言ってゴメン。じゃあね」

「うん、さよなら」

彼女は振りかえり、アパートの中へと消えていった。振りかえることはしなかった。

C

From : ケンくん To : ユウちゃん (2015/08/19 20:37)

題名 : inコシヨ

本文 : ゲーム

下の名前って漢字2つ？

あとお土産なにがいい？

From : ユウちゃん To : ケンくん (2015/08/19 20:39)

題名 : Re:inコシヨ

本文 : うん

そうだよ

なんでもいいよ

From : ケンくん To : ユウちゃん (2015/08/20 21:12)

題名 : ゲームと和菓子

本文 : 読みは3つ？

あと和菓子って好き？

From : ユウちゃん To : ケンくん (2015/08/20 21:30)

題名 : Re:ゲームと和菓子

本文 : 違う

和菓子普通

From : ケンくん To : ユウちゃん (2015/08/21 19:59)

題名 : コシヨ名物！

本文 : いちご味のチーズケーキが売ってたんだけど食べる？

あと名前の読みって2つ？

From : ユウちゃん To : ケンくん (2015/08/21 20:13)

題名 : Re: コシヨ名物！

本文 : そうだよ

2つ

From : ケンくん To : ユウちゃん (2015/08/21 20:14)

題名 : Re2: コシヨ名物！

本文 : チーズケーキは？

「おい、食事中にケータイいじんなよ」

三日目。青葉は目の前の海の幸に目をくれず、自分のケータイを眺めていた。画面は刻む時間以外変わらず、だれからもメールが来ない。赤崎はそんな青葉の漬け物に手をつけた。

「ケー、そんなに旅行がつまんないのかよ」

青葉は心ここにあらずといった感じで、ああ、とうめく。その声を聞いたであろう仲居さんと目が合い、ぎこちなく赤崎は頭をさげた。旅館の大広間には、二人をのぞき客はいない。

「一応この旅行、お前に彼女出来た記念旅行なんだが」

独り言を言いながら赤崎は青葉の焼き魚定食、ホッケや漬け物、冷奴を食べつくした。青葉はなにひとつ抵抗せず、ただケータイを見ている。

「いいかげん食べろ。はいあーん」

青葉の開いた口に、からのしの大量に乗った箸を入れた。彼は身もだえ、正気をもどす。

「で、ユウちゃんにフラれたのか。初めての失恋だからって落ち込み過ぎだって」

グラスの水を飲みほすと疲れたかのように息を吐き、弱々しく首を横に振った。

「そんなんじゃないよ。ただお土産なにかいいって聞いても、ろくな答えがこないんだ」

また水を飲みうつむく。箸をくわえたまま、赤崎はそんな青葉を見ていた。

「なんか怒らせた？ ころろあたりねえの？」

「.....マイ、かな」

だれ、と赤崎は尋ねる。晩御飯を食べ終えたので、彼らの部屋に向かいながら青葉は事のあらすじを伝えた。客室は十畳ほどの広さで、座卓は端に寄せられ、布団が二つ敷かれていた。

「うん、絶対引かれてる。伝わらないって」

赤崎は布団のうえで転がった。青葉も横になる。

「でもさ、ゲームのほうはちゃんと答えるんだよ」

「そういや、なんでユウちゃん、名前を隠してるのかね」

仰向けで止まり、首だけ青葉のほうへ向ける。

「隠してるのって、名前ぐらいなんだよね」

「そっか、メアドとアパートは知ってもんな。あと大学も。お前が嫌いなら、教えないだろ」

赤崎は起き上がり洗面台へと向かった。

「隠すとしても、なんで隠すんだろ？」

「そりゃ、恥ずかしい名前だからだろ。DQNネームだ」

歯ブラシを片手に洗面台から出てきた。

「恥ずかしい名前、ね」

「意外と思ひ浮かぶものだぞ。例えば.....そうそう」

「それつまんない」

寝転びながら赤崎に枕を投げた。柱に当たる。

「つか、まずは謝ることじゃね。ユウちゃんの名前よりさ」

「謝るってなにに」

青葉は天井を眺めた。木目を目に焼きつける。

「マイちゃん発言だろ。あれ結構気持ちわるいぞ。せめてどういう意味か説明しろ」

「そうだね」

彼女は俺のこと知らないし。小さな声で青葉はつぶやいた。目をつぶる。知らない、知らない。答えようがない。

いきおいよく、上半身を起き上がらせた。

「どした？」

歯をみがいている赤崎のほうを向き、虚ろな目で彼を見る。口だけでつぶやいた。

「分かった。彼女の名前」

布団に倒れ込み、自分の目を抑える。

「ああ、分かった。うん、ヤバい。俺、最低だ。どうしよ」

「じゃあ明日、朝一で帰るか」

青葉は顔と手の隙間から赤崎の顔を見た。

「正午にはあっちに着くはずだ」

「.....ありがと」

青葉は天井に手を伸ばす。その手を赤崎は叩いた。

**From :** ケンくん **To :** ユウちゃん (2015/08/21 22:48)

**題名 :** 君の名前

**本文 :** ユウちゃんの名前が分かった

明日午後から会える？

そこで謝りたい

**From :** ユウちゃん **To :** ケンくん (2015/08/21 22:53)

**題名 :** Re:君の名前

**本文 :** 大丈夫

初めて会ったカフェでいい？

D

「いらっしやいませ」

鈴の音といっしょに店員の通った声が店内に響きわたった。見まわすと、奥のテーブルに彼女は座っていた。茶色のショートヘアの下に、仏頂面だが整った容姿。彼女は青葉と目を合わせると、小さく手をふった。青葉は彼女の向かいに座る。

「ひさしぶり」

「うん」

二人ともランチメニューのスパゲティを頼んだ。

「この前のことだけど、さ」

最初に切り出したのは彼女だった。ほおを紅潮させ目をそらしている。

「ごめんね。へんなこと言って」

「え、いいよ大丈夫。それに可愛かったし」

ほおを緩ませ小さな声で答えた。彼女は顔を手でおおう。

「それに、あのときの言葉がなければ、分かんなかったよ」

「そっか。聞かせて」

顔を上げ、青葉を見つめた。彼はうなずく。

「不破優羽。不思議の丕に紙が破れる、優しい羽で、不破優羽。それが君の名前でしょ」

料理が来た。青葉はミートスパゲティ、優羽と呼ばれた彼女はカルボラーナ。

「最初、『俺が聞いたことのある名前か』って聞いたとき、君は言い切ったよね。『聞いたことある』って」

フォークを手に取らず彼女は聞いていた。青葉も口だけ動かして続ける。

「でも、君は言ってたよね。君は俺のことをまだ知らない、て」

「言ってたね。そんなこと」

彼女は前髪をいじっていた。

「その言葉を信じるなら、君の名前を聞いたことあるなんて、言いきれないわけがないんだ」

彼は水を一杯飲んだ。

「フワ・ユウって名前をのぞいてね。そろそろ食べよっか」

二人はフォークを手に取った。固いもの同士が触れ合う音がした。フォークを刺して回し上げて、口の中へ運ぶ。

「フワはその漢字しか思いつかなかった。ユウはたくさん漢字があるけど、二文字でユウはかなり少ないんだね。で、一番かわいいのが、優しい羽、だった。合ってる？」

彼女はフォークをくわえながらうなずいた。青葉も一口だけ食べると、フォークを置いて頭をさげた。

「ごめん。君の名前を偽名なんて言って」

優羽も食事の手を止めた。ほおを緩ませる。

「私さ、家族のことが好きなんだ。好きすぎるぐらい」

青葉は顔を上げた。柔らかい表情を見た。

「お母さんは、生まれた私に優羽って名づけてくれた。離婚して再婚して、お父さんがやってきたときに性は変わったんだ」

彼女はフォークを置いた。膝の上に手を乗せ、気恥ずかしそうに笑った。

「私の名はお母さんからのプレゼント。私の性は、お父さんの子である証。だから、私はこの名前が好きなんだ。名前をバカにする人が許せないくらいにね」

彼女は微笑んでフォークを手に取る。スパゲティを口ずさむように食べた。

「だからツルギくんとメールしてたとき、すこし期待してたんだ。名前のこと、なんにも言ってこなかったから」

青葉はナフキンで口元を拭いた。

「君なら、私の名前を聞かないでくれると思ったから。読んでくれると思ったから」

グラスを手に取りいっきに飲みほす。

「お土産の話、無視してゴメン。子供だね、私」

早口で言い、ゴメン、と彼女は頭をさげた。



「いいよ、あのときは俺も変なこと言ってたし」

こっちこそゴメン、と彼も頭を下げた。

「そういえば、どうして私のこと、マイって呼ぼうとしたの？」

彼女が顔を上げた。青葉は自虐的な笑みを浮かべつづやく。

「`Who am I?、」

「『私はだれだ』……え？」

「ごめん。青葉ツルギって、本名じゃないんだ」

え、と驚く優羽に彼は近づき、耳を貸して、と言った。彼女のは耳をかたむけ、彼はささやいた。

優羽は口を押え、笑うのをこらえる。

「それは、ずいぶんユニークな名前だね」

「だろ。正直言って、この名前嫌いなんだよ。だから優羽ちゃんの名前は、うらやましいよ」

彼女は笑った。彼も笑った。

「だからこのゲーム。俺の勝ちだよ」

「ズルいよ。私はフェアにいったのに」

「フェアどころか愚直すぎて逆にズルいって」

二人は食べ終わると食後のコーヒーを楽しんだ。

話しながら、笑いながら。

E n d

# オオヤマサマ（昆布中毒）

オヤマサマ 一一三題 嘸「山」「笛」「怒る」一一

## 昆布中毒

山の杉の木に登り、そのてっぺんから見える景色が平吉は大好きだった。

山全体の木々が日に日に緑を濃くしているのが見て取れた。向こうには川が青い糸のように伸びているのが見える。視線を手前にやると、麓の村の茅葺き屋根が点々とある。村の田んぼでは米粒ほどの大きさの人々が田植えをしている。その中の一つに平吉の母を見つけた。一歳になる平吉の妹を背負っている。

平吉はなんだかぼつが悪くなり、母から目をそらして木を降りた。さっきまでの見晴らしのいい景色は木々に遮られ、薄暗い雑木林が辺りに広がった。聞こえてくるものは、風が葉をこする音と、時々鳥の鳴き声。日の光も途切れ途切れにしか入ってこない。それでも平吉はこの森が嫌いではなかった。この木々の間を歩き回ると落ち着く、だから彼は毎日のようにこの山に登り、森に入り浸っていた。

平吉は腰に下げた巾着袋の中から笛を取り出して吹いた。すると、平吉の耳には風の音も鳥の囀りも聞こえなくなった。ただ、木々に跳ね返る笛の音が彼の耳だけでなく、体全体を包み込んだ。

平吉はしばらく笛を吹きながら歩くと、吹くのを止めて近くの手頃な岩に腰かけた。

「今日も素晴らしい笛の調べですね、平吉」

平吉の背後から澄んだ声が聞こえた。振り返るとそこには白無垢のような純白の装束に身を包んだ女性が立っていた。

「オヤマサマ」

平吉は反射的に彼女の名を口にした。山の守り神たる彼女は平吉が山の中で笛を吹くと必ず彼のもとに現れるのだ。

「今日は山葡萄が沢山あるんですよ」

そう言うと、一瞬だけつむじ風が起きた。その中心の上空から山葡萄が雨のようにばらばらと降り注いだ。平吉はそれを風呂敷で受け止める。風呂敷いっぱいの山葡萄が集まった。

こうやってオヤマサマは、平吉が笛を吹くとお礼と言って食べ物をくれるのだ。

「今日は沢山ですね」

「今日の笛は特別素晴らしかったですからね」

オヤマサマは妖艶な笑みを作る。木漏れ日に彼女の黒髪が輝くのに平吉は見惚れた。

「差し上げておいてこう言うのは変ですけど、私も食べていいですか？ なんだかおいしそうで」

「いいですよ一緒に食べましょう」

そう言うと二人は山盛りの葡萄をつまみ始めた。果汁が口の中で弾けて溢れそうになるのを抑えながら、平吉は葡萄を次々と口の中に押し込んだ。

「うぐっ」

不意に平吉がむせた。

「もう、急いで食べるからですよ。はしたない」

オヤマサマはにこやかに平吉を諷めながら、彼の背をさすった。

「ごめんなさい、あまりにもおいしい葡萄でしたから」

「まだこんなにあるんです、ゆっくり食べてもなくなりませんよ」

「でもいつもこんな食べ物をどこから手に入れるんですか？」

「それは秘密です」

オヤマサマは意地悪な笑みを浮かべた。続けて「まあ私は山の守り神ですから」と胸を張った。

四十分程で二人は葡萄の山を食べ終えてしまった。

「あっという間でしたね」

「お腹いっぱいです」

オヤマサマはやおら立ち上がった。

「では私はそろそろ行きます。平吉も暗くなる前に帰るのですよ」

「はい」

平吉はオヤマサマと別れて山を下り始めた。

◇

葡萄を食べ終わったころには真上にあったお天道様も少し傾いてきた。

笛を吹きつつ平吉が森の中を歩いていると山道に出た。平吉がいつも山に入る時に使っている道だ。右手から山道を下ってくる人影が見える。平吉と同じぐらいの年の少年で、薪を背負っている。

「八丸じゃないか。おおい、おおい」

平吉は手を振り叫ぶと、八丸はもっさりとした駆け足で向かってきた。

「笛が聞こえると思ったら、やっぱり平吉だったか」

「一緒に遊ぼうよ、さっき向こうで雉がいたんだ、捕まえよう」

平吉の誘いを聞くと八丸は申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんな、これから父ちゃんの手伝いをしなきゃいけないんだ」

「そっか、ごめん……」

「平吉も気を付けて帰れよ」

そう言い残すと八丸は速足で山を下って行った。残された平吉は再び笛を吹きながらゆっくりと歩き出した。

◇

平吉が家に帰ったのは、もう夕日が山に沈んでしまった後だった。

「平吉よ、お前も十一になるんだ。笛で遊んでばっかりいなくて、畑仕事も覚えなきゃダメだぞ」

囲炉裏を挟んで向かい側にいる父親が粥をすすりながら平吉に小言を言った。平吉は言い返す言葉がなく、無言で粥をすする。せめてもの反抗としてやや大きな音をたててすすった。

母は横で米粒をぼろぼろこぼしながら食べる弟と妹の世話でてんてこ舞いだ。

「このまま大人になったら、お前は どうやって食べていくんだ。明日は父ちゃんの手伝いをする  
こと、いいな」

平吉はただ無言で粥をすすった。

◇

次の日、平吉は父の言いつけを破って朝早くから山の中で笛を吹いていた。

彼の胸には、昨日の父の言葉に対する怒りのような感情が渦巻いていた。いつまでも遊んでいられないということは自分なりに分かっている。だから、この笛は完全な遊びとは彼は思っていない。笛を吹けばオヤマサマが食べ物してくれる。つまり笛で自分の糧を得ているのだ。そのため彼は笛吹きを半ば仕事として考えている。そもそも父親は、ああは言っているが祭りで平吉が笛を披露すれば、村人たちと一緒に、いや、その誰よりも平吉のことを褒めてくれたのだ。それなのに怒られなければいけないのが納得できなかった。

しかし、平吉はこのような憤りを面と向かって父にぶつけたことはなかった。

「今日はなんだか物悲しげな音色ですね、平吉」

「え……」

「笛の音色には奏者の感情がどうしても出るものですよ」

振り返るとそこにはオヤマサマがいた。

「何か悩み事ですか？ よければ力になりますよ」

今日、オヤマサマがくれたのは筍ご飯の握り飯だった。

平吉は手のひらほどの大きさの握り飯を頬張りながら、昨日の父親とのやり取りを話した。

「そうでしたか、でも気に病む必要はありませんよ、平吉。あなたには笛があるじゃないですか。あなたが笛を吹いてくれる限り私はあなたのことを助けます。だから、何の心配もいりません。笛をお吹きなさい」

オヤマサマは優しく平吉を抱き寄せ、そっと頭を撫でた。

「はい、ありがとうございます」

平吉は握り飯を三つ食べ終わると、慰められたこともあり、すっかり上機嫌になって再び笛を披露した。オヤマサマは笛の音に合わせて手拍子をしたり、歌ったりした。

◇

「母ちゃん、母ちゃん、筍ごはんが食べたいよう」

夕暮れ時、平吉が家に帰ると洗濯物を取り込んでいる母親の裾を掴んで駄々をこねる弟の姿があった。

「ねーいいでしょ、一昨日食べたときまだ残ってたでしょ」

「もうないわよ」

母は困ったように笑いながら答える。平吉は今日食べた筍の握り飯を思い出して優越感に浸りながらも、見つからないように、身を縮こまらせて家に入ろうとした。

「えー、どうして？」

「オヤマサマにね、お供えしたのよ」

平吉の足が止まった。

「なんでー」

「いつも村を守ってくれてありがとうございます、っていうお礼よ——あら、」

母が戸の前で固まっている平吉を見つけた。

「平吉、いままでどこ行ってたの？ お父さん怒ってたわよ」

「……ごめんなさい」

「明日はちゃんと手伝うのよ」

「……うん」

◇

その日の夕飯も平吉は父親の小言を黙って聞いていた。平吉がただ黙って頷いてるだけなのをみて諦めたのか、小言は長く続かなかった。

「それにしても、ゼンマイがたくさん採れましたね」

母が山菜のゼンマイの煮物を食べながら父に言った。

「あんまりたくさん採れたもんだから、オヤマサマの社にお供えしてきたよ」

父の上機嫌な声をよそに、平吉はただ煮物を黙って食べた。

◇

平吉はあくる日も山に入り、笛を吹いていた。

その日の笛の音には悲壮がこもっていた。力強く、激しく、繊細に吹いた。

「こんにちは、平吉、また何かありましたか？ 荒々しい笛の音です」

オヤマサマが現れた。両手で鍋を抱えている。

「……それ、ゼンマイですよ」

「よくわかりましたね、お腹すいてるでしょう？ どうぞお食べなさい」

笑顔で煮物を勧めてくるオヤマサマに対して、平吉は横に首を振った。

「ごめんなさい、今日はお別れを言いに来たんです」

「どういうことですか？」

「もう、山に入って笛を吹くことは止めます。多分もう会えなくなると思います」

「……」

「このままじゃダメだって。思ったんです。これから父ちゃんの手伝いをします」

「……本当にいいんですか？ 笛さえふければ困ることはないんですよ」

「いいんです」

「笛が下手になって誰も褒めてくれなくなるかもしれないですよ」

「いいんです」

長い沈黙が流れる。

「.....そうですか。分かりました、でも、辛くなったらいつでも戻ってきていいんですよ。私はあなたのことが大好きなんですから」

「はい、ありがとうございます.....」

そういうと、妖艶な笑みのオヤマサマの姿は風の中に溶けて見えなくなった。

おわり

あとがき

これは以前、部活で三題噺で書いたものですが、活動時間の関係であんまり多くの人に見ていただくことができなかつたため、今回投稿することにしました。

部活ですでに読んでくれた人もいたので、本来ならより改善したものを提出すべきでしたが、時間的に間に合わず部活で回し読みしたものと同じものになってしまいました。すいません。

## 案山子 2015夏号

<http://p.booklog.jp/book/99409>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

荒月 環和巳 哲

古井龍 文部蘭 三ツ葉葵 加々美翔 七乙女昂

日曜日優 高天美月 外衛眞希 Puney Loran Seapon

夏村晋 幼夏 今畑鏡 自分 瀬戸若菜 山吹弓穂 諸木夕 亜蛙阿鳴

昆布中毒 Ellie Blue 露谷アツムネ 惇暉 佐倉奏

製本版

発行： 2015年 7月3日

電子書籍版

発行： 2015年 7月7日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99409>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99409>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ